

2018 年度

根力育成プログラム プロジェクト実習
地域志向教育プログラム プロジェクト演習
活動報告書

2019 年 3 月

茨城大学人文社会科学部

巻頭言

人文社会科学部長 内田 聡

茨城大学人文学部は人文社会科学部へと昨年度改組しましたが、人文学部時代からいろいろな「学び」の場を用意してきました。今年度「プロジェクト演習」を履修した学生向けのカリキュラムでも、様々な人文科学系・社会科学系の学問分野の講義や演習等に加え、学部共通科目も多く開講しています。その一つが本授業です。

2011 年度以来、茨城大学は学生の就業力育成を目指す教育プログラム「根力（ねちから）育成プログラム」を展開してきました。当学部は全学プログラム終了後も、それを学部独自の教育プログラムとして存続させてきました。「プロジェクト演習」は PBL 技法に基づく授業であり、同プログラムの中核に位置づけられています。PBL (Project Based Learning) 技法とは「課題解決型学習」とも訳され、昨今その教育効果の高さが注目されているアクティブ・ラーニングの一つです。

社会の現状を分析し、課題を見つけ、その課題を解決するため主体的に行動する。自分の意見を発信し、他人の意見を丁寧に聴き、異なる価値観を持つ人たちとチームを組んで課題に取り組む。そのような“社会人”を育てることが「プロジェクト演習」の目標です。

この授業は、人文学部生だけでなく、教育学部や理学部、さらに単位互換協定を結んでいる茨城キリスト教大学、常磐大学の学生も一緒に履修しており、授業がまさに一つの“社会”となって、互いに切磋琢磨する場となっています。そして今年度も「プレゼンテーション講座」を並行して開講し、事業成果の「見せ方」を習得してきましたので、その効果が報告会で現れていたと思います。また、今年度は情報発信にも力を入れており、より多くの方に関心を持ってもらうことは大切ですので、引き続き取り組んでもらいたいものです。

「プロジェクト演習」授業運営をご支援いただいている地域の皆様の日ごろのご尽力に改めて深く感謝申し上げますと共に、大学で 4 年間を過ごして巣立っていく若者たちの成長をうながす本授業の進化や深化の様子を本報告書によりご確認いただければ幸いです。

はじめに

神田 大吾

プロジェクト演習にとって、2018 年は「インターネット元年」でした。かねてから念願だった授業専用ホームページが、地域志向教育プログラムホームページの一部として 6 月から稼働したのです。並行して、同プログラム公式フェイスブックも始まり、学生の活動を節目ごとに速やかに報じる体制も整いました。

初年度の今年は、試行錯誤が多かったことは否めません。しかし、インターネットによる報告は誰が見ているか分かりませんので、この授業の特徴をそもそも知らない、文字通りの「一般向け」の文章となり、担当教員は改めてこの授業を基礎から見直す良い契機となりました。人に教えることが、自ら学ぶことでもあることを再認識した次第です。

2018 年度の学生たちは、水戸市、常陸太田市里美地区、日立市大みか町、福島県富岡町をそれぞれフィールドに、皆それぞれ元気に活動を繰り広げました。プロジェクト課題ご提案者の皆様、学生の活動にご助力ご協力いただいた皆様に篤く御礼申し上げます。

学生は課題に取り組んで考え、話し合い、動き、振り返り、多くを学んで社会人基礎力を培うことができました。伴走した教員は授業の傍ら、学生の活動をインターネットを介して学外へ発信することに努めました。学生と教員による一年間の「学びの記録」としてこの報告書をご笑覧いただければ誠に幸いと存じます。

目 次

巻頭言

はじめに

目次

I : 報告、広報体制の改善

1 : 組織改編とカリキュラム改変	3
2 : 従来の報告、広報体制とその課題	3
3 : ホームページ、フェイスブックの開設	4
4 : 紙媒体報告書の廃止と HP、FB への機能継承	6
5 : 2018 年度活動報告会のテーマ設定	7

II : チーム別活動報告

1 : プロジェクト演習 2018年度の運用	11
2 : さとみ・あいチーム 活動報告	17
3 : XCC チーム 活動報告	43
4 : 水戸交通屋さんチーム 活動報告	61
5 : こみフェスチーム 活動報告	77
6 : sucSeed チーム 活動報告	101
7 : とみ咲クチーム 活動報告	129

Ⅲ：年度末活動報告会

1：趣旨と経緯	161
2：2018 年度活動報告会のテーマ設定	161
3：2018 年度活動報告会の構成	161
4：ポスターセッション	161
5：活動報告会	163

おわりに

I : 報告、広報体制の改善

- 1 : 組織改編とカリキュラム改変
- 2 : 従来の報告、広報体制とその課題
- 3 : ホームページ、フェイスブックの開設
- 4 : 紙媒体報告書の廃止と HP、FB への機能継承
- 5 : 2018 年度活動報告会のテーマ設定

I：報告、広報体制の改善

鈴木 敦

1：組織改編とカリキュラム改変

茨城大学は2017年4月を以て大規模な組織改編を行い、人文学部は人文社会科学部へと改組された（<http://www.hum.ibaraki.ac.jp/faculty/index.html>）。

これに伴い就業力育成支援PBL科目「プロジェクト実習」も、「人文学部根力育成プログラム」を構成する一科目から、新たに設定されたサブメジャー専用プログラム「人文社会科学部地域志向教育プログラム」を構成する一科目である「プロジェクト演習」へと改められることとなった。プロジェクト実習は2年次生以上向けの専門科目であることから、この2018年度が新旧カリキュラムの移行期初年度となり、2年生は人文社会科学部プロジェクト演習の履修生、3、4年生は人文学部プロジェクト実習の履修生となる。

なお本書では煩雑になることを避けるために、特に必要のない限り「人文社会科学部」「プロジェクト演習」という表記で代表させることとする。

2：従来の報告、広報体制とその課題

プロジェクト演習は、教員が学内学外の協力者の方々のご支援を得て活動の場を準備し、履修生がそれを活用して自発的に活動するという構造の下に、2012年度以来、今日まで丸8年間に亘って継続的に開講されてきた。

この間、原則毎年度末に紙媒体の活動報告書を刊行してきた。刊行の目的は多岐にわたるが、履修学生に対しては、報告書原稿作成を通じて「リフレクションの場」を提供することと、完成した紙媒体の報告書を配布することで「将来の就活時等に活用できるエビデンス」を提供することにあつた。一方、担当教員自身にとっては、当該年度の授業運営の概要を整理することで「自己検証の機会」を設けることと、紙媒体の報告書という「対外広報の材料」を得ることにあつた。

この間、総じて言えば所期の成果を上げて来たものと自負しているが、課題も多かった。以下、主要なものについて簡単にまとめておきたい。

第一の課題は、報告書の編集、刊行が年一回に限られることに起因する、「随時報告の場の欠如」、換言すれば「即時性の欠如」である。

学生の活動と学びについて報告の即時性を担保できなかったことは、「学生自身へのフィードバック」「対外広報」の両面において大きなマイナスであった。

第二の課題は、報告書が単年度主義でまとめざるを得なかったことに起因する、「年度を越えて蓄積してきたコンテンツの報告の場の欠如」、換言すれば「実績の通覧性の欠如」である。

授業運営に関する教員の取り組み実績は、年度を越えて蓄積されていくものであるが、報告書は当該年度限りの断片的な整理に終始せざるを得なかった。実績の全体像を把握した上で個々のコンテンツを検討する場を設定できなかったことは、「教員自身のリフレクション」「対外広報」の両面において大きなマイナスであった。

これらはいずれも、「報告すべき内容」と「報告書で対応できる内容」とのギャップに起因する課題である（図1）。従来の紙媒体の報告書は、「毎年度末に」「当該年度の内容をまとめる」という形態から、「年度中の、随時の活動報告」や「教員が年度を越えて蓄積してきたコンテンツ」を盛り込むことはできなかった。

加えて、報告書以外の「場」を設定できなかったため、この種の情報は報告されることなく埋もれていたのである。

報告すべき内容	紙媒体報告書の対応
当該年度の学生活動報告（年度末総括）	○
当該年度の学生活動報告（随時報告）	×
当該年度の教員運営報告（年度末総括）	○
歴年の教員運営報告アーカイブ	×

図1：報告すべき内容と紙媒体報告書の対応関係

第三の課題は、報告書の編集、刊行における「費用対効果」の悪さである。

予算の逼迫から、過去の報告書は原則として「大学の輪転機を使って教員が印刷し、表紙の作成と製本だけ外注する」という方法を採らざるを得なかった。年度末の印刷室でひたすら輪転機を回し続ける「苦行」を続けながら、それでも紙媒体での報告書刊行に拘ったのは、最低限「履修学生には就活等で使えるエビデンスを提供したい」という思いからであった。果たして、全てを外注するのに比して極端に少ない予算での刊行を実現してきたが、勢い刊行部数は非常に限られた物となった。その結果、多大な労力を要する一方で、こと「対外広報の材料」としては、内容以前の絶対数レベルで殆ど機能してこなかった。

3：ホームページ、フェイスブックの開設

以上の課題の解決を目指して、プロジェクト＜実習＞から＜演習＞への移行を機に、新たにホームページ（以下「HP」と略記）とフェイスブック（以下「FB」と略記）を開設することとした。

(1)人文社会科学部地域志向教育プログラム HP の開設

当初はプロジェクト演習単体での開設を考えていたが、最終的にはプロジェクト演習を含む人文社会科学部地域志向教育プログラム全体での開設に発展した。HP の構成を図 2 に示す。

HP の開設と、今後年に 2 回程度を予定している更新作業にかかる予算については、人文社会科学部後援会様よりご支援を頂いた（<http://www.hum.ibaraki.ac.jp/kouenkai/index.html>）。記して感謝申し上げます。

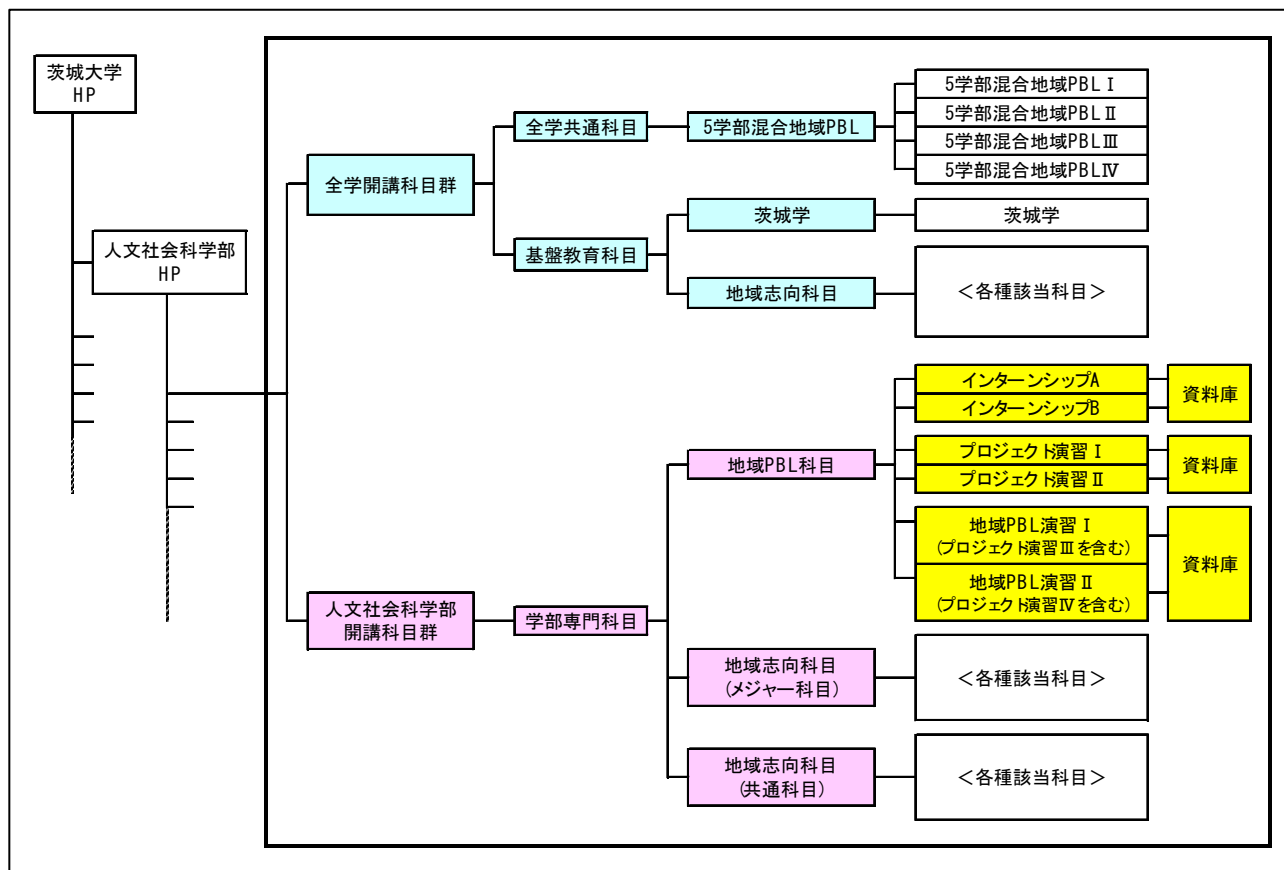


図 2：人文社会科学部地域志向教育プログラム HP の構成

(2)HP の概要

茨城大学 HP の下の人文社会科学部 HP の下に、人文社会科学部地域志向教育プログラムを置く。図 2 の太線内がこれである（<http://pbl.hum.ibaraki.ac.jp/>）。

人文社会科学部地域志向教育プログラムは、全学開講科目である「茨城学」「地域志向科目」「5 学部混合地域 PBL」（以上、水色塗りつぶし）と、人文社会科学部独自の科目である「地域 PBL 科目」「地域志向科目（メジャー科目）」「地域志向科目（共通科目）」（以上、ピンク塗りつぶし）からなる。

水色部分は、全学教育機構（ <http://www.lae.ibaraki.ac.jp/> ）が管轄している。詳細情報の提供方法については、当該科目独自の HP にリンクを張ることを考えたが、人文社会科学部地域志向教育プログラム HP の開設時点では、そのような HP は開設されていないとのことであった。そこで、本学教務情報ポータルシステムの「シラバス検索」ページにリンクを張ることを以て代えることとした。

<https://idc.ibaraki.ac.jp/portal/Public/Syllabus/SearchMain.aspx>

ピンク部分の内の、「地域志向科目（学部共通科目）」は人文社会科学部が、「地域志向科目（メジャー科目）」は人文社会科学部の各メジャーが、それぞれ管轄している。こちらも「地域志向科目」としての独自ページは持っていなかったため、同じく上記「シラバス検索」ページへのリンクを以て代えた。

「地域 PBL 科目」については、これを構成する「インターンシップⅠ・Ⅱ」「プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ」「地域 PBL 演習Ⅰ・Ⅱ」のそれぞれについて、今回独自にページを作成した（黄色塗りつぶし）。いずれのページも、当該科目の「概要」と「資料庫」の 2 つからなる。「資料庫」には、各授業の成果物や教材類がアップされ、履修生はもとより広く一般に公開されている。

それぞれのコンテンツの作成は、個々の授業の担当教員が担当した。ただし、「地域 PBL 演習」は 3 年次以上向けの科目のため、2019 年度が初開講となる。かくして 2018 年度時点では、授業担当予定教員の代表の手になる、ごく簡単な記述に留めた。

これによりプロジェクト＜演習＞は、プロジェクト＜実習＞の「スタッフ編」にほぼ相当する「プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ」が、独自のページを持つこととなった（ <http://pbl.hum.ibaraki.ac.jp/project.html> ）。本章の 2 で記した課題の第二である「実績の通覧性の欠如」への対策として、資料庫ページには、2012 年度の初開講以来蓄積してきた各種教材や成果物が分類して格納した。これにより過去 8 年間のプロジェクト演習の蓄積を通覧できるアーカイブが成立し、課題であった「実績の全体像の通覧」を容易にすることができた。

一方、プロジェクト＜実習＞の「リーダー編」にほぼ相当する「プロジェクト演習Ⅲ・Ⅳ」は、今後のカリキュラム改変で「地域 PBL 演習Ⅰ・Ⅱ」を構成する 1 カテゴリーとなったため、「地域 PBL 演習Ⅰ・Ⅱ」のページ（ <http://pbl.hum.ibaraki.ac.jp/pbl.html> ）の 1 パーツとしてに組み込まれることとなった。ただし「プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ」と重複する情報も多いため、ごく簡単な記述の後に「プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱのページを参照」と指示し、詳細な情報提供の場合は「プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ」のページに一本化することとした。

なお、プロジェクト＜実習＞の「メンター編」にほぼ相当する部分は、本来ならば「プロジェクト演習Ⅴ・Ⅵ」として立てられるべき所であったが、諸般の事情により現時点では消滅してしまっている。経験豊富なメンターの存在は、プロジェクト活動を進める上で非常に有効であることは言を俟たない。近い将来の復活を期したい。

(3) プロジェクト演習 FB の開設

本章の 2 で記した課題の第一である「即時性の欠如」への対策として、プロジェクト演習フェイスブック（以下「FB」と略記）を立ち上げた（ <https://www.facebook.com/IUChiikipg/> ）。

プロジェクト演習 FB は、プロジェクト演習 HP を含む茨城大学 HP の「外」に開設されており、更新作業も至って容易であるため、随時最新の情報を発信することができる。2018 年度には、学生チームが独自に立てた SNS に発信した記事のシェアを含めて合計で 100 回程度の発信を行っており、「即時性」は担保できたと判断している。

(4) HP、FB の特性と役割分担

プロジェクト演習 HP は茨城大学 HP の下部構造として、第一義的に「教員による授業運営報告」を掲載する場とした。HP 管理体制の制約から、データ更新は基本的に年 2 回程度となるが、「教員による授業運営報告」の発信頻度としては十分である。かくして HP は自ずと「フォーマルで」「静的な」情報提供の場となった。これに対して FB は、「カジュアルで」「動的な」情報提供の場として、HP と相互に補完しあう関係となった。

図 1 に追記する形で、従来の報告書と今後の報告、広報体制を整理した結果を図 3 に示す。なお不十分な部分はあるが、本章 2 に記した諸課題の解決に向けて一通り対応することができたと考える。

	～2017年度 紙媒体報告書の対応	2018年度～ 報告書の対応	2018年度～ HP の対応	2018年度～ FB の対応
当該年度の学生活動報告（年度末総括）	○	○	○ 報告書を収載	×
当該年度の学生活動報告（随時報告）	×	×	×	○
当該年度の教員運営報告（年度末総括）	○	×	○	×
歴年の教員運営報告アーカイブ	×	×	一本化して蓄積	×

図 3：報告すべき内容と、今後の各メディアの対応関係

4：紙媒体報告書の廃止と HP、FB への機能継承

2018 年度からのもう一つの変更点として、報告書を紙媒体で刊行することを打ち切り、専ら HP 上で電子媒体で発行することとした。これは第一義的には、電子媒体での文書閲覧が一般的になり、「履修学生が就活等で使えるエビデンス」についても、電子媒体の方が使い勝手がよくなったとの判断に基づく措置である。同時に、HP ならびに FB が開設された以上、費用対効果に照らして従来の紙媒体による少部数限定の刊行は対外広報のメディアとしての役割も完全に終えた、との判断による措置でもある。

最後に、以上の変更を一覧にまとめて提示する（図 4）。

報告内容	紙媒体 報告書の 表記	HP／FB			
		場所	HP 資料庫 ファイル No	名称	備考
授業の枠組み	プロジェクト 実習の概要	HP 概要	—	—	固定内容で 恒常的に掲載
当該年度の 授業概要	プロジェクト 実習の概要	HP 資料庫 20XX 年度活動報告書	[3XX]	20XX 年度の運用	毎年度末に 当該年度分を新規追加
当該年度の 授業改善	20XX 年度の 授業改善	2012 年度～2017 年度分： HP 資料庫	[101]	プロジェクト実習 2012～2017 の総括	固定内容で 恒常的に掲載
		2018 年度以降：複数年分一括し HP 資料庫 [102] として掲載予定	[102] 予定)	[未定]	固定内容で 恒常的に掲載（予定）
チームとしての リフレクション	チーム別 活動報告	(1)HP 資料庫 20XX 年度活動報告書	[3XX]	(1)活動報告書 ○○チーム活動報告	毎年度末に 当該年度分を新規追加
		(2)FB（オリジナル）	FB	(2)催事名等で適宜	随時新規掲載
		(3)FB（チーム SNS からのシェア）	FB	(3)催事名等で適宜	随時新規掲載
		(4)HP 資料庫 情報発信 [60X]	[6XX]	個別の記事名による	毎年度末に 当該年度分を新規追加
学生個々人の リフレクション	最終 レポート	HP 資料庫 20XX 年度活動報告書	[3XX]	最終レポート	毎年度末に 当該年度分を新規追加
	インターンシップ レポート	HP 資料庫 20XX 年度活動報告書	[3XX]	インターンシップレポート	毎年度末に 当該年度分を新規追加
活動報告会	年度末 活動報告会	HP 資料庫 20XX 年度活動報告書	[3XX]	年度末活動報告会	毎年度末に 当該年度分を新規追加
活動報告会 資料冊子	[掲載せず]	HP 資料庫 20XX 年度活動報告会	[4XX]	活動報告会 資料冊子	毎年度末に 当該年度分を新規追加
活動報告会 ホスターセッションハネル	年度末 活動報告会	HP 資料庫 20XX 年度活動報告会ハネル	[5XX]	活動報告会 ホスターセッションハネル	毎年度末に 当該年度分を新規追加
当該年度の トピック	個別の トピック名	HP 資料庫 20XX 年度活動報告書	[3XX]	個別のトピックによる	毎年度末に 当該年度分を新規追加
当該年度の 成果と課題	成果と課題	2012 年度～2017 年度分は HP 資料庫 20XX 年度活動報告書	[3XX]	成果と課題	固定内容で 恒常的に掲載
		2018 年度以降：複数年分一括し HP 資料庫 [102] として掲載予定	[102] 予定)	[未定]	固定内容で 恒常的に掲載（予定）
主な教材	資料編	HP 資料庫教材	[2XX] [7XX]	個別の教材による	毎年度末に加除修正

図 4：紙媒体報告書から HP、FB への機能継承

紙媒体報告書の表記は、大枠を維持しつつも順次変化している。この図では代表的な表記を採った

この原稿を執筆している時点で、新体制への移行から既に約一年間が経過している。現時点での総括を、箇条書きで記しておく。

(1) 広報範囲の拡大と広報内容の多様化

紙媒体の少数発行からネット上への掲載に切り替えたことで、広報範囲は（少なくとも可能性において）飛躍的に拡大した。また、図 1 に記したような、従来の紙媒体の報告書では対応できなかった情報についても、容易に情報提供ができる体制が整った。さらに、「フォーマルで静的な HP」と「カジュアルで動的な FB」という、相互に補完しあう二種類のメディアを併用することで、広報の内容も多様化に向けて動き出した。

(2) 人的、予算的負荷の減少

報告書を電子化すると共に、成果物や教材等の既存の資産を恒常的に HP 上に公開して随時参照可能にしたことで、当初の想定通り報告書作成の人的、予算的負荷が軽減された。加えて、学生への教材提供や学外協力者の方々への情報提供等の負荷も低減させることができた。

(3) セキュリティに関する負荷の増加

上記(1)の結果として、学生や協力者、催事参加者のプライバシー保護への負荷は増加した。対学生はもとより教員間でも注意喚起を心がけているが、「こうすれば万全」という決定的な方策は存在しない。引き続き効率追求と安全確保を両にらみしつつ対処してゆくことになる。

(4) 現実とのズレ

FB の開設の第一の目的は、プロジェクト演習の履修予備軍である大学一年生と高校生への広報であった。間もなく還暦を迎えようかという教員にしてみれば、かなり頑張って手を出したツールではあったのだが、後になって、大学生、高校生が主として使うのはツイッターやインスタグラムであり、FB は中高年のツールであることを知った。果たして本来のターゲット層からの反応はごく限られたものに留まり、選択ミスを痛感させられることとなった。

一方で、地域で活動しておられる中高年の方々や、さらには履修生の保護者の方々からの反応を頂けるといふ、思いがけない効果もあった。FB 開設は誤算に発するものではあったが、運営側の負担が実害の無い範囲に収まっている限りにおいて、当面は維持してゆこうと思う。

しかしながら、当初想定した大学一年生と高校生に対する有効な広報ルートが確立できていないことは紛れもない事実である。発信の「即時性」が担保できても、相手に届かないのでは意味がない。今後、学生たちの意見も求めつつ改善を図っていきたい。

5 : 2018 年度活動報告会のテーマ設定

HP と FB の開設を踏まえて、去る 12 月 15 日に開催した活動報告会のテーマは「学外への発信」とし、ミニ・トークセッションを設けて各種課題の整理と共有を行った。詳細は、本書Ⅲ－5－(2)ならびに(6)を参照されたい。

Ⅱ：チーム別活動報告

1：プロジェクト演習 2018 年度の運用

2：さとみ・あいチーム 活動報告

3：XCC チーム 活動報告

4：水戸交通屋さんチーム 活動報告

5：こみフェスチーム 活動報告

6：sucSeed チーム 活動報告

7：とみ咲クチーム 活動報告

Ⅱ：チーム別活動報告

1：プロジェクト演習 2018 年度の運用

神田 大吾・鈴木 敦

(1)授業の大枠

プロジェクト演習は、学外協力者あるいは学生自身から提案されたプロジェクト課題に、同じ課題を選んだ学生同士がチームを作って取り組み、課題解決を目指して活動することを通じて社会人基礎力を身につけることを目的とした授業である。授業の構造と運用の枠組みについては、プロジェクト演習のホームページ（以下「HP」と略記）に掲げた。

社会人基礎力：<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>

HP：<http://pbl.hum.ibaraki.ac.jp/project.html>

(2)プロジェクト＜実習＞とプロジェクト＜演習＞の関係整理

2018 年度は、新カリキュラムの第一期生が 2 年生に進級した。このため 3、4 年生はプロジェクト＜実習＞の、2 年生はプロジェクト＜演習＞の履修生という過渡的な運営形態となった。これはあくまでも教務上の扱いの変化であるが、今後無用の混乱を招かないよう、ここで両者の差異を整理しておく（図 1）。

なお、プロジェクト演習におけるセメスター形式の採用、並びに履修可能年数上限の減少は、新カリキュラム編成に当たって学部側の要請に従った結果であり、設計者の自発的変更ではない。運用の実態に鑑みて旧カリの「通年開講」「履修可能年数上限は 3 年間」が自然な形と考えており、再修正の途を模索中である。

	プロジェクト実習	プロジェクト演習	備 考
開講形態	通年2単位	前期2単位＋後期2単位	プロジェクト演習は、事実上の通年授業であり、原則として半期のみの受講は認めない
A～Dの枠組み	プロジェクト実習A～Dは、それぞれが独立の授業枠学生は、「プロジェクト実習A」、「同B」、「同C」、「同D」のいずれかを選んで履修登録	A～Dは、一授業内の便宜的な分類学生は、「プロジェクト演習」で履修登録	実習、演習共に A＝総合 B＝地域連携・地域貢献 C＝国際交流・異文化理解 D＝PBL型インターンシップ
履修学年	学年に拘わらず履修回数により スタッフ編→リーダー編 →メンター編 の順に履修	2年次以上で 「プロジェクト演習Ⅰ、Ⅱ」 3年次以上で 「プロジェクト演習Ⅲ、Ⅳ」 を履修可能	
履修可能年数上限	3年間	2年間	

図 1：プロジェクト＜実習＞とプロジェクト＜演習＞の異同対照表

(3)課題提案とチームの成立状況

2018 年度は学外から 6 件、学内から 2 件、計 8 件のプロジェクト課題提案を戴き、このうち 7 件についてチームが成立した。課題提案ポンチ絵を図 2 に、提案課題と成立チームの一覧を図 3 に示す。

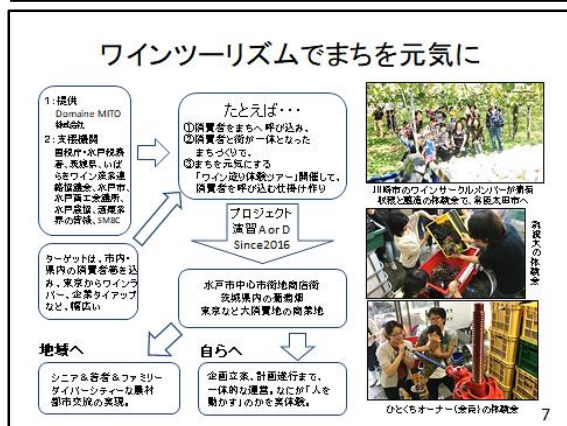
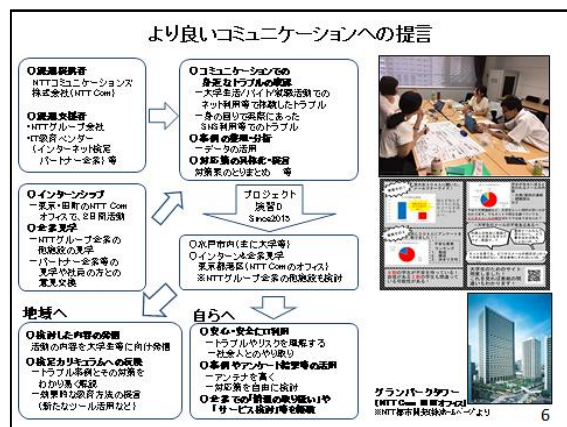
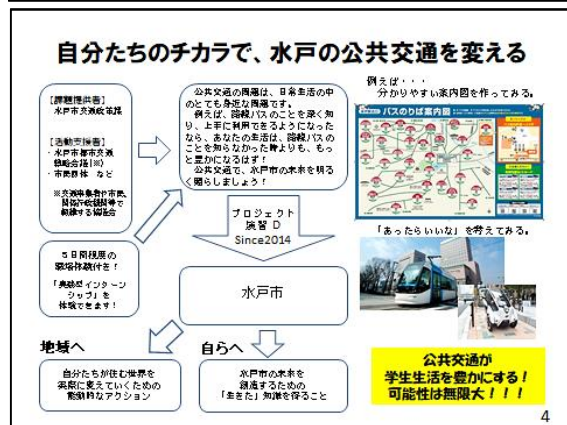
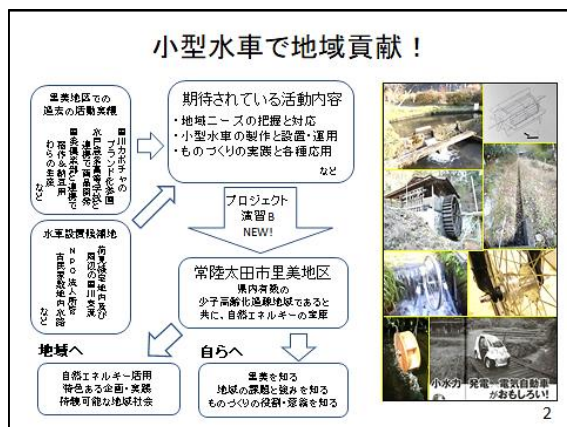
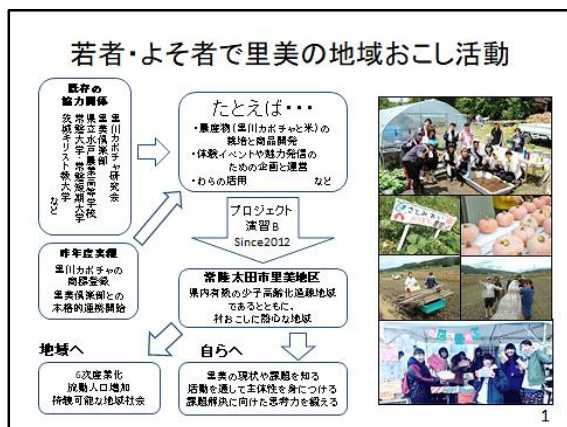


図 2：課題提案ポンチ絵

	提案課題	ご提案者(敬称略)	A～D	成立チーム名
1	若者・よそ者で里美の地域おこし活動	2017年度さとみ・あいチーム学生	B	さとみ・あい
2	小型水車で地域貢献！	教育学部教員	B	里mill
3	異文化交流・自文化発信プロジェクト	茨城キリスト教大学教員	C	XCC
4	自分たちのチカラで、水戸の公共交通を変える	水戸市役所市長公室交通政策課	D	水戸交通屋さん
5	こみっとフェスティバルを開催します!!	水戸市役所市民協働部市民生活課	D	こみフェス
6	より良いコミュニケーションへの提言	NTTコミュニケーションズ株式会社	D	—
7	ワインツーリズムでまちを元気に	DomaineMITO株式会社	D	sucSeed
8	図書館が挑む「震災復興→地域再生」	福島県富岡町役場	D	とみ咲ク

図3：提案課題と成立チーム一覧

2018年度は、ご提案 No.6 がチーム不成立となってしまった。毎年、ご提案を戴きながら希望学生が集まらずにチーム不成立となってしまうケースが発生している。プロジェクト演習の構造上不可避の事態であり、ご提案をお願いするに先立ち、そのような事情についても詳しくご説明してご理解を戴いてはいるが、甚だ申し訳無く、心よりお詫び申し上げます。

(4)PBL型インターンシップについて

「プロジェクト実習D」ならびに、「プロジェクト演習のカテゴリーD」は「PBL型インターンシップ」と称して、通常のプロジェクト活動に加えて課題をご提案戴いた組織においてインターンシップを受け入れて戴いている。

インターンシップ期間は「2日以上」としており、人文社会科学部地域志向教育プログラムで別途開講している「インターンシップA」「同B」(<http://pbl.hum.ibaraki.ac.jp/internship.html>)等に比して、概して短期間に留まる。しかし、本授業におけるインターンシップは、4月のチーム成立以降、プロジェクト課題提案者でありインターンシップ受け入れ組織の担当者でもある方々と、具体的な諸問題を巡って何度となく打ち合わせを重ねた後に実施される。このため、インターンシップ初日時点で既に4ヶ月前後の取り組み実績を有していることになり、実施期間こそ短いものの、大きな学習効果が期待できる構造となっている。

今年度は「水戸交通屋さん」「こみフェス」「sucSeed」「とみ咲ク」の各チームがこれに該当し、夏季休業中を中心に2日間ないしそれ以上のインターンシップを受け入れて戴いた。詳細については、本章の4～7に収めた各チームの活動報告の「5：インターンシップレポート」を参照されたい。

お忙しい中にもかかわらず、実社会の中で課題の考察を深めると共に、職場体験もさせていただき、「働く」とはどういうことなのか、学生が肌で感じる機会をご提供くださった受け入れ組織の皆様方には篤く御礼申し上げます。

(5)プロジェクト演習 2018年度の運用

プロジェクト演習はPBL授業であり、学生の自発的活動を前提としている。このため、教員の主導で履修者が一堂に会して行う通常の「一斉授業」と、学生がチームごとに任意の時間と場所で行う「チーム別活動」とを適宜組み合わせながら運用することとなる。

①一斉授業

2018 年度の一斉授業の概要を、図 4 に示す。

初開講以来 7 年を経て、一斉授業の内容とスケジュールはほぼ安定したと言える。プロジェクト演習は前後期併せて全 30 回 4 単位という設計であるが、ご覧のように一斉授業だけで既に「規定量」にほぼ到達している。

No.	月	日	講時	場所	授業題目	主な内容
1	4	13	1	C406	履修目的の明確化	ガイダンス、「個人の達成目標ルーブリック」作成
2	4	20	1	C406	企画プレゼンと質問会	外部提案者によるプロジェクト課題提案、質疑応答
3	4	27	1	C406	チーム結成	チーム結成、役割分担、「事例シナリオ」によるシミュレーション
4	5	11	1	C406	構想のまとめ方①	ブレインストーミングとKJ法の実習
5	5	18	1	C406	構想のまとめ方②	「プロジェクト構想書」作成
6	5	25	1	C406	構想報告会	プロジェクト構想のプレゼン、質疑応答
7	7	20	1	C406	前期末中間報告会	前期の活動概要と今後の展望のプレゼン、質疑応答
8	10	5	1	C406	後期キックオフ報告会	前期ならびに夏季休業中の活動概要と今後の展望のプレゼン、質疑応答、「個人の達成目標ルーブリック」中間評価記入
9	10	6	3	MM1	総合プレゼン講座①	第1回 イントロダクション(プレゼンテーションの定義と目的)
10			4	MM1		第2回 プレゼンテーションの企画から本番までのプロセス
11			5	MM1		第3回 PREP話法とホールパート法の実践
12	10	7	2	MM1	総合プレゼン講座②	第4回 伝わる文書構成はツリー構造
13			3	MM1		第5回 Power point操作編①:基本操作の習得
14			4	MM1		第6回 Power point操作編②:スライドを「一目でわかる化」する・デザインマスタの作成
15			5	MM1		第7回 Power point操作編③:図解とカラーリング
16	10	13	2	MM1	総合プレゼン講座③	第8回 Power point課題作成①:第11回の課題発表に向けて実習
17			3	MM1		第9回 Power point課題作成②:第11回の課題発表に向けて実習
18			4	MM1		第10回 魅せるプレゼンターのスキル (立ち居振る舞い・発声方法・質問発問)
19			5	MM1		第11回 課題発表
20	12	1	3	講義棟10	年度末活動報告会・リハーサル (総合プレゼン講座④)	報告、質疑応答、司会のリハーサルと外部講師によるご指導 (総合プレゼン講座 第12・13回)
21			4	講義棟10		
22	12	14	5	講義棟10他	年度末活動報告会・会場設営	会場設営作業
23	12	15	2	講義棟廊下	年度末活動報告会・ポスターセッション	チームごとにポスター、資料を使って活動紹介
24			3	講義棟10	年度末活動報告会・本体 (総合プレゼン講座⑤)	報告、質疑応答、司会、来賓ならびに外部講師による講評等 (総合プレゼン講座 第14・15回)
25			4	講義棟10		
26	1	11	1	C406	年度末リフレクション①	「個人の達成目標ルーブリック」「チーム内相互評価表」等作成
27	1	25	1	C406	年度末リフレクション②	活動報告書作成打合せ

図 4：2018 年度プロジェクト演習 一斉授業の概要

2018 年度の一斉授業に関して特筆すべきは、2017 年度に整備された「スキル補強講座」2 種の継続開講の実現である。

(i) ICT 情報リテラシー講座

人文学部根力育成プログラムでは、特定のスキルを養成することを目的に 15 コマ 2 単位で「ステップアップ系科目」(2 年生以上対象)、ならびに「実践連携科目」(3 年生以上対象)を設定してきた(詳細については HP 資料庫ファイル番号[305]『2017 年度活動報告書』I-2-(2)-①読解力・時事知識養成講座 を参照されたい)。

2018年度は、3、4年生は旧カリの「根力育成プログラム」受講生、2年生は新カリの「人文社会科学部地域志向教育プログラム」受講生という過渡的な状況となり、開講形態に頭を悩ませることとなったが、最終的には従来通り旧カリベースの「根力育成プログラム・実践連携科目」として開講することとした。この結果、授業自体は存続できたものの、2年生は正規に受講することができなくなってしまった。カリキュラム改編によるやむを得ない措置であったが、何とも申し訳ないことであった。

2019年度には旧カリ履修者は4年生だけとなり、これまでの履修状況に照らして実践連携科目の履修希望者は恐らく皆無となるものと予想される一方で、ボリュームゾーンである2・3年生が新カリ履修生となる。

以上を勘案すれば、2019年度から従来の「実践連携科目」と同様の趣旨・内容の授業を、新カリベースで立てることができれば、スキル補強講座の新カリへの継続と2018年度の2年生に対するリカバリを果たすことができ、理想的な展開となる。綱渡りのような構想であり、現状では成否の程は全く不明であるが、向こう一年間をかけて実現に向けた努力を積み重ねて行きたい。

(ii)総合プレゼン講座

同講座は、プロジェクト演習におけるプレゼンテーション技能向上を目指して、2017年度に初めて開講した（詳細はHP 資料庫ファイル番号[305]『2017年度活動報告書』Ⅰ－2－(2)－②総合プレゼン講座 を参照されたい）。ご担当下さった渡辺しのぶ先生のご尽力により、顕著な教育効果が見られたものの、非常勤講師時間枠の切迫に鑑みて継続開講は難しいと覚悟していた。関係者の皆様のご配慮により、前年に引き続いての開講が実現できたのは望外の喜びであり、ご尽力下さった皆様に篤く御礼申し上げます。

②チーム別活動

PBL 授業の趣旨に照らせば、「チーム別活動」こそがプロジェクト演習の根幹である。

教員は、可能な限り「授業における引率者」「活動における伴走者」として同席するよう努めている。しかし、その名の通りチーム別に任意のタイミングで行われるため、僅か3名の担当教員ではもとより完璧は望めない。加えて、PBL 授業の趣旨に照らせば、あらゆる場に教員が同席することは却ってプロジェクト演習の本質を歪めることになってしまう。

一方で、いわゆる「単位の実質化」「成績評価の厳密さ」に対する要請は非常に強くなっている。「教員が同席しない部分での活動をどう評価するか」は、PBL 授業たるプロジェクト演習ではとりわけ大きな課題である。

この課題に対応するべく、プロジェクト演習では各チームに「議事録・活動記録」(HP 資料庫ファイル番号[214])、「チーム活動記録簿」(HP 資料庫ファイル番号[215])の作成と提出を課している。量的にその全てを報告書に収めることはできず、「チーム別活動記録簿」の簡略版を切り出して収載している。具体的には、本書Ⅱ「チーム別活動報告」所収の各チーム報告文の3「議事録・活動記録(概要版)」を参照されたい。チームにより多少の多寡はあるものの、全てのチームが規定の学修時間を大きく上回る活動をしていることをご理解いただけたと思う。

加えて2018年度からは、新たに開設したプロジェクト演習フェイスブック（以下「FB」と略記）を用いて、各チーム個別の活動を随時報告している(<https://www.facebook.com/IUChiikipg/>)。FBもまた構造的に、チーム別活動の「全て」を報告しきれものではないが、学生チームの活動の一端を示すもの

としてお目通しを頂ければ幸いです。

(6)他学部からの受講を巡って

プロジェクト演習は人文社会科学部の開講科目であるが、他学部さらには他大学からの受講も歓迎している。とはいえ、カリキュラムの違いやキャンパス間の距離が障害となって、履修実績は思うように伸びてこなかった。

そんな中、2018年度は教育学部教員の提案課題に応じて、同学部からまとまった数の履修希望者が現れた。他学部からの履修生は、これまでは「人文学部の履修生から個人的に声かけを受けての参加」が主流であった。組織的な参加は初めてのことで、今後の展開が大いに期待された。

しかしながら、教育学部 (<http://www.edu.ibaraki.ac.jp/>) のカリキュラムは人文社会科学部のそれよりも必修単位が遙かに多く、後期キックオフ報告会以降は脱落者が続出してしまった。この間、関係教員と学生チームの代表者で何度か意見交換を行ったが、11月の時点で中心的メンバー若干名を除き継続困難との結論に至った。本書に彼らの活動報告が見えないのはこのためである。

教育学部のカリキュラムに照らして、必修以外の授業を履修する時間的余裕が少ないことは、プロジェクト演習担当教員側も十分承知していた。学生側もプロジェクト演習の履修がかなり大きな負担になることは予め認識していた。そのような中での履修受け入れであったが、なお事前の想定が甘かったと言わざるを得ず、学生達には気の毒なことをしてしまった。プロジェクト演習としては、今後も他学部からの履修生を歓迎するが、履修の可否を判断するに当たっては、歓迎する気持ちは強いて横へ措いて客観的な判断姿勢を徹底し、学生に不利が生じないようにしなければならないと反省している。

(7)各チームの活動報告の掲載方針

次節からチーム別の活動報告を「1：はじめに」、「2：活動概要」、「3：議事録・活動記録」、「4：活動トピック」、「5：個人レポート」、「6：おわりに」の順に掲載する。なお、PBL型インターンシップを組み込んでいるチームについては、「4：活動トピック」の次に「5」として「インターンシップレポート」を挿入する。

2：さとみ・あいチーム

リーダー	： 江口 紗姫	茨城大学人文社会科学部人文コミュニケーション学科	3年
副リーダー	： 大村みるほ	茨城大学教育学部情報文化課程	3年
書記	： 北野 友香	茨城大学人文社会科学部人文コミュニケーション学科	3年
書記	： 塩手菜々美	同 上	3年
書記	： 永田 典子	同 上	3年
会計	： 羽田野里菜	同 上	3年
メンバー	： 飯塚子都香	同 上	4年
メンバー	： 田島 彩花	同 上	4年
メンバー	： 野村 明里	同 上	4年
メンバー	： 久利生秋華	常磐大学総合政策学部総合政策学科	2年
メンバー	： 寺元 彰徳	同 上	2年

主担当教員：岩佐 淳一 茨城大学教育学部 教授
主担当教員：鈴木 敦 茨城大学人文社会科学部 教授

2018 年度

「さとみ・あいチーム」活動報告

1：はじめに

大村みるほ

茨城大学人文社会科学部プロジェクト実習 B は、地域連携・地域貢献をテーマにしている。この枠組みの中で、「さとみ・あい」は結成された。当団体は、授業が開講した初年度に結成されて以来、7 年間活動を行ってきた。メンバーが入れ替わりながら毎年受け継がれ、今年度に至る。初年度より、茨城県常陸太田市里美地区を主なフィールドとして活動を続けている。

茨城県最北端に位置する常陸太田市里美地区は、中山間地域であり、少子高齢化・過疎化が進む地域である。しかし、豊かな自然や「里川カボチャ」などの在来作物、「荒蒔邸」に代表される古民家など、誇るべき地域資源・環境資源は数多くある。当団体は、地域が直面する課題や魅力を知り、自分たちの「学生」という立場から何ができるのかを考え、活動してきた。昨年度までの活動では、自分たちが定期的に里美地区に足を運ぶことや、イベントを通して里美地区の魅力を発信し、知名度を高めることを行ってきた。

2017 年度は、チーム人数が増えたことから、大チーム「さとみ・あい」をさらに小チーム「カボチャで里美を盛り上げ隊」と「Comer（コメール）」に分けた。活動の支えとなったのは、「里川カボチャ」と、里美地区で最も作られている農作物である「米」だ。プロジェクトの目的として、一つ目に「若者・よそ者で里美の地域おこし活動を行うこと」を掲げ、「カボチャで里美を盛り上げ隊」を中心に、バスツアーと里川カボチャ収穫体験を兼ねたイベントを行った。二つ目に、「農業を通して地域の方との交流をすること」を掲げ、「Comer」が中心となり、自分たちが稲作や米の活用を通して地域の方々とふれあい、また、自分たち以外の学生と地域の方々を巻き込んだイベントを行った。

2018 年度は、大小のチームには分けず「さとみ・あい」として、活動を行ってきた。年度初めにはプロジェクトの目的として、以下の二つ「イベントを通して、学生と里美の方々に交流を楽しんでもらう」、「里美の特産物をよそ者である私たちが発信することで、里美の域外だけでなく域内の方々にも、その魅力をより知ってもらおう」ことを掲げた。

私たちがこの目的を企画に落とし込むうえで着目したのは、「人」である。昨年度から継続して参加するメンバーが感じたのは、「里美の地域資源や場所の魅力は発信しているが、魅力といえるのはそれだけではない」ということだった。さらに、自分たちが活動を継続することを決めるにあたり、何に心を留めたのかを考えると、地域の方々との交流を通じて感じた地域の「人」の魅力だった。その思いから、今年は「人」にも着目し、多角的な視点から里美の魅力を知ることのできるような企画を考え、そのカタチとして今年度の活動のメインである交流イベント「もぐもぐさとみ」が生まれた。ほかにも、今年度は稲刈り後の「わらの活用」にも目を向けた。資源を使って新たな試みができないか模索し、地域の方々に手順やコツを教えていただきながら、自分たちで正月飾りを作ることもした。

また、チームで活動をしていく中で一人一人が成長するための目的として掲げたことは三つある。それは、「活動を通して主体性を身につける」、「少子高齢化という課題の解決の一助となるように考えることで思考力（課題発見能力・計画力・課題解決能力）を鍛える」「里美の魅力を発信することを通して自分の意見をわかりやすく伝える力を身につける」ということである。これらを意識し、1 年間、各々が活動を行ってきた。

構成は、リーダー編 6 名（うち 2 名はほかのチームと兼務）、メンター編 3 名の計 9 名である。昨年度は計 17 名でスタッフ編の学生が多かったが、状況が大きく変わった。それによる困難もあったが、メンバー一人一人の個性が光り、自分たちなりの「さとみ・あい」をつくることができたのではないだろうか。

今年度の「さとみ・あい」がどのような活動をしてきたか、地域と自分たちにどんな相互作用があり、何を学ぶことができたのか。これらの点を示すべく、具体的な活動内容について記録していく。最後までお目通しいただければ幸いである。

2. 活動概要

(1) 活動の目的

① プロジェクトの目的

- (i) イベントを通して、学生と里美の方々に交流を楽しんでもらう
- (ii) 里美の特産物をよそ者である私たちが発信することで、里美の域外だけでなく域内の方々にも、その魅力をより知ってもらう

② チームの目的

- (i) 活動を通して主体性を身につける
- (ii) 少子高齢化という課題の解決の一助となるように考えることで思考力(課題発見能力・計画力・課題解決能力)を鍛える
- (iii) 里美の魅力を発信することを通して自分の意見をわかりやすく伝える力を身につける

(2) 活動の概要

チームはプロジェクト実習 B(地域連携・地域貢献)のカテゴリーに属する。リーダー編 6 名、メンター編 3 名の計 9 名で編成されている。本年度で継続して 7 年目の活動となる。

以下、主な活動とその概要について述べていく。

① 米の栽培

2018 年 5 月～9 月、常陸太田市 里美倶楽部様水田にて実施。

5 月 13 日に田植えを行った。機械では植えることのできない場所の田植えや、枯れてしまった稲の補植を行った。6 月 3 日に畔の草取り作業を行った。9 月 30 日に稲刈り・おだ掛けを行った。機械では刈ることのできない場所の稲を鎌で刈り、その稲を束で縛り横木に掛けた。雨対策のために最後にビニールで覆った。

② 里川カボチャの栽培

2018 年 6 月～10 月、常陸太田市 荷見様宅圃場にて実施。

6 月 3 日にカボチャの種まきを行った。まず土を耕し、その土をポットに入れ、種をまいた。最後に種が隠れるように上に土を被せ、水をたっぷりまいた。7 月 22 日にカボチャの皮の色の均一性を保つため、畑の藁敷きを行った。わら一束を 60 センチの間隔で敷き詰めた。10 月 21 日には収穫を行った。収穫したカボチャは綺麗に拭いて細かく切った。

③ 牛蒡締め作り

2018 年 10 月 7 日 常陸太田市 里美ふれあい館イベント広場にて実施。

小林様に教わりながら 25 本作製した。また、2018 年 10 月 21 日、11 月 2 日にも作製して、合計 28 本作製した。

④ もぐもぐさとみ

2018 年 10 月 27 日 常陸太田市にて実施。

さとみ・あい以外の参加者は学生 12 名、里美地区の方 11 名であった。午前中は北山様宅にて豆のさや剥きのお手伝いを行った。昼食には荷見カツ子様に作って頂いた里美地区の食材を使った料理をいただいた。午後は里美地区の方と学生とでトークセッションを行った。学生と里美地区の方との交流の機会を作ることができた。

⑤ 2018 さとみ秋の味覚祭

2018 年 11 月 3 日、4 日 常陸太田市 里美ふれあい館にて実施。

自分たちで作った米と正月飾りの販売を行った。米は 3 合が 46 袋、10 合が 31 袋で完売した。正月飾りは 7 本販売した。地元の方々に里美地区の良さをより知っていただけた。

⑥茨苑祭に向けての試作

2018 年 7 月 25 日 水戸農業高等学校にて実施。

2018 年 8 月 24 日 水戸農業高等学校にて実施。

2018 年 8 月 30 日 茨城大学人文棟 C201 にて実施。

2018 年 9 月 10 日 水戸農業高等学校にて実施。

水戸農業高等学校食品化学科と共同で茨苑祭に向けてのお菓子の開発を行った。スコーンとマフィンの試作、試食を 4 回行った。水戸農業高等学校食品化学科の学生が作ったものを、さとみ・あいはいは試食のみ行い、意見を述べ、小麦粉の量や大きさの改善を行った。

3. 議事録・活動記録〈概要版〉

No.	日時	場所	活動内容	参加者	実働時間
1	2018年 4月27日 8:40 - 10:10	茨城大学 人文C406	今年度のチームの活動について話し合い	江口、大村、塩手、永田、羽田野	1:30
2	2018年 5月11日 10:20 - 11:50	茨城大学 人文C406	今年度のチームの活動、補助金について話し合い	江口、大村、塩手、永田、羽田野	1:30
3	2018年 5月13日 8:30 - 18:20	茨城県常陸太田市 里美地区	田植え、荷見様、北山様、岡崎様、小林様との顔合わせ兼ミーティング	江口、大村、永田	9:50
4	2018年 5月18日 9:15 - 11:40	茨城大学 人文C406	茨苑祭・5月25日構想発表会・水戸農業高等学校への挨拶、補助金について話し合い	江口、大村、北野、塩手、永田、羽田野	2:25
5	2018年 5月21日 8:40 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習エリア	プロジェクトとチームの目的、予算案について話し合い	江口、大村、北野、塩手、永田、羽田野	1:30
6	2018年 5月23日 14:20 - 15:50	茨城大学図書館 共同学習エリア	構想発表会、助成金について話し合い	江口、大村、塩手、羽田野	1:30
7	2018年 5月28日 12:50 - 14:00	茨城大学図書館 共同学習エリア	助成金、水農訪問について話し合い	江口、大村、永田、羽田野	1:10
8	2018年 5月29日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習エリア	水農訪問と里美訪問について話し合い	江口、大村、北野	1:10
9	2018年 6月1日 16:30 - 18:20	茨城県那珂市 県立水戸農業高等学校	今年度の関わりについて話し合い	江口、大村、北野	1:50
10	2018年 6月3日 8:30 - 17:00	茨城県常陸太田市 里美地区	水田の草取りとカボチャの種まき	江口、北野、塩手	8:30
11	2018年 6月8日 10:30 - 11:50	茨城大学図書館 共同学習エリア	助成金、茨苑祭、水農について話し合い、常磐大学生との顔合わせ	江口、大村、北野、塩手、永田	1:20
12	2018年 6月13日 14:30 - 15:50	茨城大学共通教育棟 共同学習エリア	今後のイベントについて話し合い	江口、大村、永田、羽田野	1:20
13	2018年 6月15日 10:25 - 11:50	茨城大学図書館 共同学習エリア	イベントの日程、里美訪問、助成金について話し合い	江口、大村、永田、羽田野	1:25
14	2018年 6月20日 14:20 - 15:50	茨城大学共通教育棟 共同学習エリア	助成金、水農について話し合い	江口、大村	1:30
15	2018年 6月22日 10:20 - 11:50	茨城大学図書館 共同学習エリア	今後の日程について話し合い	江口、大村、北野、塩手、永田、羽田野	1:30
16	2018年 6月27日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習エリア	水農との関わり、茨苑祭、里美訪問について話し合い、	江口、大村、塩手	1:10
17	2018年 6月29日 10:20 - 11:50	茨城大学図書館 共同学習エリア	今後の日程について話し合い	江口、大村、塩手、永田、羽田野	1:30
18	2018年 6月30日 14:15 - 16:40	茨城大学図書館エリア 共同学習茨城県 立青少年会館	プレゼン発表	江口、永田	2:25
19	2018年 7月4日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習エリア	里美訪問、水農、イベント、中間報告会について話し合い	江口、永田、羽田野	1:10
20	2018年 7月6日 10:20 - 11:50	茨城大学共通教育棟 共同学習エリア	今後の日程について、予算について話し合い	江口、大村、塩手、永田	1:30

21	2018 年 7月7日 15:00 - 16:00	茨城県立青少年会館	ブラッシュアップミーティング	江口、北野	1:00
22	2018 年 7月11日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習エリア	今後の日程、広報について話し合い	江口、大村、北野、永田、羽田野	1:10
23	2018 年 7月13日 10:20 - 11:50	茨城大学図書館 共同学習エリア	イベント、議事録、予算、茨苑祭について話し合い	江口、大村、塩手	1:30
24	2018 年 7月18日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習エリア	イベント、里美訪問について話し合い	江口、大村、北野、塩手、永田、羽田野	1:10
25	2018 年 7月20日 10:20 - 12:05	茨城大学 人文C406	鈴木先生とのもぐもぐさとみの話し合い	江口、大村、塩手、永田、羽田野	1:45
26	2018 年 7月22日 8:30 - 18:20	茨城県常陸太田市 里美地区	水田の草取り、小林様との話し合い、牛蒡締め作り、畑の藁敷き、荷見様との話し合い、イベント会場視察	江口、大村、北野、塩手、永田、羽田野	9:50
27	2018 年 7月25日 8:40 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習エリア	イベント、今後の里美訪問について話し合い	江口、大村、北野、永田、羽田野	1:30
28	2018 年 7月27日 9:00 - 11:50	茨城大学 人文C406	今後の日程について話し合い	江口、大村、北野、塩手(10:30~)、永田、羽田野	2:50
29	2018 年 8月1日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習エリア	今後の里美訪問について話し合い	江口、北野、塩手、羽田野	1:10
30	2018 年 8月8日 8:00 - 16:30	茨城県常陸太田市 里美地区	もぐもぐさとみの準備、蕎麦蒔き、豊田様ご挨拶	江口、大村、塩手	8:30
31	2018 年 8月15日 10:00 - 12:00	ゲスト茨城大学前店	今後の日程と議題について話し合い	大村、北野、塩手	2:00
32	2018 年 8月19日 10:00 - 11:40	茨城大学教育学部 B406	今後のスケジュールと荷見様ご夫妻へのプレゼントの話し合い	江口、大村、北野	1:40
33	2018 年 8月24日 15:00 - 16:00	水戸農業高等学校	スイーツ試食	江口、北野	1:00
34	2018 年 8月25日 9:00 - 18:00	茨城県常陸太田市 里美地区	小林様、北山様、荷見様、里川カボチャ研究会様と話し合い	大村、北野、田島	9:00
35	2018 年 8月30日 13:00 - 17:00	茨城大学 人文C201	スイーツ試食、今後の日程について話し合い	江口、大村、北野、塩手	4:00
36	2018 年 9月5日 8:30 - 12:00	茨城大学図書館 共同学習エリア	今後の日程、イベントについて話し合い	江口、大村、北野(10:00~)、羽田野	3:30
37	2018 年 9月10日 13:00 - 16:00	茨城大学図書館 共同学習エリア(~15時)	今後の日程、イベントについて話し合い	大村、北野	3:00
38	2018 年 9月13日 8:30 - 15:30	茨城県常陸太田市 里美地区	稲刈り・おだかけ、話し合い	江口、北野、塩手、羽田野	7:00
39	2018 年 9月17日 13:00 - 15:00	茨城大学教育学部 B406	シンポジウム後懇親会、今後の日程について話し合い	江口(~14:10)、大村、羽田野	2:00
40	2018 年 9月20日 13:00 - 16:00	茨城大学図書館 共同学習エリア	今後の日程について話し合い	江口、北野、田島	3:00
41	2018 年 9月26日 8:00 - 15:30	茨城県常陸太田市 里美地区	わらの作業、豊田様との話し合い、おだかけ米の袋詰め、小林様との話し合い	江口、大村、永田、羽田野、田島	7:30

42	2018 年 9月28日 12:40 - 19:40	茨城大学共通教育 棟 共同学習エリア	今後の日程、イベントについて話し合 い	江口(12:40~14:10、 15:40~16:00)、大村 (12:40~19:40)、北野(12:40~	7:00
43	2018 年 10月1日 9:00 - 12:00	茨城大学図書館 共同学習エリア	今後の日程、イベントについて話し合 い	江口、大村、北野、塩手、永田	3:00
44	2018 年 10月3日 10:20 - 11:50	茨城大学図書館 共同学習エリア	今後の日程、イベント、お米のラベル について話し合い	江口、大村、北野、塩手、永田	1:30
45	2018 年 10月5日 12:40 - 14:10	茨城大学図書館 共同学習エリア	今後の日程、イベントについて話し合 い	江口、大村、北野、塩手	1:30
46	2018 年 10月7日 8:30 - 19:15	茨城県常陸太田市 里美地区	蕎麦の刈り取り、小豆の収穫、牛蒡締 め作り、企画協力者との話し合い、豊 田様に企画書お渡し	江口、大村、北野、塩手、永 田、飯塚	10:45
47	2018 年 10月10日 10:20 - 11:50	茨城大学共通教育 棟 共同学習エリア	今後の日程と、次回の議題について 話し合い	大村、北野、塩手	1:30
48	2018 年 10月12日 13:00 - 14:10	茨城大学茨苑会館 1階談話室	今後の日程、イベントについて話し合 い	江口、大村、北野、塩手	1:10
49	2018 年 10月13日 11:00 - 12:30	茨城大学図書館 共同学習エリア	もぐもぐさとみ、味覚祭について話し合 い	大村、北野、塩手	1:30
50	2018 年 10月17日 10:20 - 11:50	茨城大学図書館 共同学習エリア	水農、もぐもぐさとみについて話し合い	江口、大村、北野、塩手	1:30
51	2018 年 10月19日 12:40 - 14:00	茨城大学図書館 共同学習エリア	今後の日程、イベントについて話し合 い	江口、大村、北野、塩手	1:20
52	2018 年 10月21日 8:30 - 17:30	茨城県常陸太田市 里美地区	牛蒡締め作り、カボチャの収穫、荷見 様と話し合い	大村、北野、塩手、永田、羽田 野	9:00
53	2018 年 10月24日 10:20 - 12:00	茨城大学図書館 共同学習エリア	もぐもぐさとみ行程表作成、司会原稿 修正、次回の議題について話し合い	江口、大村、北野、羽田野	1:40
54	2018 年 10月26日 12:40 - 18:00	茨城大学図書館 共同学習エリア	もぐもぐさとみ、味覚祭について話し合 い	江口、大村、北野、塩手、羽田 野	5:20
55	2018 年 10月27日 8:30 - 17:30	茨城県常陸太田市 里美地区	会場の設営、企画実行	江口、大村、北野、塩手、永 田、羽田野、田島	9:00
56	2018 年 10月31日 10:20 - 11:40	茨城大学図書館 共同学習エリア	味覚祭について話し合い、作業	江口、大村、北野、塩手、永 田、羽田野	1:20
57	2018 年 10月31日 11:45 - 12:50	茨城大学 人文B502	味覚祭について話し合い、作業	江口、大村、北野、塩手、永 田、羽田野	1:05
58	2018 年 11月2日 13:00 - 19:00	茨城県常陸太田市 里美地区	味覚祭前日の準備作業	江口、大村、北野、塩手、羽田 野	6:00
59	2018 年 11月3日 8:30 - 19:30	茨城県常陸太田市 里美地区	味覚祭での出店と次の日の準備	江口、大村、塩手、田島 (8:30~16:00)	11:00
60	2018 年 11月4日 8:30 - 17:30	茨城県常陸太田市 里美地区	味覚祭での出店	江口、大村、北野、塩手、永 田、羽田野	9:00
61	2018 年 11月7日 10:20 - 11:50	茨城大学図書館 共同学習エリア	リーフレット、Facebook、助成金につい て話し合い	江口、大村、北野、塩手、羽田 野	1:30
62	2018 年 11月14日 10:20 - 12:20	茨城大学共通教育 棟 共同学習エリア	活動報告会、リーフレットについて話し 合い	江口、大村、北野、塩手、永 田、羽田野	2:00

63	2018 年 11月21日 10:20 - 12:00	茨城大学図書館 共同学習エリア	活動報告会用のスライド作成	江口、塩手、永田、羽田野	1:40
64	2018 年 11月28日 10:20 - 12:00	茨城大学図書館 共同学習エリア	活動報告会、リーフレット、ポスターに ついて話し合い	江口、大村、北野、塩手、永 田、羽田野	1:40
65	2018 年 11月30日 12:40 - 14:10	茨城大学共通教育 棟 共同学習エリア	活動報告会、リーフレットについて話し 合い	江口、大村、北野、塩手	1:30
66	2019 年 1月9日 10:20 - 11:50	茨城大学図書館 共同学習エリア	大子清流高校生向け発表、助成金に ついて、報告書について話し合い	江口、大村、塩手(10:50~)	1:30
67	2019 年 1月16日 10:20 - 12:00	茨城大学共通教育 棟 共同学習エリア	大子清流高校生向け発表、リーフレッ トについて話し合い	江口、大村、北野、塩手、永田	1:40
68	2019 年 1月30日 10:20 - 11:50	茨城大学図書館 共同学習エリア	若者フォーラム用のポスター作成につ いて話し合い	江口、大村、塩手	1:30
69	2019 年 2月23日 12:00 - 17:00	ホテルレイクビュー水 戸	若者フォーラム当日	江口、大村、北野、塩手	5:00

表 1 : 議事録・活動記録

4. 活動トピック

(1) 稲刈り・おだ掛け・脱穀

①日時

2018年9月13日(木)8:30～15:30

2018年9月26日(水)8:00～15:30

②場所

常陸太田市 里美倶楽部様水田

③活動内容

9月13日、この日は雨が降った翌日で、田んぼはひどくぬかるんでいた。普段田んぼ作業に慣れていない私たちはぬかるみの中、お互いの身体を掴みながら四苦八苦して稲刈りを行った。途中、長靴が泥に何度もはまるという事件が起こり、稲の収穫なのか長靴の収穫なのか分からなくなってしまうという事態になった。それでも一生懸命作業を行い、終わった後は苦労した後の達成感があった。

この日はおだ掛けも行った。おだ掛けをすると、日光を十分に含み、美味しいお米になるそう。丁寧に稲を束にし、横木に掛ける作業を行った。手間はかかるが、美味しいお米ができると思えば頑張れる。一緒に参加して下さった里美倶楽部の方々も、若者たちのパワーに元気をもらっているようだった。終始わいわいと、楽しく騒がしい活動日となった。

また、9月26日に脱穀を機械で行った。



図2：泥に足を取られるメンバー



図1：おだ掛けの様子



図3：稲刈りの様子

(2) 牛蒡締め

①日時

2018 年 10 月 7 日(日)8:30～19:15

②場所

常陸太田市 里美ふれあい館イベント広場

③活動内容

藁を使って何か加工できないか、と考えたのは正月飾りである。家の神棚によく飾ってある正月飾りは「牛蒡締め」というそうだ。小林さんに教わりながら作った。これがまた難しい。作り方の手順は次の通りである。

- ①藁を丁度よい太さでひとまとめにする
- ②藁をやわらかくするために棒でたたく
- ③藁を上の方で縛る
- ④上を抑えながら藁を 3 等分に分ける
- ⑤1 つは下に分けておいて、2 つを交互に編んでいく
- ⑥2 つが編めたら縛って 1 つにし、それをもう 1 つと編んでいく
- ⑦最後に縛って完成
- ⑧ハサミではみ出た毛先を切って仕上げる

最初の 3 等分が上手くできなかつたり、2 人の力加減が均等にならなかつたりすると汚い仕上がりになる。綺麗な仕上がりになるまで何回もやり直し、何時間もかけて作った。途中同じ場所がかかし作りをしていた地元の方々が教えにきてくれた。中には以前牛蒡締め作りを教えていた、という方までいた。熱心に教えてくれるその姿に心が和んだ。思いがけず地元の方々と交流ができた日であった。



図 4・5：牛蒡締め作業の様子



図 6：牛蒡締めの完成形

(3) 里川カボチャ収穫

①日時

2018 年 10 月 21 日(日)8:30～17:30

②場所

常陸太田市 荷見様宅

③活動内容

今回は午後からさとみ・あいがお借りしている畑で、里川カボチャの収穫体験を行わせていただいた。カボチャを収穫する人と運ぶ人、洗う人で分担して効率良く作業を進めることができた。土や汚れを洗い流したカボチャは、藁や机の上で乾燥させた。しっかりと実が入っているため、一つ一つが重く体力仕事であることを実感した。その後荷見様が、食べられる部分と食べられない部分の見分け方やカボチャの切り方、ヘタや種の取り方を先ほど収穫したカボチャで教えてくださった。さとみ・あいのメンバーも実際に体験させていただいた。

また、もぐもぐさとみと味覚祭についての話し合いも行った。もぐもぐさとみで実際に提供する予定の「いとこ煮」と、カツ子様特製のカボチャとブルーベリーサンドウィッチも実食させていただいた。約1週間後に迫ったもぐもぐさとみについて、カツ子様と具体的な話し合いができイベントの準備が着々と進んでいることを実感した。



図7：カボチャの収穫作業



図8：収穫したカボチャ



図9：話し合いの様子

(4) もぐもぐさとみ

①日時

2018 年 10 月 27 日(土)8:00～18:00

②場所

常陸太田市 北山様宅・徳田コミュニティセンター・里美生産物直売所

③活動内容

さとみ・あいの 2018 年度の中心的な活動として、域外の若者と里美地区の方々の交流イベント「もぐもぐさとみ」というイベントを開催した。このイベントでは、域外の若者が「里美地区を訪れ、地域の魅力を知り、対外的に発信する」だけでなく、「地域の方々との作業や食事といった交流を通し、地域の方々と知り合いになることによって、イベント後にも自らの意志で里美地区を訪ねたいと思うようになる」ことを目的とした。

このイベントでは、茨城県青少年育成協会の若者活動応援事業助成金を使ってバスをチャーターし、参加者の方々に気軽に里美地区へ足を運んでもらえるようにした。

イベント内容は「里美地区外から来た参加者が里美地区の方々のお手伝いをする」第一部と「みんなで昼食を囲み、その後トークセッションを行う」第二部の二部構成となっていた。

第一部では、晴天時は 2 チームに分かれて里川カボチャ研究会様の畑での作業と里美地区の有機農家・北山弘長様、郷子様宅での作業を行う予定であった。当日はあいにくの雨で、北山様宅での作業のみとなった。北山様宅では、豆の莢を茎から取る作業と莢をむく作業を行った。

第二部では、参加者と里美地区の方々と、若駒食堂の荷見カツ子様に料理していただいた里美の魅力たっぷりの昼食をいただいた。北山様宅の豆のピクルスや豆腐、カツ子様お手製の卵焼き、里川カボチャのプリン、6 種類の野菜のお煮しめ、フキの煮物、里美地区の在来種である里川カボチャと小豆「むすめきた」の「いとこ煮」、さとみ・あいが栽培のお手伝いをした新米など、さまざまな料理が並んだ。また、昼食後は里美地区の方々のお話を伺い、暮らしや農業について考えるトークセッションを行った。「行政との連携で地域おこしに取り組んでこられた小林信房様」「在来作物・里川カボチャの復活を柱に地域おこしに取り組んでこられた荷見誠様・カツ子様ご夫妻と里川カボチャ研究会の皆様」「I ターンで里美に移住し、有機・無農薬農法で在来作物を始めとする農業に取り組んでおられる北山弘長様・郷子様ご夫妻」の三組の方々から、それぞれのお話をお聞かせいただくと共に、参加者からの様々な質問にお答えいただいた。

また、短時間ではあるが里美地区生産物直売所を訪れ、里美ジェラート等、里美ならではの商品を知ってもらう機会になった。

最後に、このイベントは里美地区でお世話になっている皆様のご支援により実現できた。ご協力いただいた里美地区の皆様に感謝申し上げます。



図 10：豆の莢むき作業の様子



図 11：トークセッションで里美の暮らしについてお話

(5) 2018 さとみ 秋の味覚祭

①日時

2018年11月3日(土)、11月4日(日)9:00～15:30

②場所

常陸太田市 里美ふれあい館イベント広場

③活動内容

里美地区で開催されているイベントにて、プロジェクトの目的である「里美の特産物をよそ者である私たちが発信することで、里美の域外だけでなく域内の方々にも、その魅力をより知ってもらう」に基づき、自分たちで作ったおだ掛け米と正月飾り「牛蒡締め」の販売を行った。今年度はさとみ・あいとしてブースをもち、当団体の活動に関する展示や作成した冊子等の配布も行った。メンバーは会計係、宣伝係、商品の受け渡し係に分かれて活動し、それぞれがお客様と接していく中で、自分たちが知った里美の魅力や里美での活動について発信することを心掛けていた。

おだ掛け米は「さとみまい」というブランド名をつけて販売した。米袋のデザインにもこだわり、イラストはメンバーの一人が描いた。当日は3合と1升の2パターンで販売した。牛蒡締めは、地域の方々に作り方を教えていただき、当日までに16本用意し販売した。2日間の出店において、1日目の売り上げ状況をみながら2日目の対応を決めたり、ただ売るのではなく「自分たちの商品の付加価値は何か」を意識した宣伝をしたりと試行錯誤した。商品をすべて完売することを目標としていたが、最終的に、「さとみまい」は完売、牛蒡締めは7本の売り上げとなった。目標が達成できなかったことは心残りである。しかし、里美地区内外の人が集うイベントでの出店において自分たちなりに情報発信できたことは、目的の達成につながったのではないだろうか。



図 12：販売した「さとみまい」



図 13：販売した「牛蒡締め」



図 14：販売時の様子

(6) 水戸農業高等学校食品化学科との里川カボチャスイーツ試作

①日時

2018年6月1日(金)、7月25日(水)、8月24日(金)、8月30日(木)、9月10日(月)

②場所

那珂市 水戸農業高等学校、水戸市 茨城大学

③活動内容

6月1日には、さとみ・あいが水戸農業高等学校に伺い、2018年度の活動計画についてご相談をした。食品化学科の皆さんとは、今年度も引き続き「里川カボチャのスイーツの共同開発と販売」を柱とする活動を行うことを確認し、具体的な内容についてご相談した。

7月25日には、「里川カボチャのスイーツ」の試食会と意見交換を行った。「里川カボチャのスイーツ」案として、スコーンとマフィンを試食した。どちらも里川カボチャの自然な甘みが生かされているものであった。スコーンについては、一本だけでお腹がいっぱいになってしまうような食べ応えがあったため、薄力粉と強力粉の比率や、スコーンの太さなどの改善が必要だという意見が出た。マフィンについては、トッピングや生地をマーブル模様にするなどの、見た目をどうするかという話し合いを行った。

8月24日には、前回の試食時の意見をもとに、再度試食を行った。スコーンは粉の量を調節した結果、前回よりも軽い食感になった。マフィンは生地をマーブル模様にすることが難しいため、粉糖やカボチャの種を乗せるなどの、他の案を考えた。

8月30日には、茨城大学で試食会を行った。スコーンを冷蔵保存した際に固くなってしまうことをお伝えし、真空保存や薄力粉だけで作るなどの具体的な改善方法をお伺いした。また、売り出すときの具体的な値段や個数などの検討も行った。

9月10日の試食では、3日半冷蔵した薄力粉だけのスコーンを試食した。前回よりも柔らかい食感で、スコーンの太さも統一した。マフィンは粉糖で絵を描くと飛んでしまうため、松の実を乗せるといった案が出た。



図 15：スコーンの太さごとに食べ比べ



図 16：自然な甘みのマフィン

5. 個人レポート

“リーダー” はひとりじゃない

茨城大学 3 年 江口紗姫

昨年度に引き続き、さとみ・あいチームの一員として活動した。昨年度と違う点は、今年度はさとみ・あいのリーダーだった、ということである。この違いはかなり大きく、特に活動に対する心持ちが大幅に変化した。

昨年度は田島さんリーダーのもと、里美魅力発見バスツアーの仕切りをはじめ、楽しく活動をした。やはり 3 年生のリーダーがいたからか、2 年生の私は与えられた仕事についてだけ考えることが多く、正直「楽だなあ」という風に感じていた。しかし、今年リーダーという役職につき、活動に対する考え方が 180 度変わった。ひとつの企画に関しても考えなければならないことがたくさんあり、とても大変で、苦しみながら活動していた。

今年の活動を振り返ってみると、はじめてのリーダーということもあり、どうしていいかわからなかったこと、できなかったことが多くあった。特に、メインイベントであった「もぐもぐさとみ」までの時期は、一人で仕事を抱え込んでしまうことが多かった。また、その仕事を一人で抱え込むことによって、チーム内での情報共有や進捗状況の把握ができず、仕事の期限直前になっても終わっていない、というようなことが多々あった。周りの人たち、特にチームメンバーには大変な迷惑をかけてしまった。

そんな私を、周りの人たちは見捨てずに支えてくれた。

「もぐもぐさとみ」までの見通しが立たず、どの時期に何を

をしていいかが全く分かっていなかった状況を、チームメンバーが計画表や仕事リストを作成してくれることによって、「いつまでにこの仕事をやる」「この仕事は誰かがやる」といったことが明確になった。また、外部に提出する書類が期限直前に完成し、確認が必要となった時も、鈴木先生、岩佐先生にお忙しい中対応していただいた。そして、里美地区の皆さんは、私の拙い説明を理解しようとしてくださったり、企画に対してさまざまなご意見をいただいたりした。周りの人たちが私のことを支えてくれていると感じた時、初めて「リーダーというものは一人でやる役職ではなく、周りの人たちの協力があるからこそ成り立つ役職だ」ということに気が付いた。年度初めは、「リーダーだからしっかりしないと」「一人でやらなきゃいけないことが多くなる」という気持ちを抱いていたが、実際に活動をしていくうちに「組織全体をよく見て、独りよがりにならずに周りを頼り、私は私にできることを精いっぱいやる」ことがリーダーとしての務めだと感じた。もちろん、これは「頼りきりになる」ということではなく、周りの人たちと協力して物事を進めていく、ということである。私に足りなかった「先を見通す力」「周りを頼るということ」はチームメンバーから補ってもらった。「知識」や「経験」といったことは先生方や、里美地区の皆さんから教えていただいた。私は、私が得意な「元気」や「笑顔」(笑い?) で、チームメンバーが楽しく活動できるような雰囲気づくりや、さとみ・あいの顔として外部の方とお会いするときに、相手の方からの印象が明るいものになるような対応を心がけた。客観的に評価することはできないが、自分の中で、リーダーとしての務めは上記の 2 つを果たすことだと思った。

大変なことが多かったが、周りの人たちの支えにより、結果的には楽しく活動することができた。今後は、今年度のリーダーという役職を通して学んだ「自分の足りない部分」を補い、「自分の得意なこと」を伸ばしていくような活動をしていきたいと思う。

最後に、先生方や里美地区の皆様をはじめ、さとみ・あいに関わってくださった皆様、そして何より私を一番近くで支えてくれたチームメンバーに感謝申し上げます。



図 1：楽しかった稲刈り



図 2：もぐもぐさとみ・昼食会にて

成長の場

—2年目の活動を終えて—

茨城大学 3年 大村みるほ

2年目のさとみ・あいの活動を終えた。私は昨年度末、2年目もプロジェクト演習を受講するかどうか悩んでいた。なぜなら、3年生で継続するとなると、就職活動に向けた準備も始まるし、サークルなど他の団体活動も行う中で責任ある立場を担う身としては、かなり負担になると考えたからだ。しかし、1年目の活動を通して育んだ「さとみをあいする」想いと、プロジェクト演習は社会人基礎力を身につける機会になるということ、さとみ・あいを次世代へつないでいくべきだという使命感から継続して活動に参加することを決めた。1年間を振り返ると、3年生になってからの時間の大半はさとみ・あいの活動に費やしたことを否応なく感じる。それが良かったのか悪かったのかを判断すると、答えは「良かった」。継続した活動の中で、見えてきたことや力をつけられたことはたくさんあった。私が今年度の活動の中で一番力を入れたのは、「自分の技量やポテンシャルをそこまでチームの成長やほかのメンバーの成長に貢献できるか」ということだった。大それたことではあるが、私は自分だけでなくチーム全体で成長していきたくかった。これは、副リーダーという立場上というわけではなく、チームの一員としての思いだ。1人が頑張ったことで何かを成し遂げても、イベントが成功して結果が出ただけでも意味はなく、プロセスを重視していた。以下、年度初めの授業から使用していた「個人の達成目標ループリック」を参考に振り返っていきたい。

私は今年度の活動を通して、3つの社会人基礎力をつける（長所を伸ばし、短所を克服する）ことを目標としていた。

一つ目は、「プレゼンテーション能力」だ。私はこの力を短所とみなし、克服することを目標とした。具体的には、今年度末までに「公の場で、論理的で説得力のあるプレゼンテーションができる。聞き手とのコミュニケーションが取れる」ようになる、と言語化した。自分が授業内で実践した範囲では、目標達成できたのではないかと考えている。人前で発表することが苦手だった私は、この2年間で「自信を持つコツ」を学んだ。それは何より、念入りの準備と練習を重ねることだ。本番をむかえるにあたり自信がつくとともに、伝える相手と内容への本気度がそこで表れる。準備と練習で行うのは、内容の構成から資料の作成、内容を声に出すこと、そして、話す姿勢や態度をととのえていくことだ。私の場合、スライドのレイアウト（文字や図の配置）や配色など「視覚的に見やすいか」にこだわりがあるので、それがうまくいっただけでも嬉しくなる。嬉しくなると、発表への意欲がわく。そうして発表までの準備に拍車をかけていく。限られた時間の中で準備・練習をかさねるのは難しい反面、その時間をうまく使って計画的に進め、自分でモチベーションを保つことのできるポイントを見つければ、苦手意識がなくなり、自分に自信が持てるのだ。今年度、私が授業内でPowerPointを用いた発表を行う機会は4回ほどであり、実践の機会は十分とは言えなかった。今後の就職活動やその後の生活でも、人前で話す機会は格段に増えていくだろう。授業内で学んだ「自信を持つコツ」としてのプレゼンテーション能力を、多くの人前での発表の機会だけでなく、日常生活にも取り入れ、生かしていきたい。

二つ目は、「他人に働きかけ、巻き込む力」だ。私はこの力を長所とみなし、力を伸ばすことを目標とした。具体的には、今年度末までに「課題について説得力のある説明をし、協力を促すことができる。相手が主体性をもち、その課題に対して積極的に取り組むような働きかけができる」ようになる、と言語化した。自分では、年間を通し、意識して活動を行うことができたと考えている。「他人」というのは他のメンバーであったり、教員であったり、里美地区の企画協力者の方々であったりする。相手の理解度や求めていること、さらには性格に応じて、伝える内容や伝え方を変えた。また、単純な内容であっても、相手にとってわかりやすいように伝えることを心掛けた。相手は内容を理解することで、自分がその物事にどう関われば良いのか・自分だったら何ができるのかということを考えやすくなり、主体的に行動できるようになるのではないかと考えた。具体的な例でいうと、主催イベント「もぐもぐさとみ」の1、2か月前のことである。計画当初よりもスケジュールが遅れ、話し合いもうまく進んでいなかったとき、「これではまずい、イベント直前に慌てることになる」と危機を感じ、リーダーと現状を把握し合った。そこから、イベ



図1：田植えの様子

ント当日に向けて何をやるべきかを、改めて整理・グループ化し、チームメンバーに仕事が分担できるようにした。何をすればよいのかが明確になったことで、チーム全体に情報共有することができ、メンバー一人一人が動きやすく、主体性をもちやすくなったのではないかと感じる。また、教員に対して情報を伝えるときには、教員が「伴走者」であることを意識し、必要最低限のことを伝えるのでも伝えすぎるのでもなく、量を調節して情報を伝えるように心掛けた。一つ、自分の中でまだ足りていないと感じるのは「説得力」だ。口頭で話すとき、論理的な展開をするのが苦手なので、改善することを意識していきたい。さとみ・あいでは、副リーダーという立場上、また、同学年の学生が多かったため「他人に働きかけ、巻き込む力」を発揮しやすかったが、どんな立場・状況下でも力を発揮できるようにしていきたい。



図2：活動中のワンカット

三つ目は、「自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力」だ。私はこの力を長所とみなし、力を伸ばすことを目標とした。具体的には、今年度末までに「組織における自分の責務を認識し、組織全体を視野に入れて発言や行動をすることができる。相手への影響を考慮して対応することができる」ようになる、と言語化した。自分では、年間を通し、意識して活動を行うことができたと考えている。昨年度は、チームの一員としての責務を認識し、活動することはできていた。しかし、組織全体を視野に入れることはできていなかったし、チームやメンバーに対して思うことがあっても、遠慮やためらいの気持ちから、発言や行動をすることがなかなかできなかった。今年度は、昨年度よりもチームの人数が少なく、誰もが全体を見通しやすい状況にあったし、誰もが自分の責務をより認識するようになっただろう。私は、今年度の活動中、できる限り自分自身の状況とほかのメンバーの状況、チーム全体の状況を意識し、把握するようにしていた。具体的には「私はほかの団体の活動が忙しい」、「今この人はアルバイトが忙しい」、「イベント企画の進捗状況が芳しくない」、など。もちろん、すべてを知り尽くすのは困難だし、必要はない。しかし、一人一人の状況とチーム全体の状況を照らし合わせることで、チームの中で自分がどう動けば良いのか、どう人を動かしたらチーム全体として前に進んでいくことができるかを考えて、行動に移すことができた。社会の中で生きる私たちは、一人では生きていけない。周りの人と支え合って生きていくためにも、「自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力」はとても重要な力だと思う。自分のことだけではなく、他人のことにも意識を向けられる人間でありたい。

これまで、力をつけることを目標としていた社会人基礎力について振り返ってきた。プロジェクト演習を受講しなければ、社会人基礎力を意識して授業を受講することはなかっただろう。また、サークル活動などほかの団体活動や日常生活の中でも、社会人基礎力を意識することができた。プロジェクト演習から得た「視点」は、私にとって成長の糧になっている。

本文の冒頭で、私が今年度の活動の中で一番力を入れたことについて述べた。上記で振り返った社会人基礎力の内容や具体的な経験から、貢献できたといえる点もあるが実際にはどうだっただろうか。私は、ほかのメンバーと心を通わせられたかという点とあまり自信がない。本音で向き合うことがすべてではないが、このように振り返ってから言葉に発しているということは「伝えきれていない思いを伝えたい」という心情があるからである。さとみ・あいであってもそうでなくても、今後は心を通わせるということも意識していきたい。

ここで、さとみ・あいがフィールドとしていた「常陸太田市里美地区」についてふれておきたい。私はプロジェクト演習を受講することで、はじめて里美地区へ意識を向けた。そして、里美地区での活動を通して、その地の方々やモノ、環境の魅力を感じ、チームとして魅力を発信するための活動を行った。私が心残りなのは、現状と向き合いきれなかったことだ。授業日程の都合上、企画立案（構想発表）までの準備期間が短かったことも要因の一つではあるが、もっと現地調査のようなことをすべきであったのではないと思う。里美地区の方々のお話を聞き、そこから見える課題を企画に落とし込むこともできただろう。なんとなくチーム内で共通認識になっている地域の課題を、問い直すことなく踏襲してしまったように思う。昨年度までの活動をベースにしたり、従来のやり方を意識しすぎたりすると、本質を見失ってしまう。私は将来、地域の中で現状と向き合いながら地域をどうしていけば良いか考え、「実働者」とあるとともに住民やその地域に関わる方々の「伴走者」としてはたらかせたいと考えている。里美地区での活動の中で心残りになってしまった思いをバネに行動を変え、里美地区やほかの地域と向き合っていきたい。

最後に、関わって下さった多くの皆様に厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

さとみ・あいで得たもの

茨城大学 3 年 北野友香

今年は 2 年目のさとみ・あいメンバーとして自らが考えて責任を持って行動することが求められる年であった。また、人数の少ない中でどうやって仕事の分担をしていくかが課題となった。今年は 2 大イベントとして「もぐもぐさとみ」の企画実行と「さとみ秋の味覚祭」への出店を行った。以下、それぞれのイベントに際して自分がどう考えて行動したか、そして感想を述べていく。

まず「もぐもぐさとみ」である。この企画の最初の発想段階の時、正直私はいなかった。しかし、さとみ・あいメンバーから企画案や今後の活動を聞いて興味を持ち、今年も参加しよう、と決意した。このイベントを行うにあたって私は、積極的に行動することを心掛けた。例えば、2 部のトークセッションの際、「有機農家を行う際、孤独感はありませんか」と質問し、いままで聞けなかった有機農家ならではの悩みや、大変さ、そしてだからその良さを聞き出すことが出来た。また、このイベントにおいての集客という点で述べると、青少年育成協会の方にもらったアドバイスである「ボランティア」という要素を取り入れたり、学生に魅力的なイベントを取り入れたのにも関わらず、学生の集客にはかなり苦戦した。里美地区の魅力である「里川カボチャ」をもう少し前面に押し出しても良かったのかなと感じた。もう 1 つの理由として、企画の決定が遅くなったということもあってかなり遅れた広報になってしまった点が挙げられる。それゆえにもう予定が入ってしまったという人が何人かいた。さらにターゲットであった農学部「収穫祭」とかぶってしまった点も情報収集不足だったと思われる。しかし、1 年生の全学生が集まる「茨城学」で宣伝したり、また twitter で「おさとちゃんジャック」と称しておさとちゃんになりきって毎日投稿したり、絵が得意なメンバーに魅力的な絵を描いてもらってそれを投稿したりと、広報はかなり充実した内容のものになったと感じた。



図 1：苗床用の土作り

次に「さとみ秋の味覚祭」である。味覚祭では私たちは自分たちで作った米と正月飾りの販売を行った。この正月飾りであるが、とても作るのが難しい。小林様をはじめ、多くの里美のおじいちゃんたちに教えてもらいながら作った。小林様以外の方々は「かかし祭り」で展示するかかし作りでたまたまその場に居合わせた人たちであったのにも関わらず、苦戦する私達を見て見ぬふりはできなかったのか熱心に教えてくださった。地元の方々との交流ができて良かったと感じたのに加えて、地元の方々の優しさに気づかされた。実際作った正月飾りは一生懸命売ったがあまり売れなかった。しかし、味覚祭に出店することで学生が里美地区で活動している、ということを知ってもらえるきっかけとなり、そのことを知ることによって地元の方々が元気になる様子が見られた。また、お客さんとの交流は、学生である私達にもまた、笑顔や元気を与えるものであった。そういう面で、とても良いイベントであったと思われる。



図 2：正月飾り作り

この一年間の「さとみ・あい」での活動を通して、地域おこしの難しさを実感した。どれだけ「地域を活性化させたい」と思っても、思うだけではだめだということはもちろん、どれだけ魅力を伝えようとしても実際に域外の人に魅力を感じてもらうのはとても難しい。それでも、「一助」となるような活動はできたと自負している。私たちの活動、広報で里美地区の名前を知ってもらえたり、少しは身近に感じてもらうことができていると思うからだ。また、農業というものが身近に感じることもできたのも「さとみ・あい」の活動のおかげである。一年を通して農業のお手伝いをしたり、カボチャや米だけでなく蕎麦や小豆などの種まきや収穫体験もさせていただいたり、いろいろな経験ができた。普段自分の食べているものがどうやってできているのか考えないことが多い中で、こうやって自分の食べるものを一から育て、収穫し、いただくといった経験はとても充実したものであった。さらに、新規就農者である北山様のお話は、これからの「暮らし」を考え直すきっかけになったように思う。「さとみ・あい」としての活動は私にたくさんさんの経験、学び、人とのつながり、そしてこれからを考えるきっかけを与えてくれたものであった。

2年目のさとみ・あい

茨城大学 3年 塩手菜々美

プロジェクト実習を履修するのは今年で2年目だ。チームは昨年と変わらずさとみ・あいを選んだ。実をいうと私は1年目の活動を終えた時点で、2年目、すなわち今年度もプロジェクト実習を履修するかどうかは迷っていた。1年目の活動を通して、プロジェクト実習でさとみ・あいチームの一員として活動することはとても楽しかったし、素敵な出会いもたくさんあった。また、自分の成長を身に染みて感じることができた。しかし私は昨年の個人レポートに綴った通り、自分のスキルアップの目標を1年間では達成しきっていなかった。自分はもっと成長できるのではないかと、頑張れるのではないかとという気持ちが私の2年目の活動をする決め手となった。さとみ・あいを選んだ理由は単純

にさとみ・あいが好きだからだった。私が2年目もやるぞ！と決めたときにはすでに昨年度から継続すると決めていたメンバーが活動を開始していたが、そのメンバーたちは遅れて参加した私をあたたかく出迎えてくれた。このようなメンバーのあたたかささとみ・あいの魅力の1つである。

さて、今年度私が達成目標ルーブリックで立てた目標は行動力の中の実行力「目的を設定し確実に行動する力」、主体性「物事に進んで取り組む力」、チームワーキング能力の中の状況把握力「自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力」の3点を伸ばすということである。行動力の中の実行力「目的を設定し確実に行動する力」については、この1年間でしっかりと目的を設定し、目的に沿って粘り強く行動することができるようになった。ただ、迅速さに欠けるという自覚があるため、迅速さも身に付けられたらよかったように思う。また、目的に沿って動く中で目的を見失ってはいけないという意識を持つようになった。主体性「物事に進んで取り組む力」については、明確な義務を伴わない事案についても、自分ができることはなんでも率先してやろうという意識を持つようになった。ただ、メンバーからの指示や要求を待っている間に、ほかのメンバーに負担がかかってしまいすぎていることに気が付けないこともあったため、物事に進んで取り組む力とともに、自ら仕事を見つける、どんなことをしたらチームにより貢献できるのかということを常に考えられるようになりたいと感じた。最後に、チームワーキング能力の中の状況把握力「自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力」についてだ。私は3つの目標の中でこの力を伸ばすことに一番比重を置いていた。結果としては、チームが今どんな状況なのかを把握しようとする意識は持っていたが、チーム全体を視野に入れた行動ができていなかった。自分の責務を全うすることに必死で、周りにかかっている負担が把握できていなかったため、余裕を持った行動や周りの手助けなどは完璧にはできなかった。主体性の「物事に進んで取り組む力」とも重なる部分があるが、もっと自分の行動がチーム全体に及ぼす影響を考えられるようになると、よりチームワーキング能力を向上させられると感じた。

さとみ・あいとして活動してきた2年間を振り返ると、自分の人間としての成長はもちろんあったが、素敵な出会いがあったことが、私がさとみ・あいをやっているよかったと思える理由のひとつである。里美地区の農家さんはもちろん、プロジェクトの伴走者としていつも見守ってくださった先生方、そして的確なアドバイスをくれた優しく頼もしい先輩方含めたさとみ・あいチームのメンバーなど感謝を述べたい人を挙げたらきりが無い。さとみ・あいに入らなかったら出会えなかっただろう方々との出会いは、私の一生の宝物である。周りの方々の助けがあってこそ、さとみ・あいは成り立っていたし、私も成長できたと考えている。この2年間で関わってくださったすべての人に感謝申し上げたい。チーム内の少子高齢化が進んでしまった今年度だが、来年度もさとみ・あいの築いてきた歴史を受け継いで、共に里美の魅力を発信してくれるメンバーが集まってくれることを願う。



図：収穫したカボチャ

さとみ・あいのメンバーから得られたもの

茨城大学 3 年 永田典子

私が今年度のプロジェクト実習の授業で最も伸ばしたかった能力は、書く能力である。特に論理的思考力と文章作成能力に力を入れたいと考えていた。昨年度はプロジェクト実習の授業や、さとみ・あいの活動に慣れることが精一杯で、なかなか中心で活動できなかった。また、メンバーも多く、課題レポートや活動記録などの文章作成回数が少なかった。そのため、今年度はまず今後にも必要になる基本的な文章能力を伸ばし、さとみ・あいの活動のサポートができるようになりたいと考えたからである。しかし、私の理想通りにはならなかった。

今年度 1 年間活動して常に感じていたことは、私がチームに所属していることで逆にほかのメンバーの負担になっているのではないかとという不安だった。図らずも昨年度受講していたメンバーと今年度も活動したが、昨年度と決定的に異なった点は、私ともう一人のメンバーがほかのチームと掛け持ちで活動していたことである。元々は、さとみ・あいの活動をするためにプロジェクト実習の授業を受講した。しかし、福島県双葉郡富岡町の企画のプレゼンを聞いて、ぜひやってみたくて興味を持ってしまった。勉学や就職活動、さとみ・あいの活動と両立できるのか不安要素は多かったが、掛け持ちでも良いとさとみ・あいのメンバーが後押ししてくれたおかげで、私はどちらのチームにも所属することができた。私個人としては、両チーム所属していたことで、各々の良いところや改善した方が良いところを知ることができ、良い意味で比較しながら活動を行うことができた。その一方で、さとみ・あいのメンバーは私が掛け持ちをしていることにより、私の作業を意図的に減らしてくれたり、ミーティングの開催時間を変更したりと多くの負担をかけてしまった。毎回のミーティングに参加できないことも多く、活動を主体的に動かしているというよりもむしろ活動に参加させてもらっている立場のようになってしまった。そもそもミーティングに参加していなければ活動の趣旨を理解することが難しく、私のために再度説明をしてくれることもあり、ほかのメンバーを付き合わせてしまっていると感じていた。それでも一人ひとりの責任感が強く、優しい人が集まったチームのため、私に対しての愚痴は一回も出てこなかった。その中でほかのメンバーの仕事量に対して自分が何もやってなさすぎると気が付き、意欲的に活動に参加しなければならないし、自分もっと活動に参加したいと思った。しかし、現状を理解することで精一杯で案を出すことまで至らないことが多々あった。自分がさとみ・あいのチームにいて何かの役に立っているのか、むしろ迷惑をかけているのではないかと一度考えると、自分なんかが意見を言える立場なのか考えてしまい、自分から聞き役に回るようになった。このような心情になると、参加しないといけないという思いと自分がいることの意味を常に考えてしまい、前に進めなくなった。

しかし、私が 1 年間さとみ・あいのメンバーとして活動を続けてこられたのは、さとみ・あいのメンバーのサポートのおかげである。昨年度の活動を通して、メンバーのことを少し知れたつもりだったが、昨年度以上にメンバーには人を支えることが非常に嫌味なく自然にできる人のたちであると感じた。嫌なことや仕事をしたくないと思うこともあったと思うが、何も言わずこちらの心配をしてくれる優しさの塊のようなメンバーだった。自分の中でも無理はしないと意識して活動していたが、自分が何か言う前に察して言葉をかけてくれるところに何度も救われた。さとみ・あいだったから、私はチームを掛け持ちすることができたと改めて感じている。

この経験から、私はさとみ・あいメンバーのように人に寄り添えるような人間になりたいと思った。プロジェクト実習で学べることはたくさんあるが、高校までのように常に同じ人と同じ方向を向くことが少ない大学生活で、2 年間同じ活動をすることができ、そのメンバーに人間性の部分で憧れを抱けたことが純粋に嬉しかった。私は今まで、人の話を聞くことができるくらいのチームワーキング能力は備わっていると思っていたが、自分よりも上の存在に出会えたため、もっとチームワーキング能力を伸ばして人に頼りにされるような存在になりたいと目標ができた。自分に足りない気が付いていなかった能力を気づかせてもらえたこと、一人の人間として憧れる存在に出会わせてもらえたことが、今年度のさとみ・あいの活動で最も嬉しく勉強になったことである。

弱さに向き合う

茨城大学 3年 羽田野里菜

今年は、さとみ・あいチームの会計として、そしてとみ咲クチームのリーダーとして活動をしていた。二つのまったく性質の異なるチームに所属することは、大変であったと同時に、自分探しに適切な環境であったと考えている。

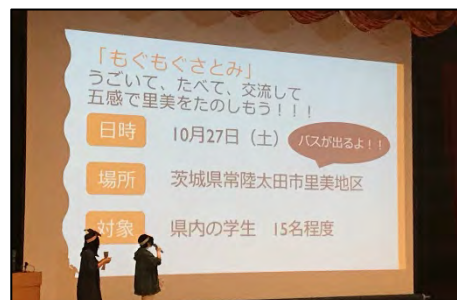
さとみ・あいでは、会計を昨年に引き続いて担当している。チームの掛け持ちで、なかなか参加できなくて、チームには迷惑を掛けてしまったと思う。そのため、さとみ・あいチームにいたときは、少しでも協力をしたかった。去年の倍以上、発言をしたし、アイディアを出し合った。それはとても、勉強になる時間だったし、自分と正確に向き合える機会だった。

とみ咲クチームも個性が豊かなチームだったが、さとみ・あいチームもそうだ。さらに去年より人数が少ないため、去年関わりのなかった人に関わったと思う。見えていなかったところが見えたということだ。それは同時に、自分との比較にもつながった。この人のこのスキルは持っていないな、どうしたらそうなるのだろうか。試してみたけど、これは自分にはできないな。と、たくさんのことを考えながら活動を進めてきた。特に、同じチームだがリーダー同士の江口からは、たくさんのことを学んだ。去年のイメージであれば、彼女はどんどん周りを引っ張っていく、リーダータイプの人だと勝手に思い込んでいた。しかし、一緒に活動を進めていく中で、自分の弱いところを認め、なんとかしようとしているところを見た。彼女は、自分はリーダーには向いていないと言っていた。一人で抱え込んでしまうところがあるのは、私も同じだ。しかし、私と決定的に違うのは、自分をきちんと分析し、なにが向いていないのかははっきり理解していたところだと思う。そのことで、まわりに助けてもらっている、補ってもらっていると言っていた。きちんと理解し、周りを敬うことが人を巻き込む力につながっているのだと、気づいた。

実際、自分たちが企画した「もぐもぐさとみ」では、協力者として去年に引き続いて、荷見様と小林様、そして新しく北山様が参加してくださった。一般の参加者も集まってイベントは成功であったと思う。自分たちがすべて企画しているため、簡単ではないが、これだけたくさんの人が参加して楽しんでもくれたのは、やはりチームの協力があったわけだ、しかし、それと同時に、リーダーが江口だったからこそそのチームワークもあったと私は思う。その彼女をそばでみてきて、自分の弱さに向き合うことが、どれだけ自分を強くするのかを学べた。だからこそ、とみ咲クチームでそれを活かせなかった自分は悔しい。あきらめないことも大切だが、素直に自分の弱さを認め、自分の弱さを克服しつつ、まわりに支えられていることを認める。これをこなしていたチームメイトから、たくさんのことを学んだ。

人との交流は難しい。たくさんの活動を進める中で、一番難しいのは、参加者とのコミュニケーションだと思った。これは、今回の活動に限ったことではないが、参加者やお客さんとなってくれた人とのコミュニケーションがこんなに難しいものだというのは思わなかった。相手が、協力者や連携先であれば、今後の関わりを通していく中で、だんだんと打ち解けていける。そのため、印象はだんだんと変わっていくものだ。しかし、参加者やお客さんはその1回が大切で、慎重に考えなければならない。なぜなら、その1回で印象が決定してしまうからだ。次にイベントをしたときに、来てもらえるように良い印象をもってもらう。そのためのコミュニケーションを考える。それがとても難しい。やはり、それに関してもチームのみんなには助けてもらった。こればかりはなかなか慣れない。自分にとって強さになるのは、まだまだ時間がかかると思う。それを今回はしっかり認めていこうと感じた。

チームにいてお互いがお互いを助け合うことが、とても大切であることをこのチームにいたことで学んだ。自分でなんでもできなければと、どこかで考えていたがこのチームワークが、チームで活動することの本当の意味を考えさせてくれた。自分の弱さはどこか認めたくないし、認めたら負けという気がしていた。しかし、弱さを認めることの強さを、このチームで学ぶことが出来たと思う。自分を支えてくれている人の存在を認めること。その人を敬い、一緒につくりあげていくこと。そのことを大切にして、チームの良さを自分で実行できるようになりたいと思えた。



図：茨城学にて企画の宣伝

新たな変化が多かった1年間

茨城大学4年 田島彩花

今年の春、私は里美地区での3年目の活動をスタートした。見慣れた道や風景、毎年変わらずに行ってきたカボチャの世話。活動をスタートした私は、今年も「普通の」「例年通りの」活動を行うと考えていた。しかし、今年の活動は様々な点において例年の活動とは違っていた。

1つ目は、昨年の私は思いつかなかったようなイベントを後輩らが計画したことだ。今年は、1つ下の学年である3年生が指揮を取りながらの活動であったため、4年生である私は後輩らの意見を聞く立場であった。話し合いやイベントに参加をした中で率直に感じたのは、「私は思いつかなかっただろう」という感情だった。思い返すと昨年、リーダーをしていた私は、精一杯、他者の意見を聞いていた“つもり”であったし、意識して意見を聞こうともしていた。しかし、今になって考えるとそれは“つもり”であったと自覚するようになった。後輩らの意見は、自分だけでは思いつかないようなユニークなものばかりであり、どれも実現したくなるような魅力的な内容であった。けれども、昨年の私はリーダーとして「実現可能な企画」を成り立たせなければならないという意識からか、本当はあまり意見を聞いてあげられていたのではないかと今になって考えたのである。今年のイベントに対する話し合いの中で、昨年の話し合いを思い出し、私は「過去の自分の幼さ」と「自分の成長」により



図：里川カボチャ収穫時に教わるさとみ・あい

やく気付くことができた。

2つ目は、協力者との関係性の変化だ。今までの私達は基本的に“手伝う”“お世話になる”という体制を取っていた。しかし今年度においては、自分たちの売り物は自分たちで作ったり(牛蒡締め等)、味覚祭でさとみ・あいとしての店舗を出店したりと、さとみ・あいが“行う”ことが増えたように思えた。もちろん今年度も、例年以上の方々のおかげで活動を行えたことは事実であるが、私は「お世話になること」と「協力を得ること」は少し意味合いが違っていると考えようになった。今までの私達はお世話になることが多く、お世話をしてくれる人と一緒に何ができるかを考えることが主であり、「普通」であると思っていた。しかし、今年度の活動は自分たちのやりたいことのために新たな協力者を探し、交渉をし、関係性を築いた。これは、お世話になるだけであった例年とは違い、本当の意味で「協力を得た」と言えるのではないだろうか。さとみ・あいが長い間活動を続けてきた結果、このような団体としての「自立性」を得ることができたのである。

3つ目は、自身が里美地区でさとみ・あい以外の活動を行うようになったことによる気持ちの変化だ。私は卒業論文のフィールドとして、里美地区を選んだ。知り合いもあり、ある程度の土地勘があることが強みになると考えた結果だった。また、里美地区におけるかかし祭はとてもユニークであり、調査対象になりうると考えたためである。一方で春の私は、これまでの2年間で里美地区で過ごしてきたという事実から、里美地区のことは何でも知っている気になっていた。しかし、それは間違いであった。実際には、さとみ・あいの協力者以外にも里美地区にはたくさんの人が住んでいるということを改めて実感したのである。同時に、さとみ・あいが関わっている協力者は、だいぶ偏ってしまっていると感じた。里美地区をフィールドにしている私達は、里川カボチャや米に携わる人々のみならず、本当の意味での地域の方々にもっと寄り添い、活動を行っていかねばならないと感じた。

3年間のさとみ・あいの活動は、私にとって大きく成長するプロジェクトであった。社会人としてのスキルはもちろん、人と関わることの大切さを学ぶことができた。本来は関わることのなかった大人の人々と関わりを持つことは、緊張する体験であると同時に、とても楽しい経験であった。私はこれからもこの関わり・繋がりを大切にしていきたい。

さとみ・あいを経て

常磐大学 2年 久利生秋華

私がさとみ・あいに参加したきっかけは、一番は私が働いているバイト先の先輩に誘われたからである。また私は元から常陸太田市に暮らし、里美地区がとても身近であることが決め手となった。茨城大学の授業を履修するのではなく、今回私はさとみ・あいのサポートとして参加してきた。結果として、履修していなくともとても貴重な時間を過ごし、今後の大学生活に活かせる事を沢山学ぶことができた。

私の中で一番印象に残っていることは、私が初めて参加したさとみ・あいメンバーとのミーティングである。先輩方の自ら考え計画し行動している姿を見て、私には同じことはできないと感じた。しかし同時に私も挑戦してみたいと感じた。そして、初めてのミーティングに参加したときにさとみ・あいメンバーから里美地区への愛が伝わってきた。既にプロジェクトは進んでおり、最初から参加していればと感じることも多々あったが、こうして最後までさとみ・あいメンバーとして里美地区を盛り上げる事ができたのは、先輩方のおかげだろう。

実際のさとみ・あいの活動では、カボチャの収穫やおだかけ作業やかかし祭りで販売するカボチャコロケ作りなどのお手伝いをさせていただいた。カボチャの収穫では、暑い中重たいカボチャを収穫しては運んでの繰り返しだった。収穫した数は多くなかったが、運ぶのが大変だなと感じた。私は常陸太田市に暮らしているが、新鮮な野菜を食べたり自分たちで育てて食べたりすることをしていなかったため、慣れない収穫作業に戸惑ってしまう事もあった。私達が収穫させていただいた倍の数を農家の方達は行っているのを考えると、改めて農家の大変さを感じることができた。おだかけ作業も同様に、私たちは手作業で収穫しおだかけを行った。私はおだかけ作業にしか参加できなかったものの、かかし祭りでさとみ米が売れた時はとても嬉しかった。他にも、締め縄作りにも参加した。かかし祭りの時には、地元の方達から締め縄の飾り方を教わりとても勉強になった。荷見さんの家でメンバーと作ったカボチャコロケもとても印象的だ。商品として提供するため、綺麗な形を作らなければならなかった。多くのカボチャコロケを作りとてもやりがいを感じた。さとみ・あいに入って間もない私の事を荷見さんは『チーム』の一員に入れてくれたことが本当に嬉しかった。同じ常陸太田市に暮らしていたとしても、最近やはり他人という関係が強く存在し、私も地元の方とお話しすることの楽しさを忘れてしまっていた。

さとみ・あいとして活動し、私は大学で地域政策について学んでいるのにも関わらず地元を知らないことを痛感した。常陸太田市に暮らしているのにこんなことも知らない自分が恥ずかしくなる場面もあり、より一層地域政策について学んでいきたいと感じるようになった。また、茨城大学の授業として行われているプロジェクト実習のような活動が常磐大学でも沢山行われるようになってほしい。そして、私は地域復興のために活動していきたい。また今回学んだ事を次の活動に活かすためにも、知識を増やさなければならぬと将来について改めて考えることができた。そして先輩達が築いてきたさとみ・あいを次の世代へとつなげるために、今年は私が頑張らなければいけない年という意識を胸に里美地区の魅力を伝えていきたい。



図1：おだかけ作業



図2：カボチャコロケ作り

さとみ・あいに参加してみても得たもの

常磐大学 2年 寺元彰徳

今回、私がさとみ・あいに参加したのは、常磐大学で同じ学科である久利生秋華さんから誘われたことがきっかけであった。普段から色々なボランティアに参加していることや、学生ボランティア団体に参加していたこともあって、さとみ・あいを紹介されたときは興味深いと感じるとともに、自分自身の成長につながるのではないかと、また、他学校と活動する機会はありませんいたため貴重な体験ができるのではないかと感じた。こうしたことが参加の動機である。

常陸太田市は私の地元には隣接しているため親近感があったものの、通学には常磐線や国道6号線を使用していることから山を越えて常陸太田市に入ることはほとんどなかった。今回のさとみ・あいでの活動は、新しい発見が多く。自分によってとても勉強になる体験であった。

まず、私は里川カボチャの存在を知らず、しかも、初めて見たときにとても特徴的な色をしていて、こんな可愛いカボチャがあったのか、と驚いた。また、見た目だけでなく、味も甘くてとてもおいしかった。今まで、常陸太田市の農作物といえば「そば」くらいしかブランドはないと思っていたが、カボチャのような農作物にもブランドがあって、常陸太田市は農作物が強いところだな、という印象が強くなった。

また、プロジェクト演習の活動で驚いたことといえば、企画から運営、活動費の管理、協力していただく地域の方々との連絡などたくさんのことを学生主体で行っているという点である。これまで私が参加してきた活動では、一応イベント企画などは行いが、外部企業との連絡や費用の管理はボランティアを運営する企業や大学の地域連携センターが行っていた。さとみ・あいのプロジェクトは、私がこれまで関わってきたボランティア活動とはかなり性格の異なったものであることが理解できた。と同時に、とても大変なプロジェクトであると感じられた。

他のボランティアやアルバイトが忙しかったため、私はさとみ・あいのイベントなどにあまり参加することができなかった。また、常磐大学と茨城大学で授業時間が異なるため、プロジェクト演習の打ち合わせや発表にはあまり参加することができなかったが、常磐大学卒として参加する機会を得ることができてとても嬉しかった。一方、かかし祭りのような大きなイベントに参加することができなかったのは今でも悔やまれることから、来年度はイベントにも積極的に参加していきたいと思っている。

今回のさとみ・あいの活動で私が特に活躍することができたのは、たまたま特技であったイラストを描くことだった。このプロジェクトにオリジナルキャラクターが存在することに驚くと同時にそれを描くという体験が楽しかった。さとみ・あいのイベントなどにあまり参加できていないという意識があったため、私のイラストがTwitterのアイコンやさとみ・あいのパッケージになっていたときは少しでも力になれたと感じてとても嬉しかったし、やってよかったと思えた。

今回のさとみ・あいのプロジェクトに参加してみても学ぶことがたくさんあった。自分たちでイベントを企画するだけでなく、運営することの大変さ、里川カボチャのブランド化に向けてどうやってアプローチしていくかなど、今後自分たちのイベントを企画・運営するにあたって大切なことを多く学ぶことができた。来年度も積極的に参加してさらなるプロジェクトへの貢献と自身の成長につなげたい。



図1: さとみ米パッケージイラスト



図2: さとみ・あい Twitter とアイコン (赤丸内)

https://twitter.com/satomi_ai_

6. おわりに

江口紗姫

今年度は昨年度に比べて、活動に参加できるメンバーが少ないながらも、さとみ・あいの7年目の活動を無事に終えることができた。プロジェクト実習Bという授業の中で組織されるため、毎年メンバーが変わることが大半であるが、今年度は昨年度から引き続き参加するメンバーがほとんどだった。そのことを活かし、今年度は昨年度の実際に活動して感じた“課題”を振り返って、活動目的を設定した。昨年度リーダーの田島さんが、今後の課題として述べていた「さとみ・あいと里美の住民の方々の関係が限定されている」ということを、私も感じていた。また、昨年度は「里美魅力発見バスツアー」と称し、里美地区の魅力溢れる「場所」をバスツアー参加者に知っていただいた。しかし、里美地区の魅力は「場所」だけではなく「人」にもあるのだということを、さとみ・あいの活動を通して感じたため、今年度は「里美の魅力を知ってもらうためにイベントを通して、学生と里美地区の方々に交流を楽しんでもらう」という活動目的を設定した。

その目的を達成するためのメインになったのが、「もぐもぐさとみ」である。このイベントで、参加者からは「里美の農家さんの話を聞いて、里美のことをより知ることができた」「地元の方のリアルな話を聞くことができた」という声があり、里美地区の方との農作業や食事、トークセッションの際の話をする機会が参加者の里美に対する理解を深めていると感じた。また、里美地区の方と農作業をすることで、参加者が里美地区の方と話しながら作業をするというシチュエーションが生まれた。「お話をしながら作業するのが楽しい」という声もあり、ただ話すだけではなく、一緒に農作業をするということは交流を深めるのに良い手法だと感じた。そして、参加者だけではなく、私たちさとみ・あいメンバー自身もこのイベントの企画・運営を通して、改めて里美地区の魅力を知ることができ、地域の方との交流が増えた。昨年度に課題だと感じていた「さとみ・あいと里美の住民の方々の関係が限定されている」ということを乗り越え、「里美の魅力を知ってもらうためにイベントを通して、学生と里美地区の方々に交流を楽しんでもらう」という目的を達成することができたように思う。

今年度の活動目的はもう一つあり、「里美の特産物をよそ者である私たちが発信することで、里美の域外だけでなく域内の方々にも、その魅力をより知ってもらう」というものであった。この目的を達成するために、昨年度に引き続き「2018 さとみ秋の味覚祭」において栽培のお手伝いをした「さとみまい」を販売した。昨年度は「若者が里美地区の活性化に携わっている」ということをアピールするために販売活動を行ったが、今年度は「里美地区で当たり前のように生産されているお米が、実はとても美味しいものである」ということを食べることを通して体感してもらい、里美の域外だけでなく、域内の方にも里美の魅力を改めて知っていただきたいと考えた。また、稲を脱穀した際に出た藁で正月飾りも作成した。商品すべてを売り切ることはできなかったが、手に取っていただいた方から「とても美味しかった、感激した」等のコメントをいただいた。里美の美味しいお米という魅力を知ってもらうきっかけを作ることができたと感じている。

今後の課題として、「もぐもぐさとみ」にご協力いただいた方から「一回きりにならず、継続的に何らかの形で繋がりが続いたら嬉しい」という声をいただいたように、このイベント後も里美地区の方々と交流ができるような企画が必要だと感じた。また、ただ交流を目的としたイベントを実施するだけではなく、「里美地区に住む方が幸せに、楽しくなれる」ことを考えて、イベントを企画していきたい。そして今年度は2年生のメンバーが少なかったため、来年度のさとみ・あいの活動をどのように継続していくかが大きな課題になると考える。私は4年生になり、就職活動や卒業論文の調査等で、今年度のように里美との密接な関係を築くことは難しいかもしれないが、できる限り今後も里美地区に足を運び、里美地区の方との交流を続けていきたいと思う。

2018年度の活動も、本当にたくさんの方々に支えられていた。今年度の活動にあたり、多大なるご支援をいただきました常陸太田市里美地区をはじめ常陸太田市の皆様、水戸農業高等学校の皆様、茨城県青少年育成協会の皆様、また、さとみ・あいを知ってくださっているすべての方々に厚く御礼申し上げます。

3 : XCC チーム

リーダー	： 大内あかり	茨城キリスト教大学文学部現代英語学科	2年
副リーダー	： 齋藤真理子	同 上	2年
書記	： 袴塚 梨帆	同 上	2年
書記・会計	： 澤田香沙美	同 上	4年

主担当教員	： 上野 尚美	茨城キリスト教大学文学部	教授
主担当教員	： 長谷川安代	同 上	講師
主担当教員	： ジャブコ ユリヤ	同 上	助教
副担当教員	： 神田 大吾	茨城大学人文社会科学部	准教授

2018 年度

「XCC チーム」活動報告

1 : はじめに

大内 あかり

(1)チーム成立の経緯

昨年度までも実施されてきた「異文化交流」の活動を継続、発展させつつ、今年度からは、新たな活動を計画し、実施している。今年度は、茨城キリスト教大学の学生 4 名が XCC チームとして活動をした。XCC とは、私たちのモットー「異文化交流 Cross Culture Communication」の頭文字をとった。Cross の部分を X に変更し、日本人と外国の方々との交流を表している。

(2)活動動機・目標・内容

文部科学省は、「国際化の発展は、人と人との相互理解・相互交流が基本」と提言している。しかし私たちの大学、地域では若年層と外国人の交流が少なく、また外国人訪問者と地域住民の交流も少ないという状況にあった。そこで私たちは図 1 に示す 2 つの目標をたて、活動を行った。そしての目標を達成するために次の 2 つの活動を計画した。

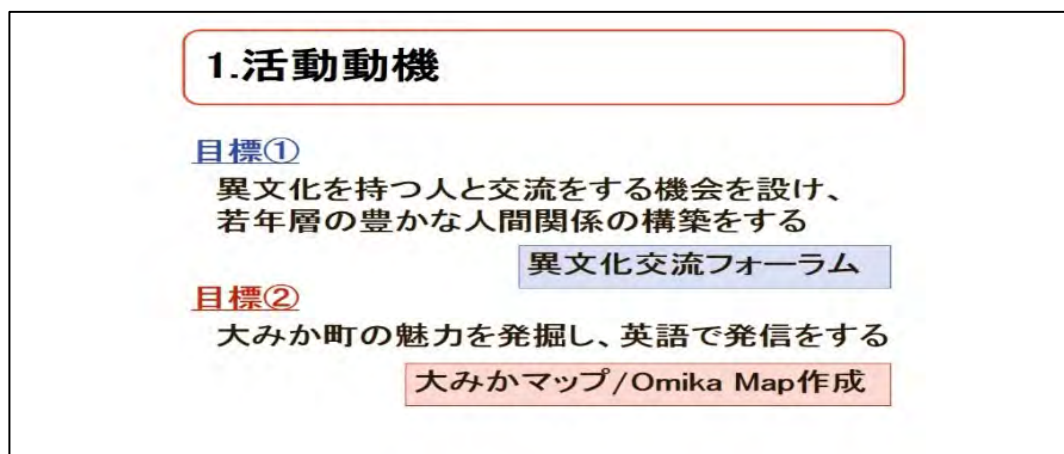


図 1：活動動機・目標・内容

異文化フォーラム

異文化を持つ人と交流をする機会を設け、若年層の豊かな人間関係を構築するために本学のオープンキャンパスの日に留学生と高校生の交流イベントを企画する。

大みかマップ作成/Omika Map

大みか町の魅力を発掘し、英語で発信をするため、大甕駅の周辺の日英併記の地図を作成する。

これらの活動の詳細については次章以降で述べるが、この最終報告を通して異文化交流に関心を持つ人がより増えてほしいと願う。

2：活動概要

袴塚 梨帆

(1)異文化交流フォーラム

「国際化」という言葉をよく耳にする。その国際化に向けて、外国人と関わりを持つことは重要といえるだろう。しかし、外国人と会話する際に自分の英語力に自信が持てず、英語に対しての恐怖心が芽生えてしまう高校生も少なくない。

そのような現状を受け私たちは、英語に対するネガティブな感情を払拭し、若年層と外国人との関わりを広げていきたい、という思いから、異文化交流フォーラムを企画・実施した。

日時：平成 30 年 7 月 16 日（祝・月）

対象：茨城県内の高校生

目標：異文化を持つ人と交流する機会を設け、若年層の豊かな人間関係を構築する(図 2)

(2)大みかマップ/Omika Map 作成

私たちの大学は、「大みか町」にある。大甕駅を利用している外国人も少なくない。しかし、せっかく外国人が訪れる機会があるにも関わらず、地域住民と外国人訪問者の交流は少なく、外国人には大みか町の魅力が伝わっていないように感じた。

そこで私たちは、大みか町の魅力を発掘し英語で発信をするべく、本学のインターン生（アメリカ人 1 名、イギリス人 1 名）に協力を得て、大みかマップ/(Omika Map)を作成した。

対象：地域住民、大みかに来る外国人

目標：大みか町の魅力を発掘し、英語で発信する



図 2：異文化交流フォーラム

3：議事録・活動記録

袴塚 梨帆 大内 あかり

No.	日時	場所	活動内容	参加者	実郎 時間
1	2018 年 4 月 26 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 上野研究室	役職の割り振りとオープンキャンパスに向けての企画案	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
2	2018 年 5 月 10 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 上野研究室	異文化交流フォーラム概要、企画書作成	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
3	2018 年 5 月 17 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 上野研究室	異文化交流フォーラムに向けてのポスター、サインアップシート作成	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
4	2018 年 5 月 18 日 14:00-14:15	茨城キリスト教大学 高等学校	ICH 訪問	大内、袴塚	0:15
5	2018 年 5 月 24 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 上野研究室	協力して下さる高校に電話、FAX 送付	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
6	2018 年 5 月 31 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 上野研究室	参加人数の状況確認、入試広報部への最終確認	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
7	2018 年 6 月 7 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 上野研究室	参加校へメール送付、イベント内容の見直し	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
8	2018 年 6 月 14 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 上野研究室	当日の飲食物確認	大内、齊藤、袴塚	1:30
9	2018 年 6 月 21 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 上野研究室、3 号館 4 階	3 号館の下見、異文化交流フォーラムに向けてのパンフレット作成	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
10	2018 年 6 月 28 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 上野研究室	参加人数の確認、名簿作り内容の見直し	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
11	2018 年 7 月 5 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 上野研究室	異文化交流フォーラムの内容見直し、パンフレット作成	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
12	2018 年 7 月 12 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 上野研究室	パンフレット最終確認、イベントの企画最終決定	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
13	2018 年 7 月 13 日 12:20-15:20	茨城キリスト教大学 3 号館、11 号館	3 号館の PC 作動確認、パンフレット印刷	袴塚	3:00
14	2018 年 7 月 13 日 17:30-18:30	茨城キリスト教大学 11 号館	当日の飾り付け作り、原稿確認	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:00
15	2018 年 7 月 16 日 10:00-17:00	茨城キリスト教大学 3 号館	異文化交流フォーラム	澤田、大内、齊藤、袴塚	5:00
16	2018 年 7 月 19 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 上野研究室	反省会	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
17	2018 年 7 月 26 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 上野研究室	反省会	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
18	2018 年 9 月 20 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 11207 教室	オリエンテーション	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30

19	2018 年 9 月 27 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 11207 教室	地図作成に向けての計画策定	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
20	2018 年 10 月 4 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 11207 教室	地図作成に向けての計画策定	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
21	2018 年 10 月 4 日 14:30-15:00	大甕駅周辺	大甕散策	澤田、大内	0:30
22	2018 年 10 月 7 日 8:40-17:30	茨城大学 理学部棟	プレゼン講座	澤田、大内、齊藤、袴塚	8:50
23	2018 年 10 月 10 日 9:00-9:40	大甕駅周辺	大甕散策、取材	袴塚、Amy(インターン)	0:40
24	2018 年 10 月 10 日 10:00-11:30	大甕駅周辺	大甕散策、取材	袴塚	1:30
25	2018 年 10 月 18 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 11207 教室	地図レイアウト作成	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
26	2018 年 10 月 25 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 11207 教室	プレゼンアウトライン 大みかマップ添削	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
27	2018 年 11 月 8 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 11207 教室、長谷川研 究室	パワーポイント作成	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
28	2018 年 11 月 22 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 11207 教室	プレゼン添削	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
29	2018 年 11 月 29 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 11207 教室	発表練習	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
30	2018 年 12 月 1 日 13:00-16:30	茨城大学 人文社会 学部講義棟 10 番教 室	活動報告会リハーサル	澤田、大内、齊藤、袴塚	3:30
31	2018 年 12 月 6 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 11207 教室	スライド改訂、ポスター作成	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
32	2018 年 12 月 13 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 11207 教室	発表練習	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
33	2018 年 12 月 15 日 11:30-16:30	茨城大学 人文社会 学部講義棟 10 番教 室	活動報告会	澤田、大内、齊藤、袴塚	5:00
34	2018 年 12 月 20 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 ジャブコ研究室	反省会 活動報告書作成	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
35	2019 年 1 月 10 日 12:40-14:10	茨城キリスト教大学 11207 教室	活動報告書作成の計画 大みかマップ作成の反省	澤田、大内、齊藤、袴塚	1:30
36	2019 年 1 月 17 日 12:40-15:50	茨城キリスト教大学 11207 教室	活動報告書作成 大みかマップ保存作業	大内、袴塚	3:10
				合計	21:55

4：活動トピック

澤田 香沙美

（1）異文化交流プロジェクト

高校生と異文化を持つ人が交流する機会を設け、若年層の豊かな人間関係の構築をすることを目標に企画した。（図 3）

①当日プログラムと参加者

日時：平成 30 年 7 月 16 日（祝・月）

場所：茨城キリスト教大学 3 号館

茨城キリスト教学園高等学校様、日立北高等学校様、日立第二高等学校様、啓明高等学校様、勝田高等学校様、茨城県立水戸第三高等学校様、土浦日本大学高等学校様にお声がけをし、24 名の高校生と、本学のインターン生 6 名、留学生 1 名にご参加いただいた。

異文化交流フォーラム 企画書	
1. 日程	7 月 16 日（月・祝日）
2. 場所	茨城キリスト教大学
3. 対象	茨城キリスト教学園高等学校様 茨城県立水戸第三高等学校様 日立第二高等学校様 土浦日本大学高等学校様
4. スタッフ	異文化交流プロジェクト 茨城キリスト教大学（8 人） 茨城大学、茨城キリスト教大学所属の留学生（10 人）
5. 目的	自分とは異なるバックグラウンドを持つ人々と交流することで、異文化に触れ、貴重な経験を得ること。また、参加者同士がフォーラム後も続くような関係を築き、豊かな人間関係を構築すること。
6. 内容	現時点での検討案であるため、変更になる可能性があります。 13：00～13：10 受付、ネームカード作成 13：10～13：30 開会式 13：30～14：00 アイスブレイク 14：00～15：00 クイズ 15：00～15：30 ビンゴ 15：30～16：00 閉会式 （当日は、10 時から茨城キリスト教大学のオープンキャンパスが開催されています。）
7. その他	・参加費は無料です。 ・参加者の方には、全員当日限り有効のイベント保険への加入をお願い致しておりますので、参加者が確定しましたら、必要な情報（名前、性別）を事前にお知らせください。保険料は無料です。

図 3：異文化交流プロジェクト企画書

当日は、学園内でのオープンキャンパス開催日であった。看板（図 4 の表紙）を用いて告知を行い、参加者にはパンフレット（図 4）を配布した。

図 4 : パンフレット

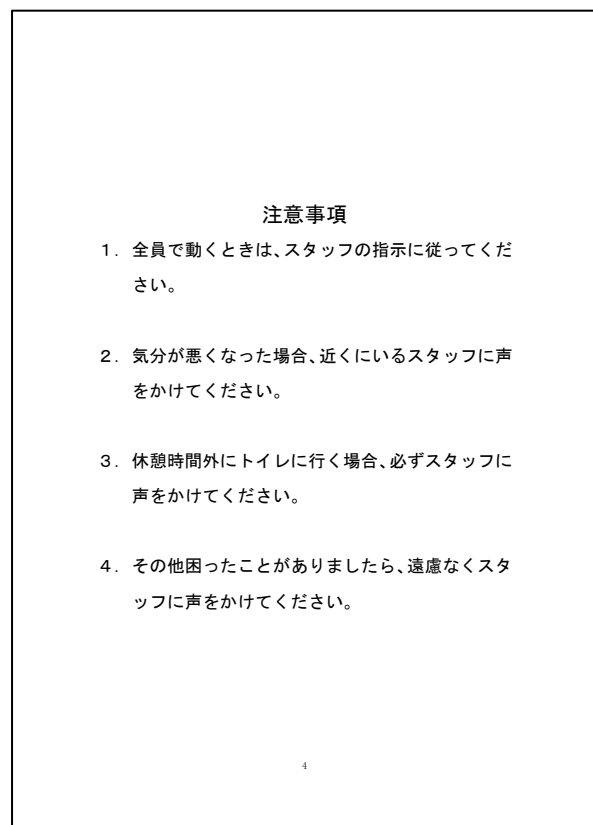
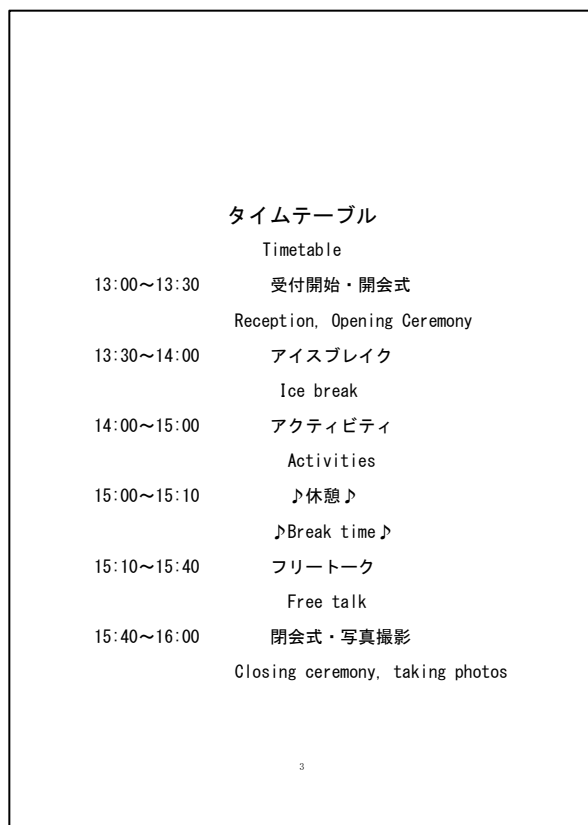
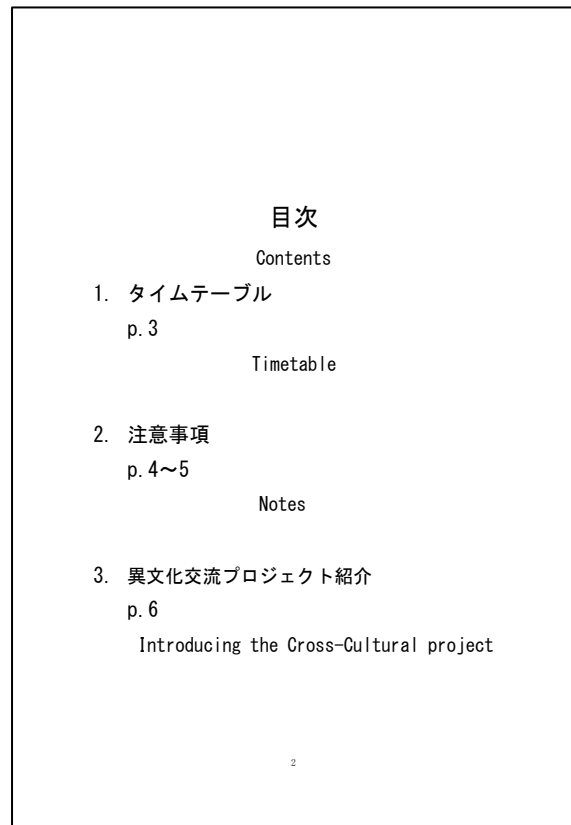
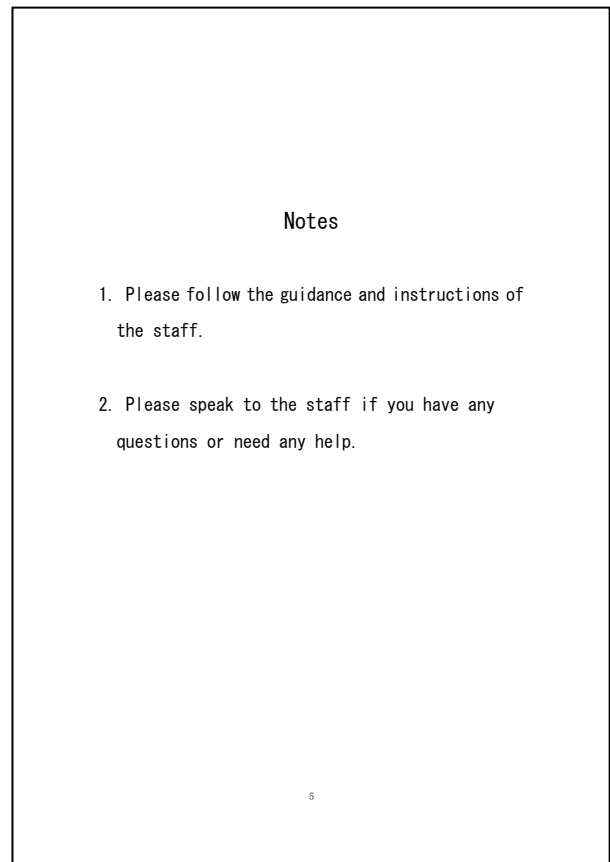
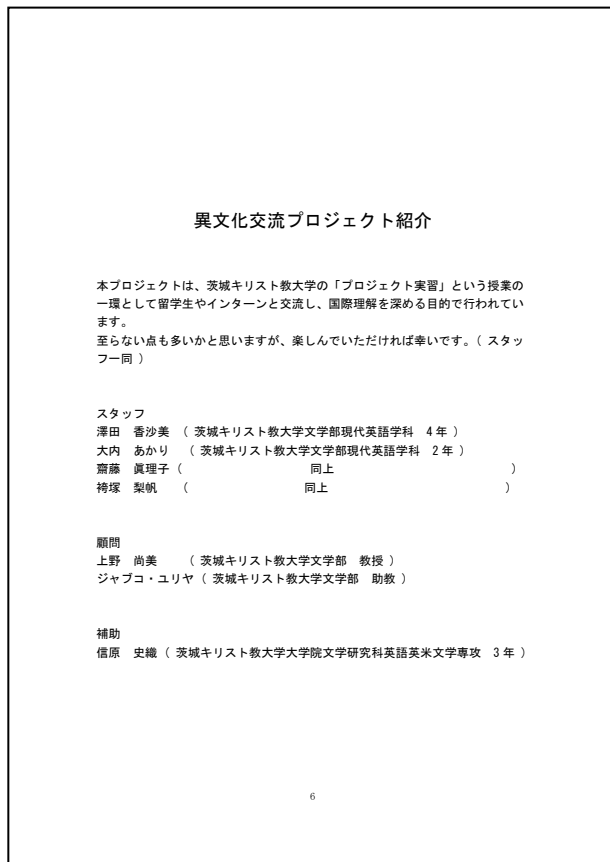


図 4 : パンフレット (続き)



②当日の様子

(i) アイスブレイク

5つのグループに分かれて、ウィンドウズゲームを行った(図5)。

この自己紹介ゲームを通して高校生と留学生の緊張が解け、次第に会話を交わす様子が見られた。



図 5 : アイスブレイク

(ii) アクティビティ

ジェンガを行なった（図 6）。コミュニケーションを楽しみながらゲームができるよう、通常のジェンガゲームのルールに加え、英語の質問に答えるというルールを追加して工夫をこらした。どのチームでも楽しそうな笑顔が見られたのが印象的であった。



図 6：ジェンガ

(iii) ビンゴ

ビンゴを行なった（図 7）。一人でも多くの外国人や高校生と英会話をするのが、ビンゴへの近道になるように工夫をした。どの高校生も積極的に英語を話している姿を見ることができた。



図 7：ビンゴ



図 8：フリートーク

(iv) フリートーク

ランダムに分かれたチームでお菓子を食べながらフリートークを行なった（図 8）。英語をうまく話せなくても、身振り手振りで会話をしている姿も見られ、どのチームでもとても盛り上がっている様子が印象的であった。フォーラム終了後には別れを惜しみ、留学生と写真をとる高校生の姿も見られた。

参加者に対してアンケートを行なった（図 9）。約 9 割の方が今回参加して「満足」と回答した。また、「一番興味深かった企画はなんですか」という問いに対して一番多かった回答は、フリートークであった。もっとも会話数を必要とする企画で半数以上の興味を惹けたことから、目標である「若年層の豊かな人間関係の構築」を達成できたと考える。

[illegible]

今回の異文化交流フォーラムを通じて、高校生に異文化と触れ合う楽しさを実感してもらうことができた。高校生が英語を話すことを恐れる気持ちを軽減させることができ、さらに今後も外国人と英語を話す機会を求めていきたいという声もいただけたことから、異文化交流の輪を広げる支えになることができた。とアンケート結果から分析できる（図 10）。



53

（２）大みかマップ/Omika Map 作成プロジェクト

茨城キリスト教大学がある大みか町の魅力を発掘し、英語で発信をすることを目標に企画した。大みか町では大みか駅を利用している外国人をたくさん見かける為、そんな外国人訪問者に少しでも大みかに興味を持ってもらえたら、という思いから大みかマップ作成を決定した。

①活動内容

（i）10月上旬 大みかマップ/Omika Map 作成のための探索

大みかマップを作成するにあたり、大みか町を手分けして探索した。散策は全3回に及び、事前調査をせずに探索をすることで、新しい大みか町の魅力を発見することができた（図11）。

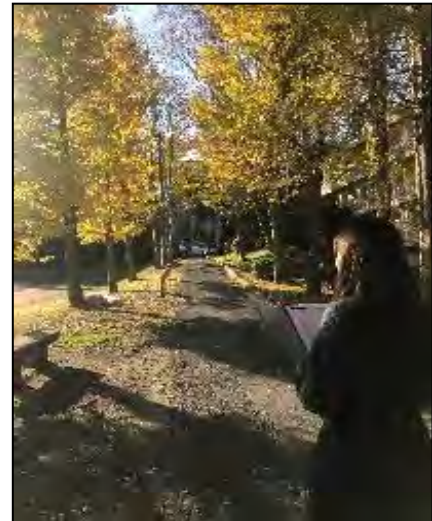


図11：大みか町探索

（ii）10月中旬 お店の訪問及び掲載許可取得

本学インターン生と一緒に大みかマップ掲載候補の場所へ訪れた。留学生と行くことで、外国人がどのような点に魅力を感じるのか、大みかマップへの掲載にふさわしいかの検討をすることができた。また、掲載許可を取得することに加え、実際に体験をしたり試食をしたりすることで、より多くの情報を得ることができた。

（iii）11月 大みかマップ/Omika Map 作成

大みかマップを作成するにあたり、掲載するお店は駅から歩いていける場所、外国人が魅力を感じるお店、外国人に訪問してほしいお店などを考慮に入れて作業を進めた。メンバーで案を出し合い、手書きで地図を作成することを決定した。地図上のアイコンや目印となる建物などは一目でわかりやすいものにし、また掲載するお店や建物をイラストにすることで、手に取りやすいマップを作成した（図12）。

5：個人レポート

一歩を踏み出すということ

学びと反省の一年

茨城キリスト教大学2年 大内 あかり

私はプロジェクト実習を履修し、一年間の活動を通してさまざまなことを学び、以前の私よりも一歩前進ができたと思う。この授業を履修した大きな理由は、大学生活で自分ができることを増やしたいという思いがあったからである。履修をするにあたって時間のことを気にして履修を考えているときがあった。しかし、そのままでは何も成長できずに大学生活が終わってしまい、後悔をすると思った。挑戦しないまま後悔したくない。やりたいと思ったことはやってみようと思い一歩を踏み出した。プロジェクト実習を履修するにあたり、この授業を通して学びたいことを「個人の達成ルーブリック」という形で記入した。身につけたいと思った力を三つ選ぶ。私が選んだのは行動力、計画力、チームワーキング能力だ。前期の「異文化交流プロジェクト」、後期の「大みかマップ/Omika Map 作成プロジェクト」の活動をこの場所で振り返りたいと思う。



図：異文化フォーラム集合写真

前期には高校生を対象にした「異文化交流フォーラム」を開催した。異文化交流フォーラムでは自分たちでイベントを企画、実行する大変さを実感した。4人と限られたメンバーでイベントを成功させるためには一人一人が積極的に行動する必要があった。各高校との連絡、企画の構成、時間配分、入試広報部との連携、当日の会場設営などやるべきことがたくさんあった。イベントまで一人一人が限られた時間の中で時間を見つけ、積極的に行動できていた。しかし計画を詳しく設定していなかったということがあり、当日に準備物が足りないというハプニングもあったが、イベントは無事成功し、高校生、留学生のたくさんの笑顔を見ることができた。焦らず、臨機応変に行動できたことが成功につながったと思う。また、企画は十分練ったが何かもっと私たちにできることはあるのではないかと考え、直前ではあったが私たちは会場にインスタスポットを作成した。イベント終了後にすぐ帰るのではなく思い出として形に残してもらいたいという思いがあった。当日はとても好評でイベントの内容が終了しても名残惜しそうに会場内に残り、留学生と写真を撮る姿がみうけられた。提案したインスタスポット作成についてもメンバーは快く受け入れ、協力をしてくれたことに感謝したい。笑顔があふれるイベントであった。アンケートでは約九割の方が今回参加して「満足」という回答であった。計画性など課題が残る点も少々あったが異文化フォーラムを通して高校生に異文化理解、国際交流の楽しさを伝えるということを達成することができたと思う。

後期は前期での反省を生かし、7カ月間に亘る活動計画表を作成した。大みかマップ/Omika Map 作成に当たっては今年が初めての取り組みであった。大甕駅を利用している外国の方が多いにもかかわらず、地域との交流が少ない。そこで、少しでも外国の方に大みか町に興味を持ってもらいたいと思いこめてカラーのマップを作成。実際に大みかを歩くことで新しい発見があり、大みかを知る貴重な体験となった。

そして一番悩み、私を成長させてくれたのはリーダーという責任だ。私には後悔していることがある。締め切りが近くなっていることに対して、担当しているメンバーに確認の言葉をかけていたことに安心し、状況を直接確認せずに任せてしまったことである。結果的に冊子の完成の締め切りに間に合わなくなってしまい、大みかマップ/Omika Map のカラー版は完成したが、冊子完成については次年度に継続してもらう形となってしまった。反省会後はメンバーと話し合いをし、誰が何をいつまでにやらなくてはならないのか明確に指示を出し、また情報共有を徹底して行うように呼びかけた。また、疑問に思ったことはそのままにせず納得をしたうえで作業をすることも呼びかけた。抱えていることをそのままにせずに相談をすることの重要性を実感した。リーダーとして、メンバーに声をかけ、仕事を分担したら、直接進捗状況を確認し、最後まで責任を持つことが大切であると痛感した。計画力、チームワーク能力については課題が残ってしまった。私にとってこの一年間は大変で、つらく感じることもあった。しかし、辛いこと以上に学びの多い一年であった。自分にできることを増やしたいと一歩を踏み出して本当によかった。プロジェクト実習を通して学んだことを今後にもいかしていきたい。

社会人への滑走路

プロジェクト実習を通しての学びと反省

茨城キリスト教大学 4年 澤田 香沙美

私は正直このプロジェクト実習を履修するかとても悩んだ。理由は、初対面のメンバーで何か新しいものを初めから作っていくことに対する不安など様々であった。しかし、社会人になる前に社会人基礎知識を習得できるということがとても魅力と感じ、履修することを決めた。そして、このプロジェクト実習を履修するにあたり自身の目標を三つ、プレゼンテーション能力の向上、対応力の向上、発信力の向上、と定めた。前期の「異文化交流プロジェクト」、後期の「大みかマップ/Omika Map 作成プロジェクト」、そしてプロジェクト実習活動報告会に向けての活動で自分が何を行い、何を学んだのか振り返っていきたいと思う。

前期には高校生を対象に行う「異文化交流フォーラム」開催に向けて活動を行った。この活動を通してもっとも学んだ点は、計画を立てる大切さだ。無論、この企画は先生ではなく、自分たちが中心となり計画をし、準備をすることとなる。しかし、「段取り八分、仕上げ二分」という言葉の通り、これらが自分の想像よりはるかに大変な作業であり、重要な作業であることを身をもって学んだ。自分が担当をした活動の一部に、留学生との連絡係というものがあつた。異文化交流フォーラムでは、高校生と外国人が交流を深めるために留学生の参加は必須であり、自分の責任も大きかった。しかしながら、当日の留学生の参加者は十名の予定に対し、たった一名であつた。それは、私の準備不足、すなわち留学生と私の間でのコミュニケーションが不十分であつたためだと考える。私は常に留学生とのコミュニケーションはメールを使用しており、常に一方通行になってしまっていた。このような結果から、相手に重要な案件を連絡する際には、コミュニケーションにおいてもプロセスが必要だと学んだ。連絡を取るだけでなく、必ず相手と実際に会って話し合いをするまで道筋を立てて実行する大切さを実感できた。私は、チーム全体でも計画性が欠けていたと感じている。異文化交流フォーラム開催日が近くになるにつれて、活動量も多くなり、課題の多さに追い詰められることがあつた。そのような余裕のない状態になってしまった原因は、私たちのチームに活動計画表という大きな指標が抜けてしまっていたためだと考える。活動の具体的な計画をなくして完璧な成果は得ることができないということを改めて感じるとともに、この学習を社会人になってからも忘れないようにしたいと思った。このような中でも異文化交流フォーラムは無事に開催することができ、沢山の高校生、本学の外国人インターン生、留学生の笑顔を見ることができたのは、メンバーそれぞれが自分の担当活動を実践にこなし、結果としてチームで一つのものを作り上げる楽しさを味わうことができた。

後期に行った、「大みかマップ/Omika Map 作成プロジェクト」では、役割分担+チェック係の必要性を学んだ。大みかマップを作成するにあたり、探索をする人、マップを書く人、文章を書く人と役割分担をすることでより進捗が早かったのだが、自分を含め、各担当者の活動の進行状況、疑問点を把握することができていなかった。メンバーの一員として現状を分析できていなかった点を深く反省し、チームでは「常にお互いのことを気にかける」ということを念頭において活動をするべきだと学んだ。

正直なところ、個々のプロジェクトでは、自身の掲げた三つの目標を達成できたかどうか実感をすることができなかった。しかし、プロジェクト実習活動報告会に向けての活動の中で、発信力とプレゼンテーション能力の向上をみとめることができた。発信力においては、パワーポイントの作成において、メンバー内で活動のまとめをする際に自分の言いたい事、疑問点を明確に相手に伝えることができるようになった。今までは、自分が言いたい事を自分の中でまとめずにそのまま相手に伝えてしまっていたことで、相手に話の内容を納得してもらえないことがあつた。しかし、伝えるのが難しい内容でも、まずは自分なりに紙に書き出してまとめて整理をし、説明するときは黒板などを用いることでわかりやすく説明することができると学んだ。プレゼンテーション能力においては、スライドを聴者の理解度や受け止め方を考慮しながら作成することができた。私たちが行った活動については私たちが熟知していることは当然であり、相手に説明をする際にどうしても自分軸で話をしてしまうことが多いと学ぶことができた。そこで、活動を知らない人にもスライドを見てもらうことで誰にでも分かりやすいスライドを完成させることができた。

一年を通して、ここに書ききれない程の多くの学びを得ることができた。今振り返ってみると「積極的に物事に取り組むこと」が学びの原点だと重々と感じる。支えてくださったすべての方に感謝したい。

社会人基礎力の習得

プロジェクト実習を通して学んだこと・感じたこと

茨城キリスト教大学 2年 袴塚 梨帆

私は、1学年の頃から、絶対にこの科目を履修すると決めていた。皆と同じ大学生活ではつまらない、少し変わったことがしたい、と模索していた私にぴったりだと考えたからである。この科目を履修するにあたり、「社会人になったとき役立つ力を身につける」という個人的な目標を立て臨んだ。全てが終了した今、一年間の活動で何を学んだのか、何を感じたのか、過去の自分と向き合っていこうと思う。

前期には、「異文化を持つ人と交流をする機会を設け、若年層の豊かな人間関係の構築をする」という目標のもと、「異文化交流フォーラム」を開催した。前期の活動から学んだことは二つある。まず一つ目は「全体を見通す重要さ」である。活動を始めたばかりの私たちは、目先のことしか考えずに、「期限」という概念を頭に入れていなかった。自分のペースで各々の仕事を進めていたが、気付いてみたら全然間に合っていない、という事態に陥ったのである。これは、明らかな見通し不足だ。イベントの開催日は既に決まっていることなのだから、その期日を念頭に置いて活動すべきであった。また、前期の活動が滞った原因の一つに、社会人において必須事項である「報告・連絡・相談」を怠ってしまった、という点がある。常にメンバーと連絡を取り合い、進捗状況や疑問点を連絡・相談することの重要性を、身をもって学んだ。そして二つ目は「メンバーを頼る必要性」である。前期の活動において私は、自分を過大評価していた。何事も自分一人でやってのけられると思い込み、仕事量をどんどん増やしたが、結局キャパオーバーしてしまった。そこで仲間助けを求めればよかったものの、自分で解決しようとして抱え込み、逆に効率を下げてしまったのである。前期の活動で私が一番後悔していることだ。「メンバー」であり「仲間」なのだから、困ったことがあったら頼ってもいいのだ、という、至極当たり前なことに気付かされた。様々な問題が生じたが、異文化交流フォーラムを無事開催することができた。目標に見合った活動ができたか、と問われると胸を張れるわけではないが、イベント後にご協力いただいたアンケートの結果を見ると、将来有望な高校生の自信に繋がったと実感できた。また、イベントの企画から開催まで中心となって活動できたことは、私たちの今後の人生で誇れる経験だと言える。

そして後期は、「大みか町の魅力を発掘し、英語で発信をする」という目標のもと、大みかマップ作成に尽力した。前期の反省点でもあげた「全体の見通し」に関しては、一番始めの活動で期日の確認と役割分担をした。この工程により、メンバーと活動の意味を改めて認識できただけでなく、前期に比べて計画的に進めることができたのだ。しかし、新たな反省点も生まれた。「本校のインターン生との関係を深く持てなかった」という点である。大みかマップは、地域住民と外国人観光客の交流の契機となることも目指している。その点で、インターン生の協力は必要不可欠であった。だが、結果インターン生と回ることできた大みか町の店はたった一軒にとどまってしまった。期日に追われすぎて、一つ一つの活動が少し雑になってしまったと感じている。期日から逆算するだけでなく、その活動をどう効率よく行うことができるのか追及し続けることで、更に質の高い活動ができたのではないかな。ただ計画を立てて満足してはいけない、ということを学んだ。

この一年間、自分なりに全力で駆け抜けてきた。想像を絶する大変さだったが、それ以上に学んだことが多かったのも事実である。学生の内には学ぶ機会があまりないビジネスメール、イベントの企画・運営など、社会人基礎力を培うことができた。活動に対しての後悔は、正直あげていくとキリがないが、一つ一つがかけがえのない貴重な経験である。未熟な私たちに寄り添ってくださり、時には的確なアドバイスをくださった先生方、異文化交流フォーラム、並びに大みかマップ作成にあたりお力添えいただいた方々、そして何より、苦楽を共にしてきたメンバーに心から感謝したい。私にとって忘れられない一年間となった。この先二年の大学生活は、自分の積極性次第で良くも悪くも変わってゆくであろう。一年間でつけた力を発揮できるか否かも自分にかかっている。この経験をバネに、悔いのない大学生活を送れるよう精進していきたい。

一年を通して成長したこと

茨城キリスト教大学2年 齊藤 眞理子

私は当初、何気ない気持ちで友達も履修するから一緒に受けようという軽い気持ちで履修しました。その時の私は受験に失敗した暗い気持ちを引きずったまま大学生活を送っていたため全く充実した毎日を送れず、何事にも全力で取り組むという気持ちを忘れて日々を過ごしていました。しかし、この授業を履修したことによって私のキャンパスライフに変化が訪れました。授業が始まると、思っていたよりも大変で、今までの自分から確実に成長していることが実感できるとても素晴らしい授業だということに気がきました。

ここからは、そんな私が経験した大変さと成長を主に振り返ってきたいと思います。

最初の壁は計画性が皆無だったことです。今までは自ら行動しなくても決まった時間に教室に行き教授の講義を聞いていれば良かったのですが、この授業は自分たちでいつ、どこで、誰が、何をするのかを全て決めなければなりませんでしたが、私たちにはそれらが出来ず、前期は明確な計画がないままに進めてしまった為、一人一人の認識が食い違ってしまい上手く連絡、報告が出来ておらず、必要なものが前日になっても用意できずに当日を迎えてしまい結局、当日に間に合わせのものを用意しなくてはならない状況でした。そこにはチームで活動するからこそ生じる問題がありました。それは協調性です。集まっても中々意見が出てこなかったり、一人が全てやろうとしてしまい負担が平等ではなくなってしまい期限に間に合わなかったり、情報量が多すぎて手に負えずに中途半端になってしまったりしていました。このような状況になっていてもメンバー同士でお互いの進捗状況を逐一連絡していませんでした。前期の反省会の時にチームで話し合い、いかに計画を鮮明にし、チーム全体に確実な情報や連絡を取ることが大切なのかがメンバー全員から挙がったので、このままでは後期にも同じようなことをしてしまうと思い私たちは改善しようと決めました。そこからチームは団結し、一人一人の意識が変わっていきました。

次に大変だったのは、英訳でした。後期は大甕の魅力を伝える為に外国人にも分かるように英訳付きの地図を作るというもので、私はその英訳を担当していました。英語は昔から得意だったのですぐに完成するだろうと思い甘く見ていました。しかし、英訳してみると自分が普段学び使用している英語では中々思うような英訳にならずに苦労しました。ネイティブの先生に最初添削をしてもらった時にあまりにも訂正箇所が多かった為、自分の英語力はまだまだ成長段階だと改めて痛感しました。二度目の添削の際、先生と単語の使い方と意味で衝突をしました。それは先生が添削し直した単語の意味が分からずに、そのまま使用してしまい先生に本当にこの意味を理解して使っていますか、私にもあなたが推敲した部分で分からない意味がありましたが、チームで確認していますかと言われました。その時私は、英訳は得意だから自分一人でなんとかやり遂げようとしてしまいチームの意見を聞かずに、進捗状況だけをメールで送っていただけでした。これでは前期と同じになってしまうと思い、次の日にすぐに訂正版の英訳を送りチーム全員に共有し意見を聞きました。メンバー全員が意見を出してくれたのでスムーズに英訳で悩んでいた部分を解決することが出来ました。

やはりここでも情報共有、連絡は大切にしなければいけないと痛感しました。

このような大変さが有りましたが、私が一番成長を実感できたのは、副リーダーとしての責任の重さでした。始め、私が副リーダーでいいのかと悩んだ時期もありました。副リーダーという地位は微妙な位置で、リーダーを支えながらメンバーの意見や話を聞き、リーダーとチームの方向性を決めていかなければならなかったからです。リーダーとは放課後や休日にメールや話し合をしながら次の授業までに何をどこまで進めるか決めていきました。イベント当日にはリーダーは他のメンバーよりも忙しくなることを予想して自らチームに声かけをしたり、状況を確認したり出来るだけリーダーの負担を減らそうと奮闘しました。チームの士気が下がらないように気配りも怠らずに行いました。

このように一年間とても大変で苦労は沢山あったけど、それ以上に社会に出たときに必要な知識と経験ができて充実した一年を過ごせたと思います。

6：おわりに

齊藤 眞理子

今年度の活動を振り返ると、このプロジェクト実習を通して二つの企画を無事に成功させることができたという成果と同時に課題も得た。

まず学んだこととして、計画的に進めることの大切さ、主体的で積極的な行動、情報共有の大切さの三つを挙げる。

前期は計画を立てる前に役割を決めてしまい、何も明確な目標がないために独断で行動してしまった。そのためにメンバー間で情報が食い違ってしまうことがあったが、後期では九月前半からしっかりと計画を立てて作業を進めることができた。また、これらのことから先生方に言われた事だけではなく、自分達で自らの情報が必要で、いつまでに完成させなくてはならないなどの先を見通しての行動も可能となった。これにより地図作りは順調に進み、大甕駅周辺の散策、お店への訪問がスムーズにこなせていた。

実際に地図が完成し、メンバー全員で確認をした時には全員が声をあげて喜んでおり、自分達で作った地図がこれから大甕の住人や、外国人訪問者に利用していただくことになると思うと、これまでのたくさんの大変なことや、辛いことが全て一気に消えた。

一年間の活動を通して一番嬉しかったことは報告会の時に聴講に来ていた地域の方やお客様から、面白い発表だったよ、興味深かったなどといった言葉をもらえた時だった。しかしながら、情報共有に関してはまだまだ課題が残るところが多かったように思える。メンバーの進捗状況を誰も確認しておらず一人で進めさせてしまい、中々チーム全体に情報が行き届かなかった。このようなことから情報共有に関しては、もう少し伸ばせる部分ではないかと考える。

最後になりますが、この一年間多くの方々に支えられ、このプロジェクト実習を進めることが出来ました。この場をお借りして感謝申し上げます。茨城キリスト教学園高等学校教諭大川通昭先生・関係者の皆様、水戸啓明高等学校教諭泉澤靖先生・関係者の皆様、日立北高等学校教諭長山祐司先生・関係者の皆様、勝田高等学校教諭柏村裕美子先生・関係者の皆様、そして最後にプロジェクト実習担当教員である上野先生、長谷川先生、ジャブコ先生、本当にありがとうございました。

4：水戸交通屋さんチーム

リーダー	： 志賀 有紗	茨城大学人文社会科学部人間文化学科	2年
副リーダー	： 荒牧 瑞稀	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
書記	： 佐藤 怜璃	茨城大学教育学部学校教育教員養成課程 教科教員コース言語・社会系英語選修	2年
会計	： 粕谷 紗雪	茨城大学教育学部学校教育教員養成課程 教科教員コース美術教育系美術選修	2年

主担当教員：鈴木 敦 茨城大学人文社会科学部 教授
副担当教員：神田 大吾 茨城大学人文社会科学部准教授

2018 年度

「水戸交通屋さん」チーム活動報告

1. はじめに

チーム一同（以下、同じ）

茨城大学人文社会科学部プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱでは地域貢献、社会貢献をテーマに活動をしている。「水戸交通屋さん」チームは、水戸市役所交通政策課様からのご提案である「水戸市の公共交通活性化」をテーマに選んだメンバーで結成された。

私たちは去年に引き続き、株式会社 茨城交通様にご協力をいただき水戸のバスの利用促進に向けて活動した。私たちの目的は大きく二つある。一つは、利用者がバスの運転士の方々により親しみを持ってもらえるようなきっかけをつくること。二つは、バスに乗ることを手段としてだけでなく、目的としても考えられるような利用者の意識転換を実現することである。このように利用者とバスの運転士の方々が距離を縮めることで、バスの利用促進を実現しようと考えた。

2. 活動概要

水戸交通屋さんチームの活動は以下の通りである。

4月の終わりにプロジェクト構想の立案を開始した。5月に水戸市交通政策課の方と今後の作業の進め方に関する進め方に関する打ち合わせを行った。その後、水戸市交通政策課様からアドバイスを頂きつつプロジェクト構想の立案を深めていった。5月下旬にはプロジェクト構想を完成させ、茨城交通様に挨拶、打ち合わせを行い本格的にプロジェクトの活動が開始した。

7月にはリーフレットの大まかなレイアウト構想を開始し、リーフレットに関する情報収集をした。9月には運転士の方々への聞き取りを行い、それらをまとめた。9月下旬にはリーフレットの下原稿を作り始めた。10月には運転士の方々のおすすめのスポットへの掲載許可を取った。

この間、8月13日～17日に荒牧と志賀が、9月10～14日に粕谷と佐藤が、それぞれ水戸市役所交通政策課様の下でインターンシップをさせていただいた。

11月の茨苑祭までに仮のリーフレットを完成させた。茨苑祭でアンケートを行い、それをもとにリーフレットの完成版を作成した。

2月にはリーフレットを配布することができた。QRコードによりアンケートを回収し、成果の検証をした。

3. 議事録・活動記録<概要版>

No.	日時 (10分単位)	場所	活動内容	参加者	実働時間
1	2018年 4月27日 10:20 - 11:50	茨城大学図書館 ラーニングコモンズ	プロジェクト構想立案	荒牧、佐藤、志賀	1:30
2	2018年 5月2日 11:50 - 15:00	茨城大学 茨苑会館	プロジェクト構想立案	荒牧、粕谷、佐藤、志賀	3:10
3	2018年 5月8日 16:00 - 17:00	茨城大学 学生生協	翌日の会議に向けた事前打ち合わせ	荒牧、志賀	1:00
4	2018年 5月9日 12:00 - 13:30	茨城大学図書館 共同学習スペースS1	水戸市交通政策課のお二方と今後の作業の進め方に関する打ち合わせ	荒牧、佐藤、志賀	1:30
5	2018年 5月11日 10:20 - 11:50	茨城大学図書館 ラーニングコモンズ	ブレインストーミング	荒牧、粕谷	1:30
6	2018年 5月14日 10:20 - 12:30	茨城大学図書館 ラーニングコモンズ	プロジェクト構想立案	荒牧、粕谷、佐藤	2:10
7	2018年 5月14日 14:20 - 17:30	茨城大学図書館 ラーニングコモンズ	メール作成、パワーポイント作成	荒牧、粕谷、志賀	3:10
8	2018年 5月18日 10:20 - 11:50	茨城大学図書館 ラーニングコモンズ	チーム名考案	荒牧、佐藤	1:30
9	2018年 5月21日 14:20 - 15:20	茨城大学理学部棟 英語学習室	個人目標ルーブリック作成	荒牧、粕谷	1:00
10	2018年 5月21日 15:00 - 17:30	茨城大学理学部棟 英語学習室	プロジェクト構想書作成	荒牧、志賀	2:30
11	2018年 5月22日 16:00 - 17:30	茨城大学教育棟 ラウンジA	レジュメ作成、名刺作成	荒牧、志賀	1:30
12	2018年 5月23日 9:30 - 10:00	茨大前営業所	茨城交通の方々と挨拶、打ち合わせ	荒牧、佐藤、志賀	0:30
13	2018年 6月6日 11:50 - 15:00	茨城大学図書館 ラーニングコモンズ	構想発表会の反省、次回に向けた打ち合わせ	荒牧、佐藤、志賀	3:10
14	2018年 6月13日 9:30 - 12:00	茨城大学理学部棟 英語学習室	配布するアンケートの作成(第一稿完成)	荒牧、志賀	2:30
15	2018年 6月20日 16:00 - 17:00	茨城大学 佐川泰弘研究室	佐川教授との面会、プロジェクトの説明	荒牧、佐藤、志賀	1:00
16	2018年 6月26日 12:40 - 16:00	茨城大学図書館	配布するアンケートの訂正(第二稿完成)	佐藤	3:20
17	2018年 6月26日 16:00 - 17:00	茨城大学図書館	助成金申請書の作成	荒牧、志賀	1:00
18	2018年 6月27日 16:00 - 17:00	茨城大学 佐川泰弘研究室	佐川教授との面会、作成したアンケートの修正	荒牧、志賀	1:00
19	2018年 7月3日 15:00 - 17:00	茨城大学理学部棟 英語学習室	アンケートの訂正(決定版完成)	荒牧	2:00
20	2018年 7月9日 10:00 - 11:00	荒牧宅	助成金申請書の訂正	荒牧	1:00
21	2018年 7月11日 13:00 - 17:00	茨城大学図書館 ラーニングコモンズ	茨苑祭に関する会議への参加、中間発表会の資料作成	荒牧、志賀	4:00
22	2018年 7月12日 1:00 - 2:00	荒牧宅	中間発表会の資料作成	荒牧	1:00
23	2018年 7月12日 12:00 - 14:00	茨城大学図書館 ラーニングコモンズ	中間発表会の資料作成	荒牧、粕谷、志賀	2:00
24	2018年 7月13日 12:00 - 14:00	茨城大学 茨苑会館	中間発表会の反省会	荒牧、粕谷、志賀	2:00
25	2018年 7月13日 14:00 - 15:00	茨城大学 佐川泰弘研究室	佐川教授との面会	志賀	1:00
26	2018年 7月14日 2:00 - 4:00	荒牧宅	パンフレットの大きなレイアウト構想	荒牧、粕谷	2:00
27	2018年 7月18日 15:00 - 18:00	茨城県立図書館	パンフレット作成に関する情報収集	荒牧、粕谷	3:00

28	2018年 7月19日 16:00 - 17:00	サザコーヒー茨城大学 店	電話内容の打ち合わせ、レイアウト構想	荒牧、志賀	1:00
29	2018年 8月13日 8:30 - 17:15	水戸市役所臨時庁舎交 通政策課	インターンシップ	荒牧、志賀	8:45
30	2018年 8月14日 8:30 - 17:15	水戸市役所臨時庁舎交 通政策課	インターンシップ	荒牧、志賀	8:45
31	2018年 8月15日 8:30 - 17:15	水戸市役所臨時庁舎交 通政策課	インターンシップ	荒牧、志賀	8:45
32	2018年 8月16日 8:30 - 17:15	水戸市役所臨時庁舎交 通政策課	インターンシップ	荒牧、志賀	8:45
33	2018年 8月17日 8:30 - 17:15	水戸市役所臨時庁舎交 通政策課	インターンシップ	荒牧、志賀	8:45
34	2018年 9月3日 8:40 - 12:00	茨城大学図書館 共同学習スペースS1	鈴木先生と打ち合わせ	荒牧、粕谷、佐藤	3:20
35	2018年 9月10日 8:30 - 17:15	水戸市役所臨時庁舎交 通政策課	インターンシップ	粕谷、佐藤	8:45
36	2018年 9月11日 8:30 - 17:15	水戸市役所臨時庁舎交 通政策課	インターンシップ	粕谷、佐藤	8:45
37	2018年 9月12日 8:30 - 17:15	水戸市役所臨時庁舎交 通政策課	インターンシップ	粕谷、佐藤	8:45
38	2018年 9月12日 10:00 - 16:00	茨大前営業所	運転士の方々への聞き取り調査とまとめ	荒牧、志賀	6:00
39	2018年 9月13日 8:30 - 17:15	水戸市役所臨時庁舎交 通政策課	インターンシップ	粕谷、佐藤	8:45
40	2018年 9月14日 8:30 - 17:15	水戸市役所臨時庁舎交 通政策課	インターンシップ	粕谷、佐藤	8:45
41	2018年 9月17日 15:30 - 20:00	ガスト茨城大学前店	レイアウトの構想	荒牧、粕谷、佐藤	4:30
42	2018年 9月26日 8:40 - 15:00	茨城大学図書館 ラーニングコモンズ	リーフレット原稿作り	荒牧、粕谷、志賀	6:20
43	2018年 10月2日 14:00 - 21:00	茨城大学 C-mail室	リーフレット原稿作り	荒牧、佐藤	7:00
44	2018年 10月3日 12:00 - 15:00	茨城大学図書館 ラーニングコモンズ	掲載許可取(保和苑)、リーフレット原稿作り	荒牧、粕谷、佐藤	3:00
45	2018年 10月3日 15:00 - 18:00	伊勢屋、チャペル	掲載許可取	荒牧、粕谷、佐藤	3:00
46	2018年 10月9日 15:00 - 19:00	茨城大学 C-mail室	リーフレット原稿作り	荒牧、佐藤	4:00
47	2018年 10月18日 16:00 - 18:00	茨城大学 C-mail室	リーフレット原稿作り	荒牧	2:00
48	2018年 10月22日 12:00 - 15:00	茨城大学 C-mail室	リーフレット原稿作り	荒牧	3:00
49	2018年 10月24日 12:00 - 22:00	粕谷宅	似顔絵作成	粕谷	10:00
50	2018年 10月27日 17:30 - 19:00	玄海	掲載許可取	荒牧、粕谷	1:30
51	2018年 10月31日 12:00 - 14:00	MILE STONE	掲載許可取	荒牧、粕谷、佐藤	2:00
52	2018年 10月31日 15:00 - 20:30	茨城大学 C-mail室	リーフレット原稿作り	荒牧、粕谷、佐藤	5:30
53	2018年 11月2日 17:30 - 22:00	茨城大学 C-mail室	リーフレット原稿作り	荒牧、粕谷	4:30
54	2018年 11月7日 8:40 - 10:10	茨城大学 C-mail室	リーフレット原稿作り	荒牧	1:30
55	2018年 11月8日 16:00 - 17:30	茨城大学 C-mail室	リーフレット原稿作り	荒牧、佐藤	1:30
56	2018年 11月12日 12:00 - 16:00	茨城大学 C-mail室	リーフレット原稿作り	荒牧、志賀	4:00
57	2018年 11月13日 11:00 - 13:00	茨城大学 C-mail室	印刷依頼	荒牧	2:00

58	2018年 11月15日 13:00 - 14:00	茨城大学 鈴木敦研究室向いの部屋	茨苑祭パネル作成	荒牧、佐藤、志賀	1:00
59	2018年 11月16日 9:00 - 16:00	茨城大学 茨苑会館5番	茨苑祭準備	荒牧、志賀	7:00
60	2018年 11月17日 9:00 - 17:00	茨城大学 茨苑会館5番	茨苑祭展示	荒牧、粕谷、佐藤、志賀	8:00
61	2018年 11月18日 9:00 - 18:00	茨城大学 茨苑会館5番	茨苑祭展示	荒牧、粕谷、佐藤、志賀	9:00
62	2018年 11月21日 10:20 - 15:30	茨城大学図書館 二階PC室	活動報告会 送り状、封筒作成	荒牧	5:10
63	2018年 11月22日 17:30 - 18:00	玄海	電話番号の確認	荒牧、粕谷	0:30
64	2018年 11月29日 14:30 - 15:00	茨大前営業所	活動報告会チラシお渡しのための訪問	佐藤、志賀	0:30
65	2018年 11月29日 16:00 - 17:30	茨城大学共通教育 ラーニングコモンズ	活動報告会 プレゼン打ち合わせ	荒牧、粕谷、佐藤、志賀	1:30
66	2018年 12月1日 17:30 - 21:00	サイゼリヤ水戸笠原店	リハーサルの反省、打ち合わせ	荒牧、粕谷、志賀	3:30
67	2018年 12月1日 22:00 - 23:00	志賀宅	茨苑祭アンケートの集計	志賀	1:00
68	2018年 12月2日 21:30 - 4:00	荒牧宅	活動報告会パワポ修正	荒牧	6:30
69	2018年 12月2日 0:00 - 1:00	志賀宅	活動報告会ポスターセッション原稿製作	志賀	1:00
70	2018年 12月3日 21:00 - 23:00	佐藤宅	活動報告会ポスターセッション原稿製作	佐藤	2:00
71	2018年 12月3日 11:50 - 12:30	鈴木敦研究室	これからの方針について	志賀	0:40
72	2018年 12月4日 0:00 - 4:00	荒牧宅	活動報告会ポスターセッション原稿製作	荒牧	4:00
73	2018年 12月5日 9:00 - 10:00	茨城大学 佐川泰弘研究室	活動報告会パワポのご指摘	佐藤	1:00
74	2018年 12月5日 12:00 - 18:00	茨城大学図書館 ラーニングコモンズ	活動報告会パワポの修正	荒牧、粕谷	6:00
75	2018年 12月13日 16:00 - 16:30	人文学部棟A208	活動報告会資料作成	荒牧、佐藤、志賀	0:30
76	2018年 12月14日 11:50 - 12:40	茨城大学 C-mail室	配布資料原稿作成	荒牧	0:50
77	2018年 12月14日 16:00 - 17:30	茨城大学 人文講義棟10番	活動報告会会場準備	粕谷	1:30
78	2018年 1月10日 16:00 - 17:30	茨城大学共通教育 ラーニングコモンズ	リーフレット配布場所、枚数の検討	荒牧、佐藤、志賀	1:30
79	2018年 1月11日 14:20 - 15:50	茨城大学 C-mail室	印刷発注	荒牧、志賀	1:30
80	2018年 1月28日 15:00 - 19:00	志賀宅	QRコード作成、配布用リーフレット作成	志賀	4:00
81	2018年 1月30日 14:30 - 16:00	茨大前営業所、伊勢屋	リーフレット設置のお願い	荒牧、粕谷、佐藤	1:30
82	2018年 1月30日 16:30 - 17:30	水戸市役所	リーフレット設置のお願い	荒牧、粕谷	1:00
83	2018年 1月31日 14:20 - 14:50	茨城大学 学務	ビラ配りの申請	志賀	0:30
84	2018年 2月1日 14:20 - 16:00	茨城大学理学部棟 英語学習室	活動報告書作成	荒牧、粕谷、佐藤、志賀	1:40
85	2018年 2月18日 9:00 - 14:00	チャペル、マイルストーン、玄海	リーフレット設置のお願い	荒牧、粕谷、佐藤、志賀	5:00
86	2018年 2月20日 14:30 - 17:00	茨城大学図書館 ラーニングコモンズ	助成金実績報告書の作成	荒牧、粕谷、佐藤	2:30
				合計	294:30

4. 活動トピック

4月～7月 方針決定

チームの話し合いにより、バスの利用促進を目的にリーフレットを作成することを決定した。はじめは、リーフレットの対象は老若男女問わずというとても大きな枠組みになってしまっていた。しかし、より明確な対象にしたほうが良いのではないかというアドバイスを受け、10代、20代の女子を対象としたリーフレットを作成することになった。また、リーフレットに運転士の方々のおすすめのスポットを掲載することで運転士の方々に親近感を持ってもらおうとともに水戸を知ってもらいたいと考えた。

9月 インタビュー

運転士の方々にインタビューを行った。質問内容は事前に設定し、状況に応じて質問を変えたり、追加したりした。私たち自身もいつもは話をすることができない運転士の方々のお話をすることができ、運転士の方々のバス利用者に対する思いや、仕事に対する思いを知ることができた。

11月 茨苑祭でのプリテスト

茨苑祭までにリーフレットを作成した。茨苑祭で行ったアンケートでは良い点としては良い点としては、運転士さんの顔が見えるのは親しみが持てる、イラストや色合いがおしゃれ、色合いがソフトで心地良いなどである。改善点としては、リーフレットの用紙の大きさが小さい、運転士さんの一言的なものが欲しい、運転士さんの苗字と名前の間にスペースが欲しいなどである。

12月～1月 完成版リーフレット（図1・2）の作成

茨苑祭でいただいた意見をもとにリーフレットの完成版を作成した。良い点としていただいた意見はそのままに、改善点として挙げられた意見は補正した。完成後、リーフレットにQRコードを添付しアンケートを行った。回収したアンケートを集計し、成果の検証を行った。



図1：リーフレット表面



図2：リーフレット裏面

5：水戸市役所市長公室交通政策課でのインターンシップレポート

市役所での仕事を通じて学んだこと

志賀 有紗（人文社会科学部・2年）

1. 参加の動機

私は「プロジェクト演習」という授業で、水戸の公共交通機関の利用促進というプロジェクト課題に取り組んでいます。インターンシップで学んだことをプロジェクトでぜひ活用したいと思い、水戸市のインターンシップに参加しました。インターンシップを通して、プロジェクトをより良い方向に向けていけるよう、プロジェクトのリーダーとして必要なこと、人に伝える力、主体的に行動する力、新たな知識や考え方を学びたいと考えていました。また、もともと地域に根差している公務員の業務に興味があったので、ぜひ参加してみたいと思いました。

2. 派遣先の概要と業務内容

水戸市役所交通政策課では、主に二つの業務を行いました。一つ目は、議事録の作成です。実際の会議の音声を聞き、様々な人の意見を Word に起こしました。二つ目は、イベントの案内版の作成です。この案内板は、水戸駅と赤塚駅で使用されました。案内板は PowerPoint で作成しました。

3. インターンシップを通して修得したこと

五日間のインターンシップを通して修得したことは三つあります。

一つ目は、人に伝える力です。パワーポイントによるイベントの案内板の作成により修得することができました。この案内板はたくさん人のいる駅で用いるため、どのようにすればよりイベントについて分かりやすく伝わるかということを考えました。実際には一番伝えたいことを大きく表示すること、絵を用いて誰にでも分かるようにしました。

二つ目は、キーボードのタッチが速くなったことです。議事録作成などでパソコンを長時間扱ったためだと思います。インターンシップに参加する前までは、キーボードのタッチが遅く、ミスタッチも多かったのですが、今では自分でも速く打ち込めるようになり、ミスタッチを減らすことができたと感じています。それだけでなく、手元を見ないで、パソコンの画面だけを見て打ち込めるようにもなりました。

三つ目は、水戸市の地域の人々の考えを知ることができたことです。議事録を作成し、さまざまな意見を聞くことができたためだと思います。地域の人々は私が思っている以上に水戸市の交通に関して深く考えていることを学びました。私も水戸の公共交通機関の促進のためにどのようにすれば水戸の公共交通機関の利用者が増えたり、利用頻度が増えたりするのか考えていかなければいけないと思いました。それまでも地域に根差した仕事をしたいと考えていましたが、インターンシップに参加したお蔭で、地域の人々にとって安全で安心、快適なまちづくりの一端を担ってみたいと思う気持ちがより強くなりました。

私は五日間のインターンシップに参加して、人に伝える力、パソコンの基本的な操作能力、そして、より良いまちづくりのために考えていくことの大切さを学びました。

4. 後輩へのアドバイス

水戸市役所交通政策課での業務はパソコンを扱う仕事がほとんどでありました。その中でも、Word を一番多く使用しました。そのため、Word の基本的な使い方はできておくべきだと思います。

また、インターンシップに参加する際、最初は緊張すると思います。しかし、水戸市役所で働く皆さんはとても優しく接してくれ、業務のやり方なども丁寧に教えてくれます。そして、水戸市役所の雰囲気が和やかなので、徐々に緊張も解けてくると思います。なので、あまり緊張しすぎずにインターンシップに参加してください。インターンシップは将来のことを考える機会になるだけでなく、技術の習得や様々な知識など多くのことを学ぶ機会になると思います。ぜひ、多くのことを得られるようにアンテナを張ってインターンシップに参加してほしいです。

人のために働くということ

荒牧 瑞稀（人文社会科学部・2年）

1. 参加の動機

私は、将来の就職先として公務員を視野に入れており、人のために働く仕事がしたいと考えています。そのため、このインターンシップは、市役所の仕事を知り、体感する良い機会だと思い、参加を決めました。また、交通政策課は、公共交通機関についての情報発信が盛んになされているイメージがあり、大学でメディアを専攻する者として、情報発信に関する計画・遂行の手立てを学びたいと考えていました。

さらに、「プロジェクト演習」という授業で水戸市公共交通機関の利用促進に向けたプロジェクト課題に取り組んでいるため、交通政策課の皆様に業務を教えていただき、実際に業務を遂行することによって、プロジェクト実行の糧になるのではないかと考えました。また、実際に計画がどのように進められているのか、課題解決のために人がどのように動いているのかを見ることで、「働くということ」についてより深く理解できるのではないかと考えたことも理由の一つです。

2. 派遣先の概要と業務内容

水戸市役所市長公室交通政策課は、交通政策の企画及び調整に関する業務や、高齢者・障がい者の方々の移動などの円滑化の促進に関する法律に関する業務などを行っています。

私が派遣期間の五日間で体験した業務は主に三つあります。一つ目は、水戸市都市交通戦略会議という会議の議事録の作成。二つ目は、各交通会社の乗車人数などが記載されているデータ表を、系統ごとに見やすいように色分けをする業務。三つ目は、8月20日開催の「真岡SL乗車体験ツアー」で使用する、受付案内板の作成です。

3. インターンシップを通して修得したこと

私がこのインターンシップを通して実感したことは、人のために働くということです。この体験をするまで、市民のために、具体的にどのような仕事をするのか、全くイメージがつかめませんでした。しかし、この五日間で、交通政策課の皆様の働く姿を拝見し、印象が変わりました。交通政策課の皆様は、市民のことを本当に第一に考え、一つ一つの事業に真剣に取り組んでいらっしゃいました。特にこのことを実感したのは、交通戦略会議の議事録を作成しているときです。さまざまな交通会社の方々と、市民の意見を聞き入れ、交通政策を調整することは決して簡単なことではありません。この業務を確実にこなしている姿を拝見し、人のために働くということを考えさせられました。自分自身が「人のために」働いていたとしても、本当にその人のためになっているのかが重要であり、一つ一つ段階を踏んで長期的にものごとと向き合うことが、人のために働くということなのかなと感じました。

また、交通政策課の皆様に、働くことということを一から教えていただいたり、貴重なお話をしていただいたりと、これから自分の将来を考える上で、糧になるものをたくさんえることができました。

4. 後輩へのアドバイス

「百聞は一見に如かず」。まさにこの言葉を痛感した体験でした。自分の想像や、周りの声に惑わされるのであれば、インターンシップに参加するべきだと思います。将来、公務員を志望する人は、自分のモチベーションをさらに向上できると思いますし、公務員を志望していないという人でも、思わぬ発見があるかもしれません。

与えられた業務を確実にこなすことはもちろん大事ですが、仕事だけに目を向けず、実際に働いている人の姿をよく拝見し、休憩時間などの時間に、受入先の皆様との何気ない会話を楽しむことができると、より厚みのある体験ができると思います。

そして何より、自分なりに有意義な体験になるよう試行錯誤することが大切だと思います。迷っている人は是非参加してみてください！

全ては市民のために

佐藤 怜璃（教育学部・2年）

1. 参加の動機

専門科目「プロジェクト演習」で、他の三人とチームを組み、水戸市の公共交通利用促進を目的としたプロジェクト課題に取り組んでいる私にとって、水戸市の交通政策内容は興味深いものだからです。また、水戸市内の学校に公共交通機関を利用して通学していることから、水戸市の交通政策内容に関心を持つようになりました。以前から公務員の仕事を体験したいという強い気持ちがあったことも一つの理由です。市役所での就業体験を通して水戸市内の現状や交通に関する課題を理解し、自らの学びにつなげたいと思い参加しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

体験した業務は主に三つに分けられます。まず、パソコンを使った事務作業を行いました。例えば、高速ICの交通量やデータを打ち込み、各地域の公共交通利用状況を一目で分かるように編集しました。また、水戸市内で運行している乗合タクシーの乗客人数、利用者の年齢層や利用時間等をエクセルにまとめる作業をしました。次に、交通に関するバリアフリー教室の手伝いをするために水戸市内の公立小学校に行きました。交通政策課の職員の方や小学校の教員の方々と共に、車いすや持ち運びスロープの準備を行いました。また、第4学年の児童たちが車いす体験をする際に乗車のサポートを行い、バリアフリー教室のスムーズな進行ができるよう補助をしました。主に車いすの操縦、児童の見守りをしました。そして、これらの活動を含む施策に対する意見をまとめ、レポートを提出しました。改善点や疑問点について職員の方と意見交換もしました。

3. インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップを通して、市民に寄り添うことの大切さを学びました。それは市報に折り込み広告として配布するプリントを折りたたむ作業をしていた時に強く感じました。私たち実習生の作業に何人かの職員が参加し、一緒に広告を折り始めました。とても丁寧に、そして真剣な眼差しで作業する姿は、広告を手取る市民に向けられているように見えました。交通政策課の職員の方々の傍で仕事をした私は、職員の方々の仕事に対する熱い思いを感じることができました。今まで私が抱いていた市役所での仕事のイメージとは異なり、交通政策課の職員の方々は団結しているように見えました。チームのように一体となり、市民のよりよい生活を実現するため熱心に仕事に取り組む姿勢は、私の憧れになりました。また、公共交通利用促進のプロジェクトを行っている私にとって、利用者を第一に考えることの重要性を改めて感じました。そして、プロジェクトを成功させようという強い気持ちが一層強まりました。

4. 後輩へのアドバイス

職員の方々とコミュニケーションを図ることが大切だと思います。業務に関する不明点は職員の方々に積極的に質問することで、業務を円滑に進めることができました。また、業務連絡だけでなく色々な話も交わすことにより、お互いが打ち解けることができました。最初は話しかけるのに勇気が要りましたが、自分からたくさん話しかけることができてよかったです。課によって職員の数はいくつ異なりますが、どの業界においてもコミュニケーションは大切なのではないかと思います。実際に働く職員の方々との交流はとても有意義なものとなりました。私の実習を快く迎え入れてくださった職員の方々に心から感謝しています。

たくさんのことを学んだ 5 日間

粕谷 紗雪（教育学部・2 年）

1. 参加の動機

私がこのインターンシップに参加した理由は、このプロジェクト演習をより深く学ぶために、必要だと感じたからです。私たち「水戸交通屋さん」チームは、水戸の公共交通活性化を目指して活動しています。そのためには水戸の公共交通に携わる、仕事を行っている人と関わり、その仕事を、間近で体験する必要があると考えました。具体的には私たちは、茨城交通の運転士の方々を紹介するリーフレットの作成を行っています。企画を進めていくためにはどのような段階を踏んでいくべきなのか、課題にぶつかったときどのように解決していくのかを見ることによって、自分たちの企画を進めていくためのヒントにしたいと考えたのも理由の一つです。さらに、自分がどのような職種に就くかは関係なく、「大人が働く職場」を体験することによって、自分の将来の糧にしていければと思います、参加しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

水戸市役所市長公室交通政策課は水戸の公共交通の活性化や課題の解決に日々取り組んでいます。私がやらせていただいた主な業務は、次の通りです。まず、私たちの一番はじめの仕事は、広報誌に織り込むチラシを折ることでした。そして初日の午後から 2 日目にかけて、過去の会議をまとめたファイルの目次をまとめて Excel に打ち込む作業を行いました。またその日は乗合タクシー「国田号」の乗車人数のまとめも行いました。3 日目には千波小学校バリアフリー講習会へ参加しました。4 日目には、タクシー運転手対象のバリアフリー講習会の見学へ行きました。最終日は、会議資料の中身をチェックし、必要事項の確認を行いました。私が思っていたよりも、いろいろな仕事に携わせていただき、驚きました。とても充実した 5 日間でした。

3. インターンシップを通して修得したこと

私がインターンシップに参加して学んだことはたくさんありますが、特に強く印象に残っていることは、千波小学校のバリアフリー講習会に参加したことでした。将来教師を目指している私にとって、とても貴重な体験でした。少しの時間ではありますが、児童たちが慣れない車いすを押したり、乗ったりします。どのように声掛けすれば安全に、そして考えて行動してくれるのか、難しかったです。またたくさん声をかければよいというわけでもなく、交通政策課の目的としては、児童たちに体の不自由な人はどのように感じるのか気づいてほしいということだったので、こう感じるだろう、こう思いなさいという印象の植え付けにならないように気をつけました。また実際に交通政策課で働く方々を見て、課題や、市民の人々からの声に真摯に対応している姿を見て、誰かのためにチームで協力することを学びました。私たちが何気なく利用している公共交通ですが、こうしたたくさんの方々の努力によって、作られているものだと実感しました。さらに大人としての振る舞いやマナーも学ぶことができました。わずか 5 日間でしたが、たくさんのことを学べた私にとって大きな 5 日間となりました。

4. 後輩へのアドバイス

何を学びたいのか、しっかり考えてから行くべきだと思います。上記で記したようにこのインターンシップはたくさんのことを学ぶことができます。自分が何のために行くのか明確にしたうえで参加することによって、より多くのことを吸収してほしいです。またわからないことがあったら、ためらわずに質問すべきだと思います。インターンシップに限ったことではありませんが、このような機会は誰でももらえるわけではありません。また、仕事に参加するうえで、よくわからないまま進めるのは相手にも失礼だと思います。交通政策課の方々は、真摯に対応してくださる方々です。積極的に質問しましょう。もちろん自分の仕事をしっかりこなすことも大切ですが、交通政策課の方々との会話を楽しみ、コミュニケーションの中で学ぶこともたくさんあると思います。頭を柔らかく、こうだと決めつけずに多くのことを学んでください。

6：個人レポート

プロジェクトを通して

茨城大学 2 年 志賀 有紗

私たち水戸交通屋さんは、水戸のバスの利用促進を目的として一年間活動してきた。バスの運転士の方々と利用者の距離を縮めたいと考え、バスの運転士の方々の紹介と運転士の方々のおすすめのお店、場所をリーフレットにまとめ配布することにした。このようなことを進めていくうえでたくさんのことを学んだ。

最初にどのような方向性で作っていくか、どのような手順で進めていくかを定めることを始めた。チーム内での方向性のすり合わせ、目的の共通認識などを構築することはプロジェクトを進め、達成することにおいて最も重要といえるのではないか。これがチーム内でずれていたら、プロジェクトを進めていくことは難しかっただろう。私たち水戸交通屋さんは初めにこのようなことをしっかりと話し合い、共通認識を築くことができたため軸がずれることなくプロジェクトを遂行することができた。また、水戸市役所の交通政策課の方や先生方にどのような手順、方法で進めていくかということについてのアドバイスをいただくことで、よりよいプロジェクト構想を作ることができた。また、助成金申請の際には、相手に私たちのプロジェクト説明をわかりやすく伝えるという発信力を身に付ける共に、チーム内で目的の再確認をすることができた。

リーフレット作成のために運転士の方々へのインタビューを行った。インタビューで重要だと感じたことは、事前準備の必要性、話を聞く姿勢や態度、話の引き出し方などである。どれくらい事前に調べてきたかは、相手にもすぐに伝わるものである。相手に「よく調べてきているな」と思ってもらえるくらいに事前準備はすべきであるということを知った。話を聞くときには、相手の目を見ること、あいづちを打つことに気をつけた。話の引き出し方については、私たちは事前に質問項目を決め、状況に応じて質問を変えたり、加えたりすることで自然な流れで聞くことができた。インタビューをまとめるときには同じバスの運転士という職業でも、一人ひとりの特徴や雰囲気が違うということを読み手がわかるような文章になるように書いた。インタビュー能力、文章力を身に付けることができた。

リーフレットのデザインでは、色や似顔絵による全体的な雰囲気の柔らかさを意識し作成した。文章を何度も読み直し、再度の手直しをした。また、茨苑祭では、試作品のリーフレットを用いてアンケートを実施した。そこでいただいた意見をもとに手直しを行った。たくさんの人の意見を聞き、それを受けとめることで、よりよいリーフレットを作成していった。人の意見を聞き入れ、問題をとらえ、それを解決する能力を身に付けた。

十二月の活動報告会までには、完成版のリーフレットはできなかったが、それまでやってきたこと、これからの展望についてしっかりと報告した。私は、人前で発表することはとても苦手であった。しかし、パワーポイント講座により、パワーポイントの構成の仕方、わかりやすく見やすいパワーポイント作り方などを学ぶことで安心して発表することができ堂々に行くことができた。

また、私は水戸交通屋さんのリーダーとして活動した。初めてリーダーという役割になり、改めてリーダーの役割について考えさせられた。一つは、方向性を示すことだと思う。チームの方向性がバラバラになりそうになったとき、全員の意見を聞き進むべき方向を特定することである。二つ目は、目的に向かって、みんなを引き連れていけるような信頼関係を築くことであると考えた。私は、これらのリーダーとしての役割を上手くできたとはいいいがたいが、チームのみんなが意見を積極的に発言する、自分のやるべきことを見つけることなど協力し合うことができたためになんとかやり遂げることができた。仲間の存在の大切さ、しっかりと顔を合わせて話し合うことの大切さ、自分の意見をはっきりと伝えることの大切さ、相手の意見、立場を考えることの大切さを学んだ。自分ひとりでは、何もすることはできないということを知り、改めて認識した。

私たちのチームは、水戸市役所交通政策課の皆様、茨城交通様、茨城県公共交通活性化会議の皆様、紹介させていただいた店舗の皆様、先生方の協力の下で一年間活動することができた。また、チームという仲間の存在は、自分が諦めそうになったとき、落ち込んでいる時に励まされ、お世話になり、また沢山の刺激を受けた。たとえ達成することが困難な目的であっても、仲間の心強い助けによって、成功することができるということを知った。仲間と同じものを見て進むことの大変さ、楽しさを知ることができた。

自分を知った一年

茨城大学 2 年 荒牧 瑞稀

私は、水戸交通屋さんのメンバーの一員として、水戸市のバスの利用促進を目的に、約一年間活動してきた。バスの運転士の方を身近に感じることによって、乗車の契機になり、バスの利用が少しでも楽しいものになればよい、という思いで、運転士の方々を紹介するリーフレットを作成した。この活動を思い返すと、言葉では表せないほど葛藤し、自分を知る一年となったという実感が湧く。

まず、私がプロジェクト演習を履修しようと思ったきっかけは、大学での生活に物足りなさを感じ、就職活動に不安を抱いていたことである。そこで、この授業の存在を知り、仲の良かった他の三人のメンバーを私が誘うという形で水戸交通屋さんチームが結成された。私たちは、本当に仲が良く、何事も面白くし、全力で楽しむという姿勢の四人であった。そのため、バスの利用促進のために、運転士の方々にスポットを当てるという、ユニークなプロジェクトを実現することができたのだと思う。

しかしながら、活動が進んでいくにあたって、私たちは失敗を何度も繰り返した。四人なら大丈夫と、どこかで安心していただけなかったのだと、今になってつくづく思う。まず、私たちは、マナー違反を何度も犯した。社会人にとっては当たり前のことが何一つ出来なかったのである。例えば、メールの返し方、アポイントの取り方、簡単な報告など、何も完璧にできたことはなかった。私たちの不注意により、ご協力いただいた茨城交通の皆様や、水戸市役所の皆様に、立て続けにお詫びを申し上げる場面も多くあった。それにもかかわらず、そのような私たちを支えてくださった皆様や先生方は、このようなことを学ぶための授業であるということを私たちに何度も思い出させてくださり、リーフレット作成という活動に集中できるように、私たちを導いてくださった。ご迷惑をおかけしたにも関わらず、リーフレットが完成する最後まで、サポートしてくださった皆様に感謝を申し上げたい。

そしてなにより、このプロジェクトで、自分にとって大きな経験となったのが、リーフレット作成である。先ほど、この授業を受けるきっかけを述べたが、他にもきっかけがあった。それは、4月の学科ガイダンスで配布された、「みとカフェ巡りマップ」である。これは、昨年の水戸公共交通プロジェクトチームが作成したものであるが、元々リーフレット作りに興味があったので、このマップを見た瞬間、自分も作りたいと強く思った。自分が作成したものを、多くの人に見てもらえるということ、さらに、通年の授業で、様々なことを学びながら作成できるということに魅力を感じたのである。しかしながら、いざ作成に取り掛かるとなると、順調には進まなかった。まず、リーフレットを作成するにあたって、イラストレーターというグラフィックソフトを使うのだが、ほとんど初心者であったので、使い方が分からず、写真を貼るだけで一日の作業が終了してしまうくらい、時間がかかった。さらに、自分の作りたいイメージと、プロジェクトの目的達成のものとの間に大きなギャップがあり、思うように進めることができずに苦戦した。そして、努力の末に獲得した助成金を使わせていただくという、責任がのしかかる中の作業であったため、精神的にも辛く、投げ出したくなる時が何度もあった。この経験により、依頼を受けたものを、相手が納得する形で作り上げる大変さを痛感することができた。また、葛藤し、自分の気持ちと何度も向き合う中で、自分はどうしたいのかということも知ることができた。

また、この授業を受ける中で、夏のインターンシップや、パワーポイント講座、報告会など、自分を成長させてくれるような機会が多くあったことにより、確実に自分に自信がついたと実感している。インターンシップでは、仕事することについて5日間真剣に向き合いながら、様々な人と交流し、それまで漠然としていた就職活動を意識できるようになった。また、パワーポイント講座では、普段疑問に思っていたことから、意外と知らなかった暗黙のルールまで学ぶことができ、自分の糧になった。三日間の講座でも、成長が手に取るようにわかり、大学生活の中で、最も有意義な時間であったと言い切れるくらいのものを経験することができた。さらに、パワーポイントが自分の強みであるということも発見でき、報告会では、細部にこだわった報告を四人ですることができた。自分たちでも、自画自賛したくなるような発表ができたことは、価値のあることであると思う。

末尾になりましたが、私たち水戸交通屋さんの活動に理解を示してご協力いただいた皆様に大変感謝いたします。皆様のサポートのおかげで、私たち四人は、かけがえのない時間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

受け入れること

「大成功のプロジェクト」と「私」

茨城大学 2 年 佐藤 怜璃

プロジェクト演習としては二回目の授業だったのだろうか。その日は私がこの授業の講義を聞きに行った最初の日だ。そもそもプロジェクト演習とは何をする授業なのかさえも分からずに聞いていたが、先生方のお話や各団体のプレゼンテーションを聞くうちにだんだんと理解していった。この授業では、掲げられた課題に対して自分たちで解決策を編み出し、実際に活動をするという、今までになく規模の大きな授業であるということをこの時初めて知った。学生である私が、企業や団体と共に何かをやり遂げる。漠然とした未来に期待しながらプレゼンテーションを聞いていた。「公共交通利用促進プロジェクト」のプレゼンテーションをした水戸市役所交通政策課の須藤文彦様の目を見た時、このプロジェクトに携わりたいという強い思いが芽生えた。もともと市役所の仕事に興味があったことや、私自身が公共交通利用者であることから、プレゼンテーション自体への関心も他のものに比べ高かったということも言える。しかし、須藤様の力強い語りや真剣なまなざしには、市民により良い生活を送ってもらいたいという熱い思いが込められているように見えた。それと同時に、このプロジェクトでこの人についていきたいという気持ちが生まれた。一定の人数が集まらない場合、プロジェクトは開始することができない。それを聞いた私は必死にメンバー探しをした。どうしてもこのプロジェクトをやりたかったからだ。具体的に何をしたいというわけでもない。ただ水戸市役所交通政策課からいただいたプロジェクトを成功させたいという気持ちがあっただけだった。4 人という少ない人数だが、協力してくれる仲間を見つけた。そして、無事プロジェクトチームの結成を認められ、活動を始めることになった。

これがやりたいなどの具体的な案がないまま始まったこのプロジェクトは、なかなか考えを実行に移すことができずにいた。実際、「運転士紹介のリーフレット作成」という活動を行うというアイデアに至るまでにかなりの時間を要した。その中で私が特に気を付けたことは「柔軟性」を持ち続けることだった。これは個人の達成目標として設定した項目の一つなのだが、生きている上で私が最も改善すべき課題の一つでもあった。私は自分の意見が正しいと思い込む癖があり、一度決めたら周囲の意見を気にせずに進めることが多かった。しかし今回は、メンバーから出た意見を第一に尊重することを心がけた。違うのではないかと思う意見もまずは受け入れることで、考え方の多様性を徐々に認められるようになった。

今までに見たことのないとても素敵なリーフレットが完成した。デザインもイラストも紹介文も、全てにおいて完璧なリーフレットだ。リーフレットを手にとった方々は、きっとバスに乗りたいという気持ちが芽生えるだろう。活動報告会のプレゼンテーションもたくさんの人にお褒めの言葉をいただいた。私たちの発表を聞いた多くの方々が、今後の活動に期待してくださった。迅速な対応や綿密なやりとりによって、株式会社茨城交通の皆様、水戸市役所交通政策課の皆様、その他協力してくださった方々と良好な関係を構築することができた。チームとして、プロジェクトとして、この活動は大成功だったと強く感じている。

しかしその全ての場面に、私のかげが見当たらない。私たちが作ったはずのリーフレットなのに、私は携わっていないような気分だ。多くの方々からいただいたお褒めの言葉も、チームとしてはありがたく受け取ることができるが、私が何かをやり遂げたという実感が全くない。あの最初の授業の時に浮かべた目の奥の輝きも、今となっては懐かしいものとなってしまった。

私は、人の意見を受け入れていたのではなく人に全て任せきりにしていたのだ。メンバーに対して申し訳ないという謝罪の気持ちと共に、別に自分がいなくてもプロジェクトがうまく進んでいったのではないかというやりきれない思いが残った。メンバーに対してマイナスな感情を抱いたことは決してない。このプロジェクトを引き受けてくれたこと、最後までやり抜いてくれたこと、成功に導いてくれたこと、そして何もできない私をメンバーとして認識してくれていたことに心から感謝している。これから先、このプロジェクト演習のようにグループとなって何かを実行する機会はたくさん訪れるだろう。その際、人の意見を受け入れるだけでなく「歩み寄る」ことを大切にし、人の意見も自分の考えにしていけるようになっていけたらいいと思う。

努力の結果得たもの

茨城大学 2 年 粕谷 紗雪

私たち水戸交通屋さんは、プロジェクト演習の中で水戸の公共交通の通活性化に向けて活動した。初めは自分のために始めたプロジェクト演習であったが、気がつけばどのようにすれば、バスの利用者が増加するのか必死に考えたくさんの時間を費やし、苦難を乗り越えてきた自分たちがいた。

まず、我々が考えた、水戸の公共交通活性化の方法は、バスの運転士の方々に着目して運転士の方々を取り上げたリーフレットを作成し、バスの利用が「手段から目的」となることを目指すものだった。その思考にいたった理由は、どうすればバスに乗ることが楽しくなるんだろう？どうすれば新しい人がバスに乗ろうと思ってくれるんだろう？と考えたからだった。

しかしそれには、壁の連続であった。

まず、リーフレットを配るという案に固まるまでが大変だった。バスの利用促進のためどんな付加価値があると乗りたいと思わせることができるのかとても悩んだ。例えば、リーフレットの案に至るまで、バスを乗りやすくするアプリや、いばっピケースを制作する案などがあがったがどれも我々の能力の範囲を超えており、現実的ではない案であった。しかし、そのような意見のブラッシュアップをする過程を経たことによって、より良い方法を選択することができたと考える。また自分たちにとってもこれほど一つのことを話し合う機会というのは稀であり、一つの経験として有意義なものとなった。

次にリーフレットに決まってからも苦難の連続であった。まず1つ目に、自分たちの伝えたいことをどのように詰めるか難しかった。手に取った方々が私たちの企画の趣旨を理解できるような内容であることや、お世話になった方々を載せることなど、制作の中で学んでいった。また、あまりに伝えたいことが多すぎると、内容を読む気がなくなるだけでなく、結局言いたいことは何なのか伝わらなくなってしまう。また逆に少なすぎると自分たちの言いたいことが言えず、見る人にとっても何の新しさもないリーフレットとなってしまう。2つ目にデザインについて。私たちはイラストレーターというソフトを利用できるメンバーがいたため、そんなに苦労しないだろうと初めは思っていた。しかしいざやってみると、どんな内容をどこにどの大きさで載せるのか、手に取った人にとって分かりやすいデザインを考えなければならぬ。さらにターゲットが20～30代の女性であることから、オシャレなものにしたかった。それを両立させるために、デザイン経験の浅い我々は非常に苦労した。しかし時間をかけて話し合い、努力を重ねることによって、壁を乗り越えることができる事を学んだ。3つ目に掲載させていただいた方々とのやりとりにも苦戦した。我々はなんとも思わずに使っていた写真や言葉も、本人がみると嫌なものだったりふさわしくない表現だったりして、自分たちに客観的な視点が足りない事を痛感した。さらに掲載させていただいたお店に掲載許可をいただくことも当然必要なことであるが、はじめての私たちは、勇気が必要だった。

さらに、私たちにはビジネスマナーというものが身につけていないことも苦難の1つであった。授業の一環とはいえ、取引先の方々もいらっしゃるし運営を実際に校外で行うということは、それだけマナーにも気を配らなければならないということである。私たちは、メールのやり取りやインターン、プレゼンテーション講座などからそれらを学ぶことができた。このことはこの授業以外でも、どんなことにも活用でき、社会人となるために必要なスキルとして重要なものを得ることができたと考える。

最後に、私がこの授業で学んだことは、自分の長所を生かしてチームで協力し合うということだ。そもそもリーフレットを運転士の方々に着目して作成しようとは一人では考えなかっただろう。またメンバーそれぞれ得意分野を生かし、例えば私なら、リーフレットに利用する似顔絵を描いた。このように、メンバー一人一人がパズルのピースとなっていくとうまく組み合わせて行けたことが、最後までやり遂げることができたことにつながっていったのだと考える。また始めの頃と比較して、グループ全体に積極性が出たと感じている。始めは私も誰がやるの？というスタンスで活動していたところもあったが、今では出来るだけチームに貢献したいという気持ちが強くなっていった。自分自身を一步大人に成長させることが出来たと感じている。さらに私たちの活動は私たちだけで出来るものではなく、いつも誰かに助けられていた。その温かさを心から感じ、改めて協力していただいた方々には感謝しなければならないと感じている。この活動を通して自分たちの未熟さと同時に、長所にも気づくことができた。ここで私が得たものは誰にでも出来ることではないだろうと思っている。ここで学んだことを、自分の生活に、将来にうまく生かして誰かの役に立てるようにしていきたいと感じた。

7：おわりに

プロジェクト実習ではチームメンバーが頭を抱えるような場面が多くみられた。理由の一つとしてチームの全員が2年生であり経験のある先輩からアドバイスをもらうことができなかったり、どのようにプロジェクトを進めていけばよいのか分からなかったり手探りの状態で活動を進めることになったことが挙げられる。また、メンバー全員で活動することができないということも多かった。そのため情報伝達がうまくできず、チーム内での情報の格差がみられた。このようにうまく進めることができなかったことも多かったが、一年間かけて少しずつチームワーク力を身に付け、その大切さを知った。自分のできる作業を自ら探し、特定のメンバーのみにかかる負担が少なくなるようになった。四人で同じ目的に向かって活動し、意見を交換し合うことで信頼関係を築くことができた。信頼のおける仲間の存在と協力のおかげでここまでプロジェクト実習を続けることができた。一枚のリーフレットを作ることでたくさんの方々と関わることができた。茨苑祭では、よりたくさんの人から意見をいただくことができ、それまで気づくことができなかったことに気づけるようになり、自分たちの視野の広がりを感じることができた。また、一人ひとりが一生懸命に活動することで、お互いに刺激を与え合い、意識を高め合うことにつながった。このように私たちは仲間と同じ目的に向かって活動することの大変さだけでなく、それ以上にその楽しさを知ることができた。

最後にこの場を借りてお世話になった皆様へお礼を申し上げます。いつもお世話になりました 茨城交通株式会社の皆様、水戸市役所交通政策課の皆様、おすすめスポット掲載を許可していただいた皆様、茨城県公共交通活性化会議事務局の皆様、ありがとうございました。また、プロジェクト実習の担当教員である鈴木先生・神田先生、不慣れな私たちにご指導、アドバイスをしてくださり、ありがとうございました。たくさんの方々の支えがあってこのプロジェクト進めていくことができました。重ねてお礼を申し上げます。

5：こみフェスチーム

リーダー	： 庄司 果織	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
副リーダー	： 田岡 真美子	同 上	2年
書記	： 小松 晴夏	同 上	2年
書記	： 関森 ちあき	同 上	2年
会計	： 大塚 萌	同 上	2年

主担当教員：神田 大吾 茨城大学人文社会科学部准教授
副担当教員：鈴木 敦 茨城大学人文社会科学部 教授

2018 年度

こみフェスチーム

1 : はじめに

大塚 萌

私たち「こみフェスチーム」は、水戸市役所市民生活課様をご提案下さった「こみっとフェスティバル 2019」の活動に参加させて頂いた。こみっとフェスティバルとは、水戸市内で活動する NPO やボランティア団体が、日ごろの活動の成果を発表したり、展示・物販を行ったりとボランティアの魅力を多くの人に知ってもらうためのイベントである。こみっとフェスティバルは今回で 7 回目。私たちは広報担当として、この活動に携わるようになった。

毎月 1 回水戸市役所で行われる実行員会会議にも参加し、本番に向け話し合いを行った。私たち学生の意見をたくさん取り入れて頂き、実際に企画が通ったこともあった。また広報担当として、SNS での情報発信やラジオ出演など貴重な経験もさせて頂いた。

こみフェスチームは、もともとボランティアに興味はあるけれども、参加方法が分からないと疑問を持った 5 人が集まって結成されたチームである。先生やボランティア団体の協力を得て、さまざまなボランティア活動に参加させて頂き、自分たちでボランティアの楽しさを知り、それをどのように発信していくかを課題としながら 1 年間活動した。実際にボランティアをしている方々の思いを知ることが出来、非常に良い経験となった。また、チームで活動していて、ボランティアだけでなく、仲間と協力することの大切さも学ぶことが出来た。水戸市のボランティアがこれからさらに活発になるよう、私たち若者も頑張っていきたい。

2：活動概要

小松 晴夏

私たち「こみフェスチーム」は茨城大学における PBL 型授業の一環として、水戸市市民生活課様と連携して活動を行った。水戸市内の NPO 法人・ボランティア団体といった市民活動団体の存在を、より多くの人へ知ってもらうためのイベント「こみっとフェスティバル 2019」広報を主な活動とし、その中で私たち自身も水戸市内の市民活動についての理解を深めること、を目標とした。

この最大の目標である「こみっとフェスティバル 2019」の開催に向け、当委員会の実行委員会ミーティングに出席する中で、今まで行われていたスタンプラリーのリニューアル版として、我々こみフェスチームが提案した「みとちゃんをさがそう！」という企画が通るなど、実際に企画・運営に携わった。また、実行員会への参加だけでなく、実際に水戸市内で活動されている市民活動団体様のもとでボランティア活動をさせていただいた。これによって、私たち自身がボランティア、そして市民活動への考えを深めることができた。

次に、広報について今回「こみっとフェスティバル 2019」では若者に来てもらいたい、興味を持ってもらいたい、という目的があった。そこで若者が馴染み深い Twitter と Instagram という 2 つの SNS を用いて、日頃よりこみフェスチームの活動を発信していった。加えて実際にボランティア活動に参加した様子や活動内容を基に、フリーペーパーを作成した。茨城大学の学園祭である「茨苑祭」では、こみっとフェスティバルや我々の活動について書いたパネルを作成し、実際に訪れた人々に説明をし、フリーペーパーやこみっとフェスティバルのちらしを配布した。ボランティアに関心のある人や携わっている人が来場し、人から人へボランティアの輪を繋げることができた。しかし、事前の役割分担不足が原因で、展示ブースに誰もいない時間を作ってしまったなどの、反省点も挙げられた。

この間、9 月 11 日～12 日に小松と関森が、9 月 18 日～19 日に庄司、田岡、大塚が、それぞれ水戸市役所市民生活課様でインターンシップを体験させていただいた。

そして私たちの最大の目的・目標である「こみっとフェスティバル 2019」開催日には、ビラ配り、出展団体へのインタビューを SNS 上に更新、ステージ発表の様子を生配信、メッセージカードを回収しながらモザイクアート作成、といったスタッフとしての活動に携わった。幸い天候にも恵まれ、大きなトラブルもなかった。実行委員の方を始めとした、たくさんの方々のご協力のもと、無事にイベントを終えることができた。

3：議事録・活動記録〈概要版〉

関森 ちあき

No.	日時 (10分単位)	場所	活動内容	参加者	実働時間
1	2018年 5月10日 17:00 - 18:00	水戸市役所 三の丸臨時庁舎	水戸市役所の担当の方と顔合わせと、今後の活動に向けての打ち合わせ	庄司、田岡、関森	1:00
2	2018年 5月17日 16:00 - 17:00	茨城大学図書館 ラーニングcommons	情報共有、今後の活動に向けた打ち合わせ	庄司、田岡、小松、関森	1:00
3	2018年 5月18日 10:20 - 12:00	茨城大学理学部棟 パソコン室	構想発表会で使用する資料作成	庄司、田岡、大塚、小松	1:40
4	2018年 6月20日 14:00 - 15:00	水戸市役所 臨時庁舎会議室2	第1回実行委員会ミーティング参加	庄司、田岡、大塚	1:00
5	2018年 6月28日 12:00 - 17:30	茨城大学図書館 ラーニングcommons	こみつとフェスティバルのメインテーマを協議し、決定	庄司、田岡、大塚、小松、関森	5:30
6	2018年 7月5日 12:30 - 14:10	茨城大学図書館 グループ学習室	中間報告会への資料作成、今後の役割分担	庄司、田岡、関森	1:40
7	2018年 7月11日 12:40 - 14:00	茨城大学図書館 パソコン室	中間報告会への資料作成	庄司、田岡、関森	1:20
8	2018年 7月18日 14:00 - 15:30	水戸市役所 臨時庁舎会議室2	第2回実行委員会ミーティング参加	庄司、田岡、大塚	1:30
9	2018年 7月19日 11:40 - 14:10	茨城大学共通教育棟 13番教室	今後の活動に向けた打ち合わせ	庄司、田岡、大塚	2:30
10	2018年 8月18日 10:00 - 15:30	水戸市 城南病院	にこにこ食堂様の活動のボランティア	田岡、大塚、小松、関森	5:30
11	2018年 8月22日 12:40 - 13:20	水戸コミュニティ放送株式会社FM ばるるん	FMばるるんのラジオ番組「HOT!!ほっと!スクウェア」に出演	田岡、関森	0:40
13	2018年 8月22日 14:00 - 15:00	水戸市役所 臨時庁舎	第3回実行委員会ミーティング参加	庄司	1:00
13	2018年 9月10日 10:00 - 11:30	水戸市 ふれあいの館	あつとま様の活動のボランティア	庄司	1:30
14	2018年 9月10日 17:00 - 20:00	茨城大学図書館 ラーニングcommons	フリーペーパー作成	庄司、小松、関森	3:00
15	2018年 9月11日 8:30 - 17:20	水戸市役所 臨時庁舎	インターンシップ参加	小松、関森	8:50
16	2018年 9月12日 8:30 - 17:20	水戸市役所 臨時庁舎	インターンシップ参加	小松、関森	8:50
17	2018年 9月18日 8:30 - 17:20	水戸市役所 臨時庁舎	インターンシップ参加	庄司、田岡、大塚	8:50
18	2018年 9月19日 8:30 - 17:20	水戸市役所 臨時庁舎	インターンシップ参加	庄司、田岡、大塚	8:50
19	2018年 9月19日 14:00 - 15:00	水戸市役所 臨時庁舎	第4回実行委員会ミーティング参加	庄司、田岡、大塚、関森	1:00
20	2018年 10月1日 14:00 - 16:00	茨城大学図書館 パソコン室	報告会に向けた資料作成	田岡、関森	2:00
21	2018年 10月3日 15:50 - 16:30	茨城大学図書館 パソコン室	報告会に向けた資料作成	田岡、関森	0:40
22	2018年 10月10日 14:00 - 15:20	茨城大学 サークル棟	「ごじゃっぺラジオ」に出演	庄司、田岡、大塚、小松	1:20
23	2018年 10月17日 14:00 - 15:00	水戸市役所 臨時庁舎	第5回実行委員会ミーティング参加	田岡、大塚、関森	1:00
24	2018年 10月19日 16:30 - 17:30	水戸市 茨城大学付属小学校	水戸こどもの劇場様の活動のボランティア	田岡、大塚、小松、関森	1:00
25	2018年 10月24日 13:00 - 14:30	茨城大学図書館 グループ学習室	FMばるるんのラジオ番組「HOT!!ほっと!スクウェア」に出演	田岡、大塚、小松、関森	1:30
26	2018年 11月1日 14:30 - 15:40	水戸市MEGAドンキ 上水戸店	物品買い出し	田岡、大塚、関森	1:10

27	2018年 11月6日 17:30 - 19:00	茨城大学共通教育棟 パソコン室	茨苑祭展示用のポスター制作	庄司、小松	1:30
28	2018年 11月7日 12:00 - 15:30	茨城大学図書館 ラーニングコモンズ	茨苑祭展示用のポスター制作	庄司、田岡、大塚、小松、関森	3:30
29	2018年 11月8日 10:40 - 12:00	茨城大学人文A棟 208室	茨苑祭展示用のパネル制作	庄司、田岡、関森	1:20
30	2018年 11月12日 12:40 - 13:10	茨城大学人文A棟 208室	茨苑祭展示用のパネル制作	庄司、関森	0:30
31	2018年 11月15日 16:00 - 17:30	茨城大学図書館 ラーニングコモンズ	茨苑祭展示用のパネル制作	田岡、大塚、小松、関森	1:30
32	2018年 11月16日 9:00 - 12:00	茨城大学 茨苑会館	茨苑祭展示コーナーを設営準備	大塚、小松、関森	3:00
33	2018年 11月18日 9:00 - 17:00	茨城大学 茨苑会館	茨苑祭展示コーナーにてチラシ配りや、こみっとフェスティバルの宣伝を行った	田岡、大塚、小松、関森	8:00
34	2018年 11月19日 9:00 - 17:00	茨城大学 茨苑会館	茨苑祭展示コーナーにてチラシ配りや、こみっとフェスティバルの宣伝を行った	田岡、大塚、小松、関森	8:00
35	2018年 11月21日 14:00 - 15:00	水戸市役所 臨時庁舎	第6回実行委員会ミーティング参加	田岡、大塚	1:00
36	2018年 11月30日 14:20 - 16:00	茨城大学人文社会科学部棟 13番教室	活動報告会リハーサルに向けたリハーサル	庄司、田岡、大塚、小松、関森	1:40
37	2018年 12月1日 13:00 - 17:30	人文社会科学部棟 10番教室	活動報告会リハーサルに参加	庄司、田岡、大塚、小松、関森	4:30
38	2018年 12月1日 17:30 - 18:00	茨城大学図書館 ラーニングコモンズ	発表用資料の修正作業	庄司、田岡、大塚、小松、関森	0:30
39	2018年 12月14日 16:00 - 17:30	茨城大学人文社会科学部棟 13番教室	活動報告会に向けたリハーサル	庄司、田岡、大塚、小松、関森	1:30
40	2018年 12月15日 11:00 - 17:00	人文社会科学部棟 10番教室	活動報告会当日	庄司、田岡、大塚、小松、関森	6:00
41	2018年 12月19日 14:00 - 15:00	水戸市役所 臨時庁舎	第7回実行委員会ミーティング参加	庄司、田岡、大塚、小松、関森	1:00
42	2019年 1月16日 13:00 - 15:00	水戸市役所 臨時庁舎	第8回実行委員会ミーティング参加、FMばるるんのラジオ番組「HOT!ほっと!スクウェア」の収録を行った	田岡、大塚、小松、関森	2:00
43	2019年 1月23日 12:40 - 13:40	茨城大学図書館 インフォメーションラウンジ	茨城放送出演へ向けた打ち合わせ	庄司、田岡、小松、関森	1:00
44	2019年 1月26日 11:00 - 12:30	水戸市 IBS茨城放送局	茨城放送のラジオ番組「ムービングなう!」に出演	庄司、田岡、大塚、小松、関森	1:30
45	2019年 1月30日 11:00 - 12:00	水戸市役所 市民協働会議室	茨城放送のラジオ番組「マイタウン」の収録	庄司、大塚、小松	1:00
46	2019年 2月8日 10:40 - 12:00	FMばるるんサテライトスタジオ stadioCOMBOX	FMばるるんのラジオ番組「週刊ミノート」に出演	大塚、小松	1:20
47	2019年 2月8日 14:10 - 15:00	茨城大学図書館 ラーニングコモンズ	こみっとフェスティバル当日に向けた打ち合わせ	田岡、大塚、小松、関森	0:50
48	2019年 2月16日 8:30 - 16:00	イオンモール 水戸内原店	こみっとフェスティバル当日	庄司、田岡、大塚、小松、関森	7:30
				合計	132:30:00

表 1 : 議事録・活動記録

4：活動トピック

田岡 真美子

(1) ボランティア活動への参加

①にこにこ食堂（図 1,2）

- ・にこにこ食堂様からのお誘い
- ・日時：2018年8月18日（土）9：00～15：30
- ・場所：茨城県水戸市城南病院
- ・参加者：田岡、関森、小松、大塚
- ・活動内容：こども食堂のお手伝い
夏休み企画宿題のお手伝い
ボランティアの方々への取材
会議への参加

②あっとま

- ・水戸市市民生活課様からのご提案
- ・日時：2018年9月10日（月）10：00～11：30
- ・場所：児童館 ふれあいの館
- ・参加者：庄司
- ・活動内容：妊娠中や育児中のママを支援するボランティア団体の活動見学

③放課後学級（図 3）

- ・NPO 法人水戸こどもの劇場 大内様からのお誘い
- ・日時：2018年10月19日（金）16：30～17：30
- ・場所：茨城大学教育学部附属小学校
- ・参加者：田岡、関森、小松、大塚
- ・活動内容：放課後学級のお手伝い

今回3つのボランティア活動に参加させていただいた。実際に活動に参加して、現場の雰囲気を知ったり、ボランティアの方々のお話を聞くことで、ボランティアに対するイメージが「奉仕」だけではなく、「楽しい」「笑顔」などのイメージへと変わっていった。



図1：にこにこ食堂でのごはん



図2：にこにこ食堂で子供たちと作ったどんぐりアート



図 3：放課後学級

(2) インターンシップ

- ・日時：2人と3人の2組に分かれ、9月11日・12日、9月18日・19日の2日間実施
- ・場所：水戸市役所臨時庁舎 市民生活課
- ・活動内容：水戸市役所の仕事内容に関する概要を傍聴、HPの更新、展示会手伝い、こみっとフェスティバル実行委員会議資料作成、消費生活センターで資料の袋詰め作業等

こみっとフェスティバルを運営している水戸市役所市民生活課でのインターンシップでは、普段どのように市民の方々のお手伝いをしているのかを知ることができた。



図 4：インターンシップ

(3) こみっとフェスティバル実行委員会議への参加

- ・日時：毎月第3水曜日 14：00～15：00
- ・場所：水戸市役所会議室
- ・活動内容：こみっとフェスティバル運営に関する話し合い等
- ・参加日：

第一回	2018年6月20日
第二回	2018年7月18日
第三回	2018年8月22日
第四回	2018年9月18日
第五回	2018年10月17日
第六回	2018年11月21日
第七回	2018年12月19日



図 5：実行委員会議への参加

会議に参加することで、実行委員の皆様、ボランティアやこみっとフェスティバルに対する思いを知ることができた。また「みとちゃんを探せ！」（こみっとフェスティバル当日の子供向けイベント）が採用されるなど、私たちの意見を言う場もあった。

(4) メディア活動

①FM ぱるるん「ほっと！HOT！スクウェア」(図 6)

- ・収録：2018 年 8 月 22 日（水）12：45～13：30
- ・収録内容：こみっとフェスティバル出演団体募集の宣伝
- ・放送：2018 年 9 月 1 日（土）15：00～の番組内
- ・場所：水戸市酒門本社スタジオ

②FM ぱるるん「ほっと！HOT！スクウェア」

- ・収録：2018 年 10 月 24 日（水）13：00～14：00
- ・収録内容：茨苑祭の宣伝
- ・放送：2018 年 11 月 3 日
- ・場所：茨城大学図書館グループ学習室

③FM ぱるるん「ほっと！HOT！スクウェア」

- ・収録：2019 年 1 月 16 日（水）13：00～14：00
- ・収録内容：こみっとフェスティバルの宣伝
- ・放送：2019 年 2 月 2 日（土）15：00～

④茨城放送「4Me 青春インタビュー ムービングなう」(図 7)

- ・生放送：2019 年 1 月 26 日（土）12：00～12：30
- ・収録内容：こみっとフェスティバルについての宣伝、自分たちの活動について等
- ・場所：茨城放送

⑤FM ぱるるん週刊ミトノート (図 8)

- ・生放送：2019 年 2 月 8 日 11：15～11：30
- ・収録内容：こみっとフェスティバルの宣伝

⑥茨城放送「マイタウン水戸」

- ・収録：2019 年 1 月 30 日（水）11：00～
- ・収録内容：こみっとフェスティバルの宣伝

・放送：2019年2月9日（土）9：40～



図 6：宣伝収録



図 7：全員で茨城放送



図 8：ラジオ生放送

たくさんのラジオに出演させていただいた。最初はうまく伝えることができなかったが、徐々に話すコツをつかむことができた。ラジオはたくさんの人が利用するため、良い宣伝になったと考える。

(5) SNS 活動

①Twitter

- ・アカウント：@CommitoW
- ・内容：こみっとフェスティバルの宣伝、ボランティア活動に関するツイート、質問箱等

②Instagram

- ・アカウント：@commito_wa
- ・内容：こみっとフェスティバルの宣伝、チーム活動での写真の投稿

若者に情報発信するためには SNS を活用することが必要であると考え、Twitter と Instagram のアカウントを作成した。どちらのアカウントもフォロワー100人を達成することができた。

(6) フリーペーパーの作成

- ・日時：夏休み期間
- ・活動内容：今まで参加したボランティア活動についてフリーペーパーにまとめた。

かわいいデザインでまとめ、手に取ってもらいやすいように工夫した。フリーペーパーは茨苑祭で配布した。



図 9：フリーペーパー

(7) 茨苑祭（茨城大学の学園祭）

- ・ 日時：2018 年 11 月 17 日（土）9：00～17：30
18 日（日）9：00～17：00
- ・ 場所：茨苑会館二階集会室
- ・ 活動内容：こみっとフェスティバルの宣伝、チーム活動・ボランティアに関するパネル展示、チラシの配布

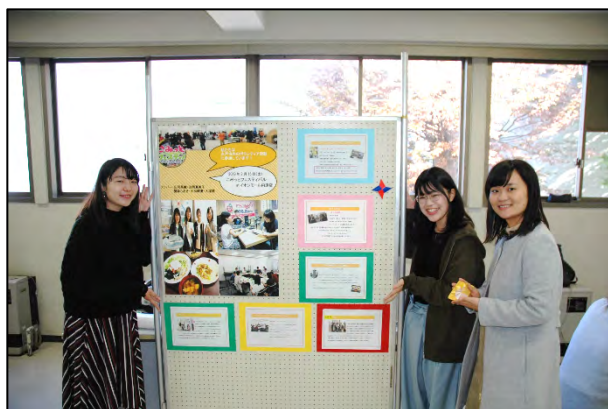


図 10：茨苑祭での展示

大学生だけでなく、小さなお子さんを連れた家族の方々にも展示を見ていただいた。こみっとフェスティバルのチラシと作成したフリーペーパーを配布し、イベントの宣伝を行った。また小さな子供には折り紙を配った。

(8) こみっとフェスティバル 2019

- ・日時：2019年2月16日（土）10：00～16：00
- ・場所：イオンモール水戸内原
- ・こみフェスチームのピーク行事
- ・イベント内容：水戸市内で活動する NPO やボランティア団体が日頃の活動や成果を発表するイベント。ボランティア活動を多くの人に知ってもらうとともに、活動団体どうしのつながり作りのための場でもある。

(i)一階ステージ：ゲスト、各団体の歌、演奏、ダンスなどの発表

(ii)二階ホール体験・物販コーナー：体験ができるコーナーや、手作り品の販売

(iii)二階ホール相談・交流コーナー：市民活動についての相談や教育

(iv)二階ホールメッセージボード：市民活動に参加している人からボランティアへの思いを集め、モザイクアートを作る

・活動内容

① SNS を使った情報の生配信

こみっとフェスティバルに参加している人にインタビューを行ったり、ステージの様子を撮影したりして、チームの SNS アカウントを用いて、生で情報を発信した。

② 二階ホールメッセージボードの作成

二階ホールにあるメッセージボードの貼り付けを行った。



図 11：メッセージボードの制作



図 12：展示ブースの手伝い

本番当日は、うまくいくか、お客さんは来るのかななどの不安や緊張があったが、始まってみると、ボランティアの方とお話したり、皆さんのメッセージを読んで思いを知ったりすることができた。

SNS を使い、生の情報発信を行った。これはこみっとフェスティバル初めての試みであった。実際にボランティア団体にインタビューを行った情報を発信、ステージの様子を生配信を行った。受けて側に興味を持ってもらいやすいような内容にするよう工夫した。

ボランティア団体の皆様のボランティアに対する思いをメッセージカードにかいていただき、それを用いてモザイクアートを完成させた。メッセージでボランティアに対する思いを知ることができるだけでなく、モザイクアートとしても楽しむことができた。

初めてのこみっとフェスティバルであったが、来場してくださった方々だけでなく、私たち自身もボランティアについて学ぶことができたし、たくさんの人の笑顔を見ることが出来た。



図 13 : 完成したメッセージボード



図 14 : こみフェスチーム集合写真

5：水戸市役所市民生活課でのインターンシップレポート

市役所で学んだこと

庄司 果織(人文社会科学部・2年)

1. 参加の動機

私は、「公務員になりたい」という思いで参加したというよりは、「プロジェクト演習」という授業の一環で、市役所・市民生活課の方々と関わりを持ったことが参加のきっかけでした。関わっていくうちに市役所の具体的な仕事内容、市民生活課とはどのような課なのか等、知らないことがたくさんあったため、実態を知りたいと思い参加いたしました。

2. 派遣先の概要と業務内容

私が参加させていただいたのは、水戸市役所の市民生活課です。市民の方々と関わりを持ち、水戸市をより良くするために市民の方々と協働し、推進していく役割を担っています。

業務内容は、展示会の準備、NPO・ボランティア団体が運営するイベントの会議資料・議事録作成、SNSでの情報発信などです。特に印象に残っているのは展示会の準備です。内容は、実際に芸術館に行き、市内の保育園・小学校などから「花いっぱい」をテーマに描いてもらった絵を市民の方々と協力して、展示するというものでした。市役所の中だけでなく、外に出て活動するということが新しい知見でした。

3. インターンシップを通して修得したこと

私は、市役所の仕事内容は、書類作成や事務処理などのパソコンと向き合うことばかりを想像していました。そのため、市役所の仕事にあまり関心を持っていなかったのですが、実際は、市役所の外に出て、イベントや展示などの準備、市民の方々との交流、SNSでの情報発信など多種多様な仕事内容でとても魅力的でした。特に市民生活課は、市民の方々との交流が多い課です。展示会の準備の際、市民の方々から笑顔で「ありがとう」という言葉をいただきました。とても嬉しく、市民の方々の役に立ちたい、水戸市をより良くしたいと思うことができました。

また、たとえ小さな仕事でも熱心に取り組むことが大切だと学びました。私は今まで「準備」は、ある程度やれば良いだろうと、いい加減に思っていました。しかし、円滑な会議を行うためやイベントを成功させるためには、「準備」がとても重要になってきます。この準備がしっかりしていなければ、本番はうまくいきません。これは、様々な面においても当てはまることだと思いました。

与えられた仕事の中に Web や Facebook での情報発信がありました。「誰が見ても分かりやすくする」ということが難しいところでした。文字ばかりでは見る気がなくなってしまう。しかし、情報量が少なくても相手に伝わりません。「相手のことを考える」という力が身につきました。市役所の方々を見て感じたのは、この「相手を思いやる気持ち」です。丁寧な対応、準備を抜かりなくすることなど、根底にあるのは、「相手のために」という気持ちだと思います。こういったことの積み重ねが、市民の方々の信頼を得ることにつながっているのだと感じました。

今回のインターンシップは、元気な挨拶、お礼の言葉、真面目に取り組むことなど、当たり前のことを見つめ直すきっかけにもなりました。このような小さなことでも、できなければ社会人として失格だと思います。当たり前のこと、人を思いやる気持ちなど、大切なことを修得できたインターンシップでした。

4. 後輩へのアドバイス

たとえ公務員志望でなくても積極的に参加すべきだと思います。市役所の方々はとても優しく、丁寧に指導して下さいます。水戸市についての歴史やビジネスマナー、市民の方々との交流など、経験しておくべきことが学べました。

また、上記でも述べましたが、挨拶やどんな仕事にも熱心に取り組む姿勢など、当たり前のことができているのか、自分を見つめなおすきっかけにもなります。相手からの指示を待っているだけでなく、自ら仕事を探すということも大切です。そうすることで、より市役所の仕事を知ることができると思います。

インターンシップを通して、是非、自分を成長させてください。

市民活動の窓口を実際に経験して

田岡 真美子（人文社会科学部・2年）

1. 参加の動機

私は受講している専門科目「プロジェクト演習」において、「こみっとフェスティバル」（2月に行われるボランティア団体の催事）の企画・運営に携わる課題にチームを組んで取り組んでいます。その運営を行っている水戸市役所市民生活課様が普段どのようなお仕事をしているか知ることによって何か自分たちの活動に活かせることがないかと思い、チームでインターンシップに参加しました。また、私は以前から市役所という職場に興味を持っていました。しかし、実際にどのような仕事をしているのかについては知りませんでした。今回、水戸市役所市民生活課様に派遣させていただくことで、市役所がどのような仕事をしているのか、自分にこの職種はあっているのかなどを確かめようと思い、参加することになりました。

2. 派遣先の概要と業務内容

水戸市役所市民生活課は、その名の通り、市民生活に関する仕事をする課で、水戸市内の市民活動のお手伝いをしたり、消費生活の問題を解決したりします。インターンシップの1日目はまず、小中学生対象の絵画コンクールの出展のお手伝いに参加させていただきました。このコンクールは水戸市住みよいまちづくり推進協議会が主催で、水戸市は後援をしています。出展場所の水戸市芸術館に行き、主催者の方々と協力し、展示の準備をしました。その後、「こみっとフェスティバル」の実行委員長様と翌日行われる会議の打ち合わせをし、資料を作成しました。また会議で資料を読む際にわかりやすくまとめた読み原稿を作成し、会議に備えました。また市民生活課が運営する「こみっと広場」というホームページのイベント情報の更新を行いました。

2日目はこみっとフェスティバル実行委員会の会場設営を行いました。会議では、昨日作成した読み原稿をもとに資料の説明をしました。会議終了後は、議事録の作成を行いました。またこみっとフェスティバルの Facebook を更新しました。最後に任された仕事は、市民生活課の運営するホームページ「こみっと広場」内にある助成金のページの更新でした。市民の皆様が助成金をうまく活用できるように、様々な助成金の情報を、わかりやすくまとめました。

3. インターンシップを通して修得したこと

インターンシップに参加する前は、市役所の仕事内容も、市民生活課がどのような課であるかも全く知りませんでした。しかし実際に仕事をさせていただくことで、市民生活課では、市民活動の手助けだけでなく、市民の方々と一緒になって活動しているということがわかりました。市民活動について特に印象に残ったのは、市民生活課は、本当に市民の皆様のことを考えて活動しているということです。こみっとフェスティバル実行委員の会議では、行政側がやりたいことではなく、当事者である市民の私たちがやりたいことができるようにご尽力されていました。担当の方は「行政だけではなく、市民の皆様の意見をできる限り反映させることで、より良いものができる。」とおっしゃっていました。私たちが普段何気なく過ごしている生活の中にも市役所の方々の仕事があるのだなと感じました。インターンシップに参加したことで、市役所は市民に寄り添って活動しているのだと気づくことが出来ました。

4. 後輩へのアドバイス

自分の興味のある職業があるのなら、インターンシップに参加することをお勧めします。なぜなら、自分の持っているイメージと現実は違うことがあるからです。また、インターンシップに参加することで新たな発見もあります。さらに、将来の自分の働いているイメージもしやすくなります。最初、私はインターンシップに参加することに対し、緊張していました。しかし、派遣先の皆様は、とても温かく迎えてくださいました。また、インターンシップに参加したことで、今やっている勉強や、取り組んでいる課題に対してもやる気ができました。もしも参加するか否かで迷っているのなら、勇気を出して参加することをお勧めします。

「水戸」を市役所の視点から見て

小松 晴夏（人文社会科学部・2年）

1. 参加の動機

私が今回のインターンシップに参加した動機は2つあります。まず1つ目に、水戸市を第二の故郷のように感じていたからです。私は、高校の頃から計5年ほど水戸市に通っていて、魅力的で住みよい土地であることを知っています。そんな水戸市で生活する側ではなく、市民の生活を改善する側の立場に立ってみたいと思いました。2つ目に、将来自分が地域に根ざした職場に就きたいからです。地元である茨城をもっと活性化させたいと考えている私には、市役所の市民生活課という部署は、とても理想的な環境でした。以上2点により、私は水戸市役所市民生活課のインターンシップに参加するに至りました。

2. 派遣先の概要と業務内容

受入先である水戸市役所市民生活課は、水戸市役所市民共同部のもとにある8つの課の内の1つの課です。主な業務内容として、地域コミュニティ及び市民憲章の推進、市民組織活動、NPO及びボランティアに係る政策の企画及び調整等に関する業務が挙げられます。

同じ期間にインターンシップを行った人と共に行った業務内容は、Wordを使用しての文書作成作業、こみっとフェスティバルにて行う企画の発案、部署内会議への参加等です。

3. インターンシップを通して修得したこと

私は主に3つのことを修得しました。1つ目はパソコン入力についてです。Wordの知らなかった機能や、ビジネス文書における文章の書き方をご教授いただきました。今後の文書作成の際に役立てていきたいです。2つ目は人への対応の仕方です。水戸市役所市民生活課の方々には、我々学生に大変優しく接して下さいました。業務内容についての正確かつ丁寧な指示や、質問に対する真摯な受け答え等、我々が動きやすいようにたくさんのご配慮をいただきました。具体的な例を挙げると、資料作成の際は予め変更点が分かるように印がつけられていたことや、常に柔和な態度で接して下さい我々が質問しやすい空気を作って下さったこと、更に私が細かい質問や業務内容の確認をした際も嫌な顔ひとつせずに対応いただいたこと等です。私が今後インターンシップの学生や後輩を受け持つときに、そのような対応を心掛けたいです。最後に3つ目は市役所の視点についてです。参加の動機でも触れました通り、私は今まで水戸市で生活する側としての視点しか持っていませんでした。市民生活課の方のお話や、自分が実際に会議に参加したこと、市をより住みやすい場所にしようという思いや考えを肌で感じることができました。初日の朝、市民生活課についてご説明いただいたときの真剣な眼差しや、実際に市民の方と誠実に接する姿を間近で見ることができました。そんな貴重な体験を経て、僅かな期間ではありましたが私も少しだけ「市役所の視点」を持てたのではないかと思います。以上3点が私がインターンシップを通して修得したことです。

4. 後輩へのアドバイス

私は今回のインターンシップを通して、質問することの大切さと、仕事を肌で感じることの重要性を学びました。まず前者について、是非皆が行く際には物怖じせず、どんどん質問をしてほしいです。気になったことや作業内容に不安を感じた時など、わからないまま進んでしまうのは大変勿体ないことだからです。まさに「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」だと思って臨んでほしいです。また、実際に働いている方から直接話を聞ける絶好の機会です。あとで後悔することのないよう、予め質問したいことをまとめておくこともお勧めします。次に後者について、今の時代、業務内容自体はインターネットで調べるとすぐにわかってしまうでしょう。しかし、ただ調べて仕事をわかった気になると、実際に行って体験するのとは大きく「わかった」の意味が変わります。自分の目で見て、自分の体で仕事を体験するほうが必ず自分の為になります。少しでも迷う気持ちがあるのならば、是非インターンシップに行ってみてください。

インターンシップを通して学んだこと・感じたこと

関森 ちあき （人文社会科学部・2年）

1. 参加の動機

私は、将来の目標が明確でなく、どのような職業に就きたいのかもはっきりしていませんでした。そこで、興味のある職業の一つである公務員の職務を経験したいと思い、参加を決めました。私は、公務員という職に対して、市民の生活を守る・収入が安定している、などといった漠然としたイメージしか持っていなかったのが、実際の現場での職務や雰囲気を体感したいと考えました。

また、人と直接関わることが好きで、生まれ育った茨城で働きたい、茨城に貢献したい、という気持ちがあったので、市民と直接関わることができ、かつ、暮らしに直結する行政活動に関わることができる水戸市役所でのインターンシップを希望しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

主に市民生活課では、市民活動・市民コミュニティ・消費活動の支援・指導・運営、市民センターなどの管理、市民と行政の協同活動を行っています。市民の暮らしと深く関わっているのが市民生活課です。

2日間のインターンでは、①来年の2月に行われる「こみっとフェスティバル 2019」で行う企画の提案や資料づくり、②フェスティバル参加団体の募集チラシを施設へ配布、③水戸市消費生活センターでの、同センターに関する資料の仕分け作業などを行いました。市役所内での業務と、外部の施設に出向き仕事をする両方を経験できました。①については、毎年、フェスティバルで行っているゲームであるスタンプラリーのリニューアル案として、みとちゃんを探せ！というゲームを提案し、企画しました。そこでは、自分の考えやアイデアが形となって作られていく過程を経験することができました。②では、ボランティア会館 MIOS や三の丸庁舎へ出向き、こみフェスの紹介とチラシの設置を行いました。③は、市民の方々の配布する資料の袋詰めを行いました。改めて市役所職員の方の業務内容の幅の広さを実感するとともに、結構な数を袋詰めしたので、終わったときは達成感を感じることができました。

3. インターンシップを通して修得したこと

インターンシップを通して、言われたこと・指示されたことのみをやるのではなく、その先を考えて行動し、他にやることを自ら探し見つけ出すことの大切さを学びました。最初は、初めての市役所での業務で何に手を出してよいかわからない部分もあり、受け身になってしまいました。1日目の後半から、2日目にかけては、自ら行動することを心掛けましたが、難しい部分もありました。しかし、職員の方に少しずつ質問し、積極的に動くことを意識すると、多少なりとも自分の行動に変化があることがわかりました。今、置かれている状況を理解し、課題を見つけ、解決策を自ら見つける力を付けることが大切だと実感しました。上司の方の指示を待っているだけでは、自分の成長に繋がらないと思います。普段の生活から、自分ができることを考えるクセを付けていきたいと思いました。

4. 後輩へのアドバイス

私は、水戸市役所以外にも、政治系、農業系の職業分野のインターンシップにも参加しました。それぞれの職務内容に違いがあるのは勿論ですが、職場の雰囲気がまるで違いました。これは、インターンシップに参加していなければ分からなかったことだと思います。今、興味がある職業がある場合は、是非インターンシップに参加してみてください。肌で職場の雰囲気を感じることは、将来の就職先を考えるうえで非常に大切なことだと思います。インターンシップは就職活動に出る前の第一歩だと思います。頭の中で、将来どうしよう、なにしよう、と悩んでいるだけで、答えを見つけることは困難です。まずは、その場に行って経験し、体感することで将来の道筋が見えてくることもあります。勇気をもってインターンシップに参加してみましょ。また、インターン生を受け入れてくれることは、当たり前なことではなく、有難いことです。感謝の気持ちを持って取り組んでみてください。

水戸を想う

大塚 萌（人文社会科学部・2年）

1. 参加の動機

私は将来、茨城県に就職したいと考えています。特に、市や町に貢献したい、地域に関わりたい、という思いが強いです。そこで、水戸市役所の市民生活課で、市役所の方々が地域に対してどのような思いを持っていらっしゃるのか、実際にどんなお仕事をされているのかを知りたく、インターンシップに参加しました。

また、市民生活課と私たち「こみフェスチーム」は連携して、2月にイオンモール水戸内原で行われる「こみっとフェスティバル 2019」に向け、毎月1回会議を行っています。普段、私たちは参加者側ですが、今回は事務局側として参加させていただきました。事務局が会議に向けて、どのような準備を行っているのかを知る良いきっかけになったと思います。

2. 派遣先の概要と業務内容

水戸市役所の市民生活課は、主に市民活動・地域コミュニティなど、水戸市や市民生活に根差した活動をしているところです。市民が安心した暮らしを送れるようにさまざまなことを行っています。業務内容としては①水戸芸術館にて「花の絵コンクール」の展示②こみっとフェスティバル実行委員会準備③その他事務作業です。①について、このイベントは、水戸市住みよいまちづくり推進協議会主催で毎年行われているもので、幼稚園生・小中学生を対象としています。今回は、受賞作品の展示をお手伝いさせていただきました。②について、実行委員会で使用する資料作りやホチキス止めを行いました。また、実行委員会当日は、事務的な説明文の読み上げと会議録作成、Facebookの更新をやらせていただきました。③について、主にホームページの更新と助成金情報の打ち込みを行いました。

3. インターンシップを通して修得したこと

私がインターンシップに参加して得たことは2つあります。1つ目は、「市民を想う」ことの大切さです。市民生活課は、水戸市民がより安心して、楽しい暮らしを送れるよう活動する部署です。2日間、市民生活課の方々の活動風景を見て、仕事に対する真剣さに感銘を受けました。ホームページの更新1つとっても、気を抜かず細かい作業を真剣に取り組んでいらっしゃいました。市民のことを想って活動するということは、非常に素晴らしいことなのだと感じました。2つ目は、他者に理解しやすい文章作りです。2日目の午後に「こみっとフェスティバル実行委員会」が開催され、私はそこで、前回の会議の概要と広報活動についての文章を読み上げる担当になりました。文章を作る際に、実行委員の皆さんがしっかりと理解できる文章を考えなければなりません。担当の宮窪千恵様に教えていただきながら、やっと文章を完成させることが出来ました。また、読み上げる際も、ゆっくり周りを見渡しながらかく読むことが出来たと思います。2日間という短い時間ではありましたが、とても多くのことを学び、濃い2日間となりました。

4. 後輩へのアドバイス

今、漠然と市役所に就職したいと考えている人は少なくないと思います。そういう人は、実際に市役所へインターンシップに参加してみることをおすすめします。人の話を聴くだけではよくわからないことも、実際に自分の目で見て、聴いてみると、職場の雰囲気や仕事などがよくわかります。また、水戸市役所に行くと、自分が行った部署のこと以外にも、水戸市のことをより深く知ることが出来ます。たとえ短い期間でも、自分でインターンシップに参加し、確かめてみることをおすすめします。

私のように、今まで全く公務員という職種を考えていなかった人でも、1度インターンシップに参加してみると、就職に対する考え方が変わるかもしれません。私もこの2日間で考え方が大分変わりました。市役所という組織の中に実際に入って仕事をするということは、とても貴重な体験です。皆さんもぜひ、2年生のうちからインターンシップに参加してみたいかと思いますが、いかがでしょうか。

6：個人レポート

「輪を広げるということ」

茨城大学 2年 庄司 果織

私は、大学に入った当初から、地域とつながりを持ちたい。他の大学生と差をつけて、自分を成長させたいと思っていた。そんな中、このプロジェクト演習という講義に出会った。複数の課題が、地域や市役所から与えられており、興味を持ったもの、やりたいと思ったものに取り組む。その中で、私は「こみっとフェスティバル」という課題に惹かれた。自分が住んでいる水戸市の方とのつながりを持てると思ったからだ。

そもそも、こみっとフェスティバルとは、水戸市内で活動している NPO・ボランティア団体が、イオンモール水戸内原店にて、日ごりの活動成果の発表や魅力の発信などを行うイベントのことである。それを成功させるために尽力する役割を担うのが、私が所属していた「こみフェスチーム」である。ここで、私はリーダーをつとめた。リーダーという役目は、メンバーを導くこと、時にはサポートすることが大切だと思う。メンバー1人1人をしっかり見て、皆を1つにすることが求められる。私は、もともと人の上に立って引っ張ることが苦手であった。本音を言うと、自分に務まるかかなり不安だった。しかし、自分を成長させたいという気持ちがあったため、自らリーダーを務めたいと、名乗り出た。もちろん、初めは右も左も分からず、何をどうして良いか分からなかった。そこで、私たちはこの活動を通して、何をしたいのかをはっきりさせたいと考えた。その際に私たちの中で、「若者にもっとボランティアの魅力を知って欲しい」という想いを共通で抱いていることが分かった。そして、そのためには、若者である私たちがボランティア活動に参加し、魅力やボランティアをされている方々の気持ちを知る必要があると考えた。

私たちは、こみっとフェスティバル実行委員会に任命され、広報担当になった。また、月1回、水戸市役所で行われる会議に参加し、水戸市役員、水戸市内の NPO・ボランティアの方々と一緒に 2019 年 2 月 16 日(土)への本番に向けて、どんな内容にしたら良いのか考えた。大人の方と混じった会議は、初めてであったため緊張していた。しかし、「若者の目線から意見が欲しい」と求められ、要望に応えたいと思い、自ら意見を述べるよう心掛けた。そして、ここでできたご縁から、ボランティア活動にも参加させて頂いた。

私は、「あつとまま」という忙しいママを支える活動を行っている団体に参加した。20 人を超えるママたち、そして、赤ちゃんがいた。話を伺うと「ママ友ができて嬉しい」「子育てに対する悩みが相談できて助かる」と笑顔で話していた。「あつとまま」さんも「ママたちの憩いの場を提供したい」と話されていた。私は、ボランティアの方がどんな思いで活動をされているか、今まで分からなかったし、知ろうともしなかった。しかし、自分が実際に体験し、活動されている人と触れ合うことで、そういった想いを直に感じる事ができた。このことは、ボランティアの魅力を伝えるうえで、かなりの強みになると思う。この想いを真っすぐ伝えるためにはどうするのか、考えることが大変だった。

こみっとフェスティバルの広報担当に任命されたため、まず SNS 発信。そして、フリーペーパーを作成した。これは、若い人たちにボランティアの良さを知ってほしいという狙いがある。内容は、今まで参加させて頂いた団体の紹介だ。そこで軸となったのが、ボランティアをやられている方々の想いだ。その想いを伝えたい、とフリーペーパー作成に力を注いだ。また、ラジオにも出演し、緊張しながらも「こみっとフェスティバル」について、どんなイベントなのか、何が魅力なのか、など聞いた人が「行ってみたい」と思ってくれるような情報を発信することを念頭に置いて、ラジオで話した。話しているうちに今まで気づけなかった、自分自身のボランティアに対する思いも知ることができた。

そして、迎えた当日。多くの方にボランティアを広め、「ボランティアやってみたい」という若者がいることを知ることができた。テーマである「つなげよう・広げよう・こみっとの輪」の通り、ボランティアの輪を広げることができたのだ。それを目の当たりにしたとき、自分が今まで行ってきた活動に誇りを持つことができた。この経験を今後も積極的に参加していきたい。



図：こみっとフェスティバル当日

自分が学び、成長できたプロジェクト

市民活動を通して

茨城大学 2 年 田岡 真美子

私は、チームの大塚さんに声を掛けられ、このプロジェクト演習を履修した。実は、声を掛けられる前にこの講義に興味を持っていたのだが、自分にできるか不安で履修するか迷っていた。大塚さんに声をかけてもらって履修に踏み切ることができて良かったと思う。

私たちはメンバー5人が集まってからプロジェクトを選んだ。私たちは「こみっとフェスティバル」のプロジェクトを選んだ。初めはこみっとフェスティバルについて全く知らなかったが、NPO やボランティアに興味を持っていたのでぜひこの活動を詳しく知りたいと思った。また市役所の活動についても興味を持っていたので、NPO・ボランティア・市役所の仕事の3つが知ることができるプロジェクトでもあった。

今回、私たちがこのプロジェクトでの一番の目標は、「若者へのボランティア活動の周知」だ。授業でも聞いたことがあるが、ボランティアに参加する若者が減ってきており、後継者がいなくて困っている団体もある。今回大学生である私たちが若者にボランティアを知ってもらうため、主に広報に力を入れた。

自分たちで SNS アカウントを作り、若者への情報発信を図った。またボランティアを伝えるためにはまず私たちが知らないといけないという考えから、自分たちが実際にボランティアに参加し、そこで得た情報をフリーペーパーにまとめ、茨苑祭で配布した。ラジオを使ったマスメディアでの広報も多く参加することができた。

広報活動をして感じたことは、情報発信の難しさだ。どのような情報を発信すれば人に興味を持ってもらえるか、人はどのような情報を求めているかは私たちにとって課題であった。またこちらから情報発信しても相手がその情報を知ってどう感じたかはわからないので、情報発信が一方的になってしまうのではと感じたこともあった。SNS のアカウントは努力の結果、Twitter、Instagram とともにフォロワー100人を達成することができたが、情報発信がどのようにしたらうまくいくかは今後も課題である。

タイトルに「自分が成長できた」とあるのは、この情報発信の難しさを知れたことが一つ。もう一つは、社会に出て役立つスキルを上げることができたことだ。

私は、人前で話すことや、物事を上手く説明することが苦手だった。また、社会に出てから必要なメール、挨拶、敬語のマナーについてもあまり知っていなかった。しかし、この授業は実際に大人の方々と進めていくものであった。その為、自然とメールなどのマナーを知ることができ、実践することもできた。また、プレゼンテーション講座を受けて、話し方のコツや相手にわかりやすいプレゼンテーションの仕方を学ぶことができた。今まで苦手意識のあったプレゼンテーションであったが、この講座を受け、また、授業内の報告会を経験し、その苦手が以前より克服できたと感じている。

このプロジェクトで自分自身が成長できただけでなく、NPO・ボランティア・市役所の仕事について知ることができた。特にボランティア実際に参加して、若者が求められているのだと強く感じた。現代は、地域のコミュニティが希薄になっているが、ボランティアなどの市民活動が活発になればそれも払拭できるのだと感じた。またお世話になった市民生活課でのインターンでは、市民生活課は市民がより良く生活できるようなお手伝いをしているのだと知ることができた。私はまちづくりを専門に学んでいるのだが、今回このプロジェクトを通して、ただプロジェクトを進めただけでなく、自分の専門に活かせる実際の現場についても知ることができた。この経験を活かして、大学での学びを頑張ろうと思った。

今回、初めてプロジェクト演習を受講し、初めてこみっとフェスティバルを知り、初めてインターンに行き、初めてイベントの運営側をやるという「初めて」ばかりの一年であった。最初は不安もあったが、一年を通して、この講義を履修し、こみっとフェスティバルに関わることができて本当に良かったと思う。自分が学び、成長できたプロジェクトであった。

本番当日は緊張や不安もあったが、たくさんの人の笑顔を見ることができ、自分たちも楽しむことができた。それと同時に、より多くの人にこのイベントを知ってもらいたいと思った。

最後に、この一年間お世話になった水戸市役所の皆様、こみっとフェスティバル実行委員の皆様、そしてチームのみんなに感謝したい。一年間大変お世話になりました。ありがとうございました。

内側から見てわかること

茨城大学 2 年 小松 晴夏

私は、高校時代も含めて水戸市に 5 年ほど通っている。しかし、私がこのプロジェクト演習の「こみっとフェスティバルを開催します!!」という課題に取り組んだ 1 年で、今まで通ってきた 4 年間は何だったのかと思えるほど水戸市の印象が様変わりした。行ったことがない場所に行った、知っている場所が増えた、などそんな単純なものではない。水戸市で生活し、水戸市のために活動している人の存在を知ったのだ。そこから私の水戸市を見る目は大きく変わった。

今回私は主に 3 つの内側からものごとを見ることができた。まず 1 つ目は、ボランティア活動についてである。元々私がこの課題に取り組もうとしたきっかけは「水戸市×ボランティア」に惹かれたからであった。馴染み深い水戸市で行われているボランティア、活動されている市民活動団体の方々とは一体どんな方々なのだろうか、と興味がわいた。まず、実際に「こみっとフェスティバル 2019」に参加される市民活動団体数は、27 とその多さに驚いた。自分が知らないだけでこんなにも大勢の方々が活動されていたのだ。そんなたくさんある市民活動の中で、私は 2 つの活動に参加した。きちんと許可を取り約束をした上での参加とはいえ、現場に赴くまで非常に緊張した。迷惑ではないのだろうか、もっと色々な知識を持った人が参加するべきではないのか、そんな渦巻いていた不安を吹き飛ばすように、暖かく出迎えていただいた。そこで活動している方々の笑顔、その活動によって生まれている笑顔。想像よりもずっと笑顔が広がっていた。そもそも私の心に不安が広がっていたのは、ボランティア自体を難しいものであると思い込んでいたからであった。どこか遠い存在であるとさえ思っていた。しかし、一歩踏み出してしまえばそこはすぐ側であった。自分も楽しみながらできる、そんな魅力がボランティアにあることを参加して初めて気づくことができた。

2 つ目は市役所の活動についてだ。夏休みに参加したインターンシップでは、水戸市市民生活課の方々にお世話になり、課内の会議への参加や資料作成等、実際の仕事を体験させていただいた。今までずっと学ぶ場消費する場であった水戸市を、創り上げる立場から見ることができてとても勉強になった。そんな中で水戸市をより良くするために、市役所の方々が常に尽力されているのだなと特に感じる行動があった。それは話の聞き方である。私やインターンシップを共に行ったこみフェスチームの関森が、様々な疑問を口にすると、それがどんな些細なことであれ全てに真剣に耳を傾け、回答をしてくださるのだ。そこには、市民のどんな小さな声にも真摯に対応する姿が重なって見えた。水戸市民の麗らかな生活はこういった努力によって支えられていることがよく分かった。

3 つ目は情報を発信することについてである。こみっとフェスティバルの宣伝や水戸市の市民活動を知ってもらうため、SNS の運用やフリーペーパーの作成をした。最初は、発信することだけに囚われていたが、徐々に受け手に対して意識を持った。受け手が求めている情報が分からず、何をどう伝えるべきか非常に迷った。また折角作成したフリーペーパーについても、上手く配布の機会を作ることができなかったことを反省している。毎日様々な情報を浴びるように受け取っていたが、その情報たちが人の目に留まりやすいよう工夫をされていることに気付かされた。また、ラジオ番組での情報発信もさせていただいた。いざラジオに出ると、緊張から喋りが固くなり思うように話すことができなかった。伝えたいことを声だけで時間内に伝えることが、どんなに難しいかを思い知らされた。私の告知自体は残念なものだったけれど、ラジオパーソナリティの方の声を生で聴くことができたことや、ラジオ収録の現場に足を運べ、出演したことなど大変貴重な経験をすることができた。

この課題を成功させるためにした様々な活動のおかげで、色々な内側からものごとを見ることができたとの発見があった。ボランティアの内側、市役所の内側、情報発信の内側と入り込んだ結果、少し水戸市の内側に潜り込めたのではないかと感じている。私がプロジェクト演習でこの「こみっとフェスティバルを開催します!!」という課題に取り組まなければ、何も知らずに過ごしていた 4 年間がもっと長い期間になっていたのだろう。今思うと、それはすごく勿体ないことだ。私は水戸市で活動している方々を見て、一緒に活動をした結果、水戸市の印象がより良いものになった。何事も一度内側に潜り込んでみるのがいいかもしれない。

こみフェスチームの活動を通して経験できたこと

茨城大学 2 年 関森 ちあき

2 月 16 日のこみっとフェスティバルを終えて、約 7 か月間のこみフェスチームの活動を終えた。この活動を通して、ボランティア活動について分かったことや活動をしていて思ったこと、活動を終えての反省を本レポートでまとめる。

私たちは、ボランティア団体等が集まるこみっとフェスティバルを広報することが最大の任務だった。そこで、私たちがボランティア活動をしている方々を紹介していくにあたり、ボランティア活動の実態や活動に携わっている方の想いを知るため、実際に水戸市内のボランティア活動に参加した。初めに伺ったのが、子ども食堂「にこにこ食堂」である。伺った日は夏休みだったので、普段は行っていない勉強会が開かれていて、私たちは子ども達に勉強を教えたり、工作をしたりした。そこで、にこにこ食堂の創設者の岡部さんに話を聴くことができた。岡部さんは活動を通して、子ども・その親の地域の居場所になるような環境づくりを目指していると同時に、貧困の問題を知ってもらえるように発信する役目も自分たちが担っているのではないかと言っていた。しかし、今の活動が実際に貧困の解決に繋がっているのか分からないといったもどかしさも岡部さんは感じていた。

ボランティア活動に参加して、楽しさや、やりがいを感じつつも、ボランティア活動の難しさや、葛藤を抱えているのだと気づくことができた。ボランティア活動に関わることで、ボランティア活動の実態を表面的にではなく、内面的に理解することができた。

また、自分のアイデアが実際に採用される喜びも活動を通して感じることもできた。昨年までは、こみっとフェスティバル当日にスタンプラリーを実施していたが、今年はリニューアルをするため、スタンプラリーに代わる新たな企画のアイデアが必要とされた。そこで、会場の 3 か所に隠れているみとちゃんを探し出すクイズラリーを考案した。会場の全てのブースに足を運んでもらうため、子どもやその親が楽しめるような企画を意識した。この案が通り、今年は「みとちゃんを探そう！」という企画が実施されることになった。こみっとフェスティバルの企画に実際に携わることができ、嬉しかった。

同時に、こみフェスチームとしての活動の難しさも経験した。私たちチームはこみっとフェスティバルを宣伝する広報担当となった。その為、SNS やラジオを通して、こみっとフェスティバルについての説明やこみっとフェスティバルに参加したいボランティア団体の呼び掛けを行った。10 月の活動報告会で、これまで行ってきた広報活動を発表した際、こみっとフェスティバルの事務局である水戸市市民生活課の橋崎様に、広報がどれくらいの人にどれくらい伝わっているのか質問され、私たちの広報の効果について問われた。しかし、それに対して何も答えられなかった。今まで行ってきた広報活動が、広報をただで終わり、自己満足・自己の中での達成感を感じて終わりになってしまっていたことに気づかされた。私たちの広報によって、こみっとフェスティバルやボランティアに興味を持った人がどの位いるのか分からないという広報の難しさを知った。

また、大きな反省が 1 つある。最終報告会の時に、今後の目標にしていたフリーペーパー第 2 弾を作成することができなかったことだ。茨苑祭の時、水戸市内でボランティアを行っている方が、水戸市内のボランティアはこれだけじゃないからもっと取材をしてみても、と助言を受けつつも、それを実行することができなかった。各メンバーそれぞれの用事や予定があり、こみっとフェスチームとしての活動を中心に考えられなかった部分に、目標達成できなかった原因があると思う。活動を終えた今、もう少し積極的に取り組むべきだったと反省している。

ボランティア団体への参加や、フェスティバル当日の出展団体の方へのインタビューを通して、ボランティアを行う方の想いを知ることができたのと同時に、ボランティア活動を行う方々に支えられて生活している方が沢山いることを再確認することができた。例えば、あっとままの活動は妊娠中や育児中の人の相談の場・心の癒しの場となっている、水戸こどもの劇場による放課後学級は、働く親に代わり、子どもと遊ぶ、勉強する場となっている等。私たちの生活は、ボランティアの方によって成り立っている部分があることを、こみフェスチームの活動を通して再確認することができた。この活動に参加していなかったら、プロジェクト演習を取っていなかったら経験できない貴重な経験をすることができた（ボランティアの方々・市役所の方々との関わり等）。こみっとフェスティバルがきっかけで、ボランティアの活動に興味を持ってくれた人がいることを願っている。

広報の重要性

ボランティアの楽しさを知って

茨城大学 2 年 大塚 萌

こみっとフェスティバルの広報担当として我々こみフェスチームが抜擢された時、広報をするということがどういうことなのか、漠然としていた。メディアを専門に勉強している私にとって、ラジオや雑誌、テレビの取材を受け出演するというのは1つの夢であり、目標であったが、広報をするうえでの知識は全くを全く持っていなかったため、このプロジェクト演習でこみっとフェスティバルを経験し、広報がいかに重要なことを知る良いきっかけとなった。

私たちは、夏休みにさまざまなボランティア活動へ参加した。水戸市初の子ども食堂や放課後学級、子育てサロンなど多様なボランティアに参加することができた。そこで私たちは、参加したボランティアの宣伝も兼ねて、フリーペーパーの作成に挑戦した。フリーペーパーの内容からデザインまで全て自分たちで考え作成

したが、どのようにすれば人に見てもらえるかが課題で、全員で試行錯誤しながら完成させることができた。また、私たちは SNS を利用した広報活動に力を入れた。特に若者がボランティアに興味を持てるよう、SNS でこみっとフェスティバルに向けて宣伝を行い、SNS の上手い使い方を身につけられたように感じる。個人情報や誤った情報を流さないようにするのはもちろん、Twitter や Instagram では文字だけでなく写真入れるようにし、目を引く画面作りに力を入れた。こみフェスチームのアカウントを見た人たちが、もしボランティアに興味を持ってくれていたら非常に嬉しいし、私たちの活動で、こみっとフェスティバルの認知度が上がっていれば水戸のボランティアがさらに活発になるだろう。最後に、マスメディアを利用した広報活動だ。私たちは主に、茨城放送と FM ばるるんのラジオに出演させて頂いた。広報担当として、初めてのラジオ出演に心躍らせていたが、いざ本番になると、緊張もありこみっとフェスティバルについて上手く情報を伝えることが出来なかった。また、こみっとフェスティバルについて実行委員の私たちも詳細を調べることを怠り、生放送中に答えられないこともあった。このように、何度も失敗を繰り返しながら徐々に自然体で話せるようになり、皆で楽しんで出演することが出来た。自分の声を誰かが聞いてくれていると思うと嬉しく、自分の夢が一つ叶って非常に良い経験が出来たと感じる。この経験を今後の活動にも生かしていきたい。

当日は、ボランティアに興味を持っている方から小さな子ども連れの方まで幅広くブースに足を運んで頂き、私たちがやっていたモザイクアートに興味を持ってもらえるなど、非常に充実した1日となった。出展団体の皆さんとお話しし、ボランティアに対する熱い思いも聞くことが出来た。私たちは主にステージ発表コーナーのライブ配信を行った。茨城大学の学生から高校生、子どもや高齢者まで幅広い人たちの発表が見られ非常に面白いステージとなり、視聴者はそこまで多くはなかったが、こみっとフェスティバルを知っている人から知らない人まで合計してたくさんの人に見てもらえたと思う。私たちが行った当日の広報活動で、こみっとフェスティバルに興味を持った人がどれくらいいたのか、分からなかったが、これをきっかけとしてボランティアを始めようとする人がいれば嬉しい。

こみっとフェスティバルを通して、ボランティアの魅力を知ることが出来た。ボランティアを始めるにあたって、凄まじいやる気や知識が必要なわけではなく、「やってみようかな」という少しの勇気だけ持っていれば始められるということだ。それを今度は私たちが、ボランティアに興味を持っている人に伝えていくことが使命だと感じる。特に若者には、ボランティアの良さに気づいてもらいたい。水戸市内だけでもさまざまなボランティア団体が存在する。もし自分が興味を持ったボランティアがあれば積極的に参加して、「ボランティアの輪」を広げてもらいたい。また、今年のコみっとフェスティバルに興味を持った人には、是非お店を出店して頂いて、来年のコみっとフェスティバルをさらに盛り上げて欲しいと思う。水戸市のボランティアがこれからも元気に発展していくことを心から願っている。



図：茨城放送の番組出演が終わって

7：おわりに

庄司 果織

「ボランティアの魅力とは、何だ」これは、このプロジェクトを始める前に抱いていた疑問だ。この疑問を抱いたのは、私の中で「ボランティア=大変」というイメージと、そもそも「よく分かっていない」という気持ちがあったからだ。そんな中、ボランティアの輪を広げるイベント「こみっとフェスティバル」の運営を担うプロジェクトに出会った。活動をしていくうちに水戸市内でたくさんのNPO・ボランティア団体の存在を知ることができた。そこでまた疑問が生まれた「ボランティアに携わっている人は、どんな気持ちでされているのだろう」ということだ。

“若者にボランティアの魅力を伝えること”それが、私たちの役目であった。そのためには、まず、私たちがボランティアの魅力を知らなければならなかったと考えた。そのため、実際にボランティア活動に参加することから始めた。そこで、今まで抱いていた疑問の答えが見つかったのである。それは「楽しんでいる」ということだ。子供たち、お母さん、色んな人の「笑顔」が溢れていた。ただ綺麗ごとを述べているように思われるかもしれないが、その場にいた全員、本当に笑顔だったのだ。私は、これこそがボランティアの魅力だと考えた。自分の行動が誰かの笑顔になることは、純粋に嬉しいし、やりがいを感じるであろう。

また、若者にボランティアの魅力を伝えるためには、SNSでの発信が有効だと考えた。そのため、写真やハッシュタグなどを用いて、印象に残りやすいような工夫をした。更にフリーペーパーの作成も行った。少しでも多くの人にボランティアの魅力が伝わっていればいいと思う。こうした活動は、今後、様々な場面で活かすことができるであろう。

2月16日（土）、イオンモール水戸内原店にて行われたこみっとフェスティバルでは、ボランティアに興味を抱いていた人はもちろん、そこまで興味が無かった人も来てくれた。「こみっとフェスティバルとは何ですか？」と興味を持って尋ねてくれた方もいた。もっともっと多くの人に「こみっとフェスティバル」「NPO・ボランティア団体」を広めていきたい、と思うことができた。

ボランティアは楽なものではない。しかし、楽しいものなのだ。それを知れただけでも、強みになると考える。きっとこのプロジェクトをやっていなければ、ボランティアの方と触れ合うこともなかったであろうし、気持ちを知ることでもできなかった。今後は、この活動によって生まれたつながりを活かして、様々な取り組みをしていきたいと考える。

最後になりますが、支えてくださった水戸市役所市民生活課・橋崎真哉様、宮窪千恵様、その他職員の方々、こみっとフェスティバル実行委員会の方々、私たちの活動を見守ってくださった神田先生、鈴木先生、岩佐先生、大変お世話になりました。ありがとうございました。

6 : sucSeed チーム

リーダー	: 小野瀬篤美	茨城大学人文社会科学部法律経済学科	2年
副リーダー	: 重富 優希	同 上	2年
書記	: 鈴木 葵	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
会計	: 青木 玲奈	茨城大学人文社会科学部法律経済学科	2年
会計	: 廣木 彩乃	茨城大学人文社会科学部人間文化学科	2年
渉外	: 岸 朱里	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年

主担当教員 : 神田 大吾 茨城大学人文社会科学部准教授
副担当教員 : 鈴木 敦 茨城大学人文社会科学部 教授

2018 年度

sucSeed チーム

1 : はじめに

岸 朱里

私たち sucSeed チームは、茨城大学女子学生 6 名によるプロジェクトチームである。水戸の街を元気にするため、ただ街に人を呼び込むのではなく、リピーターを獲得するという一時的ではない地域活性化、すなわち私達 sucSeed 的地域活性化を目指し、近頃よく耳にするようになった「ワインツーリズム」を通して水戸の魅力を発信する活動を行った。水戸のまちなかにあるワイナリー、Domaine MITO 株式会社から「ワインツーリズムでまちを元気に」というプロジェクト課題をいただき、ワインツーリズムの企画・運営を行った。

私たちはワインツーリズムを実施するにあたり、水戸の魅力は何か考えるところからなかなか進まなかった。最終的に、目玉であるワインは新しい水戸の魅力と考え、水戸の既存の魅力、弘道館・偕楽園という歴史、あんこう鍋、水戸の銘菓「水戸の梅」などの和菓子と掛け合わせる企画を考案した。まちなかワイナリーでワイン醸造体験を行う、偕楽園で和菓子とともにワインテイスティングを行うなどの体験型ツアーとし、どんな方でも楽しめる満足度の高いツアーになった。ワインツーリズムには水戸の魅力がたくさん詰まったものになったが、それだけではなく女子学生だからこそ考えられた工夫がたくさん詰まったものにもなった。

チーム結成からワインツーリズム実施の日まで、半年もない短い期間のなかで、チームの誰もやったことのなかったツアーを企画・運営するという、大変中身の濃い、充実した時間を過ごすことができた。ツアーの企画・運営の仕方だけではなく、社会の厳しさ、計画のたて方、社会に出ている 1 人の人間としての振る舞い、私達の活動についての伝え方、参加者、関係者に楽しんでもらう工夫など多くのことを学ぶことができたとても有意義な時間でもあった。反省点の多いワインツーリズム、私たちの活動ではあったが、私たちの行ってきた活動が少しでも水戸の街を元気にする一助になっていることを願っている。

2：活動概要

小野瀬 篤美

(1) チームについて

私たち sucSeed は、Domaine MITO 株式会社の宮本紘太郎様のワインを通じて水戸を元気にするためにワインツーリズムを行うというプロジェクト課題に集まった、女性 7 名で構成されたチームだ。人が多く訪れることを sucSeed 的に地域活性化として定義づけ、47 都道府県の魅力度ランキング最下位なイメージを多く持たれている茨城県の水戸市に県外から人を呼び込みリピーターを獲得するために私たちはモニターツアーを企画から運営まで行った。

(2)活動と概要

① 「和 in 水戸」ツアー

日時：10 月 19 日（土）8：30～19：00

場所：東京駅発着で茨城県の水戸市内をまわる。

工程：東京駅→泉町会館でワイン醸造体験、京成百貨店でお買い物→山翠様であんこうメインの昼食→弘道館→偕楽園でワインテイasting→東京駅

ツアーを組むうえで、人を呼び込むために本来水戸にある歴史や鮫鯨などの既存の魅力だけではなく、ワインという新しい魅力を含んだ。集客は、SNS（Twitter、Instagram）と自分たちで作ったチラシを使って東京スカイツリータウンで宣伝を行った。また、ツアーにはオリジナルしおりも作った。

結果：ツアー参加者 21 人で、何事もなく無事に終了した。最後に実施したアンケートによると、どの参加者から高い満足度を得られたようだ。水戸の魅力に知れた参加者が多く魅力を県外に発信できたのではないかと考える。

② 大学生観光まちづくりコンテスト 2018

JTB による観光まちづくりを創造しどのような地域活性化をするのか大学生のアイデアで提案していくコンテストに参加した。第 1 次審査は通過しなかったが、9 月 5 日に茨城県庁で行われた本選でほかの団体の発表を聞き、様々な刺激を受けた。

③ インターンシップ

・麻布十番納涼まつり

日時：8 月 26 日

場所：麻布十番商店街

活動内容：ワイン販売（ボトルならびにグラス）

・きたかんマルシェ in 恵比寿

日時：9 月 7 日、8 日

場所：恵比寿ガーデンプレイス

活動内容：ワイン販売（ボトルならびにグラス）、チーム活動の広報

・秋のいばらきよいとこプラン「ワインで繋ぐ水戸のまち！水戸の魅力新発見ツアー」

日時：9 月 15 日

場所：水戸市内

活動内容：茨城県観光物産協会が主催するツアーに同行し、運営スタッフとして動く

- ・水戸ホーリーホック ホームゲーム

日時：9月24日

場所：ケーズデンキスタジアム水戸

活動内容：ワイン販売（ボトルならびにグラス）

- ・ワイン講座

日時：9月19、27日

場所：水戸駅、水戸京成百貨店

活動内容：ワインについての製造方法や飲み方、流通などについて学ぶ

④ アペリティフ in 水戸 2018

日時：9月30日、11：00～13：00

場所：ホテル・ザ・ウエストヒルズ内、水戸のガーデンキッチン・リチェッタ

活動内容：セミナーに参加

⑤ ラジオ生放送出演

日時：10月27日

場所：茨城放送本社

活動内容：ラジオに出演し、活動の広報を行う

3：議事録・活動記録<概要版>

重富 優希

No.	日時	場所	活動内容	参加者	実働時間
1	2018年 5月13日 10:00 - 11:30	Domaine MITO付近の喫茶店	今後の方向性について SWOT分析	小野瀬、重富、青木、鈴木	1:30
2	2018年 5月15日 17:30 - 19:00	図書館S2	補助金申請書について、事業の活動について	重富、青木、鈴木	1:30
3	2018年 5月18日 12:30 - 17:00	図書館L4	補助金の資料作成について	小野瀬、岸、青木、廣木、鈴木	4:30
4	2018年 5月22日 11:40 - 12:30	図書館S3	プロジェクトの目的について	小野瀬、重富、岸、青木、廣木、鈴木	0:50
5	2018年 5月23日 8:50 - 11:40	図書館L1	補助金申請の準備	重富、鈴木	2:50
6	2018年 5月28日 16:30 - 18:30	図書館パソコンルーム	計画書の推敲、団体名簿の作成	重富	2:00
7	2018年 6月8日 8:50 - 10:30	図書館パソコンルーム	補助金が得られなかった場合のツアーについて	重富、岸、廣木、鈴木	1:40
8	2018年 6月9日 14:20 - 15:50	図書館パソコンルーム	中期発表に向けてのppt作成	重富、岸、	1:30
9	2018年 6月10日 12:50 - 13:50	図書館S3	中期発表に向けてのppt作成	重富、岸、	1:00
10	2018年 6月20日 15:50 - 17:30	図書館S4	若者応援事業について 茨苑祭への出店について	小野瀬、重富、岸、廣木	1:40
11	2018年 6月26日 13:00 - 16:00	図書館S4	若者活動応援事業にむけての原稿、ppt作成	小野瀬、青木、鈴木	3:00
12	2018年 6月28日 16:00 - 18:00	ラーニングコモンズ	第二次審査に向けての原稿作成	青木、鈴木	2:00
13	2018年 6月30日 9:50 - 15:00	人文棟二階教室、茨城青少年育成会館	第二次審査への準備、本番	小野瀬、青木、鈴木	5:10
14	2018年 7月3日 12:30 - 14:20	人文11番教室	第二次審査会の反省点について	小野瀬、重富、岸、青木、鈴木	1:50
15	2018年 7月6日 14:00 - 15:30	図書館S3	今後の活動について、宮本さんとの打ち合わせについて	重富、岸、廣木、	3:10
16	2018年 7月9日 12:00 - 12:30	神田先生の研究室	神田先生にお伺い	小野瀬、重富	0:30
17	2018年 7月18日 10:00 - 11:00	水戸駅付近のガスト	大学生まちづくりコンテストについてJTB西島様からのお話	鈴木	1:00
18	2018年 7月19日 12:30 - 14:00	図書館S4	宮本様との打ち合わせ、今後の方向性について	岸、廣木、鈴木	1:30
19	2018年 7月26日 12:00 - 15:00	図書館S2	今後の打ち合わせの日程、チーム運営、インターンシップについて	小野瀬、岸、鈴木	3:00
20	2018年 7月27日 9:00 - 10:00	C406	ツアーのコンセプト	小野瀬、重富、岸、廣木、鈴木	1:00
21	2018年 7月27日 10:20 - 11:30	図書館S2	ツアーについて	青木、廣木、岸、鈴木	1:10
22	2018年 8月1日 13:00 - 14:00	図書館S2	ツアーについて	小野瀬、重富、青木、廣木	1:00
23	2018年 8月3日 10:30 - 11:30	図書館S2	ツアーについて	青木、廣木、岸	1:00
24	2018年 8月10日 9:45 - 12:00	図書館S3	SWOT分析、伝えたい水戸の魅力	小野瀬、重富	2:15

25	2018年 8月12日 9:30 - 12:00	泉町会館 Afternoon tea	醸造体験、観光地の候補出し	小野瀬、重富、廣木、鈴木	2:30
26	2018年 8月13日 10:30 - 14:30	市役所三の丸庁舎 プロカフェ	観光課の方とよいとこプランの話し合い	小野瀬、重富、青木、鈴木	4:00
27	2018年 8月18日 10:30 - 12:00	B201	ツアーについて、現状分析	小野瀬、重富、岸	1:30
28	2018年 8月20日 9:00 - 17:30	図書館S3	観光まちづくりコンテストのエントリー準備	青木、岸	8:30
29	2018年 8月21日 9:00 - 17:30	図書館S2	観光まちづくりコンテストのエントリー準備	青木、岸	8:30
30	2018年 8月25日 10:30 - 13:00	図書館S2	ツアーについて	小野瀬、重富、青木、岸	2:30
31	2018年 8月28日 10:00 - 12:00	図書館S2、農協観光	現時点でのツアー内容で見積もり依頼	小野瀬、重富、廣木	2:00
32	2018年 8月30日 9:30 - 11:30	図書館S2	役割分担、募集内容の見直し	小野瀬、廣木	2:00
33	2018年 9月3日 10:30 - 12:30	図書館S2	ターゲットの見直し、ツアー会社について	重富、岸	2:00
34	2018年 9月4日 10:00 - 15:30	図書館S2	当日の日程について	重富、青木、岸	5:30
35	2018年 9月5日 9:30 - 17:00	図書館S2、県庁	募集要項について(図書館)、大学生観光まちづくりコンテスト(県庁)	小野瀬、重富、青木、岸、鈴木	7:30
36	2018年 9月6日 9:00 - 15:00	図書館S3	募集要項について	青木、廣木、岸、鈴木	6:00
37	2018年 9月7日 8:00 - 22:00	恵比寿ガーデンプレイス	インターンシップ(きたかんマルシェ)	小野瀬、重富、青木、鈴木	14:00
38	2018年 9月8日 8:00 - 22:00	恵比寿ガーデンプレイス	インターンシップ(きたかんマルシェ)	青木、岸	14:00
39	2018年 9月13日 8:40 - 16:00	ガスト、図書館S4	募集要項について	小野瀬、青木、岸、鈴木	7:20
40	2018年 9月15日 9:30 - 19:00	ツアーの行先、スター バックス(反省会)	インターンシップ(よいとこプラン、その後反省会)	小野瀬、重富、岸	9:30
41	2018年 9月16日 12:00 - 16:00	図書館S2	募集要項について	小野瀬、青木、廣木、鈴木	4:00
42	2018年 9月18日 9:00 - 16:30	図書館S2	ツアーの見直し	小野瀬、重富、青木、岸、鈴木、廣木	7:30
43	2018年 9月19日 9:00 - 17:00	図書館S3	分担ごとの活動	小野瀬、重富、青木	8:00
44	2018年 9月20日 12:00 - 19:00	図書館S2	分担ごとの活動	小野瀬、重富、廣木、岸	7:00
45	2018年 9月21日 9:30 - 13:00	図書館S3	分担ごとの活動	重富、廣木	3:30
46	2018年 9月23日 9:30 - 18:30	図書館S1	分担ごとの活動	青木、鈴木	9:00
47	2018年 9月25日 8:30 - 15:00	図書館S2	ツアーの見直し、分担ごとの活動	小野瀬、青木、岸、鈴木	6:30
48	2018年 9月27日 9:00 - 21:00	図書館S3	インターンシップ(ワイン講座)重富、鈴木) チラシ作り、担当ごとの活動	小野瀬、重富、岸、鈴木	12:00
49	2018年 9月28日 14:00 - 19:30	図書館S2	チラシ作り、担当ごとの活動	青木、岸、鈴木	5:30
50	2018年 9月29日 9:00 - 18:30	図書館S3、山翠	山翠さんとの打ち合わせ、担当ごとの活動	重富、青木、鈴木	9:30
51	2018年 9月30日 9:00 - 16:30	ホテルウエストヒルズ 宮本酒店	アペリティフin水戸に参加	小野瀬、重富、青木、廣木、鈴木	7:30
52	2018年 10月1日 8:40 - 19:00	図書館S2	担当ごとの活動、ツアー内容の落とし込み	小野瀬、重富、青木、廣木、鈴木	10:20

53	2018年 10月2日 11:30 - 14:00	図書館S2	担当ごとの活動、ツアー内容の落とし込み	小野瀬、重富、青木、岸、廣木、鈴木	2:30
54	2018年 10月2日 16:00 - 19:00	図書館S2	担当ごとの活動、ツアー内容の落とし込み	青木、岸、鈴木	3:00
55	2018年 10月3日 12:00 - 19:30	図書館S4	担当ごとの活動、ツアー内容の落とし込み	小野瀬、重富、廣木、鈴木	7:30
56	2018年 10月4日 9:00 - 20:00	図書館S2	担当ごとの活動	小野瀬、重富、青木、岸、鈴木	11:00
57	2018年 10月5日 13:30 - 21:50	図書館一階	担当ごとの活動、チラシの印刷	小野瀬、重富、青木、岸、廣木、鈴木	8:20
58	2018年 10月6日 10:00 - 18:00	スカイツリータウン	チラシ配り	小野瀬、重富、廣木	8:00
59	2018年 10月7日 10:00 - 17:00	スカイツリータウン	チラシ配り	青木、岸	7:00
60	2018年 10月8日 12:00 - 14:00	図書館S2	担当ごとの活動	小野瀬、重富、青木、廣木、	2:00
61	2018年 10月9日 16:00 - 21:30	図書館S2	担当ごとの活動	青木、岸、鈴木	5:30
62	2018年 10月10日 12:50 - 13:30	図書館S2	担当ごとの活動、ツアー内容の落とし込み	小野瀬、重富、青木、岸、廣木、鈴木	0:40
63	2018年 10月10日 14:00 - 19:30	図書館S2	担当ごとの活動、ツアー内容の落とし込み	重富、青木、鈴木	5:30
64	2018年 10月11日 16:00 - 19:00	図書館S2	担当ごとの活動、ツアー内容の落とし込み	小野瀬、重富、青木、岸、廣木、鈴木	3:00
65	2018年 10月12日 8:30 - 10:00	図書館S2	担当ごとの活動、ツアー内容の落とし込み	小野瀬、青木	1:30
66	2018年 10月12日 12:00 - 22:00	図書館S2	担当ごとの活動、ツアー内容の落とし込み	重富、青木、廣木、岸、鈴木	10:00
67	2018年 10月13日 9:00 - 22:00	図書館L4	ツアーリハーサル	小野瀬、重富、青木、岸、廣木、鈴木	13:00
68	2018年 10月14日 6:00 - 18:00	ツアーの行先	ツアー本番	小野瀬、重富、青木、岸、廣木、鈴木	12:00
69	2018年 10月15日 16:00 - 21:00	図書館L4	反省会	小野瀬、重富、青木、岸、廣木、鈴木	5:00
70	2018年 11月28日 12:30 - 15:00	図書館S2	ポスター制作	重富、青木、廣木、鈴木	2:30
71	2018年 11月28日 16:00 - 20:00	図書館1階	活動報告会パワーポイント作成	小野瀬、重富	4:00
72	2018年 12月5日 13:00 - 16:00	A201	ポスター印刷	重富、鈴木	3:00
73	2018年 12月10日 13:00 - 16:00	図書館1階	活動報告会パワーポイント修正	小野瀬、重富	3:00
74	2018年 12月15日 9:30 - 11:00	車の中、図書館1階	活動報告練習	小野瀬、重富	1:30
				合計	353:45

4：活動トピック

青木 玲奈

(1)醸造体験、ワイン座学（8、9月）



図1：宮本様に醸造の仕方を教わる

私たちにとって醸造体験は初めての体験であった。力が必要な作業が多く、宮本様のご苦勞を感じるとともに、まちなかで醸造体験をする未体験の楽しさ、感動を五感で体験できたのは貴重であった。

また、ツアーに組み込む予定の醸造体験をすることで、ツアーに現実味がわいた。様々なシチュエーションを描き、どんな事態でも対処できるよう考えた。（図1、2）



図2：sucSeed 醸造体験実践！



図3：動画などを見ながらワインの作り方を学ぶ

ワイン座学では、産地や気候によってワインの味や香りが変わるだけでなく、人が違うだけで変わってしまうというようなワインの特性を学んだ。また、ワインの香りや味の表現方法を学ぶなど、興味をそそられるような話題も学び、充実した学習だった。（図3）

(2) インターンシップ

麻布十番納涼まつり（8月26日）：販売応援

きたかんマルシェ in 恵比寿（9月7日、8日）：販売応援&自分たちの活動を伝える

秋のいばらきよいとこプラン「ワインで繋ぐ水戸のまち！水戸の魅力新発見ツアー」（9月15日）：ツアー同行

ホーリーホック試合会場（9月24日）：販売応援



図4：水戸ワイン



図6：きたかんマルシェ出店の様子

インターンシップでは Domaine MITO 社のワインをお客さんに伝えることで、お客さんに知ってもらい、買ってもらうだけでなく、Domaine MITO 社の活動、ワインについて自分たちの理解にも励んだ。宮本様はあらゆる場所で関係構築をしていらっしゃった。同行することで、実際の企業活動を体験した（図4～7）



図5：きたかんマルシェ出店時



図7：よいとこプランでの収穫体験

特に、よいとこプランでは実際のツアーに同行することで、何をパンフレットに載せるべきか、どのような場面があるのか、どのくらい時間を要するのか、これからツアーに向けて話し合うべき点は何かなど様々な考慮する点が見つかり、この体験はツアーを組むうえで非常に助けとなった。

(3)スカイツリーでのチラシ配り（10月6、7日）

自分たちで一から作り上げたチラシ（図8）を、宮本様からご紹介いただいた県庁の方の許可をいただき、ツアーを宣伝するため東京スカイツリーで2日間にわたってチラシ配りをおこなった。受け取ってもらえず、めげそうになることもあったが、600枚を配り切った（図9）。

チラシを配るとともに、画像（図10）や動画などを効果的に使用し、感情に訴えかける宣伝方法をとった。加えて、自分たちの活動を知ってもらえるよう口頭で説明すると、興味を持ってくれる方が多く、ツアーまで間近となっていた時期にもかかわらず、ツアーに参加してくれた方もいた。9月後半であるのに猛暑だったこともあり、つらい活動ではあったが、達成感に満ち溢れた。

Domaine MITO 株式会社

茨城大学学生 aucSeed

水戸堪能日帰りバスツアー

茨城大学の学生がご案内します！！

- ツアー代金（バス代・昼食代・体験代・保険料）ぜんぶ込み！！
- 美容効果◎！茨城名物あんこう鍋と水戸ワインで食欲の秋を堪能！
- 徳川ゆかりの地で優雅なワインテイasting！（和菓子付）

徳川の地、水戸で生まれたワイン

醸造体験 水戸ワイン

あんこう鍋

和 in 水戸

わ い ん み と

出発日 10月14日（日） 募集締め切り 10月9日（火）

出発時刻 8:30 到着時刻 19:00（受付 8:10～） 集合場所：東京駅鍛冶橋駐車場

参加費 6,480 円

募集人数 35名 最少催行人数 18名

8:30	11:00～12:15	12:30～13:45
東京駅鍛冶橋駐車場発	醸造所・京成百貨店	山梨
14:00～14:55	15:10～16:30	17:00
弘道館	音楽園	東京駅鍛冶橋駐車場着

申込先 JA 水戸旅行センター 029-254-9352

【旅行企画・実施】茨城県観光振興局 茨城県 2-564 号 JA 水戸旅行センター
茨城県水戸市市町 2-27 総合観光振興課 中嶋 直樹 TEL. 029-254-9332
【旅行企画・実施】茨城県観光振興局 茨城県 2-564 号 JA 水戸旅行センター
【旅行企画・実施】茨城県観光振興局 茨城県 2-564 号 JA 水戸旅行センター

auSeed twitter

QRコード

図8：和 in 水戸 チラシ



図9：スカイツリーにてチラシ配り



図10：宣伝時に使用した画像

(4)アペリティフ in 水戸 2018(9月30日)

ワインの交流会に同席させていただいた。ワイン製造者である外国の方もいらっしゃったため、学生ができることとして拙いながらも通訳をさせていただいた(図11)。また、メディア関係の方もいらっしゃったため、私たちの活動を広めるためのご助言をいただいた。非常に有意義な時間であった。



図11: スピーチを通訳しました!

(5)ツアーリハーサル(10月13日)

ツアーでは先回り準備などが必要なため、一日かけてリハーサルをおこなった。自分たちのスケジュールを確認するとともに、危険な箇所がないか、駐車場はどこにあるか、など詳細に予定を組んだ。この活動がメンバーの柔軟な対応につながり、当日の満足度向上に貢献した(図12、13)。



図12: 借楽園案内の展示品を確認しておく



図13: 本番で使用する旗もリハーサル

(6)和 in 水戸ツアー

私たちの活動のテーマは「ワインツーリズムで水戸を元気に！」。
そのワインツーリズムを 10 月 14 日におこなった。東京・水戸間のバスの送迎付きで老若男女問わず 21 名の方にご参加いただいた。

当日のツアー行程を図 14 に記す。

8 : 30
東京駅鍛冶橋駐車場発
9 : 15～9 : 30
常磐自動車道守谷サービスエリア
11 : 00
水戸着
11 : 00～12 : 15
DomaineMITO 醸造所
水戸京成百貨店
12 : 30～13 : 45
山翠
14 : 00～14 : 55
弘道館
15:10~16:30
偕楽園
16 : 30
水戸発
17:20~17:35
常磐自動車道守谷サービスエリア
19:00
東京駅鍛冶橋駐車場着

図 14 : 和 in 水戸ツアー 工程表

DomaineMITO 社の醸造所で醸造体験を行い(図 15)、その後山翠であんこう料理を食べながら(図 16) DomaineMITO のワインを飲み、水戸の名所である弘道館(図 17)、偕楽園を巡る。偕楽園では水戸の銘菓を味わいながら(図 18) DomaineMITO の数種のワインでワインテイastingも行うという、ワインと水戸を十分堪能できる、企画盛りだくさんのツアーとなり、予定通り、全工程をつつがなく終了した(図 19、20)。



図 15：醸造体験する参加者（#DomaineMITO 社醸造所）



図 16：あんこう料理（山翠）



図 17：弘道館見学の様子



図 18：和菓子（偕楽園）



図 19：メンバーで記念写真（偕楽園）



図 20：全日程を無事終了（東京駅）

ツアーの最後に行ったアンケートの集計の結果、満足度の平均値が 5 点と、参加者全員が満点をつけてくれて、私たちの予想を超えたものであった。事前のリハーサルでトラブルシューティングを行ったことによる私たちスタッフの言動の柔軟性や、私たち学生スタッフ間の活発な意見交換・共有がツアーを成功に導いたと言える。

sucSeed のメンバーは、バスガイドをはじめ、ツアーを企画・運営すること何もかもが初めての体験であった。その分苦労したことはたくさんあり、本番も始めは緊張していたが、参加者の方と話すうちに緊張も解け、私たち自身が楽しんでツアーを運営することができた。

(7)ラジオ生放送出演（10 月 27 日）

茨城放送での生放送のラジオ番組で、私たちの活動「ワインツーリズムでまちを元気に！」の広報をさせていただいた。私たちは活動を知ってもらうために Instagram や Twitter でどうにかフォロワーを集め広報をしていたが、フォロワーを増やすのは容易ではなく、このようなメディアに出る機会をいただけたことは貴重であった（図 21）。



図 21：茨城放送水戸放送局入口にて

5 : Domaine MITO 株式会社でのインターンシップレポート

インターンシップからツアーへ

小野瀬 篤美（人文社会科学部・2年）

1. 参加の動機

私はプロジェクト演習の一環でこのインターンシップに参加しました。プロジェクト演習には、大学生のうちにしかできないことやいろんなことを体験しよう、やるか迷ったらやってみようと考え、この授業の履修を決意しました。

今年私たちのチーム sucSeed がこのインターンシップに参加したのは、10月に都内の人を呼んで茨城・水戸の魅力を広めるためのツアーを Domaine MITO 株式会社の代表取締役の宮本紘太郎様と協力しながら進めていたときでした。インターンシップで体験したことや学んだことなどさまざまな知識を吸収し、よりよいツアーにするためというのが参加の動機です。

2. 派遣先の概要と業務内容

受入先の Domaine MITO 様は、ワイナリーが注目されている今、ワインを水戸のまちなかで醸造している株式会社です。醸造だけではなくぶどうの栽培や販売も行っています。この特殊性や話題性を生かして水戸を元気にするため、新たなコミュニティを作ることを目的にしています。今回私は、9月15日の「よいとこプラン」の運営補助と同月23日のワインの座学に参加しました。水戸市観光課と Domaine MITO 様で企画された「よいとこプラン」は事前の打ち合わせに同席したり、ツアー当日に参加者が行う工程の準備や片付けの補助をしたりしました。また、ワインの座学については作り方や種類などのワインに関することだけではなく、ぶどうのことや流通について宮本様からご教授いただきました。

3. インターンシップを通して修得したこと

このインターンシップを通して、ツアーに関する側面と個人的な側面の2つの側面からそれぞれ大きな収穫がありました。まず、ツアーについてでは自分たちがやろうとしているツアーを具体的にイメージが持てるようになりました。実際に参加者と接することで参加者が求めていることや他県からみた水戸の特殊性が見え、ワインに対してさらに興味がわいて多くの知識を得ることが出来ました。ツアーを実施するために活動することが非常に忙しく大変でしたが楽しくなりました。自分たちからだけの見方からだけではなく改めて参加者目線を意識できるようになりました。このような意識だけではなく、ツアーの段取りや工程の流れ方など吸収してツアーに生かせることが多くあります。次に、個人的には名刺交換の仕方やメールでの所作などの社会に出てからやる行動が少々身についたことです。LINE を主に使い、名刺をやりとりすることのない大学生が日常ではやることのないことばかりで失敗したこともありましたが、数をこなしていくうちに少しずつこの能力が体得できたのではないかと思います。

4. 後輩へのアドバイス

私からは2つのことをアドバイスしようと思います。

まず、インターンシップだけではなく、プロジェクト演習にもあてまはる話ですが、情報共有が難しかったです。情報共有は、決まった事柄だけではなく、それまでに至ったプロセスや事務連絡も含みます。チームの人数が多ければ多いほど情報の捉え方が増え、さらにその場にいなかった人に対して正確に過不足なく伝えることは非常に難しかったです。なので、報告・連絡・相談はとても大事な作業ですが、もうひとつ、認識の確認も行おうといいなと思います。

次に、プロジェクト演習でもインターンシップに参加すること、興味はわいてもなかなか行動に移せない人が多いと思います。しかし、迷ったら、もうやってみましょう。大学での時間は限られているので、この活動のせいで時間がかかったり面倒なことがあったりします。ですが、実際にやってみると、頭で想像していたことがことごとく、ほとんど覆され、面倒なことや不安であったことが案外困難なことではないことが多いです。特にインターンシップではその環境に入りに行くので、社会人の仕事を体感できて楽しいとも感じるができるでしょう。

かけがえのない経験

重富 優希（人文社会科学部・2年）

1. 参加の動機

私は、学生が主体となって活動する通年科目であるプロジェクト演習という授業を通して、Domaine MITO 株式会社様のインターンシップに参加しました。授業への参加を決めた理由は、大変そうだけれど貴重な体験ができるに違いないと思ったのに加え、以前から、大学生のうちにしかできない活動してみたいと考えていたからです。

また、授業の中でも Domaine MITO 株式会社様のご提案を選択したのは、「ワインツーリズムで水戸を元気にする」というテーマに魅力を感じたからです。

2. 派遣先の概要と業務内容

水戸初のワイナリーである Domaine MITO 株式会社様は、2015年に立ち上げられた新しい会社です。ぶどうの栽培、ワインの醸造まで全てを自らの手で行い、販売することを目指して水戸市の中心市街地で2016年の夏から醸造を始めました。ぶどうの栽培、ワインの醸造・販売を同じ地域で行っている“まちなかワイナリー”は、全国的に見てもとても珍しいそうです。

今回のインターンシップでは、Domaine MITO 株式会社様が企画に携わっている、よいとこプランという水戸をめぐるツアーと一緒に同行させていただいたり、恵比寿ガーデンプレイスで開催された、きたかんマルシェというイベントでワインの販売をさせていただいたりしました。きたかんマルシェとは、ご当地のグルメ・お酒・食品・工芸品など、水戸、前橋、宇都宮、高崎の「名物」が一同に楽しめる物産フェアのことです。

3. インターンシップを通して修得したこと

よいとこプランでは、実際のツアーに同行させていただいたことで、後に控えていた自分たちのツアーのイメージを膨らませることができました。本番ではどんな役割が必要か、どんなトラブルが起こりうるかなどを考えるうえで、大変参考になりました。

きたかんマルシェでのワイン販売では、モノを売ることの難しさを知りました。自分が売っている商品のことをよく分かっていなければ、お客様に魅力を伝え、購入していただくことは難しいと感じました。最初のうちは大きな声で呼びかけをするのがなんとなく恥ずかしかったのですが、次第に慣れてできるようになり、楽しいと感じるようになりました。自分がワインの特徴などを説明してお客様が購入してくださったときは、とても嬉しかったです。

また、全てのインターンシップにおいて、メールでのやり取りをする機会がありました。このプロジェクトに参加するまでは、社会人の方にメールを送ることはほぼありませんでした。そのため、最初のうちは一通送るのにも非常に時間がかかっていましたが、数をこなすうちに少しずつスムーズに送れるようになりました。この授業に参加しなければこのような機会は得られなかったと思うので、参加を決めてよかったと思います。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップも組み込まれているプロジェクト演習という授業は、大変さもありますが、それ以上にやりがいと達成感があります。また、かけがえのない同じチームの仲間も得ることができます。プロジェクト演習では、インターンシップ先の企業等とは一年を通じて関係性を持つことになります。そのため、通常のインターンシップよりも深い学びや気づきがあるのではないのでしょうか。ぜひ、プロジェクト演習を履修して、インターンシップに参加してみてください。

ワインを通じて学んだこと

鈴木 葵（人文社会科学部・2年）

1. 参加の動機

私は、普段の授業で観光や地域振興に関することを学んでいます。そのため、プロジェクト演習の8つのプロジェクト課題の中でも「ワインツーリズムでまちを元気に」という課題に最も興味を持ちました。自分もまちづくりに貢献してみたいと思ったことが、Domaine MITO 株式会社様のインターンシップに参加を決めた大きな理由です。インターンシップの一つは、Domaine MITO 社の取締役社長である宮本紘太郎様と、県内外の他の会社の方々との意見交換会への参加です。社会で行われている打ち合わせの流れや雰囲気を実際に体験してみたいと思い、参加致しました。もう一つは、きたかんマルシェ（東京の恵比寿で行われた、北関東三県が出店したイベント）にてワインの販売です。そこでは、収穫から醸造まで行っているDomaine MITO のワインを、実際にお客様のもとに届けるために参加致しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

Domaine MITO 株式会社様は、水戸市街地で初めての試みであるまちなかワイナリーを行っている会社です。葡萄の栽培・ワインの醸造までを自らの手で行い、販売することを目指し、2015年に立ち上げられました。また、地域とのつながりも大切にされているため、ワインを通してまちづくりに貢献することも目指しており、ツアーやイベントも盛んに行われている会社です。

座学のインターンシップでは、宮本様からワインや会社についてのお話・宮本様と他の会社の方々との意見交換会を拝見しました。意見交換会では、これからワインづくりに乗り出そうと試みている方が、宮本様からのアドバイスを伺うというものでした。ワイン関係者の紹介や、今後のワイン業界についてなどが話し合われていました。また、きたかんマルシェではワインの販売を行いました。ボトル・グラスワインの販売とともに、試飲も行いました。

3. インターンシップを通して修得したこと

意見交換会でまず最初に感じたのは、仕事をするうえで人とのつながりは大切であるということです。今回、新たにワインづくりを試みている方は、元から宮本様とお知り合いだったのではなく、ご紹介を受けて訪問されたとのことでした。そして、意見交換の場にはワインづくりとは関連がない職種の方もいらっしゃいましたが、その方々も含め活発な話し合いが行われ、次々と話が進んでいきました。多くの情報が飛び交う、とても興味深い機会でした。このことから、人脈を広げることは自分の視野や可能性を広げる為に大切であることが分かりました。何かを始めるとき、自分一人の知識と技術で達成できることには限界があり、周りの方々から経験談やアドバイスを伺う必要が出てきます。その際に、自分から動くこと、とりあえず行動をしてみるということが重要であることを学ぶことが出来ました。

また、きたかんマルシェでは、お客様とのコミュニケーションを取り方やイベントの流れなどを学ぶことが出来ました。ワインを売る流れとしては、まずは試飲で足を止めてもらい、その時間でワインの説明をします。そこで興味を持ってもらった方に、グラスワインやボトルワインをおすすめしていくものでした。北関東三県の活気や、イベントの賑わいを実際に体験し、自分自身も楽しんで参加することが出来ました。

4. 後輩へのアドバイス

Domaine MITO 株式会社様はワインを売るだけでなく、ワインをきっかけとして水戸に興味を持ってもらい、水戸の商店街の活性や街づくりにつなげることを目指しています。宮本様からは、インターンシップ以外のところでもSWOTを用いた水戸の分析や、水戸の歴史なども教えていただきました。そのため、私自身も、「水戸とはどのようなところなのか、良い点・悪い点はそれぞれどこなのか。」を常に意識しながら活動することができました。新たな視点から、水戸を見つめ直すことが出来たのではないかと思います。社会経験も兼ねながら、今後の水戸のまちづくりにについても考えるきっかけとなり、とても有意義な体験をすることが出来ました。

地域活性化の取り組みに学ぶ

青木 玲奈（人文社会科学部・2年）

1. 参加の動機

私は「プロジェクト演習」の授業でDomaine MITO 株式会社様と連携してワインツアーを行い、その一環としてインターンシップに参加させていただきました。

プロジェクト演習で「ワインツーリズムでまちを元気に」という課題を選んだ理由としては、醸造体験やワインについての学びもあるため、楽しそうだと感じたこと、ワインについて学んでみたかったということが挙げられます。また、経営者の方が直接インターンシップを行って下さいました。私は経営学を専攻しているため、経営者のもとで実際に企業活動に携われることに魅力を感じました。個人的に、地域活性化に取り組む団体の活動に関わるなら、自治体ではなく私企業の活動に関わりたいという願望もあった、というのももう一つの理由です。

2. 派遣先の概要と業務内容

Domaine MITO 株式会社は2016年夏からワインの醸造を始めた、日本有数の“まちなかワイナリー”（泉町会館裏）です。ワイン造りだけでなく、ワインツアーを行ったり、多くのイベントでワイン販売を行ったり、水戸市の飲食店でワインを提供したりしています。また、「一口オーナー」という制度もあり、収穫・醸造体験やリリースパーティーへの招待もしています。

そんなDomaine MITO 株式会社でのインターンシップでは、醸造体験（ブドウをつぶす作業）を行いました。また、ワイン造り・流通・起業についての座学ではワイン造りの現場のDVDを見たり、ヨーロッパでのワインの広まりを学んだり、普段なかなか知ることができない会社の仕組みについて学んだりしました。また、麻布や恵比寿、水戸ホーリーホック試合会場などでのワイン販売の手伝いでは、お客の呼び寄せや、ワインについての説明をしました。

3. インターンシップを通して修得したこと

地方活性化の実例を見ることができました。例えば、ツアーなどを行うことで県内に人を呼び寄せるだけでなく、加工（醸造）を水戸市で行うことで表示を“水戸ワイン”にすることを可能にしています。それは茨城県の観光資源の創造に寄与していると言え、地域活性化の一例です。そのような実例を見ることで、地域で取り組む事業にも視野が広がりました。また、地域活性化についての考えも深まったと思います。

また、これはワインの製造業の方ならではの特徴であると思いますが、経営者としてのワインへの情熱を感じられました。それは、経営に興味がある私にとって刺激になりました。知識習得については、ワインや会社の仕組み、販売についての知識を得ました。特に、醸造体験をさせていただいたり、販売の現場に行ったりしたため理解が深まったと思います。

また、インターンシップを経験して、自分の行動も変化しました。代表取締役の宮本紘太郎様は私たち学生の考えや思いを大切にしてくださるため、積極性が求められました。話し合いでは自分から積極的に意見を出すようになり、また、自分から進んで行動を起こすようになったと思います。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップ中はどこの企業や自治体、団体でも自分の積極性が求められると思います。主体的に動くことで自分がインターンシップを経て得たいもの（例えば積極性などを身につけたい、自分の興味を知りたい、その業界の実際と自分が思い描いている活動は合致するか知りたい、など）が得られるのではないかと思います。また、ただインターンシップに参加するだけでなく、インターンシップに行く前に目的や目標を掲げることで学びがあると思います。

ワイン流通の概要とマーケティング

廣木 彩乃（人文社会科学部・2年）

1. 参加の動機

プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱという授業で、私は水戸の活性化を目的としたワインツーリズムの企画をしています。今回、そのプロジェクトに協力して下さっている企業の方がインターンシップも受け入れて下さることとなりました。代表取締役社長の宮本紘太郎様は、一度商社で働いたのちに、ご自身で **Domaine MITO 株式会社** を起業なさった方です。そのような様々な経験をお持ちの方から話を伺うことで、自らの視野を広げ、新たなものの見方を得たいと思い、インターンシップに参加しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

Domaine MITO 株式会社は、茨城県水戸市泉町にある「泉町会館」にて初めての試みとなるワイナリーをオープンさせました。茨城や水戸近郊の果樹園で栽培された葡萄を用い、ワインを製造・販売しています。全国的にも珍しい都市型のワイナリーを茨城の新たな魅力として発展・発信していくための活動もなされています。

インターンシップでは商社の総合職が用いる目標登録・評価シートの記入や、**SWOT 分析**、**4P** などの手法を用いたマーケティングの理解などのワークショップも交えつつ、ワイン流通の概要やマーケティングについての知識を学びました。

3. インターンシップを通して修得したこと

業務・業績上の取り組みは定量と定性という二つのものの見方で評価されます。例えば商社の場合、売上の具体的目標値やその他の数値的データが定量的な取り組みとして評価されます。それに対し、数値で表すことができない取り組み、具体的には売上目標値を達成するための手段の工夫や、その他仕事に対する積極的な働きかけ、そのプロセス・結果が定性的な取り組みとして評価されます。

ワインの流通には、主に生産者・卸売業者・小売業者の三つの業者が関わっています。さらにこの三つの業種内でも商売の仕方や流通への携わり方のバリエーションは様々です。例えば同じ卸売業という業種であっても、卸売業者によってそれぞれ得意とするターゲットや商売の仕方、目的が異なっています。主に駅ビル内のお店をターゲットとして商品を卸す卸売業者は、駅ビル内という立地、特色を生かし電車内で手軽に飲めるカップワインや一般の人が手に取りやすい価格帯のワインなどを多く取り扱っています。それに対し、主に百貨店をターゲットとして商品を卸す卸売業者は、百貨店に買い物に来る客層、年齢層などに合わせて、市街地のスーパーマーケットでは取り扱っていないような価格帯の高いブランド性があるようなワインも多く取り扱っています。このように、それぞれの業者はそれぞれの立場から、顧客のニーズと自分たちの強みを分析し、活かしながら流通に携わっていることを学びました。

また、マーケティングを行う際には現状の分析が重要となります。その際に用いる数多くの手法のうち、**SWOT 分析**と**3C**、**4P**、**AIDMA** という四つの手法を教わりました。特に **SWOT 分析**と**4P**については、ワークショップを交えて理解を深めました。**SWOT 分析**では、**S**=強み、**W**=弱み、**O**=機会、**T**=脅威といった観点から現状を分析します。ワークショップでは、ワインの生産者と卸売業者がそれぞれ都市部で商売を行う場合と、地方で商売を行う場合について双方の特徴の違いについて理解しました。**4P**についてのワークショップでは、**Place**、**Product**、**Price**、**Promotion** という四つの観点から水戸駅ビル、京成百貨店などのワイン売り場を実際に訪れ調査したあと、それぞれの売り場の特徴をまとめ、店によって異なるワインの売り方、流通への関わり方について理解を深めました。

4. 後輩へのアドバイス

既に希望の職種や業種が決まっている人もいると思いますが、一度視野を広げて様々な職種・業種の方から話を聞くことで得られるものがあると思います。直接就職には結びつかなくても、インターンシップで得た知識やものの見方は、勉強やその他の活動の中で、今後非常に役に立つと思います。

楽しんでもらうには何が必要か

岸 朱里（人文社会科学部・2年）

1. 参加の動機

専門科目のプロジェクト演習で Domaine MITO 株式会社から「ワインツーリズムでまちを元気に」という課題をご提案いただき、チームで企画し控えていたワインツアー（東京発着の水戸を巡るバスツアー「和 in 水戸」）をより良いものとするため、Domaine MITO 株式会社でのインターンシップに参加しました。ツアーに参加していただいた方に楽しんでいただくためには、またお客様に良いものを提供するためには、何が必要か、どのような準備をしなければならないのかを学びたかったため参加しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

Domaine MITO 株式会社とは、2016 年夏からワインの醸造を水戸の中心市街地で始めた「まちなかワイナリー」です。ワインを飲むだけでなくワイン造りも体験するというのがコンセプトで、体験ツアーを随時開催中の企業です。

インターンシップでは、除梗・破碎という収穫したぶどうをつぶし 枝などを取り除くワインの醸造体験や、アペリティフという食前酒などワインについての体験に加え、よいとこプランというツアーではツアーを見学させていただき、昼食の準備や千波湖のデッキでの会場準備などの運営も経験させていただきました。

3. インターンシップを通して修得したこと

インターンシップを通して、参加者の方に楽しんでいただくには、まずそのことについて、今回は特にワインについて「自分が一番詳しくあるべき」であるということを知りました。インターンシップでワインの醸造体験やワインの勉強をさせていただいたことにより、ツアー当日の醸造体験で順番を待っている参加者の方との会話のネタになり、コミュニケーションを図ることができました。ワインについて以外にも「どのようなことをやっているの？」などと声をかけていただいたので、インターンシップで体験したこと、学んだことが、コンテンツについて一番詳しくあるべきということにつながってくると感じました。また、ツアーを執り行ううえで、内容を凝るだけでなく雨天時の対策や、参加者の方が安心して楽しんでいただける環境づくりや事前の準備が大切だということを知りました。上で述べたよいとこプランというツアーに参加させていただいたことで、環境づくりや事前の準備というツアーコンテンツ以外にも視野を広げられ、周りを見ることにつながったと感じました。これらの準備や運営すること（裏方の仕事）に徹するだけでなく、積極的に参加者の方とコミュニケーションをとることも大切なことであるということも学びました。インターンシップで体験し学ばなければこれらの気づきはなく、内容だけがただ詰まったツアーとなり、参加者の方に楽しんでいただけなかったと思います。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップでは自分が何について学びたいのかということ念頭に置きながら活動することが大切だと思います。何も考えずにただ参加させていただきただけだと、大事なことや身になることをせっかく伝えていただいても聞き逃してしまったり、どう生かせるのかという想像がわきにくいと思います。インターンシップでよいとこプランというツアーに参加させていただいた際に、スタッフの方がどう動いているのか、時間配分はどのように構成されているのか、ということ念頭に置いていたので、それらの点に注目しながら活動に参加させていただき、ツアーに生かすことができました。これをしていなかったらインターンシップではなく、ほとんどただのツアー参加者になってしまっていたと思います。

したがって、今日はこれについて学ぼう、特にここに力を入れて聞こう、と少しでも考えることでアンテナを張ることができ、受け入れていただく企業のことや、今後の活動に生かせることがより詳しく見えてくると感じます。

6：個人レポート

ワインを通じて見えたこと

茨城大学 2 年 小野瀬 篤美

私はこの約 1 年間このプロジェクト演習を履修して得られたものは非常にたくさんありました。今回履修したきっかけは、友達からこのプロジェクトの話聞いて面白そうと思ったことからはじまりました。その中でも、Domaine MITO 株式会社の宮本紘太郎様から提案なされたワインツーリズムでまちを元気にするプロジェクトに興味を持ちました。私自身が旅行や観光するのが好きで、それを実際に運営側から行うことは非常に貴重な機会であるとともに、水戸の魅力を発信することはまず自分がその水戸の魅力にさらに気づくことができると考え、このプロジェクトを選択しました。このプロジェクトを履修したことで、私の大学 2 年生の日々はとても忙しく大変になりましたが、それと同時に新しいことをたくさん経験でき、様々なことを吸収することができた 1 年になりました。そんな 1 年間から私は 2 つのことを主に学びました。



偕楽園での sucSeed 集合写真

まず 1 つ目は、ほかの視点にたつて物事を考えることの難しさを学びました。ツアーでは茨城に来たことのない人が多くいる東京から人を集客しました。ですが、そのときに私たちのこともこの授業のひとつであることも全く知らない人に対して、自信をもって自分たちが考えたツアーを宣伝しても興味すらもたせることが非常に大変なことでした。一般的な SNS での拡散と自分たちで作ったちらしを東京で配ったのですが、そのちらしでわかりやすく、かつ目を引きながらも必要な情報を入れることと、ちらしを受け取ってくれても話を聞いていただいたあとに時間をおいて実際に申し込んでくれるところまでもっていかなければならないのが本当に難しかったです。そのとき人はこんなに冷たいものなのかなどまで思ったほどでした。私は茨城生まれ茨城育ちのために、ほかの県から見た茨城のアピールするところがわかりきっていなかったと思います。頭でわかっていてもどうしてもバイアスがかかってしまう傾向にありました。様々な視点から物事を見ることができたことで新しい茨城の魅力がわかったとともに、自分たちが魅力であると思わなかったことが実は推すべきことであったように異なるアプローチがあることがわかりました。

2 つ目は、リーダーシップ、チームをコントロールする難しさを学びました。私はこのチームのリーダーを務めさせていただきました。しかし、それは自分の力不足がはっきりと露呈した経験となりました。特に、ツアー直前の通年で最も忙しく仕事が錯綜している時期に、私自身もいっぱいいっぱいになってしまっていて状況把握することも仕事を割り振ることもできず、長いスパンで柔軟にかつ変わりゆく状況に迅速に対応して計画がたてられませんでした。リーダーは全体を把握して目標を達成する見通しを捉えながらプレイヤーをコントロールする監督のようなものであると宮本様に教えていただきました。本当にそのとおりであり、私はひどい状況になるまで気づけずに、チームメイトの他多くの人に迷惑をかけて申し訳ない気持ちと自分の無力さを痛感しました。なんとかツアーは成功しましたが、私は達成感とともに悔しさも残りました。6 人チームで大きなプロジェクトでリーダーを務めることは、自分一人と考え方も視点も価値も異なる自分以外の 5 人をうまく掛け合わせて同じ方向を向いて先を見据えることができていることだとわかりました。様々なタイプのリーダーはいますが、どんなリーダーもこの点は共通しているのではないかと考えます。

プロジェクト演習を履修した 1 年間でこのようなことを主に学ぶことが出来ました。ほかにもたくさんのことを学びました。企画から運営までの流れ、メールの送り方や名刺交換などの社会的な作法も習得できてきました。ただ学んだだけではなく、その学んだことをこれからに生かすことが大事だと思います。なので、今回できるようになっていったことはもちろんプロジェクト演習で学んだ難しさやくやしさを社会に出たときにばねとして、これから社会に出たときに生かしてさらに成長していきたいです。

最後に、このプロジェクトに関係していたすべての皆様に感謝申し上げます。特に宮本様、プロジェクト演習の先生方、sucSeed のメンバーには大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

得たもの

茨城大学 2 年 重富 優希

「社会人疑似体験ができる」

そんな文言に惹かれ、「一応行ってみようかな」という軽い気持ちで参加したプロジェクト演習のガイダンスで、私は、Domaine MITO 株式会社様の提案企画「ワインツーリズムでまちを元気に」を知った。大変そうだけれど、楽しそう！自分が成長できそう！そう考えた私はこの授業を履修しようと決めた。

プロジェクト演習を通して、私は多くのことを学ぶことができた。特に、一つのことを一から計画し、実現させる難しさを知れたこと、また、計画から実現までのプロセスを学べたことは大きな収穫である。

この授業では、学生が主体的に考え、行動することが求められる。私にとって（そしておそらくチームメンバーにとっても）「ひとつのプロジェクトを、計画し、実行する」機会を得たのは人生初のことであり、それゆえに戸惑ったり上手くいかなかったりすることも多かった。最初のうちは、「ツアーを行いたい」という漠然とした思いはあっても、「あれがやりたい」「これがやりたい」というばかりで、具

体的には何から行動したらよいのか分からず、なかなか企画が前に進まなかった。ツアーを行う本質を見失いかけたこともあったし、メンバー間の意思疎通（情報共有）がうまくいかないこともあった。しかし、壁にぶつかり何度も遠回りしながらも、宮本様をはじめとする周りの大人たちに助けられながらなんとかツアーを成功させられたことは、私の中で大きな自信となった。ツアーの企画から実施までをスムーズにこなせたとは言いがたいが、（実際、最終的なツアー内容はチーム結成当初とは全く違うものになっている）「自分たちでどうしたらよいのかを考えた」過程に意義があったのだと感じている。

忘れてはならないのが、チームメンバーの存在である。「今年度は、sucSeed（サクシード・私たちのチーム名）の活動のおかげで充実した一年だった。」と言っても過言ではないくらい楽しんで活動することができたのは、愉快的チームメンバーの存在が大きい。学科も専攻も異なる 6 人だが、多くの時間を一緒に過ごした私たちはとても仲が良い。『ひとつのことを、協力しながら一緒に乗り越えた』という信頼関係で結ばれた仲間」というのも、私がこの授業で得たものの一つである。

「何かのプロジェクトを、計画し、実行する」ことは、社会に出たら確実に必要となる力だ。しかし、「普通の」大学生活を送っていてこの力が求められる機会はほとんどない。そう考えると、私は「普通でない一年間」を過ごしたことになる。ツアーチラシを配ったり、バスガイドを経験したり…様々な経験ができ、自分を成長させることができた。この授業を履修して、本当に良かったと思う。このプロジェクトを通して学んだことを、これからの人生に生かしていきたい。私たちのチーム名 sucSeed は、英単語の success（成功する）と seed（種）を掛け合わせた造語だ。“私たちが成功の種になろう”という意味が込められている。近い将来大きな花を咲かせることができるよう、残りの大学生活 2 年間、様々なことに挑戦し自分を磨いていきたい。

最後に、私たちがこのような活動を行えたのは、宮本様や先生方をはじめとする多くの人からのご支援があったからである。ツアーの参加者様を含む、私たちの活動に関わってくださった全ての皆様に感謝したい。本当にありがとうございました。



ツアーにて参加者を誘導している様子

学びと反省

茨城大学 2 年 鈴木 葵

およそ半年かけて企画運営をしてきた“和 i n 水戸ツアー”ですが、このプロジェクトに参加したきっかけは「ワインってお洒落なイメージだし、まちづくりをするって楽しそう」という単純な興味からでした。そんなワクワクした気持ちから始まったこのプロジェクトですが、簡単なことばかりではありませんでした。ですがチームメンバー 6 人全員が一つの目標に向かって活動してきたこの半年間は、二年間の大学生活のなかで最も有意義な時期になったのではないかと思います。ツアーの企画運営という何もかもが初めての状況の中で、上手くいかないことも多くありましたが、Domaine MITO 株式会社の代表取締役社長である宮本紘太郎様をはじめとする、多くの方々からのサポートを頂きながら無事成し遂げることが出来ました。普段の学校生活ではなかなか学ぶことが出来ない知識や能力を身に付けることができたのと同時に、自分の反省点を見つけることができたと思います。

まず、このプロジェクトを通して得た一番の学びは「軸と計画性の大切さ」です。何かを始める前に、軸は何なのかということをとことん突き詰めて考えないと、後々行き詰ったときに崩れやすくなるということが分かりました。目的は何なのか、何のためにそれを行うのか、そのためにはどうすべきか、などと根本的な部分を丁寧に詰めていくことは、当初の私たちが出来ていなかったことでした。そのため自分たちが何のためにツアーを行うのかが分からなくなり、中盤になってからツアーのテーマを変えることになってしまいました。ツアーの目的は、「水戸に人を呼び込むこと、水戸に新たな魅力を創出すること、水戸の魅力を県外の人に知ってもらうこと」であり、この部分に大きな変更はなかったのですが、この目的のために何をどうすればよいのかということが突き詰め切れなかったのです。テーマを決めるためには、自分たちが水戸について理解していることが必要でした。そのため、宮本様から教えて頂いた SWOT 分析を用いながら、改めて水戸の「強み・弱み・機会・脅威」の 4 つについて分析した結果、ワインの他にあんこう料理と歴史をツアーに取り入れることになりました。ツアーの軸・テーマの軸を考えることは、物事を客観的に見て何が必要で不必要なのかを適切に判断することであり、すごく難しいことでした。ですが期限が決まっている中で最善のものを作り出すためには、時間をたくさんかけてでもこの軸を固めてぶれないように進めていくことが何よりも大切なのだと学びました。また、その軸に基づいて最終的な到達点を定めたうえで、そこから逆算をして計画を立てていくことも大切な作業です。私は現段階で計画がどこまで進んでいて、自分は今何をやるべきなのかというチーム全体の中での自分の役割を客観的に見ることが出来ていませんでした。正確に状況を判断して対応する力、現状を理解したうえで優先順位をたてて物事を考えることは、プロジェクトを効率よく進めていくために必要不可欠な力だと気づきました。

また、このプロジェクト演習はチームが主体となって活動していく授業です。そのため、チーム内での役割分担や情報共有が何よりも大切だと考えます。私たちのチームは意見交換を活発に行いながらそれぞれが自分の役割を全うしていたため、チームワーキング能力は高い方だったのではないかと思います。しかしチーム内での反省会にて、情報共有が出来ていなかったことが一番の反省点として挙げられました。チームの話し合いは、6 人全員が集まれる日はほとんどなく、多くの日が 3、4 人で進められていました。そのため前の話し合いでは何がどこまで進んでいて次は何から進めればいいのかという、情報共有と仕事の引継ぎを正しく行うことが必要でした。しかしこの情報共有が意外と難しく、どうすればメンバー間で情報共有・意思疎通が正確に迅速にできるのかということは、最後まで私たちのチームの課題であったように感じます。主に議事録を読むことで情報共有をすることにはなっていたのですが、議事録では決定に至るプロセスなど細かい部分が書ききれないこと、他の仕事も増えてその日中に議事録を上げるのが難しくなっていたこと、などの問題がありました。そのためメンバー全員がきちんと現状把握が出来ているとは言い難く、どうしても現状を把握している人に頼ってしまい、そのメンバーの仕事量が多くなってしまいました。ツアー直前で切羽詰まった時期ではありましたが、そこをどうフォローしていくべきだったのか、チームで見直す時間が必要だったのかかもしれません。

このように振り返ると自分に足りなかった反省点が多く見つかりました。しかし、その分このプロジェクトは自分にとって意義があるものでした。これらのことを今後の自分の成長につなげていきたいです。

私にとって sucSeed で活動した意義

個人達成目標ルーブリックをもとに振り返る

茨城大学 2 年 青木 玲奈

私は、プロジェクト演習を通して、特に身につけたいものが三つあった。一つ目が他人に働きかけ巻き込む力、二つ目は計画力、三つめは現状を分析し目的や課題を明らかにする力である。それらを達成できたのか、sucSeed で活動を思い出しながら、このレポートで考えてみたい。

一つ目の、他人に働きかけ巻き込む力について、具体的に「目上の人にも自分の意見や提案をはっきり言えるようになりたい」と目標を立てた。結果的にその力は得られたと思う。sucSeed の活動は、Domaine MITO 社の代表取締役である宮本様と意見を合わせながら進めていた。はじめは宮本様が提案したことを忠実にこなしていくことに必死だった。言い換えれば言いなりになっていたのである。しかし、自分の意見を言う機会もいただきながら、自分たちから発言するようになっていった。意見が食い違う時は論理的に考え、意見をただ主張するのではなく、その意見を裏付ける理由が大切だと身をもって学んだ。また、宮本様からご助言をいただきながら、プロジェクト演習の担当教員である神田先生や旅行会社、地域の企業に依頼をすることがあった。その際、なかなか受け入れてくれないこともあり、それが分かった私たちは簡単にその主張を通すことを諦めていた。しかし、宮本様から、企画や主張を通すには相手の立場を考え、行動することが大事だというご助言をいただいた。目上の方にご助言をいただきながら依頼をする。このようにご助言を受けながらプロジェクトに取り組むことは、普段の大学生活ではなかなか経験できないことだ。この活動をしていなかったら身をもって学ぶことはなかっただろうと思う。

二つ目の計画力については、「解決までの具体的手順・作業内容・時間配分等をあまり変えずにすむくらい具体的なものを作り上げられるようにしたい」と具体的に目標を立てた。この目標については達成できなかった。私は普段の生活でも計画を立てることに苦手意識を持っている。一日一日の計画は具体的に立てられるが、大きなスパンでの計画は狂ってしまう。今回の活動でも、一日や一週間の計画を立て、かつ柔軟に動いたからこそツアー当日、参加者から非常に高い満足度を得られたのだと実感している。しかし、初めての活動でどの時期に何をすべきかわからないこともあり、非常に大まかな計画を立てたまま活動を進めてしまった。たしかに大きなスパンの計画は変わってしまうことはあるが、それでも目安にはなるため、もう少し具体的な計画が必要だったと思う。大まかな計画のまま進めてしまったがためにそこまで時間をかけるべきないところに時間をかけてしまった、ツアー前は仕事が多くなった、などの多くの失敗を生んでしまったと考える。私たち sucSeed の課題だと感じた。これからは目標を立てることも重要だとは思いますが、プロセスを考え、計画を立てることをより重視し、意識していく。

また、計画力については、多くの仕事を抱え込んだりしてしまい、ほかの活動との両立がうまくいかなかった。個人的に反省する点であり、これから自分の一番の課題と捉え、日々の生活から改善していく。

三つ目の、現状を分析し目的や課題を明らかにする力について、最終的には「身近な現状、背景、原因のみならず、社会規模でも考えられるようになりたい。それを解決改善につなげ、わかりやすく言語化できる」という目標を立てた。今回は身近な現状、背景、原因についてであったが、これは十分に達成できた。私の役職は会計であるが、チームの現状、メンバーそれぞれの現状をはっきり捉え、柔軟に対応したと思う。やるならとことんやりたい、という性格もあり、活動が進まない時には率先して活動を引っ張った。また、外部の方とメールをする機会がたくさんあり、混乱させるようなメールを送ってしまった時があったが、原因や背景を追及し、課題解決することができたと思う。この能力は自分の長所であるのではないかと自信を持てた。この能力を広げ、社会規模で考えられるよう訓練する。

今回のレポートは「活動を通して得られたもの」を考えるものであった。通年の活動であるため、直接的にも間接的にも非常に多くのことを得られたと思う。当たり前のことを強く実感したり、新しいことを身につけたり、「得られたもの」は様々だ。そのため今回は活動前に立てた目標にしぼり、活動を振り返った。このほかにも、様々な面から考察していくことは可能だ。自分自身はどのように成長したのか、また、自分自身の課題は何か、など身近なことから、リーダーシップとは何か、組織はどうあるべきかなど、これからキャリアを考えていくうえで必要なことや、私の専攻である経営学に近い考えを学ぶ機会でもあった。この活動を振り返り、今後につなげるからこそがこの授業を履修した意義である。机上の理論で終わらせるのではなく、実践することでさらなる成長につなげたい。

考え、深め、学ぶ

チームでの活動を通して学んだこと

茨城大学 2 年 廣木 彩乃

私は、高校の頃から地域での活動に興味があり、大学では何かそういった活動や地域活性化プロジェクトに参加したいと考えていた。その時、たまたま目にしたのが茨城大学生の活動をまとめた冊子であった。それには、現在も常陸太田里美地区で活動している「さとみあい」チームの活動が紹介されていた。私はその記事を見て、非常に感動したのを覚えている。大学生でもこのような素晴らしい活動ができるのか、私もやってみたい。まさに私がやりたいと思っていたことを、実際にやっている例として示してくれたのが「さとみあい」チームの活動であった。私も茨城大学の地域志向教育を受けたい、地域活性化に携わりたい、学びたいという思いから、この茨城大学を進学先に選び、入学した。「さとみあい」チームに自分も入りたくて、その憧れからこの大学に入学したといっても過言ではない。

そのような経緯もあり、本講義「プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ」が始まった当初は、私は「さとみ・あい」チームに入るつもりでいた。しかし、それは **Domaine MITO 株式会社** 宮本紘太郎様から本プロジェクトチームのご提案を聞いたときに変わった。宮本様のご提案にとっても心惹かれたのである。

それまで、私は地域活性化というと山村部や過疎化が進んでいる地域での活動をイメージしてしまっていた。しかし、水戸というまちなかでも積極的に地域活性化に取り組んでいること、まちなかワイナリーという新しいコンテンツ、視点から地域活性化に取り組んでいるということを知り、非常に興味を持った。今までイメージしていた地域活性化とはまた違った視点から地域活性化について知ることができると思ったのである。そうして私は本チームで活動することに決めた。

チームでの活動を通して、私は多くのことを学んだ。中でも、一番自分にとって大きかったことは、物事を掘り下げてしっかり考えるということの重要性を学んだということである。チームの最終的な目標は、ツアーの企画・実施を通して地域活性化をすることであった。どのようなツアーにするか考えるにあたって、私たちは、まず地域について考えることから始めた。

地域とは何か、何を活性化していくのか、活性化するとはどういうことか、そこにはどのような地域のニーズがあるのか。そのようなことを一つ一つ考え、定義づけしていくことで、取り組むべき現状や目的、そして今後の方針を明確にしていった。都市部や山村部、また、県や市町村あるいは地区という地域の範囲や特徴によって、ニーズや課題、地域活性化をしようとするものの役割が異なることを知った。一口に地域活性化と言っても、それぞれの地域や関わる人々の視点、切り込み方によって様々な活動の仕方や考え方があることを学んだ。その後、具体的にツアーの構成を考える際も、ターゲットは誰か、なぜそのようなターゲットを設定したのか、などということを丁寧に掘り下げて考えていくことで、そのターゲットに合わせて自分たちは何をすべきか、どのようなツアー内容にすべきかということを意識しながらツアーの構成を考えることができた。

このような、物事を深く考え、現状や課題を明らかにしていく考え方は、本チームでの活動に関わらず、あらゆる場面に応用できる。こうした考え方を身につけ、活用していくことは社会においても重要なことであり、自らの基礎となる力である。

他にもチームの活動を通して学んだことは多くある。うまくいかなかったことや新たに課題を見つけたこともあるが、それも含め貴重な良い経験となった。チームでの活動を通して多くのことを学び、成長できたと思う。本チームの一員として、高校の頃から興味があった地域での活動に参加することができて心から嬉しく思う。またそこから多くの視点や考え方を学んだ。それは、地域活性化に関わらず、今後大学生活を送る上や社会に出ていく上で自分にとって非常にプラスになるものであった。このチームでの活動は終わってしまったが、実は現在、また新しく地域に関するテーマでプロジェクトチームを自ら結成し、活動している。本チームでの活動を通して学んだことを次に活かし、今後も積極的に地域で活動していきたい。



ミーティングの様子

社会人の一人として

茨城大学 2 年 岸 朱里

プロジェクト演習での活動を通して、私は茨城大学の学生ではなく、社会人なんだと覚えることが、何度もあった。活動をするうえで、外部の企業の方とやり取りをすることも多くあり、そこで茨城大学の、と自己紹介をするが、私はツアーを企画するチームの一員であり、外部の企業の方にとってはただの大学生のお客さんではなく、取引相手になるのである。茨城大学の学生でありながらツアーを企画するチーム、いわば小さな企画会社の一人、つまり社会人でもあったのだ。

プロジェクト演習は社会人を体験することができるプログラムである、というようなことを担当の先生方がおっしゃっていたと思う。このプロジェクト演習の活動を通して、メールのやり取りや名刺交換のやり方を学ば、一般的な社会人の時間の流れ、一日のサイクルを知り社会人をほんの一部だけ体験することができた。特にメールのやり取り、名刺交換のやり方を今のうちから知っているというのは自分にとって大変有益なことであり、学ぶことができてよかったと思っている。

しかし、私はプロジェクト演習の活動において社会人体験という気持ちで活動するべきではないと考える。先ほども述べたように、このプログラムでは社会人になる前に得ていた方がよい知識や経験ができる。しかし初めに述べたように、この活動の中では自分は社会人なんだと思う場面に何度も遭遇した。それに加え、学生として向き合うのでは事がうまく進まないと思わされる状況にあったため、私は社会人体験ではなく一人の社会人として活動するべきであるという考えに至った。私は、これまで先生が教壇に立ち、学生は席について黙って先生の話をする、というスタイルの授業を受けてきた。しかしこのプロジェクト演習はアクティブラーニングである。活動当初は依然の先生が言ったこと、大人が言ったことを黙って聞くという姿勢で活動していた。また私は目上の方に意見を言うのが得意ではなかった。こういった姿勢で活動することは、活動に真摯に向き合っているとはいえなく、また協力して下さる方にも迷惑になる。なにより自分の意見が言えないとなると、自分たちの活動がそうではなくなってしまい、良いものができなくなってしまう。私はまだ学生気分だったのである。この時、学生ではなく、社会人体験ではなく、社会人として企画に向き合い、協力して下さる大人の方に向き合わなければならないのだと感じた。学生としてではなく社会人として、というのはそれぞれの気持ちようであるかもしれない。しかし、私の中には学生は大人のことを聞くのも、大人のほうが学生より偉い、という考えがあったので、自分たちの企画を成功させるには、自分たちのものにするには、大人と対等な立場に自分を置かなければいけないと考えた。これが社会人として活動すべきと考えた理由である。

この活動を通して、学生だからこそこのようなご指摘をいただいたことや、今は学生なんだから失敗を恐れずどんどん挑戦しなさい、学生という強みを生かしなさい、というようなことを言っていたことなど、当たり前なことではあるが学生という部分に焦点が当たることが多くあった。社会に出る前に、学生である今のうちに出来ることをやっておきたいと思いこのプログラムを選択したので、学生であるということを生かさないという考えはなかった。学生という視点から様々な提案をし、チームで打ち合わせをした。どうのいうにすればいいのか、これであっているのか、分からなくなってしまうこともあったが、その時は学生だから、何事も経験、というように自分に言い訳をしながら活動することもあった。周りの方々に学生の私に対し、様々な意見、考え、ご指摘等をいただいたが、ツアーを企画しているチームの一員として、責任をもってそれらに向き合うことが大切だということを感じた。学生の視点から出した意見にも、冷静にその意見に向き合い、ツアーにどう生かせるのかをしっかりと考えなければならないと感じた。学生ではあるが、社会人の一人としての考え方をすべきだということを学んだ。

ここまで、学生としてではなく社会人として、という考えを述べてきたが、活動を通して社会人として向き合い考えるということを感じることができたということは、社会人体験をした、ということであるといえるのではないと思う。この社会人体験を生かし、これからの活動に生かしていきたい。

7：おわりに

廣木 彩乃

「ワインツーリズムでまちを元気に！」この言葉をキーワードに、私たちはこのチームに集まり、活動を開始した。活動するにあたって、水戸というまちについて、そこに行き交う人びとについて、また、活性化という言葉の意味について様々なことを考えた。

ただ単にワインツーリズムを企画すればいいというわけではない。私たちの使命は、まちなかワイナリーや水戸ワインという新たな魅力を最大限に活かしたツアーを企画し、ツアーを通して水戸のまちを元気にすることであった。そのためには、水戸というまちの現状や、水戸のまちが元気な状態＝活性化された状態とはどのような状態を指すのかということを考えなければならない。現状を知り、自分たちの活動の目的を明確にすることで、私たちは活動の方向性をしっかりと定めて、進めていくことができる。

活動の目的や方向性が定まってもなお、途中で何度かツアーのターゲットの変更や内容の変更などがあり、みなで頭を悩ませた時期があった。前述したような、水戸のまちを元気にするためにツアーを企画するという、手段としてのツアーの捉え方とはまた別に、目的としてのツアーの捉え方がある。何よりもまず、ツアーに参加して下さる方々に楽しんでいただきたい、そんな素敵なツアーを考えたい。私たちはお客様にエンターテイメントをお届けする側でもあった。そのため、どのようなツアーにしたいか、ツアーのコンセプトは何か、私たちのカラーをどのように出すかということも、重要なことであった。

何度もツアーのターゲットや内容について話し合い、時にはうまくいかず紆余曲折しながらも、少しずつ積み上げ、練り上げていったものを、最終的に「和 in 水戸」ツアーとしてかたちにすることができ、心から嬉しく思う。

私たちの活動を振り返ってみると、何事もうまくいったとは言えないだろう。様々な困難に突き当たり、失敗もした。しかし、私たちは活動を通して非常に多くのことを学んだ。それらは、私たち自身の成長の種となり、水戸というまち、地域活性化について考えるきっかけとなった。そして、ツアー自体も、水戸の新しい魅力と既存の魅力の両方を伝えるようなツアーにすることができ、また、実際にツアーに来てくださった方々からも楽しかった、水戸のイメージがプラスに変わったなどという感想を頂くことができ、非常に嬉しく思う。

私たちの活動の良かったところや反省点を踏まえ、次なるチームの活動に活かされれば幸いである。末尾となりましたが、今年度の活動にあたり、多大なるご支援をいただきました **Domaine MITO** 株式会社 宮本紘太郎様、JA 水戸 大澤政道様、中澤直美様、茨城県庁 大窪浩一郎様、大塚弘子様、掛札巧様、山翠 高野健治様、プロジェクト演習Ⅰ担当教員神田大吾准教授、鈴木敦教授、そして活動にご支援いただきましたすべての皆様に厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

7：とみ咲クチーム

リーダー	：羽田野里菜	茨城大学人文社会科学部人文コミュニケーション学科	3年
副リーダー	：永田 典子	同 上	3年
書記	：大貫 史織	同 上	3年
書記	：野平 知里	同 上	3年
会計	：戸谷実花子	同 上	3年

主担当教員：鈴木 敦 茨城大学人文社会科学部 教授
副担当教員：岩佐 淳一 茨城大学教育学部 教授

2018 年度

とみ咲クチーム

1 : はじめに

羽田野 里菜

私たちとみ咲クチームは、今年度初めて成立したチームだ。福島県双葉郡富岡町から課題提案をいただき、プロジェクト演習開始以来初となる県外を拠点にした活動を行った。富岡町は福島県の浜通りに位置している、人口は13,010人（平成31年1月末時点）の町だ。水戸市から富岡町までは約136キロメートルの距離があり、私たちは電車で約2時間30分かけて富岡町を訪問していた。富岡町は平成23年の東日本大震災時に起きた福島第一原発事故により警戒区域となったが、平成29年の4月1日に帰還困難区域を除く地域で避難指示が解除された。

昨年の4月に図書館の事業を再開した富岡町文化交流センター「学びの森」を拠点に、復興応援の事業を主に行っている。富岡町役場の方より、図書館を有する複合施設を使って「こころの復興」につなげることをして欲しい、複合施設としてのハードを活かしたソフト事業の企画立案・運営をして欲しいという依頼を受けた。具体的には、①施設の複合性を活かす図書館づくり②大学生があったらいいと思う機能を活かす図書館づくり③読む・借りるだけではない図書館コーディネートが提案されたが、私たちは3つ目に注目し活動を進めた。

メンバーの5人は、福島県出身というわけではなく、最初は皆が被災地ということに実感を持てていなかった。初めの富岡町訪問で、皆が衝撃を受けた。「静かな町」「人がいない町」「町の中にまだ入ってはいけない土地がある」など、自分たちが住んでいる環境とは全く違うことに、改めて気づいたのだ。自分たちに何ができるのだろうか。自分たちのやろうとしていることは、果たしてこの町にとって必要なことなのか。私たちは毎回、考えていた。

私たちのやってきた活動は主に4つだ。まず大きなイベントとして、8月26日に行われた「謎解きスタンプリー」、11月25日に行われた「学びの森」文芸祭だ。また、ミニ企画として「パネル展示・作品展示」と「落語体験教室」を行った。これらの企画は、補助金を活用しながら行ってきた。私たちは「平成30年度福島県県内避難者・帰還者心の復興事業補助金」に申請し、115万円の金額を獲得した。この金額を獲得したことは、私たちの活動をより質の高いものにしたと考えている。また、イベントのため、連携先である富岡町役場の三瓶秀文様や門馬健様、図書館職員の東山恵美様と、何度も会議を行ってきた。訪問回数は、5月から2月までで、約20回になる。

私たちのチームの目的は、「今後も継続する企画を考え、実行する」「地域の現状を学び、県外に住んでいる私たちが、受け入れられた上で地域に貢献する」の2つである。1つ目は、この1年間で活動に区切りがつくが、それで終わってしまてはいけないと考え設定した。このような活動で期待されるのは継続することである。私たちの思いをつないでいきたい、今後の復興応援の事業の発展のきっかけになってほしいと考えた。2つ目は、前述にもある通り、自分たちの活動が町にとって必要なのかという、私たちの毎回の課題につながる。富岡町を訪れるのは初めてだ。町の現状を知らずに活動はできない。また、町の人の求めているものと違う活動をするのも、私たちの自己満足で終わってしまう。常に心に富岡町に住んでいる方や、富岡町を好きな人の考えや思いを忘れないためにこの目的を設定した。

5月から活動をスタートさせ、8月から補助金を獲得して様々なイベントや企画を実施して、3月まで活動を続けてきた。それぞれチームメンバーの個性を活かし、企画を成功させることができた。私たちの富岡町に対する熱い思いがこの報告書に詰まっている。この報告書を通して、その私たちの思いを感じ取ってもらうとともに、富岡町の現状を知るきっかけとしていただけたら幸いである。

2：活動概要

大貫 史織

(1) 活動目標

私たちとみ咲クチームはチームの目的を以下のように掲げている。

- ・今後も継続する企画を考え、実行する。
- ・地域の現状を学び、県外に住んでいる私たちが受け入れられた上で地域に貢献する。

これらがチームの目的であるが、ここから富岡町のコミュニティの再形成を目指すことを最終的な目標としている。ここでいうコミュニティの再形成とは、私たちの活動拠点である富岡町文化交流センター「学びの森」に多くの人が集まることで、そこに会話が生まれコミュニケーションの場となることと定義している。

(2) 活動の概要

とみ咲クチームは5人のメンバーで構成されていて、全員が人文学部の3年生である。5人のうち、昨年度も活動していたメンバーが3人、今年度初めて受講したメンバーが2人である。昨年度も活動した2人は他のチームと掛け持ちしている。このようなメンバーにより、とみ咲クチームは結成された。チームを結成できる最小人数で結成されたとみ咲クチームは、今年度の活動が初めてである。初年度の活動であり、5人という少ない人数のなかでも、他のチームに負けないくらい活発に活動することができた。富岡町への訪問回数は計24回にも及ぶ。そして、いくつかのイベントを企画したり、インターンシップに参加したりと実に様々な活動を行ってきた。そうした活動をいくつか取り上げ以下に載せる。また、とみ咲クチームは「平成30年度福島県県内避難者・帰還者心の復興事業補助金」に申請し、115万円で採択されたこともあり、補助金に関する活動も以下に載せることにする。

※ミニ企画

①常設展示

常設展示には、とみ咲クチームメンバーが作成するパネル展示と、町民や近隣住民の方からお寄せいただいた作品を展示する作品展示の2種類がある。

・パネル展示

日にち：2018年7月22日（日）～

場所：富岡町文化交流センター「学びの森」階段

少しでも福島県の魅力が伝わってほしい、昔を思い出してほしいといった思いからパネル展示を企画。福島県、特に富岡町の文化や地元ならではのものをとみ咲クチームが模造紙にまとめ、パネルを作成。展示場所は階段の横であり、展示の積み重ねが目に見えるように工夫した。今までに、「福島県の祭り」「富岡町の風景」、インスタグラム風の「Tomigram（トミグラム）」、「今食べたいあま〜い甘味」「浜通りの食」「富岡町MAP」を作成した。

・作品展示

日にち：2018年9月29日（土）～11月24日（土）

場所：富岡町文化交流センター「学びの森」正面入り口付近

趣味で様々なものを作っている方のために、作品を飾れる場を設けたいとの思いから作品展示を企画。富岡町や近隣市町村にお住まいの方から作品を募り、約2週間ごとに入れ替えながら展示。最終的に「学びの森」文芸祭ですべての作品を展示することを目指し、作品を募った。陶器や瓶などから、ぬいぐるみや刺繍などに至るまで様々な作品が寄せられた。

②落語体験教室

日にち：2018年8月23日（木）、9月15日（土）、29日（土）、10月17日（水）、27日（土）、

11月10日（土）

場所：富岡町文化交流センター「学びの森」2階 和室

落語を通して、人との交流に繋がればとの思いから、イベントを企画。とみ咲クチームに茨城大学落語研究会というサークルに所属しているメンバーがいるため、彼女が講師となって全6回の落語体験教室を実施。他の会員にご協力いただくこともあった。活動を進めていくにあたり、演目を覚え発表するという当初予定していた企画から、講師が披露した演目にある、落語ならではの動作を体験したり、短い台本で実演したりする企画に変更。毎回10～20人の方にご参加いただいた。

③茨苑祭（学園祭）での展示

日にち：2018年11月17日（土）、18日（日）

場所：茨城大学茨苑会館2階

4月からの活動をパネルにして展示したり、イベント時に撮影した動画を流したりした。興味を持っていただいた方に今までの活動を自分なりの言葉で伝えた。

※大きなイベント

①謎解きスタンプラリー

日時：2018年8月26日（日）12時～16時30分

場所：富岡町文化交流センター「学びの森」

イベントを通して施設の機能を知ってもらい、「自分もこの施設を利用したい」「また来たい」と思っただけのようにとの思いから、イベントを企画。富岡町役場の職員の方々にご協力いただき、大小ホールや茶室、IT研修室などを開放した。参加された皆様にはとみ咲クチームが考えた謎を解きながら「学びの森」内を巡っていただいた。すべての謎を解いた方には富岡町の公式キャラクターの「とみっぴー」グッズをお渡しした。富岡町や近隣市町村から約60名の方にご参加いただいた。

②「学びの森」文芸祭

日時：2018年11月25日（日）12時30分～16時40分

場所：富岡町文化交流センター「学びの森」大ホール、2階 第1会議室

とみ咲クチームの集大成のイベントとして、「学びの森」文芸祭を実施。文化に触れながら、少しでもコミュニケーションの場になればとの思いからイベントを企画。当日は、日本文学とフランス文学の作品を題材にした朗読劇、アカペラサークル **Impressive Voice** による歌唱、茨城大学落語研究会の会員による落語の実演、参加された皆様も含めた合唱が行われた。茨城大学の教授や学生サークル、学生ボランティア、富岡町役場の職員の方々、図書館員の方々にご協力いただいた。また、当日は同時開催として、第1会議室で作品展示を行い、町民や近隣住民の方から寄せられたすべての作品を展示した。謎解きスタンプラリーと同様に、富岡町や近隣市町村から約60名の方にご参加いただいた。

※インターンシップ

日にち：2018年8月21日（火）、22日（水）、9月19日（水）～21日（金）

場所：富岡町役場

8月と9月に分かれ、インターンシップを実施。さまざまな業務を体験し、普段の活動では学ぶことができなかった富岡町の現状や役場の仕事を学んだ。

※補助金関連の活動

・訪問調査

日時：2018年9月27日（木）14時～17時

場所：茨城大学人文社会科学部A棟205番教室

補助金の事務局、ふるさとふくしま交流・相談支援事業義務局の方々にお越しいただいた。主に活動内容や帳簿の管理状況のチェックがあり、様々なご指摘やご意見を頂戴した。

3：議事録・活動記録＜概要版＞

永田 典子・野平 知里

No.	日時（10分単位）	場所	活動内容	参加者	実働時間
1	2018年 5月20日 10:30 - 15:10	富岡町文化交流センター「学びの森」 富岡町図書館	自己紹介、館内見学、町内視察 プロジェクト演習についての打ち合わせ	羽田野、永田、大貫、野平	4:40
2	2018年 5月21日 15:20 - 17:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	構想報告会のパワポ修正 Twitterの開設	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:50
3	2018年 5月30日 8:50 - 10:00	茨城大学図書館 共同学習スペース	次回富岡町訪問日時の検討 ミニ企画の内容検討	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:10
4	2018年 6月4日 9:10 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	7月現地訪問の候補日決定 文芸祭の内容詰め	羽田野、永田、大貫、野平	1:00
5	2018年 6月11日 9:10 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	8月のイベントの内容詰め 助成金に関して話し合い	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:00
6	2018年 6月17日 10:20 - 15:20	富岡町文化交流センター「学びの森」 富岡町図書館	これまでの学校での活動報告 関係者様との意見交換 河北新報社の取材対応	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	5:00
7	2018年 6月18日 9:20 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	8月現地訪問の候補日決定 SNSの対応者決定	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	0:50
8	2018年 6月25日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	8月イベントの内容詰め チラシ制作方法の検討 インターンシップの希望月の決定	羽田野、大貫、野平、戸谷	1:10
9	2018年 6月27日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	8月イベントの内容詰め 常設展示やインターンシップの確認	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:10
10	2018年 6月27日 13:30 - 16:00	富岡町役場	助成金の申請書について 阿部祥久様にご挨拶	羽田野	2:30
11	2018年 6月28日 12:40 - 14:10	茨城大学人文社会科学部講義棟 13番教室	助成金で購入する品目の確認 次回のミーティング日時の決定	羽田野、大貫、野平、戸谷	1:30
12	2018年 6月29日 14:30 - 18:00	茨城大学人文社会科学部講義棟 14番教室	助成金の書類確認 ミーティング資料の作成	羽田野、大貫、野平、戸谷	3:30
13	2018年 7月1日 10:30 - 16:00	富岡町文化交流センター「学びの森」 富岡町図書館	チラシに関して イベント開催時の注意事項 今後の日程の話し合い	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	5:30
14	2018年 7月3日 9:00 - 10:00	茨城大学図書館 共同学習スペース	ミーティングについて 8月のイベントについて	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:00
15	2018年 7月5日 9:10 - 14:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	中間報告会のパワポ作成 チラシの作成	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	5:00
16	2018年 7月9日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	中間報告会のパワポ修正・発表練習	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:10
17	2018年 7月12日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	常設展示のパネル作成	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:10

18	2018年 7月12日 12:40 - 14:00	茨城大学人文社会科学部講義棟 13番教室	中間報告会のパワポ修正	大貫、戸谷	1:20
19	2018年 7月13日 10:10 - 11:50	茨城大学人文社会科学部C棟 C406教室	常設展示のパネル作成	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:40
20	2018年 7月13日 15:00 - 16:00	茨城大学人文社会科学部講義棟 13番教室	8月のイベントの内容詰め	羽田野、野平、戸谷	1:00
21	2018年 7月19日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	8月のイベントの内容詰め	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:10
22	2018年 7月19日 12:30 - 14:00	茨城大学図書館 共同学習スペース	落語体験教室のチラシについて 今後進めることの確認	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:30
23	2018年 7月20日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	常設展示のパネル作成	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:10
24	2018年 7月20日 14:50 - 18:00	茨城大学図書館 共同学習スペース	8月のイベントのチラシ作成	羽田野、大貫、野平、戸谷	3:10
25	2018年 7月23日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	インターンシップの候補日決定 各イベントの内容確認	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:10
26	2018年 7月30日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	今後の予定 補助金について	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:10
27	2018年 8月6日 14:30 - 15:50	茨城大学人文社会科学部講義棟 27番教室	今後の日程について チラシや広報日の確認	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:20
28	2018年 8月21日 10:30 - 15:30	富岡町立小中学校富岡校	エコクラフト同好会への挨拶	羽田野、大貫	5:00
29	2018年 8月21日 8:30 - 17:30	富岡町役場	インターンシップ	永田、野平	9:00
30	2018年 8月21日 8:30 - 17:30	富岡町役場	インターンシップ	永田、野平	9:00
31	2018年 8月23日 10:20 - 17:50	富岡町文化交流センター「学びの森」 富岡町図書館	ミーティング、8月のイベントについて	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	7:30
32	2018年 8月25日 10:30 - 17:15	富岡町文化交流センター「学びの森」 富岡町図書館	謎解きスタンプラリーの前日準備	羽田野、大貫、野平、戸谷	6:45
33	2018年 8月25日 18:15 - 19:15	富岡ホテル	取材を受ける	羽田野、大貫、野平、戸谷	1:00
34	2018年 8月26日 8:00 - 17:15	富岡町文化交流センター「学びの森」 富岡町図書館	謎解きスタンプラリー本番	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	9:15
35	2018年 8月27日 9:00 - 12:30	茨城大学図書館 グループ学習室S2	広報室山崎様の取材を受ける	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	3:30
36	2018年 8月27日 13:30 - 15:00	茨城大学人文社会科学部講義棟 12番教室	補助金について、「学びの森」文芸祭について	羽田野、大貫、野平、戸谷	1:30

37	2018年 9月11日 8:50 - 10:10	茨城大学図書館 共 同学習スペース	落語体験教室や常設展示についてのミー ティング	羽田野、永田、大貫、戸谷	1:20
38	2018年 9月15日 10:20 - 16:30	富岡町文化交流セン ター「学びの森」 富岡町図書館	常設展示の準備、落語体験教室	永田、大貫、戸谷	6:10
39	2018年 9月18日 11:00 - 11:30	図書館インフォメーショ ンラウンジ	ラジオの打ち合わせ	羽田野、大貫	0:30
40	2018年 9月19日 8:30 - 17:30	富岡町役場他	インターンシップ	羽田野、大貫、戸谷	9:00
41	2018年 9月20日 8:30 - 17:30	富岡町役場他	インターンシップ	羽田野、大貫、戸谷	9:00
42	2018年 9月21日 8:30 - 17:30	富岡町役場他	インターンシップ	羽田野、大貫、戸谷	9:00
43	2018年 9月25日 10:20 - 16:40	富岡町文化交流セン ター「学びの森」 富岡町図書館	ミーティング、常設展示の準備	羽田野、永田、大貫、戸谷	6:20
44	2018年 9月27日 9:00 - 13:30	茨城大学図書館 共 同学習スペース	補助金の書類の準備	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	4:30
45	2018年 9月27日 13:30 - 16:00	人文社会科学部A棟 A205教室	補助金の訪問調査	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	2:30
46	2018年 9月29日 11:20 - 12:20	茨城放送	茨城放送のラジオ出演	羽田野、大貫	1:00
47	2018年 9月29日 10:10 - 16:40	富岡町文化交流セン ター「学びの森」 富岡町図書館	常設展示の準備、落語体験教室	永田、野平、戸谷	6:30
48	2018年 10月1日 9:20 - 10:20	茨城大学図書館 共同学習スペース	チラシやパンフレットについてのミーティング	羽田野、大貫、野平、戸谷	1:00
49	2018年 10月2日 12:40 - 14:00	茨城大学人文社会科学 部講義棟 27番教室	後学期キックオフ報告会のPPT確認・修正、 アンケート集計	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:20
50	2018年 10月3日 15:30 - 18:00	茨城大学人文社会科学 部講義棟 27番教室	後期キックオフ報告会の発表練習	大貫、野平	2:30
51	2018年 10月10日 10:20 - 16:30	富岡町文化交流セン ター「学びの森」 富岡町図書館	ミーティング、常設展示の準備	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	6:10
52	2018年 10月12日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	チラシやパンフレットについてのミーティング	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:10
53	2018年 10月15日 9:10 - 9:50	茨城大学図書館 共同学習スペース	「学びの森」文芸祭に向けてのミーティング	羽田野、永田、大貫、野平	0:40
54	2018年 10月17日 10:10 - 16:30	富岡町文化交流セン ター「学びの森」 富岡町図書館	「学びの森」文芸祭に向けてのミーティング、 落語体験教室の実施	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	6:20
55	2018年 10月18日 17:50 - 18:30	茨城大学人文社会科学 部A棟 A307教室	朗読劇の打ち合わせ	戸谷	0:40

56	2018年 10月19日 9:00 - 9:40	茨城大学図書館 共同学習スペース	「学びの森」文芸祭に向けてのミーティング	永田、大貫、野平、戸谷	0:40
57	2018年 10月19日 9:40 - 10:20	茨城大学人文社会科学部C棟 C406教室	「学びの森」文芸祭に向けてのミーティング	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	0:40
58	2018年 10月22日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	茨苑祭、「学びの森」文芸祭に向けてのミーティング	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:10
59	2018年 10月26日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	落語体験教室や「学びの森」文芸祭についてのミーティング	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:10
60	2018年 10月27日 10:10 - 16:40	富岡町文化交流センター「学びの森」 富岡町図書館	「学びの森」文芸祭に向けた準備、落語体験教室の実施	大貫、野平、戸谷	6:30
61	2018年 10月29日 9:00 - 10:00	茨城大学図書館 共同学習スペース	補助金や「学びの森」文芸祭における作品展示についてのミーティング	羽田野、大貫、野平、戸谷	1:00
62	2018年 11月2日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	茨苑祭や「学びの森」文芸祭などについてのミーティング	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:10
63	2018年 11月5日 9:00 - 10:00	茨城大学図書館 共同学習スペース	「学びの森」文芸祭などについてのミーティング	永田、大貫、野平、戸谷	1:00
64	2018年 11月9日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	「学びの森」文芸祭や次回訪問などについてのミーティング	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:10
65	2018年 11月10日 10:30 - 17:30	富岡町文化交流センター「学びの森」 富岡町図書館	「学びの森」文芸祭に向けてのミーティング、準備、落語体験教室の実施	羽田野、永田、大貫、戸谷	7:00
66	2018年 11月12日 9:00 - 12:00	茨城大学図書館 共同学習スペース	茨苑祭に向けたミーティング、パンフレット文言や使用楽譜の作成	永田、大貫、野平、戸谷	3:00
67	2018年 11月14日 10:20 - 18:10	富岡町文化交流センター「学びの森」 富岡町図書館等	現地広報、富岡町内計20か所	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	7:50
68	2018年 11月19日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	「学びの森」文芸祭や活動報告会についてのミーティング	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:10
69	2018年 11月20日 9:00 - 12:20	茨城大学図書館 共同学習スペース	「学びの森」文芸祭に向けてのミーティング	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	3:20
70	2018年 11月20日 13:30 - 16:00	茨城大学人文社会科学部A棟 A212教室	マニュアルの作成等文芸祭に向けた準備	永田、大貫、野平、戸谷	2:30
71	2018年 11月20日 16:00 - 17:00	茨城大学人文社会科学部C棟 ラウンジ	「学びの森」文芸祭で使用するアンケートや地図の印刷	永田、野平、戸谷	1:00
72	2018年 11月22日 12:40 - 15:00	茨城大学人文社会科学部講義棟 14番教室	朗読劇の練習	羽田野、大貫、戸谷	2:20
73	2018年 11月22日 14:30 - 17:00	茨城大学教育学部C棟 ピアノ個人練習室	「学びの森」文芸祭で行う合唱の伴奏練習及びその際使用するPowerPointの操作練習	永田、大貫、野平、戸谷	2:30
74	2018年 11月24日 10:20 - 18:00	富岡町文化交流センター「学びの森」	「学びの森」文芸祭の前日準備	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	7:40

75	2018年 11月25日 8:30 - 17:50	富岡町文化交流センター「学びの森」	「学びの森」文芸祭本番	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	9:20
76	2018年 11月30日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	活動報告会に向けてのミーティング	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:10
77	2018年 12月1日 11:10 - 12:40	茨城大学図書館 共同学習スペース	活動報告会の練習	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:30
78	2018年 12月3日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	活動報告会の練習	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:10
79	2018年 12月7日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	活動報告会の練習、ふうあいねつについて	永田、大貫、野平	1:10
80	2018年 12月10日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	活動報告会の練習、補助金について	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:10
81	2018年 12月14日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	活動報告会や次回訪問日などについてのミーティング	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	1:10
82	2018年 12月26日 10:40 - 13:40	富岡町文化交流センター「学びの森」 富岡町図書館	常設展示のパネル作成に向けた情報収集、ミーティング	永田、大貫、戸谷	3:00
83	2019年 1月9日 10:20 - 16:40	富岡町文化交流センター「学びの森」 富岡町図書館	常設展示のパネル作成、補助金についての確認	羽田野、大貫、野平	6:20
84	2019年 1月15日 9:00 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	次回訪問やその際に行うインタビューの内容についてのミーティング	羽田野、永田、野平	1:10
85	2019年 1月19日 9:00 - 17:00	茨城大学図書館 共同学習スペース	補助金提出資料の作成・郵送	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	8:00
86	2019年 1月26日 9:20 - 16:40	富岡町文化交流センター「学びの森」 富岡町図書館	富岡町のなじみの食に関するインタビュー	羽田野、大貫、野平	7:20
87	2019年 1月30日 9:30 - 10:10	茨城大学図書館 共同学習スペース	今後の活動についてのミーティング	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	0:40
88	2019年 2月5日 10:20 - 13:40	富岡町文化交流センター「学びの森」 富岡町図書館	補助金についての確認、常設展示のパネル作成	羽田野、大貫、戸谷	3:20
89	2019年 2月19日 10:10 - 15:30	富岡町文化交流センター「学びの森」 富岡町図書館	補助金についての確認、現地広報のお礼	羽田野、大貫	5:20
90	2019年 2月26日 10:20 - 16:50	富岡町文化交流センター「学びの森」 富岡町図書館	補助金についての確認、常設展示のパネル作成	羽田野、永田、大貫、野平、戸谷	6:30
				合計	293:10

4：活動トピック

永田 典子・戸谷 実花子

(1) 第1回富岡町訪問

①日時

2018年5月20日（日）10:30～15:10

②場所

富岡町文化交流センター「学びの森」

③活動内容



図1：顔合わせの様子

第1回富岡町訪問は、これからお世話になる富岡町役場の三瓶秀文様、門馬健様、東山恵美様への挨拶から始まった(図1)。最初に、富岡町図書館の基本情報や富岡町の要望を伺った。

次に、富岡町文化交流センター「学びの森」内の図書館、大小ホール、会議室、視聴覚室などの見学をさせていただいた(図2)。



図2：館内見学の様子



図3：町内視察の様子

その後、町内を見学させていただいた。行った場所は主に夜の森地区、中央商店街、災害公営住宅、富岡駅などである(図3)。実際に帰還困難区域との境にあるバリケードや震災当時のまま残っている建物を見て、安易な気持ちで取り組んではいけないことを痛感し、自分たちが取り組もうとしているプロジェクトの重大さを感じた。その後、富岡町にあるショッピングセンターのさくらモールとみおかにて昼食をとった。

午後からは「学びの森」に戻り、打ち合わせを行った。内容は、とみ咲クチームの紹介や図書館と富岡町のイベント日時の確認、インターンシップの日程など多岐にわたった。関係者の皆様と協力して、これからの活動をより良いものにしていくために、気持ちを新たにした。

(2) 展示用パネル作成

①日時

2018年7月22日（日）10:30～15:15

②場所

富岡町文化交流センター「学びの森」

③活動内容

とみ咲クチームが活動の拠点とする文化交流センター「学びの森」入り口にある階段に、富岡町についてのパネルを作成し、展示することにした。第1弾のテーマは「お祭り」。取り上げたのは富岡町の「麓山（はやま）の火祭り」のほか、福島市の「水かけ祭り」、相馬市・南相馬市の「相馬野馬追」の3つである（図4）。

この中でも「麓山の火祭り」は、富岡町に400年以上続く、五穀豊穡などを願う伝統あるお祭りなのだが、震災の影響で長らく開催できずにいた。しかし、2018年に8年ぶりに復活することになった。パネル作成に先駆け、文献での調査や以前開催されていた様子を見聞きすることでまた一步富岡町について理解を深めることができたように思う。私たちにとっても有意義な活動であった。

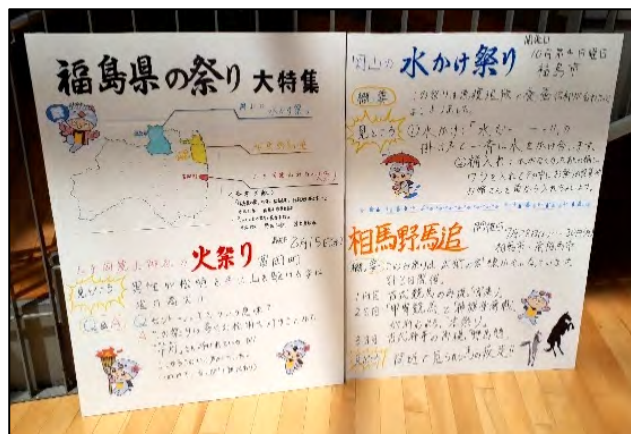


図4：実際に展示したパネル

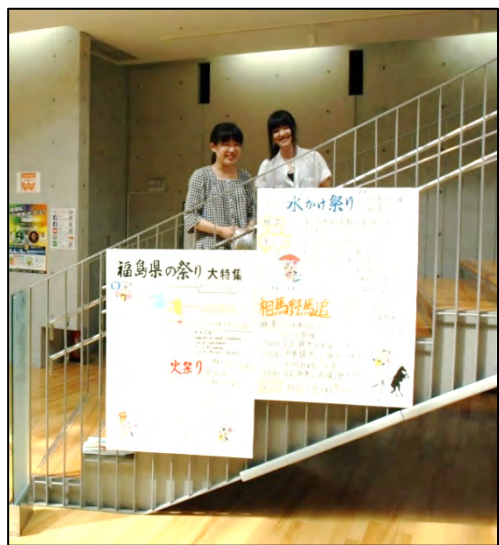


図5：パネルと共に記念撮影

第1段に続き、富岡町の風景や食べものなどをテーマにそれぞれパネルを作成した。現在では階段の上部までパネルが展示されており、達成感もひとしおである（図6）。

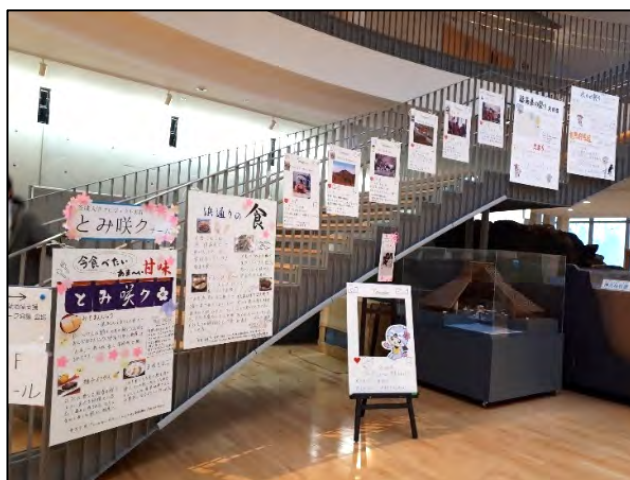


図6：階段上部まで続くパネル

(3) 落語体験教室

①日時

2018年8月23日(木)(第1回)～11月10日(土)(第6回)

②場所

富岡町文化交流センター「学びの森」2階 和室

③活動内容

富岡町文化交流センター「学びの森」内にある和室で落語体験教室を全6回開催した。毎回、茨城大学落語研究会の会員を講師として呼び、落語の披露の他、参加者の皆様には落語ならではの動作の体験や短い台本での実演を行っていただいた。



この体験教室ではとみ咲クメンバーや、参加していただいた方々同士の交流の機会を作ろうということを目指に行われたものであった。初めのうちは双方緊張感もあったが、回を重ねるごとに雰囲気もほぐれ、会話も弾むようになった。また、体験教室は富岡町図書館と連携し、図書館の入り口にチームで作成したチラシを貼っていただき宣伝をしたり、図書館に所蔵されている落語関連の本の紹介をしたりして、図書館利用の促進も同時に図ることができた(図7)。

震災以前、「学びの森」内では、茶道教室などの数々の住民参加型の行事が行われていた。しかし、そういった教室も現在は少なくなってしまった。そういった状況の中で、この落語体験教室をきっかけに地域の皆様の交流の機会が増え、また「学びの森」を活用して何か教室を開きたいと思っていたのであれば本望である。

図7：作成したチラシを使っでの宣伝

右の図(図8)は実際の体験教室の様子である。全6回の開催を通して、子どもから大人まで幅広い年齢層の皆様にご参加いただいた。中には、落語を聞くのが初めての方もいらっしゃったようであったが、披露する演目は軒並み大盛況であった。

次第にご友人を誘ってご参加いただけるようになったり、くり返し足を運んでいただきたりするようにもなり、体験教室はたくさんの笑い声が絶えないひと時となった。



図8：実際の教室の様子

(4) 謎解きスタンプラリー

①日時

2018年8月26日（日）12:00:~16:30

②場所

富岡町文化交流センター「学びの森」

③活動内容

富岡町文化交流センター「学びの森」には拠点とする図書館以外にも大小ホールや和室など様々な部屋がある。その各部屋の機能を知っていただくために、「学びの森」内を回って各部屋にある謎を解き、スタンプを集めてもらうという謎解きスタンプラリーを企画した。

とみ咲クチーム初の「学びの森」全体を使う一大行事ということもあり、メンバーのみならず、富岡町役場の方々、図書館員の方々にもお手伝いいただき、準備に力を入れた。館内は富岡町の名物でもある桜をイメージしたピンクのお花で飾り付けをし、普段とは一味違った華やかな雰囲気があふれた。



図 9：受付での様子

図 9 はスタート地点である受付での様子。とみ咲クメンバーや図書館員の方々が来場者の皆様をお出迎え。スタンプを押す台紙（図 10）や、館内の地図（図 11）を渡した。



図 10：スタンプ台紙

図 10、11 はスタンプを押す台紙と「学びの森」館内の地図である。こちらも富岡町の名物である桜と、富岡町の公式キャラクター「とみっぴー」を使用した。また、地図には問題の場所だけではなく、各部屋の機能についても記載した。

イベントには約 60 名の方々にご参加いただいた。大勢の方にとみ咲クの存在を知っていただき、協力していただけたのは何よりの喜びである。皆様からは「施設を知ることができたいい機会だった」、「活用してみたい」といった感想をいただき、手ごたえも十分であった。



図 11：館内地図（1 階）

(5) 作品展示 1 回目（第 9 回富岡町訪問）

①日時

2018 年 9 月 29 日（日）10：10～16：40

②場所

富岡町文化交流センター「学びの森」

③活動内容



図 12：展示用のケースを検討する様子

今回の富岡町訪問では、プロジェクト開始当初に常設展示として考えていた作品展示を主に行った。富岡町関係者の皆様のご協力のもと、チラシを配布し周知に努めたため、多くの方から様々な作品が寄せられた。作品展示の 1 回目である今回は、関係者様から「学びの森」内にある展示用の台やケース・布などの使い方を説明していただいた（図 12）。

そして、実際にそれらを借りて干支の色紙・軍足人形・びん装飾・まつぼっくりとハスの壁掛けリース・エコクラフトの 5 種類を飾った（図 13）。学芸員である富岡町関係者のお二方に展示の仕方を教えていただき、びん装飾用のマクラの製作も行った。どの面を見せたいのか・どのように飾れば強い印象を与えられるのかなど、初めて展示する側に立って作業をして、展示の奥深さを知ることができた。



図 13：実際の展示



図 14：「学びの森」文芸祭での作品展示

また、11 月に開催した「学びの森」文芸祭では作品展示にご協力いただいた全ての作品を、第 1 会議室に飾らせていただいた（図 14）。

作品の募集を始めた当初は、作品が集まらないのではないかと不安に思ったが、富岡町の皆様を中心とした多くの方のご協力のおかげさまで、文芸祭まで展示を行うことができた。チームの知名度が低い中でのチラシの配布になった。しかし、実際にエコクラフト同好会に伺い、一緒にエコクラフトを製作することなどを通して、私たちの活動が少しずつでも富岡町に周知されるように努力したことが実になったと実感した。そして何よりも文芸祭を通して、富岡町の皆様と私たちとみ咲クチームの合同のイベントを開催できたように感じられたことが大きな収穫になった。

(6) 文芸祭

①日時

2018 年 11 月 25 日（土）8:30～17:50

②場所

富岡町文化交流センター「学びの森」

③活動内容



図 15：最終確認の様子

メインのイベントとなる「学びの森」文芸祭は、前日の 24 日から 1 日かけてリハーサルや会議室に飾る作品展示の準備を行った。当日は、とみ咲クメンバー・富岡町役場の方々・図書館員の方々・茨城大学のボランティアスタッフが集まり最終確認から始まった（図 15）。

文芸祭の演目は、大ホールで行う朗読劇・落語・歌唱・合唱と、第 1 会議室で行う作品展示である。朗読劇は、江戸川乱歩の『人でなしの恋』を茨城大学人文社会科学部教授の谷口基先生に、ジュール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』を茨城大学人文社会科学部准教授の神田大吾先生に解説を担当していただき、チームリーダーの羽田野が一人で演じきった（図 16）。落語では、戸谷の所属する茨城大学落語研究会の堤仁人様が新作落語の『みどりの窓口』を披露してくださり、戸谷が古典落語の『強情灸』を披露した（図 17）。



図 16：朗読劇の様子

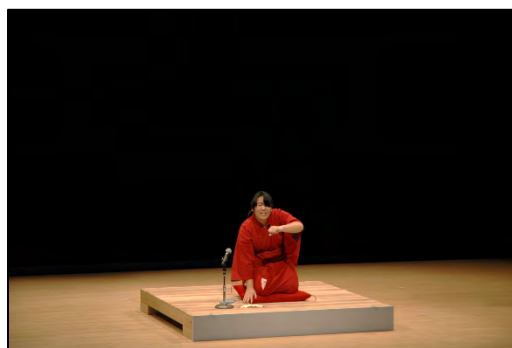


図 17：落語披露の様子

落語体験教室にご参加いただいた方も見に来てくださり、幕間で戸谷とお客様の軽快なやり取りも見られた。歌唱では、茨城大学学生サークル Impressive Voice 様にアカペラを披露していただいた。最後に、舞台上のスクリーンに富岡町の風景を映しながら野平のピアノに合わせて全員で富岡町の町民歌の『富岡わが町』と、『花は咲く』を野平のピアノの伴奏で合唱した。目標としていた集客人数には及ばなかったが、チラシやポスターの作成から当日の司会進行に至るまで様々な仕事を担当するなど、イベントの企画・運営を最初から行うことになり、非常に貴重な経験となった。そして、最後の合唱を全員で歌い終えた際やイベント終了後のお見送りの際に「ありがとう」「良かったよ」と声をかけていただけたことで、私たちの活動は少しでも富岡町の皆様の役に立っているのではないかと感じることができた。メインのイベントである文芸祭では、客観的な数値目標は達成できなかったものの、富岡町の皆様と近い距離で心を通わせて一緒に一つのイベントを作り上げることができたのではないと思う。

5：福島県富岡町役場でのインターンシップレポート

自分たちができることとは何か

羽田野 里菜（人文社会科学部・3年）

1. 参加の動機

私は将来、メディア関係の仕事に就きたいと考えています。しかし、具体的プランが見えていない状態でした。今回のインターンシップでは、自分の将来を見つめ直し、今後のプランをしっかりと考えるため、自分の適性をしっかりと分析し、自分が働く姿を想像できるように知識を得たいと思いました。また、役場で働くということがいかに住んでいる人たちの支えになっているのか、そのことを支える側になって考えたいとも思いました。行政サービスを受けている側だけではわからない考えや対策をしっかりと学び、客観的な分析をできる力を得たいと思ったのです。

2. 派遣先の概要と業務内容

福島県双葉郡富岡町の役場であり、私が派遣された産業振興課商工係は主に事業再開の支援を行っています。また交通や観光についても事業を行っています。もう一つの企画課では、企画政策係・まちづくり係・広聴広報係に分かれています。私が行ったのは主に広聴広報係での業務で、町民の人たちにいかにすばやく正確な情報を伝えるかを考えて業務を行っています。一日目は産業振興課商工係についての説明を受け、交通についての会議を見学しました。二日目は、町の商工会への挨拶と商工会についての説明を受け、町の現状について町をまわりながらと役場に戻ってから、様々な立場の人から聞くことができました。三日目は、企画課にて資料の印刷や広報誌の整理を行い、町役場の隣にあるふたば医療センター附属病院にてドクターヘリの運航式の撮影に同行しました。また、企画に限らず今後の就職やものの考え方に役立つお話しをして頂きました。

3. インターンシップを通して修得したこと

インターンシップで学んだことは、就職のことに関することだけではありません。もちろん、役場という職場の知識がない私は、役場の内部がいったいどのような仕組みになっていて、具体的にどんな仕事をしているのか、しっかりと学ぶことができました。しかし、それだけではありません。仕事に対する基本的な知識がいかに重要であり、それをいかに活かしていくのがとても重要なことであるということを、身をもって感じました。自分の知識をいったい何のために使うべきなのか。誰のためにどういったかたちで、またどの知識がどの考え方が最善なのかを自分で選ばなければなりません。例えば、事業を始めるといっても色々事情を抱えた人がいます。事業を再開しようとしているのか、新規で始めるのか。また、計画がきちんと進められているのか、まだの段階なのか。相談にきてくれた町民の方の声にきちんと耳を傾け、その人にあった適切な対応をしなければなりません。そのためには、自分が「わからない」では話になりません。また、知識があるだけでもダメで、その知識を誰に向けるべきなのか適切に使い分けなければなりません。資料の準備にしても、自分の知識を出すだけではなく、常に相手の顔を思い浮かべ、その相手に向けて発信していかなければならないのです。当たり前のことですが、しかし私は一番難しいことだと考えます。常にこれらを意識し続けるのは大変で、それをこなしていくには、常に自分に何ができるのか目標を持っていなければならないのです。目標は高く、それに向かって少しずつステップを踏むことで、いつかその自分の目標達成が誰かの笑顔につながるのです。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップは就職のための活動かも知れません。それが動機でインターンシップに参加する人が大半かなとは思いますが、しかし、インターンシップに参加する意義はそこだけではありません。自分の今のレベルがいったいどれぐらいなのか、自分の力量に対しての気づきが得られます。現場にその身を置くことで、いったいどれだけの知識が自分にはあるのか、しっかりと知ることができます。私は実際、インターンシップは自分の就活に直結する活動だと考えていたため、何もわからない自分は何が学べるのか不安でした。しかし、今回のインターンシップで想像以上の学びを得ることができ

ました。また、富岡町でプロジェクト活動をしている以上、現状をしっかり学んでおく必要がありました。それに関しても町役場の皆様にたくさん教えて頂き、さらに自分がやっている活動の意義を再確認し、自信を持つことができました。私はこのインターンシップを決して忘れることはなく、三日間で学んだたくさんのことは他の誰にも負けないほどの力になると確信できました。もしも皆さんが迷っているならば、思い切って飛び込んでいくべきです。

業務の体験から得た就職への一歩

永田 典子（人文社会科学部・3年）

1. 参加の動機

もともと将来の選択肢として公務員を考えていましたが、具体的にどのような職種に興味があるのか、はっきりしていませんでした。そこで、自分の将来を考えるためにも役場のインターンシップに参加して役場の現状を知り、実際の業務を体験することで、自分自身のやりたいことを知りたいと思いました。それにより、今後自分がどういうことを学んでいく必要があるのかについても、具体的なイメージがつかめるのではないかと思います。

2. 派遣先の概要と業務内容

福島県双葉郡富岡町は、東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所の事故により、まだ多くの地域が帰還困難区域に指定されています。震災から7年を経た現在もなお、多くの町民がいわき市と郡山市を中心に避難生活を続けており、通常の少子高齢化過疎地域とは異なる「過疎問題」にも直面しています。富岡町役場は、一般的な町役場業務とともに震災復興に関するたくさんの業務を担っています。

今回のインターンシップは二日間で、私が当初から希望していた住民課と健康福祉課に一日ずつ受け入れていただきました。

初日の住民課では、午前中に住民系の職員さんから窓口業務の説明を受け、実際にパソコンを使用し利用者の方との対応の一部を体験させていただきました。午後は避難生活支援系の職員さんに同行し、仮設住宅の見学をさせていただくとともに、実際に仮設住宅の管理をしている人からお話を聞かせていただきました。東日本震災から7年が経ち、仮設住宅が現在どのような状況にあるのかを知ることができました。

二日目の健康福祉課では、まず健康福祉課全体に関するご説明を受けた後、福祉係で資料作成のお手伝いと住民の方へ配布する封筒への押し印作業を行いました。どちらも指導員として職員さんが常について下さり、助言をいただきながら作業を行いました。

3. インターンシップを通して修得したこと

私がインターンシップを通して修得したことは、初対面の方といきなり一緒にお仕事をするときの接し方です。学生生活では、常に同じ友人と一緒にいることが多いため、初めて会う方と一日一緒に行動することは新鮮で多くの学びがありました。加えて仕事の一部に参加させていただくにあたって、相手を不快にさせない距離感や接し方を考えることの重要性を知りました。

また、実際に業務を体験することで役場や住民の方の現状を垣間見ることができ、そこから自分が何をしたいのか・何に興味があるのかに気が付くことができました。とくに住民系の窓口業務の体験では、自分が意外にも人と接することが好きであることを知りました。また、福祉係で書類作成の手伝いや封筒の押し印作業をしたときには、パソコンに向かって作業をしたり、同じ作業を繰り返したりしても思いの外集中力が続くことがわかりました。自分自身の意外な一面に気づくことができ、実際に業務を見学し体験する大切さをも実感しました。

4. 後輩へのアドバイス

今回のインターンシップが充実した日々になったのは、富岡町役場の方々のご配慮のおかげです。インターンシップに参加することは緊張すると思いますが、受け入れ組織の方々には親切に対応して下さい。気になったことは勇気を出して質問して下さい。自分の視野を広げることに役立ちます。

また、実際の作業中だけではないさまざまな場面で学校生活ではなかなか得られない多くの発見があると思います。お昼休みや休憩を職員さんと一緒に取る機会があれば、積極的にご一緒させていただくことをお勧めします。

インターンシップは限られた時間で行います。皆さんにとって有意義な活動になることを祈っています。

企画と福祉という仕事を経験して

大貫 史織（人文社会科学部・3年）

1. 参加の動機

私は自分の進路を明確に決められていません。公務員として働くか民間で働くかも決めかねています。そのため、プロジェクト実習 D のインターンシップを通して、自分の進路を決めることに役に立つのではないかという思いから参加しました。また、社会人の方の働く姿を間近で見ることや実際に業務を体験することで、職業の正しい理解に繋がるのではないかと思います。

2. 派遣先の概要と業務内容

富岡町役場企画課では、『広報とみおか』や公式キャラクター・とみっぴー等を用いた広報から、統計調査や町政懇談会等に至るまで幅の広い業務を行っています。同、健康福祉課福祉係では、児童や障がい者の福祉にかかわることから戦傷病者や交通遺児にかかわることまで扱っています。また、2日目には健康福祉課福祉係の方を介して、富岡町社会福祉協議会で受け入れていただきました。富岡町社会福祉協議会（以下「社協」）は民間の非営利組織であり、昭和43年に法人として設立されました。地域福祉の推進を目的として様々な福祉サービスの提供や相談活動等を行っています。

インターンシップは3日間でした。初日の企画課広報係では企画課に関するご説明をいただいた上で、『広報とみおか』の郵送のお手伝い、町内視察への同行、とみっぴーの Facebook 原稿作成等を体験しました。2日目の社協では、民生委員児童委員協議会定例会に同席したり、個別訪問へ同行したりしました。3日目の健康福祉課福祉係では、障がい者の状況や障がい福祉制度についての説明、児童手当制度に関する通知の封入作業、障がい者手帳や義足等の補装具について、資料を用いてご説明をいただきました。

3. インターンシップを通して修得したこと

公務員と社協の職員の仕事をイメージでしか捉えていませんでしたが、仕事や職場の雰囲気まで知ることができたことは大きな収穫だったと思います。公務員というと長時間パソコンに向かっているイメージがありましたが、封入作業から役場の外での仕事まで業務内容は多岐にわたり、仕事の幅の広さを実感しました。社協においてもデスクワークだけでなく、町民の方や周辺地域の方とさまざまな形でかかわる仕事もしていることを知りました。職場の雰囲気について、上下関係はあるもののコミュニケーションを大切にしていることがわかりました。組織で働く中でコミュニケーションは必要ですが、仕事の話だけでなく雑談もできる関係が築かれていることは魅力的だと思います。

また、富岡町についてより知ることができました。職員の方や町民の方からお話をうかがった際に、富岡町への通勤や富岡町に戻ってきてからの日常生活についての生の声を聞くことができました。活動の中でそのような話を聞く機会はほとんどなかったため、富岡町で働くことや住むことへの理解を深めることに繋がったのではないかと感じています。

さらに、主体性を持つことの重要性を感じました。インターンシップ中に自分の目的は何か、どのようなことを学びたいのかを自分の中で明確にして仕事に臨むかどうかによって結果が異なると思います。また、そのように臨めれば積極的に質問することにも繋がり、インターンシップでの学びに差が出てくると感じました。そのため、主体性は重要だと思いました。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップに参加することで初めて見えてくることがあり、これはプロジェクト実習の活動でも得られないものです。そのため、プロジェクト実習の活動だけでなくインターンシップも経験したい方はプロジェクト実習 D を受講することをお勧めします。また、私の場合、社会人の方の貴重な時間を割いていただいているという自覚が足りない部分がありました。皆さんがインターンシップに参加される場合には、その自覚を持って業務に取り組んでほしいです。

コミュニケーションの大切さ

野平 知里（人文社会科学部・3年）

1. 参加の動機

私は、将来的に公務員、特に地方公務員の職に就きたいと考えています。ですから、市役所や役場の業務内容を学べるようなインターンシップをやりたいと考えていました。そこで、インターンシップが組み込まれているプロジェクト実習Ⅱを受講しました。富岡町役場でのインターンシップを通して、役場での業務内容や、仕事をしていく上で必要となってくること、心構えなどを学びたいと考えました。

2. 派遣先の概要と業務内容

インターンシップは二日間実施しました。実施場所は福島県富岡町役場。

一日目は福祉課福祉係でお世話になり、障がいや子ども福祉に関する手続きや業務内容、また、業務を行う上で心がけていることを福祉係の方にご指導いただきました。また、町内を案内していただき、実際に一件、町民の訪問に同行しました。

二日目は教育総務課生涯学習係でお世話になり、古い文献や東日本大震災当時の看板など、様々な史料を見学し、東日本大震災当時から今に至るまでの過程や史料の復元、管理について学びました。また、富岡町文化交流センター「学びの森」内で実施されたコンサートの準備の手伝いを行いました。また富岡町文化交流センター「学びの森」内の設備などの見学も行いました。

3. インターンシップを通して修得したこと

私は、富岡町役場でのインターンシップを通して多くのことを学びました。その中でも一番必要だと感じたのはコミュニケーションの大切さです。役場の方々の話をうかがったり業務を見学させていただく中で、役場の方は町民との会話であったり、県などとのやりとりであったり、人と人の間に立って業務をこなすことが多いという印象を受けました。また、自身の考えを的確にわかりやすく伝える力、住民の方々とコミュニケーションをとって信頼を築くことの大切さを学びました。役場はデスクワークが中心だと思っていたので印象が変わりました。

業務内容に関しては、一日目は、私が興味を抱いていた福祉について深いところまで学ぶことができました。ひとえに障がいといってもさまざまな福祉手続きがあることや障がいの種類にあわせ一人一人にあった対応があることなどが分かりました。障害者手帳の交付に関しても種類があるということ、町民の方に届くまでの過程などを学びました。

二日目は、史料の扱い方や生涯学習に関する知識を普段であれば学べないところまで得ることが出来ました。

今回学んだことは、これからの就活に活かしていきたいと考えています。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップ当日は、時間厳守はもちろん少し余裕をもって行くとよいと思います。ほとんどが初めて赴く場所であると思うので、多少道に迷ってもよいように余裕を持つべきです。

また、現地では担当の方以外にも会った方には笑顔で挨拶をすることが大切だと思います。受入先の方は忙しい中インターンシップを受けて下さっているので、感謝の気持ちを伝えるべきであるし、その空間、場所において受け入れてもらえる、更には、顔を覚えてもらう意味でも挨拶は大切であると思います。実際に私も、一日目に笑顔で挨拶をした方に二日目に逆に向こうから挨拶をしていただけたということもありました。インターンシップを受けるにあたってコミュニケーションの大切さを実感したので、ぜひ、今後インターンシップを受ける方はコミュニケーションをとることを意識すると思います。

最後に、私はガチガチに緊張していたせいで上手く言葉が出てこないという失敗もあったので、できる限りリラックスして、一つ深呼吸をしてみるといいかもしれません。

視点を変えて分かったこと

戸谷 実花子（人文社会科学部・3年）

1. 参加の動機

この授業では、福島県富岡町にある文化交流センター「学びの森」を拠点として活動しています。「学びの森」はかつて町民の皆さんが集まり、賑わっていましたが、東日本大震災で被災し、それに伴う原発事故の影響で避難せざるを得なくなりました。現在は一部地域を除いて避難指示が解除されましたが、以前のような活気は戻ってきていません。そこで、このプロジェクトでは「学びの森」を町民の皆さんのコミュニティの場として再び活性化させることを目標にしています。そして、日々の活動にあたり富岡町役場の皆様には大変なご尽力をいただいております。

私は本が好きなことから、以前から図書館業務に関心を抱いていました。また、私の実家が自営業であることから、震災後、富岡町でかつて営業されていた方々がどのように事業再開をされているのか非常に興味深く思いました。以上の私の関心をふまえ、今回のインターンシップが実現しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

1 日目にうかがった教育総務課生涯学習係では、文化交流センター「学びの森」の管理、運用をはじめとし、町の文化財の保護や管理、イベント開催といった業務を担当しています。初めに「学びの森」などに保存してある文化財や資料を見学し、東日本大震災の時に被災した JR 夜ノ森駅の駅舎から運ばれてきた看板などの確認作業を行いました。そのあとは富岡町で開催された祭の雑誌掲載用の記事の校正作業、「学びの森」の館内アナウンス等を行いました。

2 日目、3 日目にうかがった産業振興課商工係では、公設民営の商業施設「さくらモール」の管理、事業再開支援や事業誘致、町内循環バスなどの交通業務を行っています。私は、一部業務を委託している商工会の見学をし、各所でお話をうかがうなどしたあと、在京の避難者の方への広報の封入作業、「さくらモール」での会議の見学等を行いました。

3. インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップは富岡町での活動を既に 4 ヶ月ほど継続してのものでした。ですので、とりわけお世話になっている、教育総務課の業務内容などある程度把握しているつもりでいました。しかし、実際に業務を担当する側になり、外から見える仕事だけがすべてではないとわかりました。例えば、雑誌掲載用の記事の校正を行いました。その記事を書かれたのも教育総務課の方です。記事は町内で 8 年振りに行われた祭についてのものなのですが、町としての復興への想いが伝わるものでした。ほかの例としては産業振興課での「さくらモール」の管理があげられます。「さくらモール」は一般企業が入る施設ではありますが、町が作ったもので、官民一体となり営業をしています。このように役場の業務は窓口業務だけではないことを実感し、町のため仕事は多岐にわたるものだとわかりました。

インターンシップ参加以前は、役場というと事務的で固い印象がありました。しかし、実際に組織の内側に入ると、現場に出向いて声を聞くなど、町民を第一に考える役場の皆様の真摯な姿勢がうかがえ、認識を改める良い機会になりました。また、富岡町は一部地域を除き避難指示が解除されてからまだ日が浅いため、町民の皆さんから様々な要望があがっています。しかし、現状では全ての要望を聞き届けることは不可能です。職員の皆様は、その葛藤のなかでも、最大限の努力を尽くそうとしています。その姿勢は、ほかのどんな仕事を行う上でも忘れてはならないものだと思います。

今回のインターンシップを通して、今までの大学生としての視点と異なる、富岡町役場としての視点を体感することができました。この視点は今後も富岡町で活動する上で活かされるものになると思います。富岡町役場は普通の役場とは違い、様々な課題がある大変な現場であると思いますが、その中に身を置くことで一般市民の側からは見えない仕事、想いが見えました。

4. 後輩へのアドバイス

初めてお会いする方々や初めての状況で緊張すると思います。しかし、緊張や遠慮しすぎていても自分が持っている力を最大限に発揮できなくなります。また、遠慮しては体験できないこと、見えない視点もあるかと思います。せっかくの用意していただいた機会ですので、学ぶこと、吸収できることはたくさんあるのに越したことはありません。積極的に自ら動いていくのが良いでしょう。

6：個人レポート

自分の力を見つける

茨城大学3年 羽田野 里菜

今回、私は「とみ咲ク」というチームで、リーダーを務めた。きっかけは、大きな図書館と大ホールだった。本当に単純なものだ。最初は、「震災があった場所」ということにあまり実感がわいていなかったのだ。再開したばかりの図書館で、何でも出来る。その言葉は、自分に一歩踏み出すチャンスがあると、感じさせるには十分な言葉だったのだ。

メンバーを集めなんとか五人のチームを結成した。そのリーダーとなった。去年のさとみ・あいのリーダーで、すごい先輩を近くで見っていたのだ。「私もあのスキルを身につけるチャンスだ」と、リーダーになったときは感じた。最初は、希望に満ちていたわけだ。これから起こることにわくわくしていた。しかし、そう簡単ではないことを1回目の訪問が近づくにつれて感じていた。正直、役場の人との会議と、メールのやりとりに指摘があったことは、私にとってショックだった。自分の去年のスキルは何だったのか。すべて消えてしまったのではないのか。今考えてみれば、さとみ・あいでの人との交流と役場の人とのやりとりはまったく違うのだが、その時の私はかなり落ち込んだのを覚えている。しかし、そこからだんだんと自分の考え方が変わっていくのを実感することになった。

大きなきっかけは補助金の書類整理だ。今回、「福島県県内避難者・帰還者心の復興事業補助金」に申請に、115万円を獲得した。しかし、ここにたどり着くまでが大変だった。今までまったく触れたことのない書類を書かなければいけない。今回、協力して頂いている連携先の三瓶秀文様と門馬健様と何度もやり取りを行い、書類を仕上げていった。膨大な量の書類を前に、以前の私なら心が折れていた。しかし、今回は違った。「次は負けない」「次はやってやる」と、強い意志が確かにあったのだ。自分にそんな考えがあることは知らなかった。褒められることは嬉しいが、それが目的だったわけではない。次こそ、「見返してやる。」「完璧にこなしてやる。」と、毎回失敗する度に、考えるようになった。その思いがあったからこそ、ここまでチームを引っ張っていたわけであり、今たくさんのスキルが身についている。同じく連携先の図書館で勤務している、東山恵美様に「発言が最初に比べて堂々としている。」と言われたことがある。こんなに嬉しい言葉はなかった。今まで、歯をくいしばってやってきたことが、まわりが気づくほどに現れたのは、まさに力がついたと実感できる瞬間だった。

活動自体については、こちらも最初とまったく心意気が違う。最初はとにかくわくわくしていた。ただそれだけだったといってもいい。しかし、実際訪れてどうか。「被災地」というのが、こんなに静かな場所なのか。自分たちがやらなければならないことは簡単なことではないのだ。最初の訪問の日は、大きな衝撃だった。そこからは、何をすればその助けになるのかメンバーで考えた。訪問回数も、当初考えていたよりはるかに回数を増やした。補助金をとって最初のイベント「謎解きスタンプラリー」は、とても緊張した。本当に、このイベントが何かの助けになるのか、参加者はきてくれるのか。不安がたくさんあった。しかし、イベントは成功したと思う。目的にかかっていた、「文化交流センター学びの森の機能を知ってもらう」ことが、そのまま結果に表れた。これがすごく嬉しかった。「とみ咲ク」というチームを初めて、富岡町の皆様が認めてくれたように感じた。落語体験教室も、回数を重ねるごとに毎回来てくれる方も増えてきたし、人数も自然と集まった。常設展示も、当初言っていたように、もう階段の上まで届きそうだ。そして、メイン行事の文芸祭。このイベントは、私を心だけでなくスキルや体力、すべてにおいて成長させてくれたイベントだ。自分で、イベントの進行を考えて、朗読劇の脚本・演出、演者をやる。そして、機材スタッフさんとのやりとりや、連携先との連絡、協力者との連絡など、今考えれば、そのすべてをやっていたことが自分としてもすごいと考える。文芸祭が終わるまでは、そのスキルに自分で気づけていなかった。しかし、それが終わってとあるイベントを観客側からみていたとき、ふと思ったのだ。自分はこのステージをみる席に座っている人を考えて、イベントを企画した。そのすべてを仕切っていた。自分がやりたいことに少しでも近づけたのではないのか。そう考えたとき、全身に鳥肌がたったことを覚えている。

この活動を通して、最初は希望に満ちていた。しかし、進むにつれて自分の将来に直結しないようで、わからなくなっていた。しかし、今思う。自分が知らなかった力を知った。何を活かすべきなのかを学んだ。一年前の自分とは明らかに違う自分がそこに立っているのだ。将来がわからなくなっていた自分に、道が広がった。この活動がなければ、その道は見つけられなかったのだ。自分の強さを、なかなか認められなかった。その強さを認められた。この活動は私にとってかけがえのないものだ。

富岡町の活動で得られた仲間と想い

茨城大学 3 年 永田 典子

私が今回とみ咲クチームに所属して最も学んだことは、チームメイトの存在の有難さと全く知らない土地で自分たちの活動を認めてもらえる嬉しさである。昨年度はさとみ・あいチームに所属していたが、メンバーも多く昨年度から引き続き活動を行っている先輩もあり、里美地区での活動や授業の課題も不安なく進めることができた。また、プロジェクト実習の授業開始当時から成立しているチームのため、私が参加するときには里美地区の関係者の方々とつながりが既にできている状態だった。今年度の活動を通して、昨年度は活動をする上で不安要素がほとんどない状態でプロジェクトを進められていたことを実感した。

元々富岡町のプロジェクトは希望している人が 2 人しかいなく、チーム成立も危うい状況だった。そのため、チーム成立のために友人を引っ張ってきた。半ば強制的に誘ったその友人たちにあらゆる局面で助けてもらった。まず、とみ咲クチームの活動で主体となったのは、富岡町文化交流センター「学びの森」を富岡町民の方々が集まる施設にして、富岡町民の皆様の心の復興に助力したいという思いだった。そのため、施設内で様々なイベントを行い、施設の周知に努めた。最初にイベントを考えると、各々のできることを活かしてイベントを行うことで、より活動の主体となってイベントを開催できるのではないかと考えていた。私には人に自慢できる特技はないため、私だけではイベントを開催するところまでいかなかったが、実際に開催したイベントでは、メンバーの特技を活かしたから素晴らしいものにすることができた。活動の中で富岡町の関係者の方を仰っていた「人も財源」という言葉が、活動を行う中でより意味を理解できるようになった。チーム成立の基準である 5 人ぎりぎりでの心の復興をテーマに活動するには、正直負担も大きかった。片道 3 時間弱かけて拠点である学びの森に行き、名前も知らない方々の心の復興のために何をすれば良いのかを考える。私はプロジェクトをやりたいと言い出した本人だったため、やりたくないと思ったことは無かったが、他のメンバーにとっては大きな負担になっていたと思う。それでもメンバーは主体的に活動に参加し、自分の特技を活かして様々な場面で活躍してくれた。加えて、私が不安に思っていることを親身になって聞いてくれたり、作業を手伝ってくれたり、メンバーがいたから乗り越えられた場面が多々あった。友人ではなく、仲間と言える人たちに出会えたことが本当に嬉しく思う。

また、私たちは福島県双葉郡富岡町をフィールドに 5 月から活動を行なってきた。最初に訪れたときは現在動いている常磐線の最終駅ということにまず驚いた。町中はどこに何があるかもわからず、町民の方々がどのように生活しているかも想像ができなかった。最初の訪問で富岡町を案内してもらい、震災の爪痕を実際に見て、プロジェクトに対する想いを新たに活動を行うことを決意した。当初はとみ咲クチームのことを知っている人も少なく、町民の方々とお話しする機会もほぼ無かった。しかし、活動を通して福島県や茨城県のメディアに出演させていただき、富岡町の関係者の方々のお声がけもあり、最後の大きなイベントとなる文芸祭では参加していただいた町民の方から「頑張ったね」と声をかけていただけた。私が普通に生活している上では行く機会が無い土地で、おそらく一生出会わない方々に認めてもらえることの嬉しさを感じた。私は心の復興をするための最適解は無いと思っている。私たちの活動も最適解ではなく、いくつもある方法の一つを取ったにすぎないが、私たちが選んだ方法を当事者である富岡町民の方に認めてもらえることが本当に嬉しかった。今回のプロジェクトを通して他者に認められることの嬉しさを実感することができたため、今後の自分の方向性を決めることに活かしたいと思う。

私は家族や友人を含め多くの人に支えてもらっていることを、今回の活動を通して改めて実感することができた。また、全く関係がない土地で活動を行っても、活動の内容や自分たちの気持ち次第では協力してくれる人があることもわかった。最初は図書館を利用できるという面だけに興味があり始めたプロジェクトだったが、活動を行う中で様々な立場の人の想いを知ることができたり、自分が帰宅困難区域との境にあるバリエードを見て改めて震災や東京電力福島第 1 原発事故について考えたり、福島県双葉郡富岡町での活動でないと学べないことをたくさん学ばせてもらった。富岡町文化交流センター「学びの森」を一度きりの集客ではなく、継続的に人が集まる場所にするという目標にはまだ届いていないことが現状だが、よそから来た私たちだからこそできることを行うことができたのではないかなと思う。なかなか取り組むことのできない東京電力福島第 1 原発事故からの心の復興という課題に取り組む機会をいただけたことに感謝し、この活動で得られた仲間や知識、富岡町への想いを胸にこれから自分の人生を歩んでいきたい。

115 万円の重み

—補助金担当として一年を振り返る—

茨城大学 3 年 大貫史織

今でも鮮明に覚えている。それは 7 月下旬のある日のことだった。とみ咲クチームは、福島県の「平成 30 年度福島県県内避難者・帰還者心の復興事業補助金」(以下、補助金)に申請していた。その事務局、ふるさとふくしま交流・相談支援事業事務局(以下、事務局)と電話でのやりとりがあった。前日に事務局からご連絡があり、折り返しのお電話をしたのが次の日になってしまったのだが、私の中には不安しかなかった。以前提出した、補助金の申請に関する書類に不備があったのだとばかり思っていた。電話をかける手が震え、鼓動が速くなった。しかし、事務局の方がおっしゃったことは予想に反していた。とみ咲クチームが 115 万円で採択されたとおっしゃったのだ。私は採択されたとしても絶対に減額されるだろうと思っていたので、満額の 115 万円で採択されたこと伺い、最初は信じられなかった。しかし、リーダーの羽田野も事務局から同様のご連絡を頂いていたことを知り、少しずつ実感が湧いてきた。嬉しく思ったのと同時に、安堵した自分がいた。

この 115 万円という額は先生方が言うことには、「未曾有」「桁違い」の額であるという。たしかに、車一台買えてしまうほどの大金であり、昨年度私が所属していた KITAIBA Art Project チームで交付された助成金は 13 万 8 千円だったことを考えてみても、本当に桁違いだと感じた。しかし、この補助金を運用していくことはどれほど大変なことか、そのときの私には知る由もなかった。

私はこの補助金の担当になった。補助金の申請から交付決定に至るまで、関係者の皆様やとみ咲クメンバー内で話し合いを進めていくうちに、補助金の担当を一人決めておいた方がいいということになった。書類の申請は羽田野が主に担当していたが、羽田野から補助金の話进行いろいろ聞いていたこともあり、私が補助金の担当として選ばれた。当時の私はそのように仕事を任せられたことを嬉しく思い、頑張ろうと意気込んでいた。今思えば、115 万円の重みを全く理解していなかった。そのため、そのように楽観的な態度でいられたのだと思う。

まず、補助金担当としての仕事を説明する。簡単に言うと、帳簿の管理と事務局および関係者の皆様へのご連絡であった。皆から領収書をもらい、いつ誰がどのくらい支出したのかを Excel などのファイルに書き込んだ。何日に訪問しどのくらい参加者がいたかなど事業を一覧としてまとめたり、交通費の内訳を細かくまとめたりもした。とみ咲クチームは、補助金の書類上は茨城大学学生チーム「とみ咲ク」・富岡町協議体という名称であった。このように複雑な名称であったために、領収書の宛名が間違っていたことが多々あり、その都度訂正を依頼することもあった。交通費について、誰が何を使いどこまで乗っていたかなども把握しておく必要があった。また集めた領収書は原本をそのまま扱うことはせず、必ずコピーをとっていた。ご連絡については、メールだけでなく電話でのやり取りもあった。以上が、私の仕事である。

8 月から補助金を運用していく中で、補助金の大変さ、115 万円の重みを身に染みて感じるようになる。それについて、私の中で非常に印象に残っている日がある。

まず、9 月 27 日である。その日に補助金の訪問調査が行われた。補助金の事務局の方が茨城大学にお見えになり、活動内容や帳簿の管理など様々なことを調査することが目的であった。その日は関係者の皆様に加え、とみ咲クチーム全員で臨んだ。その日に帳簿の管理は適切かどうかの調査もあったため、その日までの帳簿を確認したり印刷したりすることが必要であった。

私は、訪問調査の準備を通して補助金の書類の管理の大変さを思い知ることになった。

まず印刷を何回もやり直すはめになったことである。前日に帳簿を確認し自分で印刷したり、訪問調査の当日になって他のメンバーに印刷をお願いしたりした。その中で帳簿に記入していなかった領収書が見つかり、通し番号がずれることから印刷をやり直すことになってしまった。大量に印刷をお願いしていたこともあり、用紙を無駄にしてしまったことが非常に悔やまれた。

私が他のメンバーにうまく指示を出せなかったことも挙げられる。自分の中で何をどのくらい印刷すればいいのか、よく分かっていなかったように感じる。他のメンバーとの情報共有がうまくいかなかったこともあり、訪問調査の直前まで準備をすることになってしまった。

訪問調査は無事に終わり、帳簿についても大きな問題はなかった。それが私にとって救いにはなったが、自分の未熟さを感じ関係者の皆様およびとみ咲クメンバーに対し非常に申し訳なく思った。準備ではとみ

咲クメンバーに迷惑をかけてしまい、訪問調査では関係者の皆様のご対応により成立していたと言えるので、そのように思った。

私が 115 万円の重みを感じた日はあと一日ある。それは 12 月 19 日である。その日は 2 日後に迫る補助金の中間報告の締め切りに備え、書類をすべて揃え発送する準備をしていた。中間報告は 8~11 月分の帳簿をすべて印刷し、補助金の事務局へ郵送およびデータで提出するものであった。その日は発送の準備を中心に、文字通り朝から晩までチーム全員で作業を行った。

前回の訪問調査の反省もあり、よく帳簿を確認し事前にある程度印刷していた。しかし、とみ咲クチームの大きいイベントが 8 月と 11 月にあったこともあり、80 枚以上の領収書を扱うことになっていたため、その事前の印刷だけでは到底間に合わなかった。今回の準備で他のメンバーに仕事を割り振り、自分でもメールを確認しながら作業を進めていった。書類はとみ咲クチームでの控えと提出用の二組を作成した。それらをすべて積み重ねるとティッシュ BOX 一箱分くらいの厚さになっていたように感じる。そのくらい膨大な量の書類を準備する必要がある。少しずつ作業を進め、夕方に「発送が完了しました」との連絡を受け取ったとき、私は安堵した気持ちと他のメンバーに対する申し訳ない気持ちが込み上げてきた。その日、私はバイトが入っていたため途中で作業を抜けざるを得ず、最後の発送まで参加することができなかった。それで申し訳なく思ったのだが、とみ咲クメンバーが一生懸命取り組んでくれたことに感謝し、このメンバーに任せてよかったと思い、それを含めたいろいろな思いから安堵した。

また、その日に 115 万円の重み以上に運の良さを感じる出来事があった。私はその準備日の数日前に委託契約書という書類が必要であることに気づいた。その書類は 11 月中の支出に関するものであったが、中間報告の締め切りに間に合うようにどうしても準備しなければならなかった。そのような事態になり、私はすぐ関係者の皆様およびとみ咲クメンバーへご相談した。そのときに、関係者様から丁寧かつ迅速にご対応いただき、なんとか書類を作成することができた。また、委託先の会社の方にも書類の確認や印刷などを行っていただいた。普通であれば、その日に書類が手元に用意できるようにご連絡することは大変失礼なことであり、許されないことである。しかし、そのような無礼なお願いにもかかわらず、お時間を取ってご対応いただいた関係者の皆様および委託先の会社の方には感謝を申し上げるばかりである。本当にありがとうございました。今でも「もしあの時、関係者様のご返信が遅くなっていたら」「もし福島県内の会社だったら」と思うときがある。そうであったら、書類は間に合っていなかったと思う。とみ咲クチームにご協力いただいている皆様への感謝だけでなく、限られた時間で書類をなんとか揃えることができた運の良さも感じた一日であった。

その後、事務局からは「受け取りました」とのご連絡しかなかった。私は少し拍子抜けした。何か訂正があるのではないかと心構えをしていたからだ。しかし、いつまで経っても他にご連絡はなかった。関係者の皆様や他のメンバーからは「何も問題がなかったんだよ」と言われた。私はそれを聞き、初めて「頑張ってきてよかった」と思えた。正直に申し上げると、12 月 19 日の中間報告の準備が補助金の仕事の中で最も大変な作業であった。ちょうどその頃、精神面で優れない時期と重なっていたため、自分を苦しめるものから逃げ出したかった。補助金の作業もすべて投げ出したかった。115 万円の重みを理解していたつもりだったが、これほど大変だとは想像もつかなかった。その頃、115 万円なんかどうでもいいと思ってしまったこともあった。私が作業しなくてもなんとかかなと思ってしまっていた。

しかし、今、補助金とともに歩んだ一年を振り返ると、ここまで頑張ってきてよかったと心から思える。補助金の担当として想像以上の大変さを味わったが、そんな中でも完全に挫けることなく、なんとかやり遂げることができた。そんな自分を褒めてあげたい。「よくここまで頑張ってきてたね、本当にありがとう」と。そして、115 万円の補助金を扱うという、滅多にできないであろう経験をさせていただいたことに非常に感謝している。補助金担当として一年を振り返る中で、私にとってはすべてが未知の世界だった。その中で、何を理解しているのか、何が分からないのかが自分でも分からなくなってしまったことが多々あった。関係者の皆様およびとみ咲クメンバーには、たくさんご迷惑をおかけしてしまったとも感じる。しかし、ここまで私を支えていただいたことに感謝してもしきれないほどである。今の関係者の皆様、今のメンバーでなかったら、この活動は途中で終わっていたかもしれない。そもそも、チームが結成していなかったかもしれない。今まで、本当にありがとうございました。

このレポートを書いている現在でも、補助金の仕事はすべて終わっているわけではない。むしろこれから締めくくりとして非常に重要な時期である。115 万円の重みを改めて自覚し、最後の最後まで補助金担当として「気を引き締めて」「自信を持って」頑張っていく所存である。

自分にできること

「とみ咲ク」の活動を通して

茨城大学 3年 野平 知里

私は3年次に初めてプロジェクト実習を受講し、1年間、「とみ咲ク」として活動を行ってきた。最初は、富岡町という町で図書館コーディネートを行う、という内容を友人に聴き、軽い気持ちで参加を決めた。しかし、初めて富岡町を訪問した際に、東日本大震災の際に起こった原発事故の影響が今なお残っている現状を実際にみて、胸を打たれた。私たちにできることは何かを考え直し真摯に向き合わなければならないという決意が芽生えた。それから約1年間、富岡町の復興の一助となれるように邁進して来た。初めに、自分たちの目標を定め、その達成のためにどのようなアプローチをして、活動を進めていくかを考えた。結果として、8月に謎解きスタンプラリー、11月に文芸祭の実施、そして継続して常設展示や落語体験教室などを行ってきた。それぞれの活動の中には多くの学びや気づきがあり、非常に勉強になった。

まずは、謎解きスタンプラリーについてである。私は、チラシ、スタンプラリーで使用する用紙のデザイン、クロスワード、問題の作成等を行った。この際に、自分の中で大きな一歩を踏み出していた。というのも、私は元来自分に自信がなく、自分が活躍できそうな場面においても、なかなか手を挙げられないという短所があった。しかし、周りのチームメンバーの積極性にも背中を押され、自らチラシのデザインを志願することが出来た。チラシのデザインは、まず、試作を作りそれをもとに先方と協議を重ね、改良していった。その際に、そのチラシは誰に何を伝えるために作るのか、必要な情報の配置はどうかなどチラシデザインについて必要な要素を学ぶことが出来た。また、改良を重ね、実際に自分がデザインしたものが使用されることの喜びを知ることが出来た。それは、文芸祭のチラシを作成する際に役立てることが出来た。問題やクロスワードの作成は今までの経験をもとに一から行った。これに関しても重要となってくるのは誰を対象に作成するかということである。当初は、複数難易度を用意するということが想定されていたが、時間がたらず、メンバーに助言をもらいながら難易度を作成した。来場すると予想される来場者層から大人でも楽しめるが、子供もヒントを貰えば融ける。そういった難易度を目標に作成した。謎解きスタンプラリー当日は、実際に近くで来場者が問題を解いているのをみて、「解けた！」と喜ぶ声や「難しいな～」と考える声を聴いた。自分が作成した問題は大丈夫だろうか、難しかったらうかなど不安ではあったが、楽しそうな声を聴き笑顔を見ることで頑張ってた良かったと、その成果を実感することが出来た。

次に文芸祭、常設展示についてである。文芸祭では、チラシの作成、ピアノ伴奏、装飾、常設展示の会場デザイン、設置を主に行った。謎解きスタンプラリー同様に自分の能力を鑑みて適切な行動をとれたように思う。文芸祭でも、例えば常設展示ではどれをどう配置したら目を引くことが出来るかなど多くの学びを得ることが出来た。ピアノ伴奏は、中学生以来で間の取り方や歌いやすいテンポなど練習をしてきたが、本番でさえ不安で非常に緊張した。しかし、実際伴奏してそれに載せて会場や舞台上の方々が歌ってくださると一体感が生まれ胸が躍り、音楽の楽しさを再確認することが出来た。常設展示では、パネルのデザインや盛り込む内容などをメンバーと相談し決めていたり、地域の方から預かった作品を展示したりと仲間と作り上げることができた。また、実際にパネルを見てくださる方がいることも励みとなった。種々の活動を通して重要だと感じたものは人とのつながりの大切さや人の温もりのありがたさである。どんな活動であれ、実際にお越しくくださる方々の笑顔が一番心に響いた。それは「とみ咲ク」の目的でもあるし、私たちが活動が続けるうえでの糧であった。

最後に、私はプロジェクト実習を通して、多くの学びや気づきを得ることが出来た。元来自分に自信がなく消極的に生きてきたが、この活動を通して積極性を磨くことが出来たと思う。自分の強みであるデザイン系や音楽が好きなことなどをうまく活かし、チームに少しは貢献できたのではないだろうか。また、実際にチラシデザインなどを行う中で自分がやりたいこと、好きなことを再確認することが出来た。また、臨機応変に対応し、複数の条件を鑑みた上で行動を起こす力や人に頼るという選択肢を身に着けることが出来た。「とみ咲ク」のメンバーとして、約1年間活動してきて、多くの学びを得るとともに、自分自身成長することが出来たのではないかと思う。今後の人生を歩んでいく上で貴重な経験ができた。そして、こうして活動してこられたのは、富岡町役場や図書館の方々を始め、「とみ咲ク」に関わってくださった多くの人々の支えがあったからこそである。また、近くで一緒にやって来たメンバーがいたからこそ私は最後まで行うことが出来たと思う。関わってくださった全ての方に改めて感謝をしたい。

プロジェクト実習だから気づけたこと

—初心に帰らせてくれた言葉—

茨城大学 3 年 戸谷 実花子

私は現在 3 年次であるが、プロジェクト実習を受講するのは今年が初めてであった。以前からこの授業の存在は友人たちを通して知っていたが、詳しい活動については知らず、ただ漠然と、やることが多くて大変そうだと敬遠していた節もある。では、なぜ私がこの授業を受講したのか。それは、友人たちの誘いがあったからである。はじめのうちは及び腰であったが、その熱意に押され、まずは授業自体を知ることになった。そこで初めてプロジェクト実習の内容を知ることになったのだが、受講者が主体となって活動を計画し、フィールドとする地域や企業と社会人同様に渡り合う姿には非常に感銘を受けた。その時に、この授業であれば自らの現状を見つめなおし、自分に足りない能力を身につけることのできる機会になるのではないかと思えた。受講のきっかけは誘われたからという消極的な理由であったが、やると決めた以上、新しい学びや能力を獲得しないともったいない。そう思わせてくれるほどに、このプロジェクト実習は活動の選択肢が無限に存在し、自らのステップアップが期待できるチャンスなのであった。

私が所属したとみ咲クチームは今年から発足したチームである。福島県双葉郡富岡町を活動のフィールドとし、富岡町図書館を中心とした文化交流施設を地域の皆さんの交流の場として再活性化することを目指した。なぜ「再活性化」なのかというと、この富岡町という地域は 2011 年の東日本大震災に伴う原発事故の影響で 2017 年まで避難指示区域であった。(なお、現在も一部は帰還困難区域である。) そのため、町に戻っている住民はまだ少なく、以前の様な賑わいはまだ取り戻せていない。そのような状況の中で、当初の前向きな気持ちとは裏腹に、果たして自分が復興の一端を担えるのかという不安も生まれた。

そのような中、プロジェクトは始まった。ただ、活動は比較的スムーズに進んでいったように思う。それは、プロジェクト実習経験者であったメンバーがいたり、尽力してくれたその他のメンバーが居たりしたのはもちろんのこと、協議体として共に活動してくださった富岡町役場の皆様の尽力のおかげであろう。彼らをはじめとする、関わって下さった全員にはこの場を借りて感謝申し上げたい。

そんな活動を通して、自分の印象に強く残っていることを述べていこうと思う。それは、活動も中盤に差し掛かり、いよいよメイン行事である文芸祭を行うという時であった。これからの活動で、また、それだけにとどまらず、いずれ社会人として過ごしていく中でも忘れてはならないと思える言葉と出会ったのである。それは、あるメンバーが言った「自己満足で終わらないように」という一節である。この言葉を聞いた時に、私は初心に帰ることができた。

その時、とみ咲クとしての活動には地域の方々にも参加していただけるようになり、富岡町町内での知名度も以前よりは高まっていた時期であった。協力をしてもらえると喜びや達成感の中に、良くない意味で安心感や慣れが出てしまっていたのかもしれない。それに加えて、五人というチーム結成の最小人数での活動はやはり大変なものもあった。その忙しさにかまけて、文芸祭、ひいてはとみ咲クとしての活動を通じて何を行うことが目的なのか、自分の中で見失っていたことに気付かされた。本来なら手段であるべき文芸祭の開催が、私の中で目的になるようとしていたのである。

そのような危機的状況から脱却できたのは、前述の言葉があったからである。ただ、その言葉は私個人に向けられたものではなく、そのメンバー自身の決意の表れでもあった。もしかしたら危機感を抱いていたのは自分だけではなかったのかもしれない。そう気づくと、あとは行動に移すのみであった。当初の目的をもう一度振り返り、個人として、チームとして何ができるのか見つめなおすことができた。この時ようやく、当初に思い描いていた自分を見つめなおす機会が持てたともいえるだろう。

当初の受講の目的は自分を見つめなおし、新たな能力を身につけたいという自分中心の思いからであった。しかし、実際にプロジェクトに携わってみると、何か活動を行う上で、対象となる人々が居てはじめてその活動は意味を持つてくるということに気付いた。「自己満足で終わらないように」この発見はプロジェクト実習を通してしか出来なかっただろう。

長いようで短かった 1 年間の活動を終え、この活動は誰かの役に立つことができたのであろうか。それを評価するのは私ではないが、活動に参加してくださった皆さんの応援や掛けてくれた言葉を思い出すと、これは決して自分の為だけの活動ではなかった、そう言い切れる自信があるのである。

7：おわりに

羽田野 里菜

私たちは、「謎解きスタンプラリー」「文芸祭」でアンケートを実施し、両イベントの評価を行った。その上で、私たちの反省点と今後の課題を具体的に示す。「謎解きスタンプラリー」では、満足度については達成、地域貢献については未達成である。「謎解きスタンプラリー」の満足度に関しては5段階評価で7割以上の良かったという回答に加え、さらに自由記述で「学びの森の機能を知れて良かった」などという回答をいただいた。「謎解きスタンプラリー」の目的であった、学びの森の機能を知ってもらうとことをまさに達成できたと実感できた。しかし、地域貢献については達成できなかった。「子どもが少なかった」「交流が少なかった」などの回答を頂いた。大きな原因として、広報のやり方があげられると考えている。人口が少なく、その中でいかに人が来てくれるかを考えて会議を重ねてきた。そのため広報の対象を富岡町の住民の皆様だけでなく、その周辺地域に住んでいる皆様にも広げた。しかし、8月は私たちが本格的に活動を始めたばかりで、知名度はまったくなかった。茨城県から来た大学生が何かをやっている。紙を配っただけ、インターネットで宣伝しただけでは私たちの考えていることやこのイベントにかける思いは伝わらないのだ。顔を合わせ広報することの重要性を学んだ。

「文芸祭」でも、「謎解きスタンプラリー」と同じように検証を行った。文芸祭では、「謎解きスタンプラリー」での反省を活かし、富岡町にてポスターとチラシを直接持って行き宣伝するという広報活動を行った。そのため「文芸祭」は、満足度と地域貢献ともに達成できた。「元気をもらった」「復興の力になると思う」などの意見をいただいた。自分たちの活動が、富岡町の皆様の力になっていることを実感できた。参加者同士の交流もあり、「謎解きスタンプラリー」の反省をここで活かして嬉しかった。しかし、達成できた喜びも感じたが、「文芸祭」では今後の課題を考えさせられた。アンケートの回答にて「続けることが大切」という意見をいただいた。自分たちのチームの目的にも関することだ。改めて自分たちの活動をどのように継続していくのかを考えなければならないと思った。私たちは、茨城県でもっと富岡町の現状を知ってもらうこと、興味を持ってもらえるようにとみ咲クの活動を多くの人に伝え、どのような形でも継続可能な状態をつくることが大切であると考えている。

5人という少ない人数の中で、それぞれが力を振り絞って活動してきた。富岡町を最初に訪れてからこの約1年間は、私たちにとってかけがえのない時間になったことは確かである。また、富岡町の1年間の変化を間近で感じることができた。これも大きな経験だ。町に活気が溢れる様子を近くで見ていることが嬉しかった。また、イベントに何度も参加してくれる人がいることがとても嬉しかった。私たちのイベントに何度も参加してくれる方もいた。この町のためにやってきたことが、間違っていなかったと感じることができた瞬間だった。この1年間で、富岡町は私たちにとって特別な場所となった。私たちの活動を通して、1人でも多くの方が私たちの大好きな富岡町に足を運ぶきっかけとなればと強く願う。

最後に、この1年間私たちと共に活動を進めてくださった三瓶秀文様・門馬健様・東山恵美様、イベントや企画に協力していただいた富岡町役場の皆様・図書館員の皆様、とみ咲クチームにご協力いただいたすべての皆様に御礼申し上げます。

Ⅲ：年度末活動報告会

- 1：趣旨と経緯
- 2：2018 年度活動報告会のテーマ設定
- 3：2018 年度活動報告会の構成
- 4：ポスターセッション
- 5：活動報告会

Ⅲ：年度末活動報告会

鈴木 敦

1:趣旨と経緯

プロジェクト＜実習＞では、2012年度の初開講以来、年度末に本学水戸キャンパスにおいて学外の方にもご参加戴く形で活動報告会を開催している。意図する所は、以下の4点である。

- ①履修生のリフレクションとプレゼンテーション実習
- ②教員による授業運営と授業改善の報告
- ③お世話になった方々への御礼
- ④学内と学外への情報発信（広報）

例年、会の前半は「履修学生がどんな活動を行い、そこから何を学んだか」の発表と質疑応答、後半は年ごとにテーマを設定してトークセッションや交流会等を行い、年度ごとの特色を出すことに努めてきた。2018年度からは、学年進行に従って随時プロジェクト＜演習＞への移行が進むが、活動報告会の趣旨と大枠は維持してゆく。

2:2018年度活動報告会のテーマ設定

2018年度は、活動報告会全体のテーマを「学外への発信」とした。

プロジェクト演習独自のホームページ（以下「HP」と略記）の立ち上げは、2012年度の初開講以来の懸案であったが、授業の運営だけで精一杯という状況が長らく続いてきた。今回のカリキュラム改変を機に漸くHPが立ち上がり、併せてフェイスブック（以下「FB」と略記）も運用を始めることができた。これは、授業の中身がある程度安定して漸く外への発信を考えられる状態に至ったということの表れであり、ここまでの経緯を振り返って感慨深いものがある。

このテーマに沿って、式次第7として「ミニ・トークセッション」を設定した。35分間という限られた時間であったこともあり、登壇者3名の「スピーチ」で時間切れとなってしまった点は残念である。しかし、当初想定していた「プロジェクト演習の情報発信手段として、今回立ち上げたHP、FBをどう活用しようか」という限定的な内容を超えて、「大学として広報をどう考えるか」といった視野での発言、提言がなされている。本章5-(6)に発言内容を全文収載しているので、お目通しを頂ければ幸いである。

3:2018年度活動報告会の構成

2018年度の活動報告会は、前年に引き続き「ポスターセッション」と「報告会本体」の二部構成とした。

特筆すべきは、昨年度の新機軸であった渡辺しのぶ先生による「総合プレゼン講座」を、今年度も継続開講できたことである。同講座は「夏季集中講義」「報告会一週間前のリハーサル」「報告会での講評」の3部分からなる。単なるPPTソフトの操作法に留まらず、考えのまとめ方から話し方、プレゼン時の身のこなしまで、文字通り「プレゼン全般に関する総合的な学びの場」である。総合プレゼン講座の詳細は、神田大吾・鈴木敦『2017年度根力育成プログラム プロジェクト実習活動報告書』茨城大学人文社会科学部根力育成プログラム小委員会（プロジェクト演習HP資料庫、ファイル番号[305]）の、1-2-(2)-②「総合プレゼン講座」の項を参照されたい。

これから実社会に巣立ってゆく学生たちにとって、一歩上のプレゼン力を身につけられる本講座の有用性、重要性は言を俟たない。貴重な非常勤講師時間枠をご提供下さった人文社会科学部執行部ならびに昨年度に引き続いてのご出講をご快諾下さった渡辺先生に、心より感謝申し上げます。

4:ポスターセッション

活動報告会の開会に先立ち、恒例のポスターセッションを行った（図1～6）。例年通り、各チームがA1判2枚組でポスターパネルを作成し、人文学部講義棟廊下に張り出すと共に長机に成果物を並べ、参観者に自チームの活動を紹介するという形式である。今年度は日程が錯綜していたこともあり、協力者の大学院生ではなく担当教員が直接指導しての作成となった。

プロジェクト実習／演習履修 6 チームに加えて、今年度も水戸農業高等学校食品化学科食品科学部チームにも出展して戴いた。高校の授業時間との兼ね合いで、ポスターパネルの製作だけは本学側で行ったが、ポスター原稿の製作から成果物の展示、会場での説明まで、大学生チームに互して立派にこなしてくれた。各チームが作成したポスターは、プロジェクト演習 HP 資料庫にファイル[503]として収載している。

(<http://pbl.hum.ibaraki.ac.jp/doc/503poster2018.pdf>)

また茨城県立水戸農業高等学校生徒が作成したポスターは、本章 5-(4)に図 19 としても収載している。



図 1：教員の指導の下、ポスターパネル作成



図 2：本番前日、ポスターを設置



図 3：受付開始、本番スタート！



図 4：ポスターと現物資料でご説明



図 5：茨城県立水戸農業高等学校のコーナーで
新堀俊博先生と高校生チーム



図 6：XCC チームのコーナーで
茨城キリスト教大学生チーム

5：活動報告会

5：活動報告会

活動報告会は、例年通り人文社会科学部 10 番教室で開催した。

活動報告会を現在のような形で開催するようになった 2013 年度以来、チラシは同一デザインを踏襲して来たが、新カリキュラムへの移行を機に、デザイン会社に外注して一新することとした。
(図 7)。



The poster for the 2018 Activity Report Meeting is divided into two main sections. The left section, on a yellow background, features a large circular logo with the text '2018 活動報告会' (2018 Activity Report Meeting) and 'ACTIVITY REPORT MEETING'. Above the logo, it says 'IBARAKI UNIVERSITY 茨城大学人文社会科学部PBL授業プロジェクト演習' (Ibaraki University Faculty of Humanities and Social Sciences PBL Class Project-based Learning Practice). The logo is surrounded by names of participating teams: 'さしみあいチーム', 'XCCチーム', '水戸交通屋さんチーム', 'こみフェスチーム', 'sucSeedチーム', and 'とみ咲クチーム'. Below the logo, it states '2018年度のテーマは 学外への発信' (The theme for the 2018 fiscal year is 'Dissemination outside the university'). A small text block explains the PBL program's goal of social contribution. Below this are four small photos showing students in various activities. At the bottom left, it provides the website 'http://pbl.hum.ibaraki.ac.jp/' and a QR code. The bottom right corner contains event details: Date (December 15, 2018), Time (13:00-16:15), and Venue (Room 10, Faculty of Humanities and Social Sciences). The right section, on a dark blue background, lists the schedule from 12:20 to 16:15, including a poster session, opening remarks, a presentation by the project-based learning teams, a break, and a mini-workshop. It also lists the names of the staff members involved.

図 7：活動報告会チラシ

同時に、広報の主力を「紙媒体のチラシの配布」から、「版下データをネット上にアップ」する形へと変更した。チラシ版下が確定すると速やかに、本学広報室に依頼して大学の HP に掲載して頂くと共に、プロジェクト演習の FB にも掲載した。

また、会場設営と運営・撤収についても例年通り人文学部歴史・文化遺産コースの院生・学生にアルバイトで協力して戴いた。

人文学部執行部ならびに事務方からも、例年通りの手厚いご支援を戴けた。

以上、沢山の方々のご支援を戴き、報告会はちょうど 100 名の参加者を得ての開会となった (図 8)。以下、其次第 (図 9) に沿って列記する。



図 8：会場風景

2018 年度 プロジェクト演習 活動報告会

- | | |
|---|-------------|
| 0 : ポスターセッション（人文社会科学部講義棟） | 12:20－12:50 |
| | |
| 1 : 開会挨拶
田中裕（人文社会科学部副学部長・評議員） | 13:00－13:10 |
| | |
| 2 : 趣旨説明
神田大吾（プロジェクト演習担当教員）
司会：永田典子（茨城大学 3 年）・高土夏花（県立水戸農業高等学校 2 年） | 13:10－13:25 |
| | |
| 3 : プロジェクト実習活動報告第一部
(1)さとみ・あいチーム
(2)XCC チーム
(3)水戸交通屋さんチーム
(4)こみフェスチーム
司会：鈴木葵（茨城大学 2 年）・廣木綾乃（茨城大学 2 年） | 13:25－14:15 |
| | |
| 4 : 休憩 | 14:15－14:25 |
| | |
| 5 : プロジェクト実習活動報告第二部
(5)sucSeed チーム
(6)とみ咲クチーム
(7)県立水戸農業高等学校食品化学科 食品科学部
司会：佐藤怜璃（茨城大学 2 年）・庄司果織・（茨城大学 2 年） | 14:25－15:10 |
| | |
| 6 : プレゼン講評
渡辺しのぶ（ラシャンス 代表） | 15:10－15:25 |
| | |
| 7 : ミニ・トークセッション「学外への発信手段としての HP、FB」
山崎一希（元茨城放送プロデューサー・PR 代理店勤務 本学広報室専門職）
岩佐淳一（地域メディア論 プロジェクト演習担当教員）
鈴木 敦（プロジェクト演習設計者 プロジェクト演習担当教員） | 15:25－16:00 |
| | |
| 8 : 総括と閉会挨拶
内田聡（人文社会科学部学部長）
司会：塩手菜々美（茨城大学 3 年）・袴塚梨帆（茨城キリスト教大学 3 年） | 16:00－16:15 |

図 9 : 活動報告会式次第

(1)式次第 1： 開会挨拶



田中 裕（人文学部副学部長・評議員）

皆様、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました、人文社会科学部副学部長の田中でございます。当学部では、教務委員長とプログラムの統括役を仰せついております関係で、私より開会のご挨拶を申し上げます。

昨年もこの席でご挨拶をさせていただきましたが、今年も無事、活動報告会を開催できまことを大変喜んでおります。寒い中、報告会にお越しいただきました皆様、当科目に日頃ご協力を賜っております関係者の皆様、そして関係の教員と、本日運営に協力をしてくれてる学生スタッフに、まずは厚く御礼を申し上げます。

図 10：田中副学部長挨拶

さて、「プロジェクト演習」ですが、今から遡りますこと 8 年前の平成 22 年度に、文部科学省の大学生の就業力育成支援事業に採択されたことを受けて、全学プログラム「根力育成プログラム」が置かれた際に、その中核的科目として誕生した「プロジェクト実習」を起源としております。

当初は、文科省のいう「就業力」は、「就職力」とは異なりまして、就職の後に社会人として活躍していくために必要な知識や技能をはじめ、課題解決能力、職業観、それから人生観まで、より広く深い力をつけるというものでございます。当時の「根力育成プログラム」では、課題解決能力に加えて、「社会生活力」とか「行動力」、「思考力」、「チームワーキング能力」などの要素を育むことを掲げておりました。その中で、「課題解決能力」、「チームワーキング能力」等をトレーニングにより身に付けようという目的で置かれたのが、「プロジェクト実習」でございました。

その後、昨年平成 29 年度より、新しく全学的にディプロマポリシー（卒業時に身に付けているべき 5 つの能力、①（世界の俯瞰的理解）②（専門分野の学力）③（課題解決能力・コミュニケーション力）④（社会人としての姿勢）⑤（地域活性化志向））を制定し、これに基づく教育を行うべくカリキュラムポリシーを制定するとともに、全学的な改組を行いました。とりわけ、③（課題解決能力・コミュニケーション力）④（社会人としての姿勢）⑤（地域活性化志向）を醸成する教育が全学的課題となり、その結果、全学では、従来の教養教育を大幅に見直す必要から新たに「全学教育機構」が発足したところでございます。

当学部も、当時文科省から出された通知に示されているように、人文系国立大学への強い逆風の中、これを跳ね返すべく熾烈な議論を重ねまして、装いを新たに、「人文学部」から、「人文社会科学部」として生まれ変わり、新たな教育のかたちに取り組むこととなりました。

「人文社会科学部」の発足にあたりましては、文系の学習を通じて、地域の持続的発展に積極的に関わり、活躍できる人材を幅広く養成することをコンセプトといたしました。具体的には、とかく「たこつぼ的」だとの批判を浴びがちな文系教育について、一つの専攻だけの学びにとどまらない、複眼的な視野や、プラス α の実践力を身に付けるため、主専攻としての「メジャー」のほかに、副専攻として「サブメジャー」を組み合わせ、その 2 つが卒業要件となるといいう、日本では他に例を見ない「メジャー・サブメジャー制」を導入しております。

この画期的なカリキュラムの肝は、「サブメジャー」の必修化です。学生は 7 つの「メジャー」が用意するサブメジャー・プログラムの他、実践力養成を主眼とする 4 つの「サブメジャー専用プログラム」から 1 つを選択致します。

その中で、ディプロマポリシーの中の③（課題解決能力・コミュニケーション力）④（社会人としての姿勢）⑤（地域活性化志向）の 3 つを醸成するサブメジャー専用プログラムとして、当学部が力を入れておりますのが、「人文社会科学部地域志向教育プログラム」です。

このプログラムは、全学の「根力育成プログラム」の「プロジェクト実習」で積み重ねてきた豊富な実績や経験を引き継ぎながら、同じく全学プログラムの「COC 地域志向教育プログラム」の理念に沿って、文系教育用に再設計したもので、DP 達成に向け、学部としても最も期待を寄せるプログラムの一つです。

今回活動報告を行う「プロジェクト演習」はこのプログラムの中で、2 年次に選択する科目となっており、今年度初めて、開講されました。3 年次のプログラム必修科目「地域 PBL 演習」につなげて、学生自らが自発的に学んで行く力を養う、当プログラムの目玉の科目となっております。学生自身が何を考え、どう行動したのか、本日の活動報告が大変楽しみです。

全学規模から学部規模という身の丈にあった運営になりますけれども、当科目が卒業要件として選択できるようになったのは、より根本的に発展的に、位置づけられたものと考えております。これまで以上にご支援を賜りますようお願い申し上げます、開会のご挨拶とさせていただきます。

(2)式次第 2：趣旨説明



図 11：趣旨説明

皆様、こんにちは。これから課題の趣旨説明を申し上げます（図 12）が、その前に皆様に一点、お伺いします。プロジェクト演習のフェイスブックをご覧になられた方、フェイスブックを昨日までに見たことがあるという方、ちょっと手を挙げていただけますか。はい、どうもありがとうございます。

私の趣旨説明のお話の流れですが、まず、プロジェクト演習という授業がどのようなものなのかということを簡単にお話しします。その後、先ほど田中からもご紹介しましたが、これがどういう科目の構成になっているのかという点を、今度はホームページ（以下「HP」と略記）を通じて、またフェイスブック（以下「FB」と略記）もご覧に入れながらご説明します。続いて、どういう経緯で今年の報告会が「学外への発信」というテーマになったかということをお話しし、最後に、何を、誰に、何のために情報を発信するかについて教員が今、どのように考えているかをお話ししたいと思います。

最初に、プロジェクト演習の特徴ですが、これは前身のプロジェクト実習の基本を継承しておりまして、2 年生から取れる科目です。3 年生や 4 年生でももちろん取れるのですが、2 年次から取れる科目です。

そして、課題、授業ではプロジェクト課題と言っていますが、学生が自由に選択したプロジェクト課題に基づいて学ぶという形の PBL 授業、Project Based Learning を特徴とする授業でございます。

そして、授業は学生が主人公、教員はその横を走るという形で、学生が主体的に学びますので、主体的・対話的で深い学び、アクティブ・ラーニングに基づいた授業です。

そして、冒頭、司会者からも紹介がありましたが、人文社会科学部だけでなく、教育学部の学生も履修していますし、また茨城キリスト教大学や常磐大学の学生さんも一緒に、あるいは並行してプロジェクト活動に取り組んでいる科目です。

それから、高校生です。高校の場合は授業そのものを取ることはできませんが、水戸農業高等学校の生徒さんの活動と連携してプロジェクトを進めている授業でございます。

この PBL 授業で養成される能力は一般的にどういう能力かと申しますと、まずは未知の世界に踏み出すチャレンジ精神、それから、自ら考えて行動する主体性です。また、チームとして行動していきますから、自らの役割を果たす誠実性です。そして、チームの一員としての協調性を持ち、誰とでも意思の疎通ができること。最初はチームの中で、この授業を取るまでは全く知らなかった学生同士です。また、学外に出て社会人の方々とコミュニケーションをしていく、そういうことも必要、それを通じて養われる力でございます。このような 5 種類の力が PBL 授業では養成されると言われております。

神田 大吾（プロジェクト実習／演習担当教員）

図 12：趣旨説明

2018年度プロジェクト演習 活動報告会

趣旨説明 ～学外への発信～

プロジェクト演習担当教員 神田大吾
daigo.kanda.8139@vc.ibaraki.ac.jp

1

お話の流れ

I：プロジェクト演習の特徴
II：テーマ「学外への発信」
III：「何を」、「誰に」、「何のために」・・・

2

プロジェクト演習の特徴

(1)2～4年次生向け専門科目
(2)自ら選択した課題にチームで取り組む
→Project Based Learning(PBL)
(3)学生が主人公で、教員は伴走者
→主体的・対話的で深い学び (Active Learning)
(4)3大学+1高校の連携

3

PBL授業で養成される能力

(1)未知の世界に踏み出す
チャレンジ精神

(2)自ら考えて行動する
主体性

(3)自らの役割を果たす
誠実性

(4)チームの一員としての
協調性

(5)誰とでも意思疎通できる
コミュニケーション能力

4

期待される五つの能力

日本経済団体連合会「2018年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」より

5

では、なぜそういう PBL 授業が大学生にとって重要かと申しますと、日本経済団体連合会が毎年発表している新卒採用に関するアンケート調査結果では、今年も含め、16 年連続でコミュニケーション能力が第 1 位でした。次に主体性、チャレンジ精神、そして協調性、主体性というわけです。ですから、このように社会ではまさにこの 5 つの能力が求められているところでございます。

このような方針に沿って行われているプロジェクト演習という授業が、では実際に、具体的にどういうものなのかということ、今度は、地域志向教育プログラムの HP を使ってご説明申し上げたいと思います。

こちらが人文社会科学部の HP です。そして、こういうふうな HP をスクロールしていきますと、一番下に地域志向教育プログラムというボタンがございます。これがプロジェクト演習の属しているプログラム、先ほど田中からも紹介がありましたが、卒業要件にも入るサブメジャープログラムです。

このボタンからページに進みますと、こういう形で、人文社会科学部地域志向教育プログラムが 5 科目で構成されていることが示されております。その下には、昨年の交通関連のプロジェクト実習の活動などがこのようにスライドショーで紹介されております。

さて、今度はプロジェクト演習のところをクリックしてみましょう。

はい、こういう形でプロジェクト演習のページの説明が載っております。右側のところに、それぞれ 1 年間、どういう形で授業が展開されているのか、こういう図解で、12 月から 1 月までの概略が表題として示されます。そしてこの表題にさらにカーソルを当てますと、詳しい説明が出て参ります。こういう形で、授業がどのように展開しているかを示しております。それから左側のほうは科目の構造で、プロジェクト課題とはどういうものなのか、一斉授業とは、チーム活動とは等々、カーソルを当てますと内容が詳しく分かるようになっております。

そして、この右端なのですが、資料庫という緑色のところがございます。本日の活動報告会では今年度に行った授業のご報告ですが、この資料庫を見ていただくと、こういう形で、これまでの過去のこの授業の実績、これまでどういうことを行ってきたかをここに載せております。

例えば、一番最初の「概要」をクリックしていただきますと、プロジェクト演習の前身のプロジェクト実習がどういう経緯で成り立ち、どのように展開してきたか、という研究ノートをお読みいただくことができます。鈴木と神田の両名が本学の紀要に投稿した研究ノートをこういう形で公開しております。

それから、資料庫のもう少し下を見ますと、実際に授業で使っている教材はどのようなものなのか。「個人の達成目標ルーブリック」のボタンをクリックしますと、こういう形のものが出て参ります。学期の最初で、どういう力を自分が養いたいのか。コミュニケーション能力なのか、それとも、協調性なのか、それぞれの学生が自分の伸ばしたい力を 3 つ選んで、目標を立てます。そして授業の中間の 10 月に、このオレンジ色のところで、どこまで行ったかを書き入れる。そして最後の総括として、黄緑色のところを書いて、自分の学びの記録を残す。こういう教材を使っています、と公開して発信している次第です。

その下にずっと過去の年度の報告書などもございますが、一番下、どのページでもそうなのですが、そこに FB というのがございまして、そこをクリックすると、別の形での FB、これは地域課題プログラムの FB になっております。例えば、先ほど廊下で見ていただきましたポスターをどんな形で学生たちが作ったのかという制作風景がこちらです。節目、節目での学生の活動をこのような形で FB を使って報告しております。

プロジェクト演習は、こういう形で、この授業で何が行われているかを HP と FB で学外に発信しているわけでございます。

さて、そのようにお話しをしますと、まるでずいぶん昔からこういうことをやっているように聞こえるかもしれませんが、実はこの体制が成立したのは今年の 6 月なのです。今年の 6 月からようやくこの形になりました。

というわけで、お話の続きに参ります。

この活動報告会、これまで 6 年間行って参りました。最初の 1、2 年の授業では、プロジェクト課題に取り組むことで精一杯でした。それが、3 年目ぐらいから、ただ課題に取り組むだけではなくて、その中でどういうふうに学生が学んでいくのか。と申しますのは、どうしても活動そのものを成功させることに、つい学生も、そして教員も目が行ってしまいまして、肝心のその活動から何を学ぶのかというところに 3 年目ぐらいからようやく重点を置くようになりました。これに応じて、活動報告会のテーマも変わってきた次第です。そして、昨年さらにワンランク上げまして、そういう取り組み、学びを人に伝えることまで視野に入れまして、「取り組む・学ぶ・伝える」という 3 段階のテーマ



にいたしました。総合プレゼン講座を開設した年です。

そして、今年は、先ほど申しましたように、ようやく6月からHPとFBが始まりました。6月からこれまでやってきましたその成果と課題をこの場でご報告したいと思ひまして、今年は活動報告会のテーマを「学外への発信」とした次第です。

というわけで、次のスライドをご覧ください。スライドの上の四角2つ、HPとFBは基本、教員の世界です。教員がHPを作りました。また、教員がFBの原稿を書いております。もちろん学生の活動ですからその素材は学生からもらいますが、それを文章にするのは教員です。それで、これらは教員の世界です。これに対して、今年は特に、各チームに、今日お手元にもお配りしましたが、ツイッター、そしてインスタグラムを各チームで作し、それで情報発信するようにと勧めました。

このような形で6月からやって参りまして、そして今、教員もこのように考えております。そもそも、どんな情報を発信したらいいのだろうか、発信するべきなのだろうか。つまり、一人の活動でも発信するのか、それとも、チーム活動なので、チームとしての活動に絞って情報発信するべきなのか。

また、誰に、という点で申しますと、教員は、最初は、この授業を取る前の、つまり2年生から取りますから、その前の年次の1年生に授業の紹介をと考えておりました。それから、さらに言えば、この大学に入る前の高校生、そして本日、ここにお見えになっていらっしゃる学外の協力者の方々にもご報告をしたい、と思っております。

さて、先ほど冒頭で、このFBをご覧になった方、手を挙げてくださいと申し上げましたら、3分の2の方は手を挙げてくださいました。3分の2も手を挙げてくださったと嬉しく思いますと同時に、活動報告会にわざわざご足労をいただいたほどこの授業に関心を持っている方で、しかし3分の1には届いていないのだなということも反省をする次第です。

そして、教員としては、何よりも、学生はこの情報発信を通じて何を学ぶのかということが一番の重要なことになっております。最初にも紹介した5種類の能力を育てるという点で、この情報発信はどうすれば、どのようにこれが寄与するのかということを考えております。

そのような形で問題意識を持ってこの活動報告会を企画しましたので、今後続く各チームの報告、そして、その次のミニ・トークセッションをお聞きいただければ誠に幸いと感じる次第です。

本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

ご清聴感謝いたします。ありがとうございました。

活動報告会のテーマ

- プロジェクト実習、3大学連携で始動!
- 受講生のコンピテンシー向上
- 学外からの支援の拡大
- 授業改善の取り組み
- 高大連携
- 取り組む・学ぶ・伝える(総合プレゼン講座開設)

プロジェクト演習の情報発信

プログラム Homepage プログラム Facebook

各チーム SNS

学びの場

何を? • 一人の活動?
• チームの活動(準備/実施/振り返り)?

誰に? • 1年生?
• 高校生?
• 学外の皆さん?

何のために? • 学生は何を学ぶのか?

ご清聴ありがとうございました

(3)式次第 3、5：プロジェクト実習／演習活動報告

2018年度プロジェクト実習／演習履修6チームが、カテゴリーA→Dの順で活動報告を行った。会場で放映したPPTを、以下に収載する（図13～18）。

なお、従来は放映するPPTをそのまま印刷してハンドアウトとしてきた。しかし、昨年度から「総合プレゼン講座」での学びを踏まえて、必要に応じて「放映用PPT」と「PPTを含むハンドアウト資料」とを別建てとするよう指示している。ハンドアウト資料については、プロジェクト演習HP資料庫「活動報告会資料冊子等」内「2018年度活動報告会」ファイルを参照されたい。

<http://pbl.hum.ibaraki.ac.jp/archive.html#intern>

活動報告会での持ち時間は1チーム当たり12分と非常に限られる。加えて「時系列に沿った活動内容報告」が主眼ではなく「活動を通じて何を学んだか」に軸足を置いた報告が求められている。このため下記PPTは必ずしも具体的な活動の全てを紹介するものではない。活動の全容については本書Ⅱ-2～7のチーム別活動報告を参照されたい。また、学生の報告に対する渡辺しのぶ先生のご講評については、本章5-(5)に収載している。併せてご参照戴くことで「具体的活動」「学生の学び」「活動と学びに関する第三者評価」の三者が揃うという構成である。

図13：さとみ・あいチーム

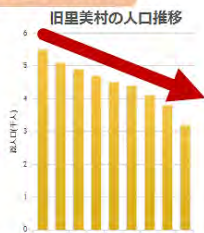
Figure 13 displays the presentation slides for the Sato and Ai team. The slides are arranged in a grid:

- Slide 1 (Top Left):** Title slide for the Project Practice Activity Report (プロジェクト演習 活動報告会) dated December 15, 2018. It features a cartoon character and the title "さとみ・あい 今年の歩み ~7年目の挑戦~" (Sato and Ai's Journey This Year ~7th Year Challenge~).
- Slide 2 (Top Right):** Table of Contents (目次) listing 9 items, including member introductions, the project area, goals, activities, and results. The page number 2 is indicated.
- Slide 3 (Middle Left):** A group photo of the team members, titled "1. メンバー紹介" (1. Member Introduction). The page number 3 is indicated.
- Slide 4 (Middle Right):** Detailed member introductions (1. メンバー紹介) listing 11 members (計11名) from various departments and years, including their names and affiliations. The page number 4 is indicated.
- Slide 5 (Bottom Left):** A landscape photo of a field, titled "2. 常陸太田市里美地区とは" (2. What is the Rimi District of Tsukuba City). The page number 5 is indicated.
- Slide 6 (Bottom Right):** A map of the Rimi District (2. 常陸太田市里美地区) showing its location within the city of Tsukuba. The page number 6 is indicated.

2. 常陸太田市 里美地区とは

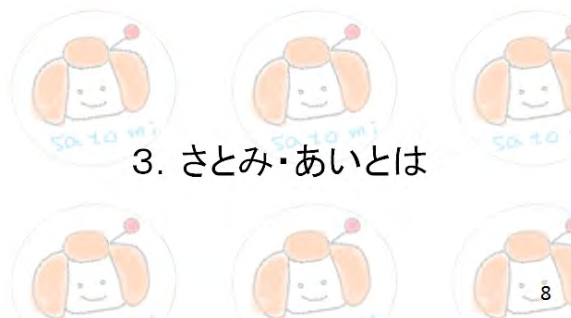
少子高齢化・過疎地域

高齢化率
34.0%
(2015年 常陸太田市)



7

3. さとみ・あいとは



8

3. さとみ・あいとは

里川カボチャ

コメとワラ
(おだかけ)



9

4. 今年度の活動目的



10

4. 今年度の活動目的

- ▶ 昨年度: 里美魅力発見バスツアー
→ 里美の魅力あふれる場所やものを紹介
- ▶ 里美の魅力は場所だけではなく“人”も

11

4. 今年度の活動目的

〈プロジェクトの目的〉

- ▶ イベントを通して、
学生と里美の方々に交流を楽しんでもらう
- ▶ 里美の特産物をよそ者である私たちが発信することで、
里美の域外だけでなく域内の方々にも、その魅力をより
知ってもらう

12

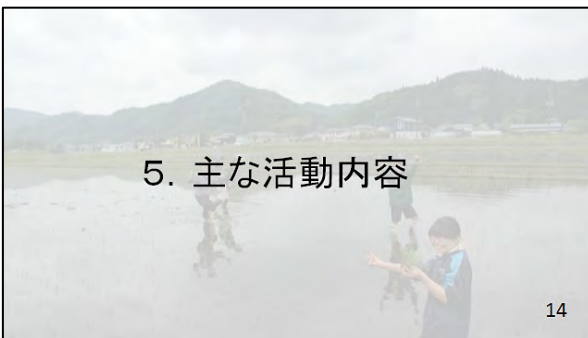
4. 今年度の活動目的

〈チームの目的〉

- ▶ 活動を通して主体性を身につける
- ▶ 少子高齢化という課題の解決の一助となるように考えることで思考力を鍛える
- ▶ 里美の魅力を発信することを通して
自分の意見をわかりやすく伝える力を身につける

13

5. 主な活動内容



14

5. 主な活動内容

(1) もぐもぐさとみ

日付: 10月27日

参加者: 計32名

一般参加学生 12名

里美地区の方々 11名

さとみ・あい 9名

15

(1) もぐもぐさとみ

〈活動内容〉

第1部: 有機農家のお手伝い
豆のさや剥き等の農作業



16

(1)もぐもぐさとみ

第2部

昼食:里美地区の食材を使用した料理

トークセッション:

テーマ

- ・里美での暮らし
- ・農業
- ・地域おこし



17

(1)もぐもぐさとみ

▶茨城県青少年育成協会

「若者活動応援事業」

→10万円獲得

主に消耗品費、バス借上代

18

5. 主な活動内容

(2)2018さとみ秋の味覚祭

日付:11月3日、11月4日

場所:里美ふれあい館
イベント広場



19

(2)さとみ 秋の味覚祭

〈活動内容〉

正月飾り、おだかけ米の販売

さとみ・あいの活動紹介



20

6. 活動の成果

21

6. 活動の成果(プロジェクトの目的)

〈「成功」の基準〉

(1)もぐもぐさとみ

▶一般参加者の目標人数

学生 15名以上 里美地区の方々 15名以上

▶アンケートの実施

4段階評価で3以上の回答者8割

(2)2018さとみ 秋の味覚祭

▶完売させる

22

6. 活動の成果(プロジェクトの目的)

(1)もぐもぐさとみ

人数:

▶学生12名

→達成ならず

▶里美地区の方々11名

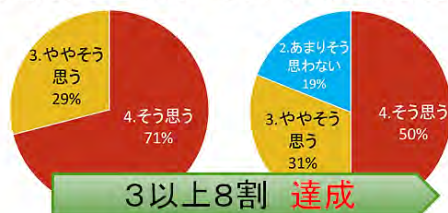
→達成ならず



23

6. 活動の成果(プロジェクトの目的)

里美にまた来たいと思ったか このイベントで交流できたと思ったか



24

6. 活動の成果(プロジェクトの目的)

(2)味覚祭

▶正月飾り 7本販売

→達成ならず

▶おだかけ米 3合 46袋

1升 31袋完売

→達成



25

6. 活動の成果(プロジェクトの目的)

〈プロジェクトの目的〉

▶イベントを通して

学生と里美の

交流を深め

ることを

目指す

こと

達成!

▶里美の特産品を

発信することで、

里美の域外

にも、その魅力をより

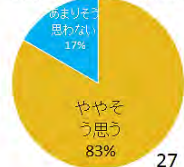
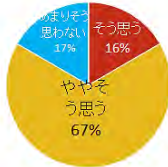
知ってもら

26

6. 活動の成果(チームの目的)

メンバーでアンケート実施

主体性が身についたか 思考力が鍛えられたか 自分の意見を分かりやすく伝える力が身についたか



27

6. 活動の成果(チームの目的)

〈チームの目的〉

- ▶ 活動を通して主体性を高める
- ▶ 少子高齢化を食い止めるように考える
- ▶ 里美の魅力発信活動を通して自分の意見をわかりやすく伝える力を身につける

達成!

28

7. 活動を通じた学び

29

7. 活動を通じた学び

- ▶ イベントを企画することの大変さと達成感
- ▶ チームワークの重要性
- ▶ 自分自身の弱みへの気づき

30

8. 今後の展望

31

8. 今後の展望

企画内容

- 里川カボチャの商品開発、PR
- 若者が里美地区へ足を運ぶ機会を継続して創出
- 域外での里美の魅力発信活動

32

8. 今後の展望

広報

- 一人一人の積極的な情報発信
- イベント開催日に対する広報開始時期の検討

33

9. お世話になった方々

さとみ・あいを
知ってくださっている
皆様

34

参考・引用文献

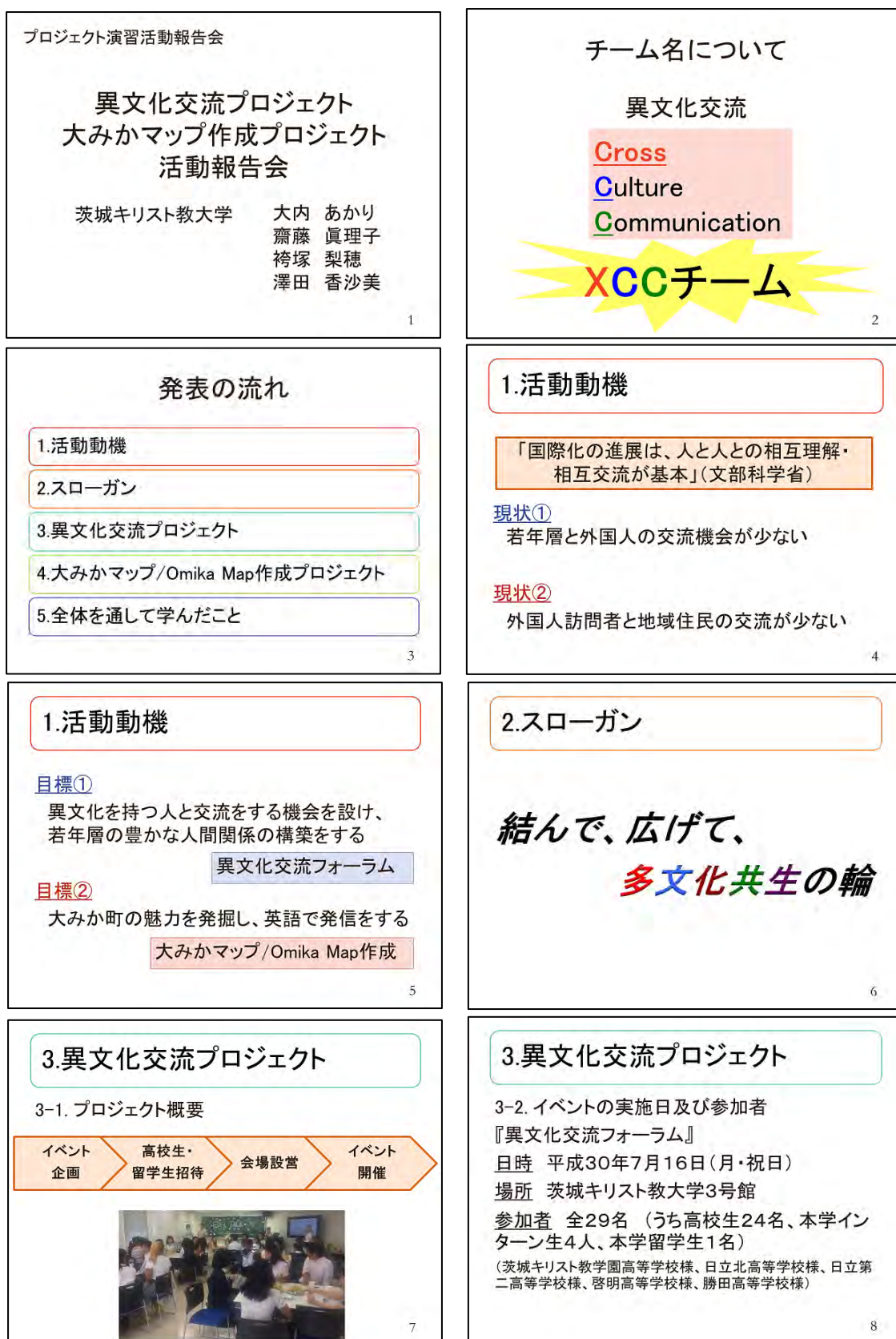
- ▶ 「茨城県地図 | 白地図ぬりぬり」
(2018/12/5閲覧)
<https://n.freemap.jp/tp/lbaraki>
- ▶ 「常陸太田市の人口推移及び人口増減率」
人口統計データベース(2018/11/19閲覧)
<http://demography.blog.fc2.com/blog-entry-4040.html>

35

ご清聴ありがとうございました

36

図 14 : XCC チーム



3.異文化交流プロジェクト

3-3. プログラム内容

アイスブレイク(ジェンガ)
ビンゴ
フリートーク



9

3.異文化交流プロジェクト

3-4. アンケート結果

・調査対象 異文化交流フォーラム参加者 29名

1) 今回参加していかがでしたか

- a 満足
- b 普通
- c まあまあ
- d 不満

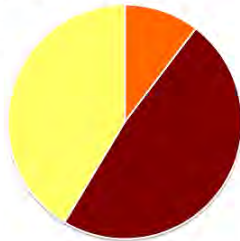


10

3.異文化交流プロジェクト

2) 一番興味深かった企画は何ですか

- a アイスブレイク
- b フリートーク
- c ゲーム



11

3.異文化交流プロジェクト

3) 自由記入欄の分析

外国人とコミュニケーションをとる恐怖心を払拭できた

英語をもっと学びたいという意識を向上させることができた

ゲーム、フリートークを通じて、積極的にコミュニケーションを交わすことができた

12

4.大みかマップ/Omika Map作成プロジェクト

4-1. プロジェクト概要

大みか町散策 → お店の掲載許可取得 → 地図作成



13

4.大みかマップ/Omika Map作成プロジェクト

4-2. 企画内容



14

4.大みかマップ/Omika Map作成プロジェクト

4-3. 引き継ぎと展望

- 1) より広域のマップ作成
- 2) マップをお店・大甕駅・日立市の国際交流協会などに配布
- 3) 地図を使用したイベントの開催



観光客の呼び込み、および、外国人と地域住民の交流の増加

15

5.全体を通して学んだこと

1) 計画を立てることの重要性

おおよその計画しか立てていなかった

→ イベント直前に、余裕のない状態になってしまった

メンバーの仕事量に偏りが出てしまった

改善策

活動計画表の作成

(具体的な活動の内容と活動責任者の決定)

『実施済み』₁₆

5.全体を通して学んだこと



17

5.全体を通して学んだこと

- 2) 適切な方法で事前確認をする重要性
留学生とのコンタクトのが不十分だった
→ 異文化交流フォーラムの留学生参加者が予定10人に対し実際は一人のみだった

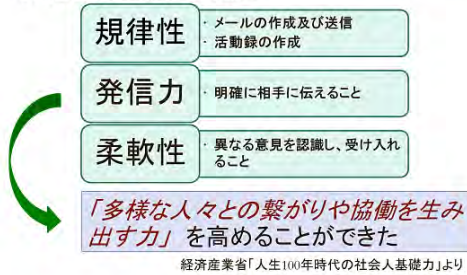
改善策

重要案件はFace to Faceで伝える

18

5.全体を通して学んだこと

3) 社会人基礎力の向上



19

御礼

大川通昭教頭先生をはじめ、茨城キリスト教学園高等学校の皆様
黒澤吹美子先生をはじめ、日立第二高等学校の皆様
長山祐司先生をはじめ、日立北高等学校の皆様
泉澤靖先生をはじめ、水戸啓明高等学校の皆様
柏村裕美子先生をはじめ、勝田高等学校の皆様
茨城キリスト教大学 入試広報部の皆様
茨城キリスト教大学 国際理解センターの皆様
茨城キリスト教大学 留学生の皆様

20

ご清聴ありがとうございました



21

図 15 : 水戸交通屋さんチーム

プロジェクト演習
活動報告会

～手段から目的へ～への道のり

荒牧瑞希 粕谷紗雪 佐藤怜璃 志賀有紗

水戸交通屋さん

1

目次

1.水戸交通屋さんとは

2.チームとしての目的

3.活動報告

4.今後の活動成果の検証

5.学び

6.お世話になっている方々

2

1.水戸交通屋
さんとは

2.チームとして
の目的

3.活動報告

4.今後の活動
成果の検証

5.学び

6.お世話になっ
ている方々

3

水戸交通屋さんとは

水戸市市長公室交通政策課
須藤文彦様から

課題 水戸市の公共交通利用促進

構想 運転士の方々と利用者の新たなコミュニケーション
から生まれる利用促進

茨大生がツナグ〜「手段」から「目的」へ〜

4

1.水戸交通屋
さんとは

2.チームとして
の目的

3.活動報告

4.今後の活動
成果の検証

5.学び

6.お世話になっ
ている方々

5

チームとしての目的

水戸市役所交通政策課でのインターンシップ

茨城交通の運転士の方々への取材と
似顔絵の採用

ターゲットの明確化・デザインの工夫

6

1.水戸交通屋
さんとは

2.チームとして
の目的

3.活動報告

4.今後の活動
成果の検証

5.学び

6.お世話になっ
ている方々

7

活動報告

1.助成金について

2.インターンシップ

3.リーフレット作成

8

活動報告

1.助成金について

2.インターンシップ

3.リーフレット作成

9

1. 助成金について

茨城県公共交通活性化会議事務局

地域公共交通利用促進活動助成事業

→8万円獲得

→リーフレット印刷代へ

10

活動報告

1.助成金について

2.インターンシップ

3.リーフレット作成

11

2. インターンシップ

水戸市役所交通政策課にて5日間

・仕事内容

－小学生に向けた講習会の補助

－水戸市都市交通戦略会議の議事録作成 など

・市役所の皆様とプロジェクトの構想立て

12

活動報告

1.助成金について

2.インターンシップ

3.リーフレット作成

13

3.リーフレット作成

◆発案

運転士の皆様を利用者である私たちが
身近に感じられたら良いのではないかと。

→運転士さんのおすすめスポットや趣味の紹介

◆ターゲット

水戸市の10代、20代の女性

◆デザイン

落ち着きのある、おしゃれな雰囲気

14

3.リーフレット作成 流れ

9月 運転士の方々への取材

10月 おすすめスポットへ掲載許可取り

11月上旬 デザイン・内容の確認・修正

11月中旬 文化祭でのプリテスト

15

3.リーフレット作成

9月

運転士の方々へ取材

運転士の方々…稲見孝一様、梶間武様、志々木悟様、
高橋淳様、山田拓海様
(計5人茨城交通様が選出)

取材内容 …趣味、休日の過ごし方、
水戸のおすすめスポット

16

3.リーフレット作成

10月

おすすめスポット5カ所へ掲載の許可取り

- カフェ「MILE STONE」
- ホルモンラーメン「玄海」
- 喫茶店「チャペル」
- 庭園「保和苑」
- 和菓子屋「伊勢屋」

全5カ所

17

3.リーフレット作成

11月上旬

リーフレットデザイン、内容の確認・修正
(茨城交通の皆様、水戸市役所交通政策課の皆様)

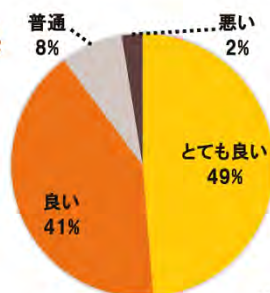
11月17日
11月18日

文化祭にてプリテスト
→来場者にアンケートを実施
→意見をもとにデザイン、内容を修正

18

プリテストの結果

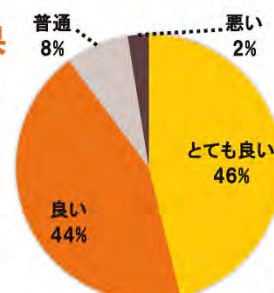
①デザインの評価



19

プリテストの結果

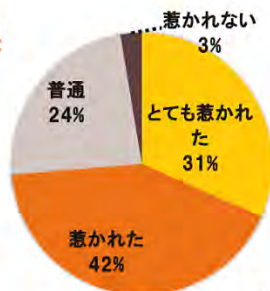
②内容の評価



20

プリテストの結果

③運転士の方々や茨城交通のバス、水戸のお店などに惹かれたか。



21

茨苑祭でいただいた意見

○良い点

- ・運転士さんの顔が見えるのは親しみが持てる
- ・イラストや色合いがオシャレ
- ・色合いがソフトで心地良い

×改善点

- ・リーフレットの用紙の大きさが小さい
- ・運転士さんの一言的なものがあつたらよいのでは
- ・運転士さんの苗字と名前の間にスペースが欲しい

etc...

22



成果の検証方法

●リーフレットを読んでいた方へ、アンケートの実施
→各項目で

“はい”の回答が7割を超えれば成功

25



私たち4人が学んだこと

**チームワーク
の大切さ**

27

私たち4人が学んだこと

- 自分の係以外の仕事もこなす
- 複数人で一つの課題に取り組むということ
- メンバー全員の意見を取り入れたリーフレットの完成

28



お世話になっている方々

- 茨城交通株式会社の皆様
- 水戸市役所交通政策課の皆様
- おすすめスポット掲載を許可していただいた皆様
- 茨城県公共交通活性化会議事務局の皆様

30

ご清聴ありがとうございました

31

図 16 : こみフェスチーム



目次

- ▶メンバー紹介
- ▶こみっとフェスティバルとは
- ▶活動内容・目的
- ▶目標
- ▶行った活動
- ▶今後の展望

11

行った活動

- ◆こみっとフェスティバル実行委員会への参加
- ◆宣伝のためのラジオ収録
- ◆市民活動への参加
- ◆フリーペーパーの作成
- ◆茨苑祭(学園祭)での展示

12

こみっとフェスティバル 実行委員会への参加

- ◆こみっとフェスティバル実行委員会へ参加
- ◆実行委員の方の意見を知ることができた
- ⇒学生という目線から意見を出すことも

13

市民活動への参加①

- ◆にここ食堂(参加日:8月18日)
- 水戸市初の子ども食堂!
- 食事を通して繋がる
- 「地域の居場所」

14

市民活動への参加②

- ◆あっとま(参加日:9月10日)
- 妊娠中や育児中のママを支援するボランティア団体を見学!
- ⇒ママたちの憩いの場となっている大きな存在

15

市民活動への参加③

- ◆放課後学級(参加日:10月19日)
- NPO法人水戸こどもの劇場様の活動の1つ
- ⇒小学校低学年の子供たちと楽しい時間を過ごした

16

フリーペーパーの作成

- ◆参加させていただいた活動をまとめたフリーペーパーを作成
- ◆茨苑祭で配布

17

宣伝のためラジオ収録

- ◆ラジオ収録(8月22日)を行い、FMばるるん「HOT!ほっと!スクウェア」にて放送
- ◆出演団体募集の宣伝
- ◆茨苑祭についての取材・宣伝

18

活動を通して学んだこと

19

ボランティアは魅力的★

- ◆ボランティア活動をされている方々の思いを知ることができた
- ◆ボランティアに興味がある方に対して分かりやすい情報発信を

20

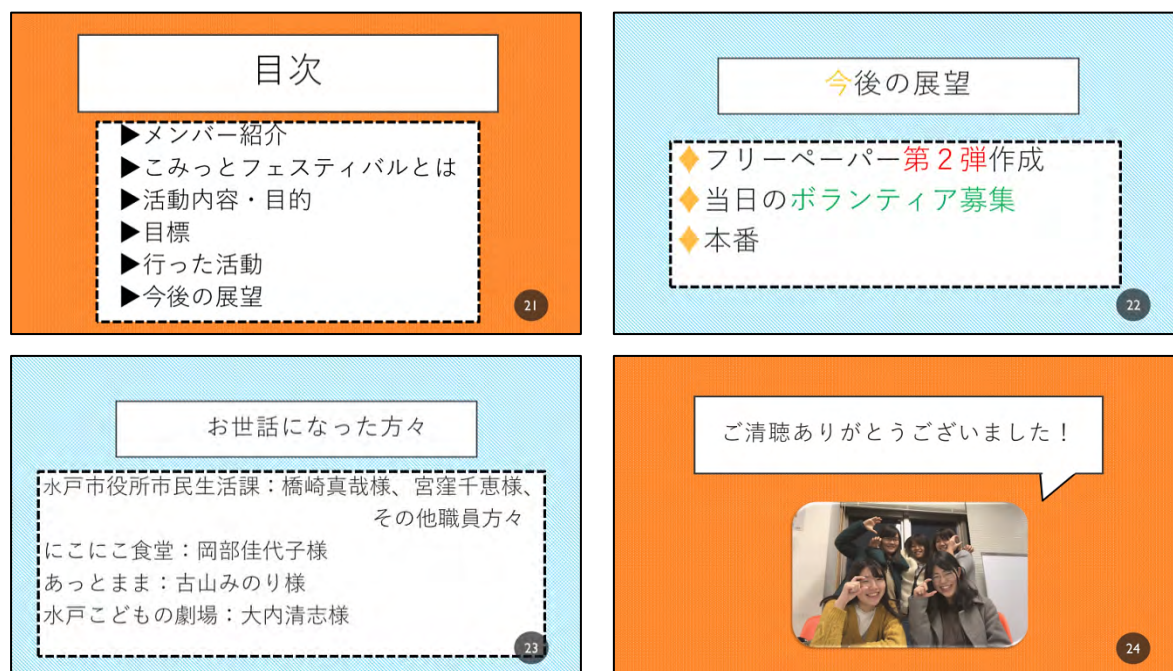
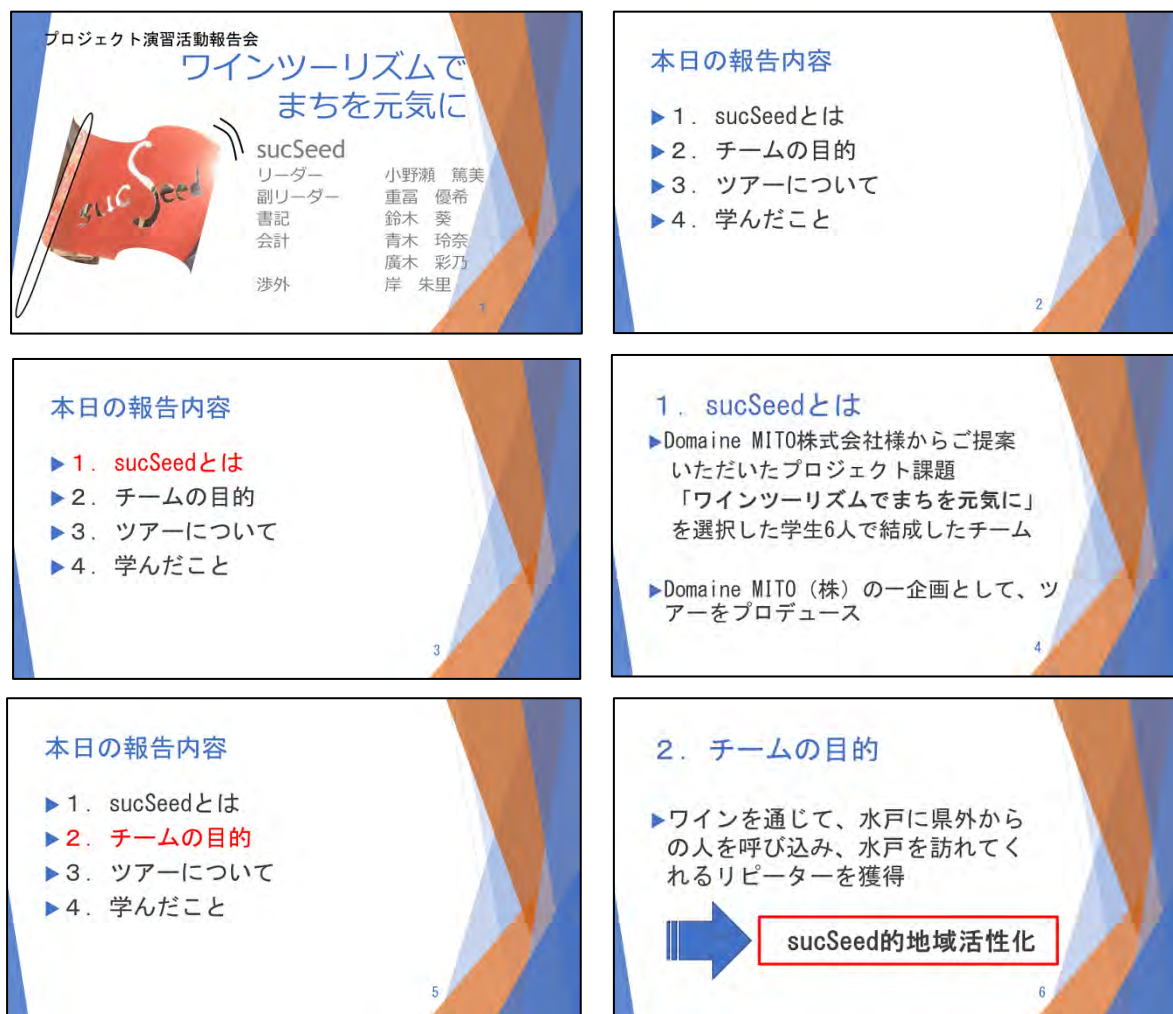


図 17 : sucSeed チーム

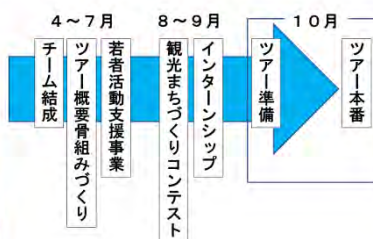


本日の報告内容

- ▶ 1. sucSeedとは
- ▶ 2. チームの目的
- ▶ 3. ツアーについて
- ▶ 4. 学んだこと

7

3. ツアーについて



8

3. ツアーについて

▶ インターンシップ

8/26	麻布十番まつり出店手伝い
9/7・8	きたかんマルシェ
9/15	よいとこプラン
9/19・27	ワイン座学
9/30	アペリティフ水戸

9

3. ツアーについて

9/15 よいとこプラン



10

3. ツアーについて

ツアー内容吟味 ツアー会社の決定

集客・パンフレット作り

本番準備

結成してからツアー本番まで

ツアー本番

11

人を呼び込むためには

既存の魅力
歴史・鮫鯨

+

新たな魅力
ワイン

ワイン
ツーリズム

12

3. ツアーについて

ワイン水戸

「和in水戸」

日時: 10/14 (土)

場所: 東京⇄水戸

費用: 6,480円

時間: 8:30～19:00

13

3. ツアーについて

ツアーチラシ

10/6・7の2日間に
東京スカイツリータウンで
このチラシ600枚を配った



14

3. ツアーについて



<https://www.skytree-navi.com/kitakanto-20181006/>

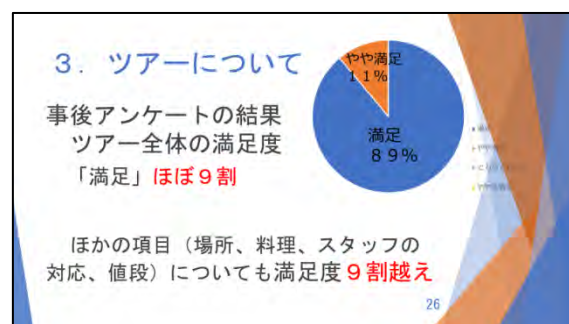
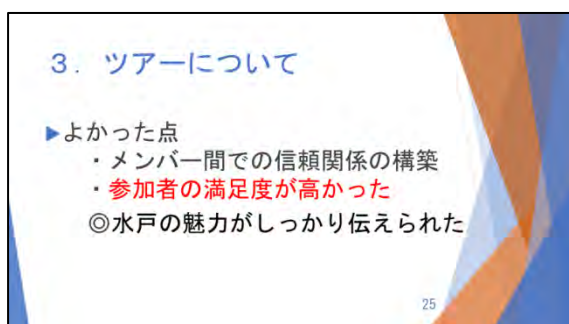
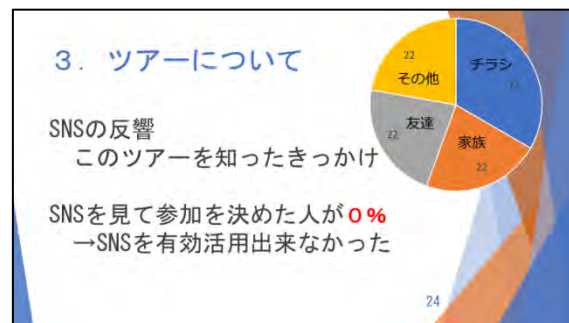
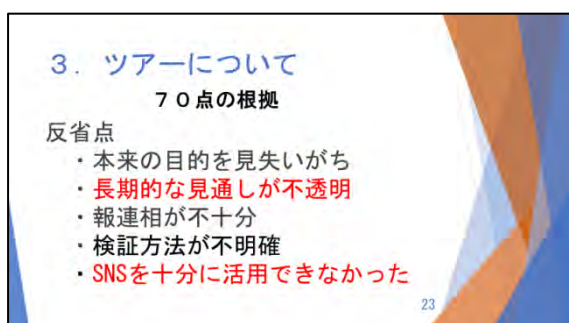
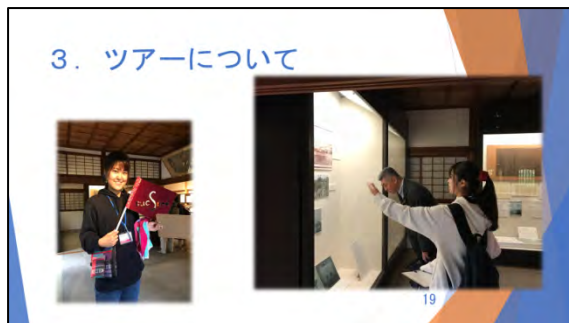
15

3. ツアーについて

パンフレット



16



本日の報告内容

- ▶ 1. sucSeedとは
- ▶ 2. チームの目的
- ▶ 3. ツアーについて
- ▶ 4. 学んだこと

27

4. 学んだこと

- ① 社会人疑似体験
メール、名刺
- ② 物事の進め方
計画性、状況把握、優先順位のつけ方
- ③ 情報共有

28

お世話になった方々

茨城県庁：大窪浩一郎様 大塚弘子様
掛札巧様
JA水戸：大澤政道様 中崎直美様
山翠：高野健治様
茨城放送：首藤美穂様 菊池真衣様
ツアーに参加して下さった皆様
sucSeedを応援してくださった皆様

29

ご清聴
ありがとうございました



30

図 18：とみ咲クチーム

プロジェクト演習 活動報告会 平成30年12月15日

とみ咲クチーム
1年を通しての活動報告

リーダー 羽田野里菜
副リーダー 永田典子
書記 大貫史織 野平知里
会計 戸谷実花子

1

目次

1. 福島県双葉郡富岡町の説明
2. チームの目的
3. 補助金について
4. これまでの活動報告
5. プロジェクト演習を通しての学び
6. 今後の展望
7. お世話になった方々へ

2

目次

1. 福島県双葉郡富岡町の説明
2. チームの目的
3. 補助金について
4. これまでの活動報告
5. プロジェクト演習を通しての学び
6. 今後の展望
7. お世話になった方々へ

3

1. 福島県双葉郡富岡町の説明

- 福島県の浜通りに位置
- 震災後(平成28年3月11日)、福島第一原発の事故の影響で警戒区域に
- 町民は47都道府県又は国外へ避難
- 平成29年4月1日、帰還困難区域を除く地域で避難指示解除



4

1. 福島県双葉郡富岡町の説明

- 富岡町の人口(平成30年12月1日現在、届出居住者数)
町内居住者 826人／世帯数 586
- 町外避難者数 12,240人／世帯数 6,036

参考:「県内外の避難・居住先別人数」福島県富岡町ホームページ

5

富岡町の皆様に頂いたお題

図書館を有する複合施設を使って「こころの復興」につなげる複合施設としてのハードを活かしたソフト事業の企画立案・運営

- (1) 施設の複合性を活かす図書館づくり
- (2) 大学生の「あったらいいな」図書館機能
- (3) 読む・借りるだけではない「集う」

図書館コーディネート

今回、注目！

6

実際に足を運んで・・・

被災地である福島県双葉郡富岡町の現状を知る

→被災地の現状を学び、
こころの復興の一助になりたい

7

目次

1. 福島県双葉郡富岡町の説明
2. チームの目的
3. 補助金について
4. これまでの活動報告
5. プロジェクト演習を通しての学び
6. 今後の展望
7. お世話になった方々へ

8

2. チームの目的

- 今後も継続する企画を考え、実行する
 - 地域の現状を学び、県外に住んでいる私たちが、受け入れられた上で地域に貢献する
- ⇒富岡町のコミュニティの再形成を目指す

9

目次

1. 福島県双葉郡富岡町の説明
2. チームの目的
3. 補助金について
4. これまでの活動報告
5. プロジェクト演習を通しての学び
6. 今後の展望
7. お世話になった方々へ

10

3. 補助金について

- 福島県の補助金申請
「福島県県内避難者・帰還者心の復興事業補助金」

総額115万円で採択
交通費・消耗品費・印刷製本費等に
使用



11

目次

1. 福島県双葉郡富岡町の説明
2. チームの目的
3. 補助金について
4. これまでの活動報告
5. プロジェクト演習を通しての学び
6. 今後の展望
7. お世話になった方々へ

12

4. これまでの活動報告

1. 5月より、富岡町へ訪問し
連携先との会議を行う
(計14回訪問)
2. インターンシップ
8月21/22日(2人)
9月19/20/21日(3人)

月	回数
5月	1回
6月	1回
7月	2回
8月	3回(宿泊1回)
9月	2回
10月	3回
11月	2回(宿泊1回)

13

報道実績

- 6月27日 河北新報新聞に掲載
8月26日 福島民友新聞に掲載
9月24日 福島中央テレビにて放映
9月28日 福島民報新聞に掲載
9月29日 茨城放送に出演
11月24日 福島民報新聞に掲載
9月3日 本学HPの「茨城大学コミットメント」のページに掲載

14

主な活動一覧

日程	主な活動
8月26日(日)	謎解きスタンプラリー
11月25日(日)	「学びの森」文芸祭
8月から計6回	落語体験教室
7月～11月にかけて	常設展示 住民の方の作品展示
11月17日・18日	茨苑祭(学園祭)

15

(1) 謎解きスタンプラリー

目的 イベントを通して富岡町の
の機能を学ぶ

対象 富岡

約60名の方
が参加

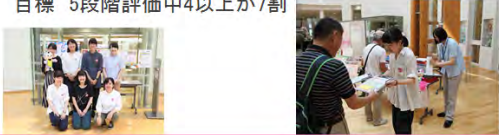
日時 8月
場所 文化交流センター



16

成果の検証

アンケートを実施
対象 謎解きスタンプラリーに参加して下さった方
目標 5段階評価中4以上が7割



17

自由記述

・施設全体が見て廻れて自然とその魅力が感じられてよかった
・改めて学びの森の施設が分かった
・もっと町民に参加してほしい

満足度

満足度	割合
とてもそう思う	47%
どちらかといえばそう思う	34%
どちらかといえばそう思わない	13%
そう思わない	3%
無回答	3%
どちらかといえばそう思わない	0%

達成！

18

自由記述

・富岡に人が集うきっかけになると思う
・地域の拠点になると思う
・若い人と話すのは久しぶりで。どんどん町に来てほしい

地域貢献

地域貢献	割合
とてもそう思う	50%
どちらかといえばそう思う	21%
どちらかといえばそう思わない	11%
そう思わない	5%
無回答	13%

未達成

19

(2) 文芸祭

目的 交流の場
対象 富岡町
日時: 11月10日(土) 13:00~17:00
場所: 文化ホール
* 同館内、児童館で絵画展示を同時開催

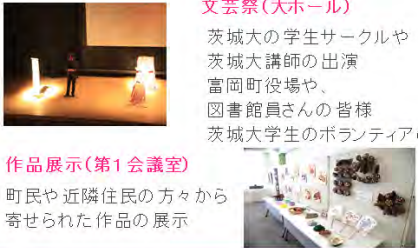
約60名の方が参加

20

文芸祭(大ホール)

茨城大の学生サークルや茨城大講師の出演
富岡町役場や、図書館員さんの皆様
茨城大学生のボランティアの協力

作品展示(第1会議室)
町民や近隣住民の方々から寄せられた作品の展示



21

成果の検証

対象 文芸祭にお越し下さった方
目標 5段階評価中4以上が7割



22

自由記述

・色々な人と関われた
・元気をもらいました
・楽しみが出来た
・もっと宣伝してほしい

満足度

満足度	割合
とてもそう思う	67%
どちらかといえばそう思う	25%
どちらかといえばそう思わない	8%
そう思わない	0%
無回答	0%

達成！

23

自由記述

・復興の力になると思います
・地域のコミュニティをつなぐような内容だったと思います
・続けることが大事だと思う

地域貢献

地域貢献	割合
とてもそう思う	64%
どちらかといえばそう思う	18%
どちらかといえばそう思わない	9%
そう思わない	0%
無回答	9%

達成！

24

目次

1. 福島県双葉郡富岡町の説明
2. チームの目的
3. 補助金について
4. これまでの活動報告
5. プロジェクト演習を通しての学び
6. 今後の展望
7. お世話になった方々へ

25

5. プロジェクト演習を通しての学び

- 計画をたてること、また計画を実行することの重要性
- 計画実行のための想像力
- チームワークの大切さ
- 広報活動の重要性

26

目次

1. 福島県双葉郡富岡町の説明
2. チームの目的
3. 補助金について
4. これまでの活動報告
5. プロジェクト演習を通しての学び
6. 今後の展望
7. お世話になった方々へ

27

6. 今後の展望

- 2月まで、月に1回の富岡町訪問の継続
→パネル製作や作品展示
- 富岡町のイベントへの参加
- 茨城県内で、富岡町の現状を話す機会の創出

28

目次

1. 福島県双葉郡富岡町の説明
2. チームの目的
3. 補助金について
4. これまでの活動報告
5. プロジェクト演習を通しての学び
6. 今後の展望
7. お世話になった方々へ

29

7. お世話になった方々へ

三瓶秀文様・門馬健様・東山恵美様をはじめとする
富岡町役場の皆様
及び
とみ咲クチームにご協力いただいた皆様

30

参考・引用サイト

「県内外の避難・居住先別人数」福島県富岡町ホームページ
<http://www.tomioka-town.jp/2222.html>
(平成30年12月7日アクセス)

31

ご清聴ありがとう
ございました



富岡町マスコットキャラクター「とみっぴー」

32

(4)式次第 5-(7)：茨城県立水戸農業高等学校活動報告

里川カボチャの魅力を伝えるために ～私たちのチャレンジ Vor. 2～

茨城県立水戸農業高等学校 食品化学科
2年 高土夏花・大津ひなた・野平祐美
鴨志田優月・飯田幸多

1. はじめに

このプロジェクトを始めたきっかけ

→ 先輩方が過去に行っていた

この活動に興味を持ったため

→ 昨年の活動

→ 昨年の茨苑祭にて販売した里川カボチャパイ

販売したパイの状態



2. 目標

最終目標：里川カボチャを知ってもらい、
常陸太田市里美地区のPRにつなげる

今回の目標：里川カボチャの特徴を生かしたスイーツ等の
レシピを考案し、発展につなげる

3. レシピ

スコーン (材料)

薄力粉 500g 砂糖 40g 卵 1個 (60g)
牛乳 200ml B. P 18g
里川カボチャペースト 125g

作り方

- ① オーブンを予熱 (180℃)
- ② 粉類をふるいにかけ、ボールに入れる
- ③ ペーストに牛乳半量と卵を入れて混ぜる
- ④ ②のボールに③を入れて練る

残りの牛乳を入れながらやわらかさを調節する

- ⑤ 1時間冷蔵庫に寝かせる
- ⑥ 麺棒で4回3つ折りにする
- ⑦ 棒状 (厚さ1cm×縦16cm×横1.5cm) で切る
- ⑧ オーブンで約20分焼く



4. 感想

今回のスコーンのレシピでは、里川カボチャの甘さと色に重点を置いたため、風味を生かすところまで、たどりつかなかった。

次は、すべてのよさを生かせるようなレシピを考案していきたい

また、茨苑祭での販売ができなかったのが非常に残念であるため、今回の失敗を今後の活動に生かしたいと思う。

図 19：ポスターパネル（掲示は各 A1 判）



図 20：活動報告会での発表風景

茨城県立水戸農業高等学校からは、まず食品化学科教諭の新堀俊博先生が「里川カボチャを通して学んでほしい～主体的・対話的・深い学び～」と題して、高校側の取り組みの背景についてご説明下さった（図 21、22）。次いで同校食品科学部の生徒達が、2年目を迎えた自分たちの活動について報告した（図 20、23）。

水戸農業高等学校との連携は 2014 年度に始まった。連携第一期生が 2016 年度末に卒業し、今年度は第二期生の 2 年目となる。第一期生と同様のスケジュールで進めば、第二期生は来年度に締めくくりの活動を行い、総括の報告を行う予定であった。しかし、今年度初頭の高校側の管理体制の変化に起因する方針変更により、残念ながら連携活動は今年度末を以て打ち切りとなることが決まっている。大学側として甚だ残念であることは勿論であるが、それ以上に、高校側の都合でいきなり活動打ち切りとされてしまう生徒たちが気の毒でならない。



図 21：水戸農業高等学校 新堀先生のご説明

里川カボチャを通して学んでほしい ～主体的・対話的・深い学び～ 茨城県立水戸農業高等学校 教諭 新堀俊博 1	9月から11月まで不在 ・企業研修で3か月間不在 ・これまでの生徒の活動を振り返り 新しい発見・提案を考えてもらいたい ・リクエストに応えられる柔軟な発想をしてもらいたい ・継続的で、発展的な活動にしたい 2
里川カボチャを通して学んでほしい ～主体的・対話的・深い学び～ 3	色々ご迷惑やご苦勞をおかけしました この場で発表をさせていただけることを 改めて感謝申し上げます 引き続き生徒の発表をよろしくお願いいたします 4

図 22：水戸農業高等学校 新堀先生 PPT

図 23：水戸農業高等学校食品化学科生徒チーム PPT

里川かぼちゃの魅力を伝えるために ～私たちのチャレンジ Vor. 2～

茨城県立水戸農業高等学校 食品化学科
2年: 高土 夏花・大津 ひなた・野平 祐美
鴨志田 優月・飯田 幸太

1. はじめに

このプロジェクトを始めたきっかけ
→先輩方が過去に行っていたこの活動に興味を持ったため

昨年の活動
→昨年の茨苑祭にて里川カボチャを使ったパイの提供

2. 目標

最終目標: 里川カボチャを知ってもらい、
常陸太田市里美地区のPRにつなげる

今回の目標: 里川カボチャの特徴を生かしたスイーツ等の
レシピを考案し、発展につなげる

3. 経過スケジュール

月	内容
4月～5月	レシピ考案・試作品作り
6月1日	茨城大学 さとみ・あいとの打ち合わせ①
7月25日	茨城大学 さとみ・あいとの打ち合わせ②、作成レシピの決定
7月27日	試作品作り(スコーン・カップケーキ)①
8月8日	試作品作り②
8月17日	試作品作り③
8月24日	茨城大学 さとみ・あいとの打ち合わせ③
8月27日	試作品作り④
8月31日	茨城大学 さとみ・あいとの打ち合わせ④、最終決定(スコーン)
9月7日	試作品作り⑤

4. レシピ

スコーン(材料)
薄力粉 500g 砂糖40g 卵1個(60g)
牛乳 200ml B.P 18g 里川カボチャペースト 125g

4. レシピ

作り方
① オーブンを予熱(180℃)
② 粉類をふるいにかけて、ボールに入れる
③ ペーストに牛乳半量と卵を入れて混ぜる
④ ②のボールに③を入れて練る
残りの牛乳を入れながらやわらかさを調節する
⑤ 1時間冷蔵庫に寝かせる
⑥ 麺棒で4回3つ折りにする
⑦ 棒状(厚さ1cm×縦16cm×横1.5cm)で切る
⑧ オーブンで約20分焼く

4. レシピ

スコーンの特徴
食べた時のかるさを追求し、
強力粉などを使用しない薄力粉のみのスコーンに仕上げた

食べやすさを求め、棒状に仕上げた

里川カボチャの甘さを引き立たせるために、
グラニュー糖を少なめに仕上げた

5. 結果

レシピの完成まではできたものの
茨苑祭での販売までにいかなかった

原因→細菌検査などの安全面が十分に考慮されていなかった
また、両者の情報の食い違いなど
情報伝達が正確でなかったため

6. 今後の課題

基礎的なことを改めて踏まえた上で、プロジェクトに取り組む

イベントなどアピールできる場を探し、積極的に参加していく

引き続きレシピ作成に取り組み、
さらに里川カボチャの魅力を伝えられるような加工品を考案していく

7. 感想・考察

今回のスコーンのレシピでは、里川カボチャの甘さと色に重点を置いたため、風味を生かすところまで、たどりつかなかった

次は、すべてのよさを生かせるようなレシピを考案していきたい

茨苑祭での販売ができなかったのが非常に残念であるため、
今回の失敗を今後の活動に生かしたいと思う

ご清聴ありがとうございました。

11

(5) 式次第 6：プレゼン講評

「総合プレゼン講座」の新設は、2017年度の授業改善の中核であった。しかし同時に、これを2018年度以降も継続的に開講していくことは、大学の財政状況に照らしてかなり難しいことと覚悟していた。授業内容に照らして、既存の専任教員が自らの専門の授業の片手間でこなせる内容ではなく、非常勤枠の確保が継続開講の大前提であったからである。

幸いにして学部執行部のご理解により、2018年度も30時間分の非常勤枠を宛がって戴くことができた。さらに渡辺しのぶ先生にも、引き続きご出講戴く事ができた。かくして昨年度同様、渡辺先生による「夏季集中講義」「活動報告会リハーサルでのご指導」「活動報告会当日のコメント」が実現した。厳しい状況の中で非常勤枠を宛がって下さった学部執行部、並びに遠路ご出講を戴いた渡辺先生に、この場を借りて篤く御礼申し上げます。



図 24：渡辺先生ご講評

渡辺 しのぶ（ラシャンス代表）

学生の皆様方、そして来場なさっている皆様方、どうもお疲れさまでした。
今ご紹介いただきましたラシャンスの渡辺しのぶと申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私、10月に学生の皆様方にプレゼンテーションの講義を担当させていただきました。それから、前年度から担当させていただいているということで、今年で2年目ということなのですが、今年の皆様方は非常に完成度が高いなと思ひまして、聞いていて、感動で胸がいっぱいになってきたというところがあります。本当にお疲れさまでした。

まず、今回のプレゼンテーションの講座の振り返りということで、プレゼンテーションの語源というのはプレゼントだったわけですね。もらってうれしいものをどうせだったらもらいたい。このプレゼンテーションもやはり同じなのです。ここにお集まりいただいているたくさんの皆様方が、本当に聞いてよかった、いい話が聞けた。それからまた、関係者の皆様方にすると、私のかわりに学生のみんが言ってくれたんだといったような話ができれば、これはとても成功だったなと思います。

お聞きの皆様方、いかがだったでしょうか。学生は皆様の伝えたいこととかをきちんと語ってくれたでしょうか。そのあたりも気になるころだと思ひます。

そして、今回、皆様方、プロジェクト活動ということで、プロジェクト活動という意味合いでの振り返りもちょっとしていきますと、まず、組織とか業務本来の組織とは別に、目的を達成するために臨時で構成される組織や業務のこと、小さな目標の達成のためのものではなくて、大きな目標を集団で実行するものを指すことがあるといったものです。ということだと、皆さん、学部が違ったり学年が違ったりしているのだけれども、一つの目的のために集結をしてやっていった。そして、小さなことを一つだけクリアするのではなくて、今年度もそうですが、前年度から引き続いていろいろな活動を継続してやっているということもありますので、本当の意味でのプロジェクト活動というものに、皆さん、つながった活動ができているのではないかなといったようにも思ひました。

そして、課題・問題を解決するということをもたちょっと振り返ってみると、まず現状が左下にあります。そして、何かを達成しようというふうに考えて目的をまず立てたときに、現状と目的の間には必ずギャップがあるわけです。ギ

ギャップであり問題点がある。この現状から目的までのギャップや問題点を一つ一つクリアしていくということが課題なわけです。アクションを起こして行って、課題解決をしていく。その課題が小さな目標であったり、マイルストーンと呼ばれるものだったりするわけなのです。ですから、この最終的な目的をきちんと明確にして、そして、スケジュールを立ててクリアしていったチームというのがプロジェクト活動が達成できたというふうに言うことができるのではないかなと思いました。そういった意味では、皆様方は目的はきちんと明確にして取り組んでいったのではないかなと私は思いました。

では、皆様方それぞれのチームごとに、簡単ではありますが、私から感じたことをお伝えさせていただきます。

まず、水戸農業高校の皆さん、いろいろなことがあったみたいなのですね。大変だったようで。まず、高校生でありながら、発表の仕方が落ち着いていていいなと思いました。

そして、去年はパイの提供をしたということですが、今年はスコーンとカップケーキということで、棒状のスコーンってすごく珍しいなと思いました。どんなものかなということで見せてはいただきましたが、気になりました。ぜひそういったものも今後展開していただけるといいです。

プロジェクトメンバーは3人おいでになりましたが、3人だけなのですか。5人なのですね。きょうは3人だけいらっしやったということですね。

とてもスケジュールをきちんと組んで、それで少しずつ積み上げてきているというところはすばらしいことだなと思いました。スケジュールがちゃんと立っていないと、なかなかそれに向かって達成していくということは難しいので、すばらしいことだと思いました。

それから、去年お伺いしたお話ですと、学内での知名度が低いということを伺っていたのですが、その知名度を上げるような活動というのは今回はなさっていたのかなということがちょっと気になったところです。そこも並行してやっていただけるとよかったのかもしれないですね。

それと、レシピを考案していただいた。衛生面でも確認が取ればますますいいですが、SNSで発信していくということを見ると、例えば、クックパッドとかに出してみるとか、そっちのほうから先に知名度を上げていくということもありなのかなんていうふうにも思いました。

どうもお疲れさまでした。

では、続きまして、さとみ・あいチームなのですが、さとみ・あいには7年目の挑戦ということで、本当に毎年毎年、メンバーは変わりながらであるかもしれないけれども、引き継ぎながらやっているというところは、本当にプロジェクト活動ということで、真の意味を持っているような気がいたします。

そして、目的は里美地区の魅力を発信していくということで、人と交流がテーマになっているということですね。

発表の仕方も非常に慣れていらっしやるし、笑顔、そして発問とかもちゃんとできていて、引き込みができていましたよね。

チームの目的もつくっていらっしやって、それも8割がオーケーということで結果を出しているというところもよかったと思います。

そして、若者活動の応援事業でも10万円を獲得しているということで、それもすばらしい結果を出しているなと思いました。

あとは、成功したかどうかという基準を決めたということもよかったですね。基準を決めて、その目標に向かって努力した結果、お米のものはオーケーだったのだけれども、15名以上若手が参加できなかったというようなことで、そこが少し足りなかったということでしたが、そのあたり、ご自身のところの問題点というか、結局はちょっと発信力が弱かったということだったのかもしれないですね。

学んだこと、弱みにも気づけたということをおっしゃっていたのですが、私は、想像として、発信力が弱かったので集客できなかったということかなと思ったのですが、明言がされていなかったのも、その弱みというのが実際に何だったのかといったようなことを明言していただけると、よりよかったのかなというふうにも思いました。

今回、学校としてのこのプロジェクト活動としても、学外への発信と各チームのSNSで活動するということが新しいテーマだったので、SNSのことがもう少し触れられているとよかったかなと思いました。

続いて、XCCの皆さんですが、こちらも本当にお疲れさまでした。

スライドのつくり方も前回から比べてもとてもよくなっていたし、非常に笑顔もいっぱい出ていたし、みんなで参加しているなという感じが伝わってきたところはよかったですね。

異文化交流フォーラムというものをやったわけですね。こちらは明確なスケジュールを最初は立てなかったために失敗をしたことに気がついて、もう一つのマップのほうでその失敗を生かすことができたといったところがすばらしかったなと思いました。

あと、フリートークの時間などをフォーラムの中で取ったことに関しては、高校生の皆様方がいろいろと恐れずに外国人の方と会話ができたのでよかったかと思いました。

気になったことは、文法の間違いにこだわらないといったような工夫というのはどういうことをやったのだろうと。ちょっとその工夫が見えなかったのも、そこをおっしゃっていただくとよかったかなと思いました。

あとは、質問で出た回答で、マップをつくることで、地域の人との交流というのはどういうふうにしたかということで、回答として出てきていた、留学生と一緒に回ってつくったということとかおっしゃっていました。そこはプレゼンの中に入れてよかったのではないかなと思いました。一緒につくって、外国人がどういうところに興味を持っているかということがわかったとか、そういったことを入れていただいてもよかったように思いました。

そして、水戸交通屋さんは、こちらは本当にまた大きくて元気がいい声を出していただいて、佐藤さんはダンスとかも得意だということで、もともと皆さんもすごくチームワークがよかったのだけれども、すごくみんなが参加しているという感じで、いいプレゼンテーションになっていたなと思いました。メリハリもとてもあったなと思いました。

スライドのつくり方とかアニメーション効果も非常によくできていると思いました。効果的でした。

そして、助成金 8 万円を獲得したというところもすごいなと思ったし、あとは、ターゲットを若い女性に絞って、バスのドライバーの方々を身近に感じてほしいということで、明確に絞っていったというところはとてもよかったと思いました。

そして、このチラシとかもとてもいいなと私は思いました。この似顔絵がすごく上手に描けていて、プロの方に頼んだのかしら、どうなのかしらと思ったのですが、これはすごいなと思いました。

あと、私、関東のほうでバスの運転手さんの研修とかもやっているのですが、すごく大変なのです。なので、こういうものをつくって配っていただくと、おそらくドライバーの方々のモチベーションもすごく上がったのではないかなと思うし、また、地元の人も何々さんと声をかけたりしやすくなるかなと思って、すごくいい企画だなと思いました。

さらに、プレゼンの中でアンケートを使用して、全員参加型ということで、オンタイムで今後のことを決めていこうなんていうこともすごく画期的で面白いと思いました。

ただ、残念だったところというのは、オンタイムで決めたことを今後に生かしたいという意味はあったのだけれども、これも質問をされて初めて出てきたというところもあったと思うので、今後の展望をどうするのかということ、アンケートの結果をもってまた展開させていきたいとか、そういったような発言があるともっともっとよかったかなと思いました。

それから、続いては、こみフェスチームですね。こみフェスチームは、こちらも笑顔とか発問などができていましたね。よかったです。

目的として、ボランティアのよさを知るということで、知った上で若者たちに伝えて、若者にもたくさんボランティアに参加してほしいというふうなことをおっしゃっていました。

具体的な数値目標も出していましたね。5 団体以上を確保するという、そして、活動としては、毎月 1 回市役所に出かけて行って職員の方々とミーティングをしたとか、学生目線での提案をしたとかというのはすばらしい経験だなと思いました。

それから、にこにこ食堂に参加するとか、あつとままに参加するということとかも、これから女性の皆様が結婚されてお子様を持ったりしたときに、どういったことがあれば女性活躍推進の一助になるのかといったようなことの予習にもなっていったのかなと思うし、あとは、若いお母様方というのもとてもこういうことには興味を持っているので、学生さんたちが寄っていつてくれるということがありがたい気持ちでおそらく見守ってくれるのではないかなと思いました。

今後の展望もきちんと示せていたので、とてもよかったなと思います。

これは質問にも出ていましたが、ボランティアを集める方法はとするのかという話が出ていましたが、そのあたりとかも具体的に出てくるともっともっとよかったかなと思いました。

そして、続いてが sucSeed チームということで、ワインを通じて県外から人を呼ぶということで、水戸の魅力に気づいてもらおうというのがテーマでしたね。

これも本当にすばらしいなと思ったのは、ただ単にこういう企画をしましたというだけではなくて、運営からツアーにずっと携わっていて、見積もりを出したとか、比較してこっちの会社に決めたとか、そういったことはなかなか大人になってもその経験ができる人は、全員が経験できるわけでもないの、今からそういったことができているというのはすごいなと思いましたし、パンフレットをつくったり、パスガイドの練習もしていたというのは、本当に皆様方でつくっているのだなと。そして、スカイツリーで 600 枚のピラを配ったというところもものすごい実行力だなと思いました。

私もスケジュールが合えばぜひ参加したかったなといういい企画だったかと思います。学びも非常に多かったですね。

いろいろやりながら状況を把握して、優先順位を決めるということを学んだとか、そういったこともすばらしいと思いました。

残念だったのは、皆さんのプレゼンの中にも出てきていたのですが、長期的な見通しが不透明だったという言葉が出ていたのですが、これは今後の展望ということがなかったというふうに考えてよろしいのでしょうか。そこのあたりも、メンバーは代わったとしても、同じような企画はおそらく続くので、そのあたりは継続性を持って伝えていただきたいなと思いました。

そして、最後、とみ咲クチームですね。とみ咲クチームは、富岡町の心の復興の一助になりたいということで、訪問したところで、非常にそういったことを強く感じられたということでした。いろいろと皆様の胸に響くようなこともあったのだらうなと想像いたしました。

地域の現状を知って、そして、いろいろと学んでいくということで、総額 115 万円も得ることができて、そこをもとにしていろいろな活動をなさったということもすばらしいなと思いました。メディアにも 6 個も取り上げられたのですものね。黙っていて取り上げられることはないので、何かしらやったということで、活動して取り上げられたのかなと思いました。

自分たちでは地域貢献ができなかったのではないかなということをおっしゃっていて、広報が少し遅かった。これも SNS とかをもう少し活用するとかいうことができるとよかったのでしょうか。

成果の検証とかもしていっちゃって、そこもよかったかとは思のですが、残念だったところは、まず、コミュニティの再形成ということなのですが、どういうことができたかコミュニティの再形成になるのだろうかというのがちょっと私には見えてこなかったのです。そこのあたりと、あとは、学びはとても多かったことはよくわかりましたが、うまくいっていないことが何だったのかということ、苦労したことというのがちょっとプレゼンの中では見えてこなかったもので、そこのあたりもおっしゃっていただくと、より臨場感のあるようなプレゼンになったのではないかなと思いました。

ということで、駆け足ではございますが、私からは以上とさせていただきます。

ありがとうございました。

(6) 式次第 7：ミニ・トークセッション「学外への発信手段としての HP、FB」

2018 年度の活動報告会のテーマは「学外への発信」である。これに沿ってわずか 35 分という短時間ながら、「学外への発信手段としての HP、FB」と題したミニ・トークセッションを設定した。登壇者は本学広報室の山崎一希専門職とプロジェクト演習担当教員の一人でメディアが専門の岩佐淳一教授、プロジェクト演習の設計者であり担当教員でもある鈴木敦の 3 名である（図 25）。

鈴木は当初、プロジェクト演習の HP、FB の開設を受けて、これをどのように有効活用すべきかという、かなり限定的な議論を想定していた。しかし、事前打ち合わせの過程で山崎、岩佐の両氏から「より広く、大学としての広報を考えるべきではないか」との意見を得て、最終的にはこのような形に落ち着いた。

当初想定よりも大きなテーマを扱うことになった一方で、それに見合う事前打ち合わせの時間を確保することはできなかった。また、セッションの時間を延長することもできなかったため、当日は 3 名の「スピーチ」が終わった段階で割り当て時間がほぼなくなり、「トーク」に進むことができなかった。かくして登壇者 3 名の話は相互のつながりが今一つとの印象は否めない。しかし、メディア分野に造詣の深い 2 名の登壇者のスピーチには、今後のプロジェクト演習さらには人文社会科学部のカリキュラム充実にとって非常に有意義な提言が多々あったと感じている。プロジェクト演習だけではなく、学部としての取組も期待される内容であった。今後の展開に期待したい。



図 25：ミニ・トークセッション

左：鈴木敦 中：岩佐淳一 右：山崎一希

○鈴木敦（プロジェクト演習設計者 プロジェクト演習担当教員）

ミニ・トークセッションということで、これから 3 人で少しお話ししたいと思います。宜しくお付き合いの程、お願い申し上げます（図 26）。

申し遅れました、プロジェクト実習担当教員の一人、鈴木でございます。

本日お配りしております資料冊子に、「プロジェクト演習のホームページ（以下「HP」と略記）とフェイスブック（以下「FB」と略記）を立ち上げたので、この機会に学外への発信について考えてみたい」という旨を記しております。それを受けてのこの話なのですが、まずはここに至る経緯をご説明しておこうと思います。

プロジェクト演習は今年度で開講 7 年目になりますが、スタートの時点では、とにかくプロジェクトを立ち上げて、動かして、事故なく終わらせることだけで精いっぱいでした。その後 3 年位やってきますと、プロジェクトは手段であって、それを通じた学びこそが本体であると明確に自覚するようになり、「何をどう学ぶのか」を強く意識するようになりました。昨年度に至って、ようやく、ではそれをどう伝えたらいいのだというところまで頭が行くようになりまして、夏季集中講義として渡辺しのぶ先生に「総合プレゼン講座」をご開講いただき、それを受けて活動報告会でも「伝える」をテーマとするに至りました。

そういう具合でして、プロジェクト演習の初期にはそもそも「情報発信」「対外的広報」という概念が存在していなかった。この 1、2 年でようやくその辺まで頭が行くようになったということです。

実際には、昨年度、規則を調べたり予算を戴いたりしながら HP 並びに FB の立ち上げに向けた具体的な作業を行いました。その際、情報発信のターゲットとしてどのような方々を想定するのかについて、色々に考えました。結果的にターゲットとしたのは、スライドに記しておりますこの 3 種です。

ターゲットの第一は、「プロジェクト演習の履修予備軍とその関係者」です。具体的に言えば大学 1 年生と本学を受験先候補と考えている高校生及びその進路指導の先生、親御さんです。「本学では、2 年生になるとこういう授業がありますよ。しんどいけれども、その分力もつくから受講しませんか？」という呼びかけをしたいということです。

第二は、「域学、産学連携授業への協力者」の方々です。こういう類のことでご協力下さる方々、あるいは教育学的な立場からこういう活動に興味を持って下さっている方々、そういう方々に情報を発信し、「こんなことをやっています。可能であれば、ぜひ一緒に！」というお誘いです。

第三は「社会一般」。多額の公金を戴いて運営されている国立大学法人茨城大学の一授業として、社会一般に対してプロジェクト演習関係の情報発信を行い、説明責任を果たそうと考えた訳です。

さて、そのような経緯で HP を立ち上げたわけなのですが、この 3 つのターゲットへの情報発信、当初は全部 HP で行おうと思っていました。しかし立ち上げ作業の過程で、本学の管理体制上の制約から HP は頻繁な更新ができず、小回りのきく運営は不可能ということがよくわかりました。当初は 3 つのターゲットを考えていたわけですが、即時性を担保できない HP というメディアで対応可能なのは②番のターゲットだけだなということになってしまいました。そこで、即時性が不可欠な①番と③番のターゲットに向けた情報発信手段を別途確保する必要が生まれ、

図 26：プロジェクト演習にとっての広報のターゲット 3 種

プロジェクト演習 活動報告会 2018年12月15日 プロジェクト演習にとっての 広報のターゲット3種 プロジェクト演習担当教員 鈴木敦 Atsushi.suzuki.8115@vc.ibaraki.ac.jp 1
プロジェクト演習にとっての 広報のターゲット3種 ①履修生予備軍とその関係者 ②域学/産学連携授業への協力者 ③社会一般 2
①履修生予備軍とその関係者 ・1年次生 ・高校生+進路指導教諭+保護者 →履修者数の維持・拡大による プロジェクト演習の安定的な継続 3
②域学/産学連携授業への協力者 PBL授業担当教員 教育系の研究者 ・「AL」「PBL」「地域連携」「高大連携」「インターンシップ」 「社会人基礎力」等のキーワードに反応する層 →協力者の維持・拡大と斯界での知名度の向上 4
③社会一般 ・各プロジェクトの目的に内包された広報 ・広報の実践的学習 →「広報効果そのもの」ではなく、 「学生が、広報すること自体を通じて学ぶこと」 5
ご清聴ありがとうございました プロジェクト演習担当教員 鈴木敦 Atsushi.suzuki.8115@vc.ibaraki.ac.jp 6

HPと同時にFBも立ち上げるということになったという次第です。

そういう形で始まりました。HPにつきましては、先ほどの趣旨説明のところで、お手元のスマホ等でご覧戴いたかと思います。この機会にもう一遍見て戴くと、大体どんなものか見当がつくと思うのです。要するに、非常に「フォーマル」で「静的な」情報を並べています。

一方でFB。スマホをお持ちの方はこちらでもご覧戴ければありがたいのですが、HPとは対照的に「カジュアル」で「動的な」情報を「即時性第一」に提示し、併せて「明るく行動的な」な雰囲気を前面に出す構造にしています。

正直申しまして私はなべてSNSというものが苦手でした、それまでは敬して遠ざけて参りました。①番と③番のターゲットにHPは有効ではないということで、還暦を目前に仕方なくFBに取り組んだ訳ですが、しばらく運営してきた時点で愕然としたのです。「リーチしました」の意味がやっとわかるようになってみれば、プロジェクト演習FBの記事で、リーチが100に届くのはそうはなかったのですね。500に届いたらもう大変だ、1,500!?!何だそれは！みたいな状態です。大体は100に届かない位の、その程度のリーチ数に過ぎないことが分かったのです。「いいね」の意味が分かってみれば、押してもらえそううれしく思うようになったのですが、よく見ると履修生だったり、その親御さんだったり、協力者の方だったり、「身内」が殆どだったのです。秋口になって初めて、全く知らない方のお名前をちらりほらりと見かけ出来るようになったという状態です。

それで学生にボヤきました。随分やったんだけど、特に①のターゲットに届かないんだよと言ったら、女子学生が、「は？」という顔をして、「当たり前ですよ先生」と言う。「FBって、おっちゃんおばちゃんのツールですよ。大学生や高校生は、普通はFBなんて使いません。インスタグラムとかツイッターですよ」と。①番のターゲットについては、ハナからメディアの選択を誤っていたわけです。

そんなこんなをいろいろ踏まえまして、では今後のプロジェクト演習の情報発信手段としてのHP、SNSをよくしていくためにはどうしたらよいのだろうか、という非常に狭いレンジでものを考えて、こちらのお二方に今回のミニトークセッションへの登壇をお願いしたわけです。ところが、こちらお二方はメディア系がご専門ですので、いやそういう局所的な矮小化した問題をこういう場でやってもあまり意味はないでしょう。むしろもっと広く、大学としての広報ということを考えるべきでしょうというお返事をいただきました。こちらとしては、プロジェクト演習のHPとFBという目の前の課題で手一杯だったのですが、何度もやり取りをしているうちに、確かにそうだなと思うようになりました。当初想定よりももうちょっと広い視野から語ることにしようという結論になりましたので、きょうはまずそういう話から入っていききたいと思います。

ですのでフロアの皆様は、スタートはこの授業のHPとFBだったのに、何だかいきなり大きな話になっているぞとお感じになるかもしれません。その点はどうかご了承下さい。

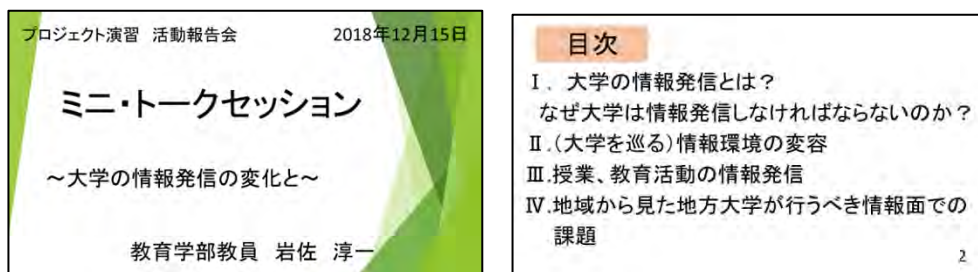
では、まずは岩佐先生からお願いいたします。

○岩佐 淳一（地域メディア研究 プロジェクト演習担当教員）

プロジェクト演習担当の教員の岩佐と申します。

渡辺先生に落第点をつけられるようなパワポイントをつくってまいりました。恥を忍んで報告をしたいと思います（図27）。

図27：ミニ・トークセッション～大学の情報発信の変化と～



今、鈴木の方から話がございましたように、今年度のテーマは学外への発信ということで、授業のHP、FBを立ち上げ、学生は自チームのSNSを運営したわけなのですが、最初、そういう細かい話をしようかなと思ったのですが、3人で話をしているうちに、もう少し大きい話をしようではないかという話になりまして、大学の情報発信って何なのかとか、あるいは授業とか教育活動の情報発信って何かとか、あるいは地域から見た大学の情報発信というのはどうい

うものなのかとか、そういったことをちょっと考えてみようということになりました。

私のほうでは、余り細かい具体的な話はしませんが、概括的な話を少ししたいと思います。その上で山崎のほうから具体的な話を、フィジビリティというか、実現可能な話というか、そういったことを少しお話ししたいというか、つなげていければと考えています。

大学の情報発信とは？

まず最初に、大学の情報発信ということなのですが、どうして大学は情報発信をしなければならないのかということについて簡単にお話をしておきたいと思います。

実は、大学教育に関しては、情報発信といいますか、情報公開といいますか、それをしなければならない法的説明責任がございます。そこに書いたように、学校教育法 109 条とか 113 条とか、うんたらかんたらというのがありまして、大学ってどういう人材を養成するのとか、あるいは、授業の方法とか内容とか授業計画はどうなっているのとか、成績基準はどうですかとか、自己点検・自己評価といったことを公開しなければならない。発信しなければならないということが決まっている。

1. 大学の情報発信とは？
なぜ大学は情報発信しなければならないのか？

1. 大学教育に関する法的説明責任
(1)「学校教育法109条、113条」「大学設置基準第2条の2」

①人材養成の目的
②授業の方法・内容・年間授業計画・成績評価基準等
③自己点検・自己評価

(2)国立大学法人法による中期計画、財務諸表、事業報告書等の公表

3

2. 大学の社会への説明責任、広報、便宜供与

(1)研究活動
(2)教育活動
(3)学生生活
(4)受験生・在学生への便宜供与
(5)その他

4

3. 地域社会、企業など外部への情報提供、連携協力

5

4. 大学のブランディング戦略

(1)「象牙の塔」からの脱却→大学への信頼の社会的醸成
(2)大学価値の伝達、明確化

6

5. 活動のジャーナリズム的、アーカイブとしての機能

7

それから、国立大学法人法によって中期計画とか財務諸表等も公表しなければならないことが決まっています。これは法律で決まった大学の情報発信というところでございます。

それから、法律によらない部分ですが、大学の個別の社会への説明責任といった意味、あるいは広報、便宜供与といった意味で、研究活動とか、教育活動とか、学生生活の様子とか、あるいは受験生や大学生への便宜供与とか、そういったものを情報発信するという部分がございまして。

それから、連携教育という観点から言うならば、地域社会とか企業への情報提供ということも大学にとっては非常に重要な部分になってくる。

それから、大学の価値の伝達、あるいは明確化といったようなものとか、大学への信頼の社会的醸成ということで言うならば、大学のブランディングの戦略としても非常に重要な意味を情報発信というのは持っていると言えます。

最後に、これは大学自身の問題なのですが、大学自身が自分たちの活動をアーカイブ的に持っていくということも必要なのだろうと思います。その意味では、情報発信することがイコールアーカイブという機能を持つということもあるのかもしれない。

いずれにしても、大学にとっての情報発信というのは非常に多方面の広がりを持っていますし、今後もその重要性というのはますます増していくだろうということは言えるのかなと思います。

（大学を巡る）情報発信の変容

皆さんもご承知のように、近年は情報環境が激変しているという状況で、これまで大学の情報発信というのは、紙メディア、紙媒体等でやっていたわけなのですが、従来のそういうマスメディア型の情報媒体だけではなくて、当然インターネットというものが非常に重要になってきているということでございます。ブログやSNSによる情報発信が量的に拡大してきて、発信者も多様化していくと。そして情報内容も多様化し、誰でも発信できるように、その発信も非常にたやすくなっているということが言えるわけですが、当然それに大学のほうも連動していくわけですし、大学情報というものが多様化・多元化していくという状況で、大学が発信している公式サイトだけではなくて、教員や学生が発信する情報も増加して、大学情報は激増しているわけです。

そういう中で、公的な情報と私的な情報をどう切り分けるかということも問題でしょうし、あるいは教員や学生が発信する情報というものをどういうふうに大学が把握して、そして、それを総合化したり見える化していくかということ、簡単に言うと可視化していくということがおそらくこれから必要になっていくのだらうと思います。

そういう意味では、広報体制をどう見直していくのかということは、茨城大学だけではなくて、大学全体の課題になっていると思えるわけなのです。

授業、教育活動の情報発信

続きまして、プロジェクト演習という授業を1年近くやってみて、教員の側が情報発信ということを考え始めたわけなのですが、授業や教育活動を情報発信するというのはどういう意味があるのかということのをちょっと考えてみたいと思います。

情報発信というものと大学の学びというものを連動させたらどうなのかという発想を持つに至ったのですが、要するに、大学の通常の研究活動、あるいは授業等があるわけなのですが、その中に情報発信という発想を内包させる、組み入れてみたらどうなのかということなのです。そうすると一体どういうことが意義として考えられるかということを見てみると、一つは、大学が見える化していく。要するに、授業等、どういうことをやっているかということが具体的に見えるということです。これはおそらく大学にとってはプラスになるのだらうと思いますし、より直接的には、受験生にとってこれは便宜供与になるのだらうと思います。要するに、茨城大学がどういう授業をやっているのがよく見えるということです。こういうことは一つあるのだらうと思います。

それからもう一つ、内から見る、大学生の側から見るとどうかということ、さまざまな学生の授業や教育活動を見ていて、それがこういうふうなことをやっているんだとか、こういうふうによればいいのねとか、こういうのっていいよねとか、そういう気づきとか、あるいはインスパイアというか、触発されるといったことになっていくということが一つ考えられるということです。

逆に外から見るならば、茨城大学の学生はこういうことをやっているんだ、これって、もしかしたら自分のところの地域で使えるかもしれないよねといったような地域の気づきというものにつながっていく可能性もある。こういう効用が考えられるのだらうと。

Ⅱ.（大学を巡る）情報環境の変容

- (1) 情報媒体の多様化 従来のマス・メディア型情報媒体＋インターネット
 - (2) ブログやSNSによる情報発信の量的拡大、発信者の多様化
 - (3) 情報内容の多様化
 - (4) 情報発信の易化
- 大学を巡る多様な情報が社会的に流通する現状

8

情報環境の変化にともなう大学情報の変化

多様化・多元化した大学情報→公式サイトのみならず、教員や学生等が発信する情報の増加

- (1) 教員、学生等が発信する情報（研究や教育、授業）をどのように把握していくか
- (2) 多様な情報の総合化、見える化→どのように可視化するか→広報体制の見直し

9

Ⅲ. 授業、教育活動の情報発信

情報発信が大学の学びと連動、情報発信を学びに内包することの意義

- (1) 大学が見える化の一助になる→受験生への便宜供与

10

- (2) 内から見ると在学生の「気づき」「インスパイア」になる
外から見ると学生目線を通じた地域の気づきにつながる

11

次は、渡辺先生にいっぱい怒られそうなパワーポイントなのですが、広義の人間教育になるということでした、要するに、授業と、あるいは学習活動の成果を情報発信するというのは、結局、情報発信の技術というものも習得しないといけませんし、それから、どういうメディアを使えばいいかということです。何も FB やツイッターだけがメディアではないわけでした、従来のマスメディア型のものもありますし、どういうメディアを使えば一番有効に自分たちの考えていることや活動を相手に知らせるか、その選択能力も非常に重要です。

そういったものですか、あるいは、情報を発信する上での情報収集する力とか、人と交渉する力とか、コミュニケーションの力とか、あるいは、今回のプロジェクト演習もそうですが、グループでマネジメントする力とか、そういう総合的な能力というものが開発されていくということ。

それから、情報発信することで、内外から評価を受けるということと自体の中に学びがあるということです。そして、その評価を授業や教育活動にもう一度フィードバックしていくことができる。そういう意味では、教育活動の中に情報発信というものが組み込まれるというのは、程度問題はありますが、どこまでやるのかということは、もちろん、これは議論のあるところではございますが、これを積極的に考えてもいいのではないかと私は考えています。

ということで、今年度、教員の側でプロジェクト演習をしていて気づいたことというのは、一つは、情報発信という観点から、学内の教育体制というものを制度設計してみてもいいのではないかとということ、それから、教育実践というものを情報発信する意義といいますか、先ほど申し上げたようなこういう問題も含めていろいろと勉強になるなど、これはいいのではないかとというようなことです。こんなことを気づいた次第でございます。

地方大学の情報面からの課題

話が変わりまして、次に、地方の大学、茨城大学も地方の大学なわけですが、大学の情報発信と地域ということについてちょっと考えてみたいと思います。

地方大学の課題というのは、教育研究の成果を還元する。そして、それを地域の問題や課題解決に生かしていく。そして、その 1 と 2 を含めて、地域的な人材を養成するというのが地方の大学の一つの課題、意義だろうと思います。

しかしながら、考えてみると、では、地域の問題や課題解決といいますが、大学はどこまでそれを把握しているのかということが問題なわけなのです。

ですから、大学の側が本当に地域のことがどこまでわかっているのかという問題が明らかにならないとなかなか信頼されないだろうと思います。そういう意味では、地域の問題や課題について大学が情報を発信するとか、あるいは可視化するというのは、非常に重要な大学の課題ではないかと考えます。どんな問題や課題が地域に存在していて、それがどんな縁連関をなしているのか。これをわかりやすく地域に向けて発信するというのは大学の重要な機能ではないかなと考えています。

茨城大学憲章を見てみると、情報発信という視点から見ると、大学の情報を広く発信するということは書いてあるのですが、大学への期待や要請の把握に努めると書いてあります。では、それというのはどういうふう把握したのですかということが次に来るわけです。次に、市民、自治体、教育界、高等教育研究機関、経済産業界と連携した教育と研究を推進する。どんなふうに推進したのですかというエビデンスが問われるわけです。

(3) 広義の人間教育になる

授業などの成果を情報発信する＝①情報発信技術、②メディア選択能力、③情報収集力・交渉力・コミュニケーション力・交渉力・マネージメント力等総合的な能力等が開発される

④情報発信することで内外から評価を受ける→評価を受けること自体が学びとなる、⑤評価を授業、教育活動をフィードバックできる

→教育活動と大学の情報創造がセットになることの効用

12

今年度のプロジェクト演習での気づき

情報発信という観点からの学内の教育体制をもう一度制度設計してみる必要があるのではないかと

13

IV. 地方大学の情報面からの課題

(1) 教育研究の成果の還元

(2) 地域問題・課題解決への寄与

(3) 地域的人材の養成

14

情報発信という視点から見た茨城大学憲章

市民や社会から信頼される大学であるために、大学の情報を広く発信し、大学への期待や要請の把握に努めます。市民、自治体、教育界、高等教育研究機関、経済産業界等と連携した教育と研究を推進します。教育研究の成果を積極的に社会に還元し、地域の教育と文化の向上、環境保全、産業振興、社会の発展に寄与します。教育と研究の成果を広く国際社会に向けて発信するとともに、学生や教職員の国際的な交流と共同研究を行い、国際水準の教育と学術研究の推進及びその成果の共有に努めます。アジア地域を中心とした国際社会から信頼される学術と文化の交流拠点となることを目指します。

15

地域から見た地方大学が行うべき情報面での課題

(4) 地域の問題・課題についての情報発信、可視化(どんな問題や課題が地域に存在し、それがどのような布置連関をなしているか)

→地方大学は本当に地域のことを分かっているか？
地域社会に信頼されているか？

16

その下も同じで、云々かんぬんの発展に寄与する。ではどんなふうに寄与したのですかということが、当然それを発信しないといけないわけです。

ですから、茨城大学憲章というのは、実は情報発信とタッグになっているということが一つ言えるわけなのです。その中には、こういう地域の問題や課題についての情報発信、可視化というのはぜひとも入れなくてはいけない、今後考えていかななくてはいけない課題なのだろうと思います。

地方大学の情報面での役割 大学にアクセスすると...

- (1) 地域の問題・課題が整理されている
- (2) 問題・課題を一般化したり、比較する視点が提供されている
- (3) 地域の問題・課題解決を助けてくれそうな大学の専門家がを見つけやすい

17

大学として行うべき情報媒体の整備

- (1) 地域に関わる情報の総合サイトへ
- (2) 地域の団体や人々が気軽にアクセスでき、なおかつ「使える」地域情報ポータルへ

18

地域情報の結節点としての大学へ

19

ですから、茨城大学の HP 等にアクセスすると、例えば、地域の問題や課題が整理されているとか、あるいは、問題、課題を一般化したり比較する視点が提供されているとか、何となく専門家がいて、課題や解決を助けてくれそうだとか、そういう人が見つかるとか、そういったことがあると地域の人にとっては使いやすいのだろうと思います。

そういう意味では、大学の情報発信、特に HP 等で言うならば、地域情報や地域実践の総合的なポータルサイトになれないとか、あるいは、もっと地域の人が気軽にアクセスして使える地域情報ポータルになれないとか、そういったことも今回考えるに至りました。

では具体的にはどのように？

山崎様へお願いします

20

ご清聴ありがとうございました

21

ですから、地域情報の結節点として大学が機能するということがあればいいということなのですが、当大学にはいろいろな課題があるわけです。どこまでできるかという問題もあります。そういう意味で、フィジビリティ、実現可能性はどこまであるのかという問題があるわけなのですが、その辺は広報の専門家の山崎のほうに具体的にどうすればいいかということについてお話いただければと思っています。

ご清聴ありがとうございました。

○山崎一希（元茨城放送プロデューサー・PR 代理店勤務 本学広報室専門職）

茨城大学広報室専門職の山崎です。みなさん、プレゼンテーションお疲れ様でした。

大学の広報担当として、岩佐先生の話に襟を正す気持ちで聞いていました。先生がより根源的な指摘をされましたので、私はそれを受け取りつつ、より具体的な実践レベルの話題に引き寄せられればと思います（図 28）。

岩佐先生が指摘した中で私も強く共感したのが、最後に触れていた、地域の問題・課題についての情報発信・可視化ということが大学の広報の上でも重要だという点です。

世界に目を転じると、知への信頼の低下、たとえば科学的根拠のある事実を簡単に否定してしまうようなリーダーがいたりします。また、日本の大学自体でも選抜における不正や幹部の配慮のない発言などが問題になっています。

つまり、大学は「知の拠点」を標榜しながら、知そのものの価値や信頼が社会の中で低くなってしまっている。あるいは信頼されているとしても、その知の最先端が果たして本当に大学にあるのか、という疑問を呼び起こしてしまうことがあります。ですから、さきほど岩佐先生が提言していたように大学は知や社会の最先端の課題をきちんと把握している、キャッチアップしている、ということをはかりに可視化するかが、大学そのものの価値を上げる上でとても大事だと思っています。

では、そのために具体的に何ができるのでしょうか。私自身が現在考えていて、また実際にやろうとしている方向性が2つあります。

ひとつが、岩佐先生の言葉を借りれば、まさに「ジャーナル」としての機能を果たすことです。世の中にはいろいろなオンラインニュース媒体がありますが、まさに茨城大学のメディアもただ大学の出来事を発信するのではなくて、今社会で起こっていることを、専門家である研究者がそれぞれの専門を活かして発信し、それがまさにニュース記事として読めるような、そういうジャーナル機能をもった大学の広報媒体のあり方を考えたいと思っています。

そして2つめのアプローチ、実はこれがプロジェクト演習にも関わるところだと思うのですが、学生が地域課題にリアルに触れているプロセスを、きちんと可視化するということです。今日もみなさんのお話を聞いて、なるほど地域のバスをめぐってそういう課題があり、そんな解決方法があるのか...と、とても勉強になりました。こういうふうに、みなさんが実際に地域のいろいろな課題に出会い、気づきを得る。うまくいかないこともあるけれど、試行錯誤しながら解決していこうとする。そのプロセスをちゃんと見せていくことはとても大事で、地域の人、学外の人が、学生の皆さんの目線を通して、地域の課題に「ああそうだね」と初めて気付くきっかけになります。そうすると地域そのものが学習していく、地域がよくなっていくということが期待されます。

つまり、単純に大学でこんなことがありましたという自慢話をするのではなくて、学生や教員の活動を再体験しながら課題を発見し、なおかつ解決の道筋を見出すヒントにできるような場を、大学の広報として社会に提供する。そのこと自体が大学の価値を上げていくのだと考えています。

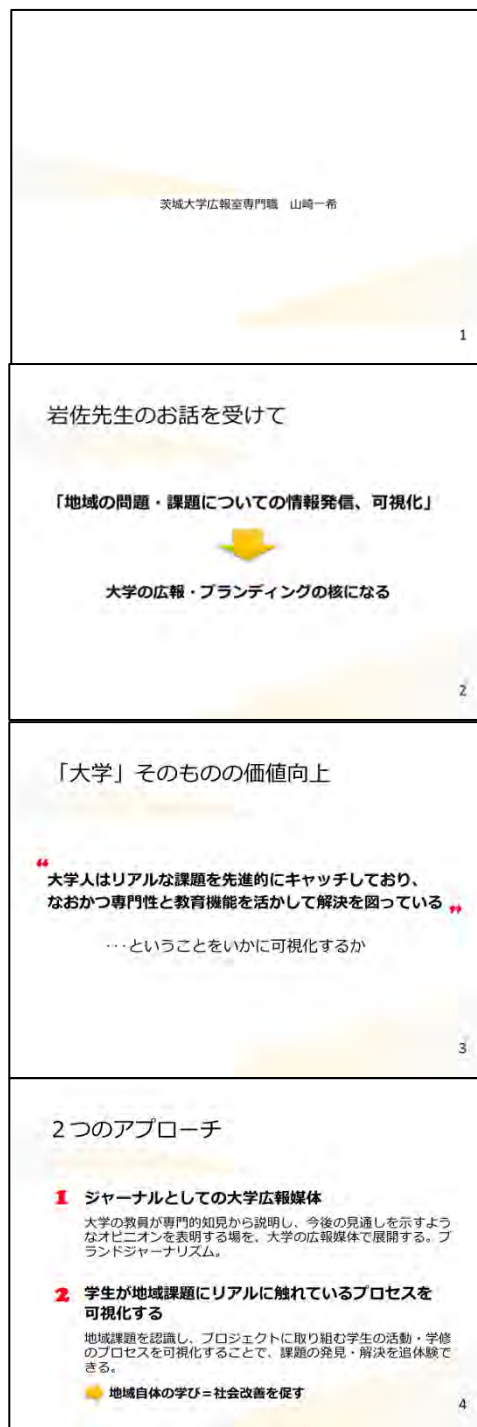
そう考えると、このプロジェクト演習における広報—私たちは「コミュニケーション」という言い方をしますが—コミュニケーションの意味とは何かというと、「プロジェクト演習という授業がありますよ」というお知らせをすることは第一義にならないと私は考えています。もちろんそういう周知が必要ないということではなく、もっと優先順位が高いものがあるということです。それよりも大切なのは、各プロジェクトで学生の皆さんが取り組んでいる目的やターゲットに応じた広報の最適化、効果の最大化をいかに図るかということだと思います。

今年度の活動では、各プロジェクトの皆さんはまずSNSのアカウントを作るよう指示があったということですが、フォロワー数はどのくらいになったでしょうか。フォロワーの多い活動もあれば、フォロワー集めに苦労したプロジェクトもあったと思います。

実際、それぞれのプロジェクトによって、コミュニケーションする相手は違う。さとみ・あいの場合だと、特に学生たちにイベントに参加してほしいということがあったからツイッターはワークしたかも知れませんが、一方で里美の地元の人を呼び込むにはツイッターだとアプローチしづらいかも知れません。つまり、それぞれの活動の目的に応じて本来はそれぞれに最適な媒体があるはずで、とりあえずみんなで同じメディアを使いましょう、というのは、ターゲットの合わないプロジェクトでは無駄になってしまいう可能性もあるわけです。

ですから大事なことは、すべてのプロジェクトでコミュニケーションのメディアを統一するのではなく、学生がそのプロジェクトの目的とかに応じて適切な広報媒体を選べるよう、神田先生から「伴走者」という話がありましたが、まさに伴走者としてサポートすることだと思っています。

図 28：地域の問題・課題についての
情報発信、可視化



さて、せっかくなのでメディアの話も広げたいと思いますが、私たちのようにコミュニケーションをデザインするという仕事をしていると、メディアの特性を分類するために、P・E・S・O という 4 つの頭文字に注目します。P はペイドメディア、E がアーンドメディア、S がシェアードメディア、O がオウンドメディア。ペイドメディアというのは PAY= お金を払う情報媒体で、要は広告のこと。アーンドメディアというのは EARN= 「稼ぐ」 ですから、例えば取材をしてもらって、新聞などで記事を書いてもらう、そこに広告費は発生しない、という形です。Shard= シェアードは、SNS に代表されるようにシェア・拡散されるもの OWNED= オウンドメディアというのは、自分で所有している HP とか広報紙とか、そういう自前の媒体です。このそれぞれをどういうふうに適切に組み合わせるか。たとえば、ペイドは予算がないと難しいのですが、とはいえ SNS では情報が届きづらい高齢者などに対しては、やはり新聞広告が有力、ということになる。そのためには、必要な予算を助成金などの形で獲得しなければなりません。あるいは、広義の広報媒体という意味では、sucSeed チームのように、東京スカイツリーのようなもともと人が集まっている場所でビラ配りをする 것도有効です。いずれにせよ、これらのコミュニケーション媒体をどう組み合わせさせてどう使うか、という観点が求められるわけです。

ですから、プロジェクトを進める上で、自分たちの目的は何であって、ターゲットは誰であり、ではどういうメディアをどう組み合わせるのかということをしっかり考える。逆に言えば、こういう情報こそ、授業の中で皆さんに提供していけば、おのずと情報の設計もできるようになります。

大学についても、プレスリリースを出す、茨城放送のレギュラーラジオ番組に出てもらう、FB を使うなど、さまざまな広報チャネルをもっています。そういうものはみなさんも使える資源ですので、私に直接相談や情報提供いただければ、直接的に力になれることがあると思います。

あるいは茨城大学であれば、人文社会科学部にメディア文化メジャーというものがあり、広報の専門家もいますから、広報論の授業とコラボしたりしながら、情報発信を学んでいく機会を作れると良いと思います。

そして、プロジェクト演習の HP についての話がありました。私自身が見て強く感じたのは、長年の試行錯誤しながらの取り組みがちゃんとアーカイブとして残っているということの価値の大きさです。「資料庫」というパートがあって、これは当然、マスの人たちにコミュニケーションする媒体ではないかも知れませんが、しかし、それが確かに存在していることがとても大事なのです。今、日本ではいろんな大学において、アクティブ・ラーニングや PBL を標榜した取り組みが増えていますが、教師にとってはどうやったらいいかわからなかったり、アクティブな雰囲気だけはあるものの実は何も学んでいなかったり、といったことが結構あります。そういう、いわば無駄なアクティブ・ラーニングもどきが増殖するのは非常によくないわけですが、その状況において、一方では 7 年も 8 年も試行錯誤を積み重ねてきた記録が、オープンで検証可能な状態になっているという事実は、日本の教育にとっても魅力的だと思っています。ですから、HP での「アーカイブ」という作業は、そういう使命でぜひ継続的に取り組んでもらえればと思います。

それから FB のついては、「玄人向け」の HP では届かない層にアプローチするための、ライトなコミュニケーションの媒体として使っていく、といった位置づけでもいいのかもしれない。

プロジェクト演習における「広報」「コミュニケーション」の意味

- ・「プロジェクト演習」という授業そのものの広報は優先すべきではない
- ・各プロジェクトの目的・ターゲットに応じた広報・コミュニケーションの効果最大化を考えるべき
- ・Facebook・Twitterが最適な媒体とは限らない。
- ・コミュニケーション媒体を統一化するのはではなく、学生がプロジェクトに応じて適切な媒体を選ぶようなサポートをすべき。

5

PESO: メディアの特性

- ・P Paid Media
- ・E Earned Media
- ・S Shared Media
- ・O Owned Media

6

どんな「媒体」が使える？



7

広報専門職として茨城大学にいての
遠慮なく何でも聞いてください！

8

プロジェクト演習のHPは意味がないのか？

- ・長年試行錯誤しながら取り組んできたPBL実践の貴重なアーカイブとして、十分に価値がある。
- ・日本の大学において、「這い回るPBL」「這い回るアクティブ・ラーニング」が今後増えていくかも知れない中、実践～報告の記録がオープンで検証可能になっていることは、教育方法の研究の上でも大切なこと。
- ・プロジェクト演習としての情報発信は、それで十分なのでは？（授業としてのFacebookページは見直したほうがよい？）
- ・優先すべきは、学生の活動の目的そのものに組み込まれているべき「情報発信」を最適化すること。

9

さて、これで最後になりますが、岩佐先生も話していたとおり、アクティブ・ラーニングや PBL といった学修活動については、実はその学習、教育の目的そのものの中に、情報発信という機能が内包されるべきでしょう。情報を発信すれば、自分へのフィードバックも返ってくる。ですから、そうした考えを前提にして、積極的な情報発信やコミュニケーションの実践的なトレーニングを、PBL のカリキュラムの中にもっと組み込んでいくことを議論することが大事です。この組み込みができれば、PBL をやっていけば自ずと情報が発信されていくという流れができ、私たち大学の広報はそのプラットフォームをちゃんとつくったり、情報をシェアしたりすれば良くなるわけです。そういう自立的な仕組みをつくっていければと思っています。

○鈴木

ありがとうございました。

といったような具合で、スタートは本当に矮小化した話から始まったのですが、お二人と一緒にやり取りをしているうちにだんだん話が大きくなっていく。と同時に、これをいきなり 100%は無理でも、相応に組み込みながら、何年か積み重ねていったらすごくいいものになるのかなという期待が生まれてきたということなのです。

ただ、非常に残念なことなのですが、3 人それぞれの話と 3 人でのトークとで合計 35 分だと言っていたのですが、現時点でもう持ち時間を使い切ってしまったのです。

予定時間を延長してしまおうかとも思いましたが、実は当初想定になかったことなのですが、今日は佐川副学長も来て下さっているのです。副学長にもぜひお話しして戴きたいということもあるので、ここはぱっとおさめて、副学長にマイクを回したほうが良いかと判断しました。

では、最後のまとめを、岩佐先生、お願いできますか。

○岩佐

まとめにもなりません。来年度は、今まで、私どもが申し上げたように、メディアを使うことの教育性といえますか、教育効果への配慮みたいなことを考えながらプロジェクトの運営をしたいと考えています。ですので、来年の今ごろは、そういったことについての成果もご報告できればと考えております。

以上でございます。ありがとうございました。

○山崎

今、こういう考え方だと言っていたのですが、来年の 5 月に大学の HP をリニューアルする予定なのです。そこでは、さっき言った教員が記事を投稿というか、見せるような仕組みとか、あとは、来年度、茨城大学では iOP クォーターが始まりますが、そうやって皆さんが地域に出て行って、その現場で情報発信をしていくと、それがぱっと見える化する仕組みとかをつくらうとしていますので、きょうの意見等も参考にしながら、またいい仕組みをつくれればと思いますので、引き続き皆さんのご支援をよろしくお願いをいたします。

○鈴木

すごく耳寄りの話を伺いました。人文社会科学部の学部長も副学部長もおられるので、この後、ちょっとご相談をさせていただこうかなと思っています。

それでは、ばたばたになってしまいましたが、これで閉じたいと思います。どうもありがとうございました。

(7)式次なし：佐川副学長コメント



副学長 佐川 泰弘

皆さん、こんにちは。

時間も押しておりますので、簡単に、急遽、鈴木シェフから一言と言われましたので、お話をさせていただきます。

去年、この場はまだ学部長でしたので、後ほど内田先生から総評があると思いますが、そういう立場でお話をさせていただきました。

年度が変わってやっと下りられると思ったら、余計に仕事が増えてしまいまして、私は先ほどの山崎さんと一緒に、広報の広報室長としての仕事の一つ、それから、いろいろなデータが大学に集まってくるわけですが、そのデータをもとに、大学をどういう方向に持っていくのかみたいなことで、IRとか大学戦略の室長、それから、来年度、5月に本学は70周年を迎えます。その記念事業を準備しているのですが、その準備室長ということ

で、そういうことをやりながら、きょうの学生のメンバーを見させていただくと、私の授業を取っていらっしゃる方もたくさんいて、ほぼ通常の教員と同じぐらいの授業をやっているというような日々でございます。それは愚痴になるので置いておきます。

今年もこうやって拝見をいたしまして、しっかりとプレゼン指導も受け、並みの大学生とは思えないようなご報告をたくさんいただいて、ますますレベルアップしているなということを実感した次第です。

もとをたどると、茨大生って地味でおとなしいと言われ続けてきて、企業や何かに面接とかに行ってもなかなか自分を出せない人が多い。そういう中で、積極的に外に出ていく学生にしたいよねという教員の思いから始まったみたいなのところは一つあります。

それともう一つは、地方にある国立大学ですから、地域志向という表現がされていますが、地域との関わりを持って、学生に限らず、大人になっても必ずどこかの地域との関係で仕事をしたり住んだりするわけですから、その意識をちゃんと持とうよということで教育を始めてきました。

この授業自体、あるいはこの前身の根力育成プロジェクトというのもそこから始まっているわけですが、今や、こういう考え方は、大学全体の教育の立て方の柱に座っている。その意味で、プロジェクト実習改め、今はプロジェクト演習は、これらの先駆けになっていると、全学の場合に行って、今非常に強く感じているところです。

かつ、毎年事業としてもいろいろな課題を持って一步一步進めていらっしゃるって、ついに今年は広報も参りまして、学生の皆さんだけではなくて、教員にとっても事業自体がプロジェクト化しているなということ強く考えさせられたところです。

ということで、学生の皆さんにおかれましては、これは学部地域志向教育プログラムの一つの授業かと思います。ほとんどの皆さんが来年3年生になるといいますので、来年度は来年度でまた次のプログラムがあって、そちらには、お題は変わってくると思いますが、私もゼミの延長線上で強く囁むということを予定しておりますので、またぜひ何らかの形で目にかかれればいいかなと思っております。

あわせて、大学全体としては、学生の皆さんはiOPという言葉を知っていると思いますが、internship Off-campus Programというのを茨大では考えておまして、3年生の第3クォーターの時期、夏休み明けからの数カ月間ですが、大学の中で、必修の授業を、ゼロには完全にはできないのだけれども、極力少なくして、国内外、いろいろな学外に出ていこう、その条件をつくらうということで今準備をしております。この2年生の学年から来年3年生の後期始まりはiOP期間ということになります。

ということで、地域の皆様方におかれましては、彼ら、彼女たちに限らず、多くの学生が外に出ていくことになりますので、ぜひご協力いただければと思います。

学生の皆さん、これを履修したら、大学の成績証明書にもこんなものを履修したと書かれるそうですので、そういう意識を持ってぜひ臨んでいただければと思います。

宣伝ばかりになりますが、最後に一つ、受付にもあってごらんいただいた方もいらっしゃると思いますが、来週の土曜日、22日、人文社会科学部棟で、「みんなの〈イバダイ学〉シンポジウム」を実施します。先ほどの岩佐先生の話にもありましたが、国立大学はお金もないし、その上、法律・制度の縛りが厳しく、かつ、いろいろな評価のされ方がしていて、どこに向かって行ったらいいのだみたいなことで非常に苦しんでいる実態があります。学生だけではなくて、大学としても自分を見失っているのではないかな。これではまずかろうということもございまして、そういう外的条件に余り縛られず、茨大ってどういう大学だろうし、どうしていったらいいのことをみんなで話し合って、軸を定め

ていこうという企画を考えておりまして、その出発点としてこのシンポジウムを行います。多くの方が多分お名前を知っていらっしゃると思うのですが、元東大、今はオックスフォード大学にいらっしゃる荻谷剛彦先生、教育社会学とかから来て、今は日本のことをオックスフォードで教えていらっしゃる方ですが、ここにお見えになります。その後、講義棟の幾つかの教室に分かれていろいろなテーマで話をする。きょうは詳しくは申し上げませんが、そういうことで、教職員だけではなくて、学生の皆さん、それから地域の皆さんにもぜひお越しいただきたいと思っております。

一定のステートメントにして、5月の創立記念の式典で公表するというのも考えておりますので、よろしくお願いいたします。

最後、宣伝ばかりで時間を取って申しわけないですが、とにかく毎年レベルアップしているこの企画は、非常に学部にとっても大学にとっても誇りになるものだと思っております。今年も、授業としてではありますが、参加された学生の皆さん、やっと終わりかなというところで、ご苦労さまでした。ちょっとゆっくりしてもらえればと思います。

長くなりまして済みません。以上です。

(8)式次第 8：総括と閉会挨拶



図 30：内田学部長挨拶

人文社会科学部学部長 内田 聡

皆さん、こんにちは。

ご紹介に預かりました学部長の内田です。

とても楽しい、かつ有意義な報告を聞くことができました。プレゼンをしてくれた皆さんはもちろん、さまざまなお力添えをいただいた地域の方々や関係者の方々に、この場をかりてお礼を申し上げます。

すでにいろいろな方がお話をされましたが、私は4月に学部長になる前の4年間、学長特別補佐という職にて、文科省の地(知)の拠点整備事業、通称COCを担当してきましたので、そうした経験も踏まえながらお話しします。

まず、少し大きな話になりますが、大学で勉強する意味は何かなどいつも考えています。違う言い方をすれば、教育をする意味は何かなど自問自答しています。いろいろあると思いますが、専門のない大学生はありえないので、教養や専門はきちんと学ばなければいけませんが、専門だけあればいいのかというと、専門ばかりでも困ります。専門という自分の好きな分野を学習する過程で、物事の本質を理解し、チームで行動できる力を身につけること、これが大学で学ぶ意味だと、私は考え普段から教育をしています。

学習の仕方には、座学であるとか、PBLであるとか、さまざまありますが、今回はPBLです。皆さんの取り組み・活動を見ていると、一生懸命頑張っている、満足感もあるし、地域の方にも感謝されていて、とてもいいことです。

さらに思ったのは、活動を通じて学びがどのくらい広がっているのか。もちろん、授業としての学びは当然あると思いますが、実は皆さんの日常生活が変わってきたのではないかと期待しています。というのは、一見つまらなくて役に立たないようなところに、実は本質的なことがあったりします。そういうことに気づける力がついているのではないかなと思うのです。

また、よく言うのですが、仕事とか勉強はやらされるものではなく、やるものです。こういう姿勢が皆さんに多分身につけているはずですが、やらされて4年間過ごすのと、やるという意識で4年間過ごすのでは、皆さんの成長に大きな違いをもたらします。皆さんは主体的に学ぶことが身につけていますので、これから先よく成長していくと思います。その成長は、当然、皆さんにとって大切なことなのですが、それにとどめることなく、ぜひ皆さんが学んだ経験を周りにいる友達にも共有してください。皆さんが社会に出たときに接する方々にも。そういう人たちが触れ合うことで、さらにもう一歩上のところに行けるのではないかと。その第一歩が今始まった、そういう心構えを持ってもらえたらとてもうれしいです。

そして、先ほど情報発信の話があって、私は専門家ではないですが、最近、新聞をインターネットで読んでいます。ですが、大学に来て同じ新聞をわざわざ紙媒体で見えるようにしています。なぜなら、紙媒体で見たときに、何でこれをネットでは読まなかったのかな、ということがあるのです。人って、(新聞で言えば見出しレベルで)目につくぐらいのものしか見ないのですね。私もそういうミスをしてしまう。ということは、例えば、地域というテーマはとてもいいと思うのですが、地域に興味がある人しかみてもらえない。でも、皆さんの活動は、必ずしも地域という切り口だけではないと思います。地域以外の人にも興味を持ってもらえる切り口があるかなと考えることが、またそのプロジェクトのレベルを上げていくことになるでしょう。情報発信というのは、実は、皆さんのやってきたことを見直すという作業

でもあるのです。それなくして手段としての情報発信だけをやっても、実は誰の心にも響かないと思いますので、この点もぜひ学んでください。

さて、それでは最後に少し大きな話をして終わりにします。最近、テクノロジーの進展がとても速くて、少し不安になるかもしれません。AIが人の仕事を奪うとさえいわれています。確かにそういう部分はあると思うのですが、違う言い方をすれば、人間しかできないものって何ですかということだと思ってしまうのです。もう少し言えば、人間って何者ですかという根源的なことが、実は今我々に問いかけられているのです。まさに人文社会科学の力が必要とされているのではないかと。我々の力が期待されているのだと思います。

大学、そして学部は、PBL、さまざまな授業を通して、学生の皆さんが、そうした世の中、社会、地域で、価値創造ができるように育てることが大切です。しかし大学だけではできませんので、地域の方々やさまざまな方々のご協力を得て進めていきたいと思っています。ぜひ今後ともご協力をいただければと思います。

それでは、私のご挨拶はここまでとさせていただきます。どうもありがとうございました。

(9)司会担当

2018年度も、引き続き履修生自身が司会を担当することとした。運用の枠組みも、基本的に昨年度の枠組みを踏襲した。具体的には、以下の通りである。

- ①会を4つのブロックに分けて学生と生徒計8人が二人一組で担当する
- ②学生、生徒の活動報告に当たっては、報告内容を踏まえてコメントを加える
- ③人選自体はチームに任せる
- ④「ペアの構成と担当ブロック」については、担当教員が「各ブロックの特性」と「各人の個性」を勘案して割り振る

以下に各ブロックの特性と担当者名、担当教員のコメントを記す。式次第の詳細は、図9を参照されたい。

第一ブロック（開会～趣旨説明）

責務：会のスタートであり会全体に関わる連絡事項も多いが、遅刻入場者もあって冒頭はざわついている。開会直後は会場の雰囲気も硬い。ペアの高校生をエスコートしつつ「明確な開会宣言並びに確実な情報伝達」と「会場のアイスブレイク」という、相反する責務を同時並行でこなさねばならない。

担当：永田典子（図31右・茨城大学3年）

高土夏花（図31左・茨城県立水戸農業高等学校2年）

図31：県立水戸農業高等学校と「とみ咲ク」ペアがきりと「起」



第二ブロック（プロジェクト実習活動報告第一部）

責務：会場の雰囲気は和らいできている。一方で、4チームそれぞれの報告の勘所をその場で理解し、当を得たコメントを出さねばならない。

担当：廣木彩乃（図32右・茨城大学2年）

鈴木 葵（図32左・県立水戸農業高等学校1年）

図32：「sucSeed」ペアが、堅実に「承」



第三ブロック（プロジェクト実習活動報告第二部）

責務：休憩を挟み、「第二の開会」とも言える。会場には、ややダレが出てくるタイミングでもある。その中で「会の再起動」並びに第二ブロックと同様に「報告内容の即時理解・然るべきコメント」という大役を担うことになる。

担当：庄司果織（図 33 右・茨城大学 2 年）

佐藤怜璃（図 33 左・茨城大学 2 年）



図 33:「水戸交通屋さん」(左)と「こみフェス」(右)ペアが笑いを取って(?)「転」

第四ブロック（プレゼン講評～総括と閉会挨拶）

責務：会全体の締めくくりであり、登壇者も概して「肩書きが重い」。会場にも疲れが見えてくる中、会の終了時刻を睨んで時間調整を強く意識した臨機応変の差配が求められる。

担当：塩手菜々美（図 34 右・茨城大学 3 年）

袴塚 梨帆（図 34 左・茨城キリスト教大学 3 年）



図 34:「XCC」(左)と「さとみ・あい」(右)ペアがきっちり「結」

(10)報告会を終えて

今年度の活動報告会も、多くの方々のご支援を戴いて盛況の内に終えることができました。皆様に篤く御礼申し上げます。

近年は PBL を表看板に掲げる授業も珍しくなくなり、以前のように思いもかけないような遠方からわざわざお越し下さる方は珍しくなりました。一方で、毎年必ずお運び下さる方もいらして、色々な意味でプロジェクト演習も「安定」してきたのかな、との感を抱いております。皆様、ありがとうございます。引き続き、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

例年、「プロジェクト演習卒業生」の皆さんが顔を出して下さるのですが、今年は特に沢山の方々が駆けつけて下さいました。図 35 は、報告会終了後、ひと段落したタイミングでの記念撮影です。帰りの便の関係で、この時点ではもう既にお帰りになった方々もおられ、全員での撮影とならなかったのがとても残念です。

専門のゼミとは異なり、プロジェクト演習はあまたある選択授業の内の 1 つに過ぎません。

「履修期間が終われば、ご縁もそれっきり」で当たり前前の存在です。それにも関わらず、卒業後までこうして駆けつけて下さり、後輩たちの頑張りにエールを送って下さる皆さんは、担当教員にとって本当にありがたい存在です。どうもありがとう！これからも、後輩たちの頑張りを応援してあげて下さい。どうぞ宜しくお願い致します。



図 35：今年も駆けつけてくれた OBOG と、終了後の記念撮影

おわりに

神田 大吾

2018年度の活動を振り返りますと色々な場面が思い出されますが、特に強く印象に残っておりますのが、学生を引率して訪れた福島県富岡町の街の景色です。歩ける道路から少しだけ先にずらりと立ち並ぶ、「この先は立ち入り禁止」を示す銀色の金属製フェンス。お昼時には、ショッピングモールのイートインスペースが水色の作業服を着た人々で混雑する様子。日が落ちると、街中なのにほとんど人家の灯りが見えない夜の景色。初訪問から半年以上が経っても鮮明に脳裏に浮かびます。新聞やテレビの報道で知っていたつもりでも、原発事故が残した爪痕は想像をはるかに越えておりました。

お蔭様で今年からホームページとフェイスブックが稼働し、授業内容と学生のプロジェクト活動を学外に「ご報告する」体制が整いました。昨年度までの紙媒体のみとは格段の進歩ですが、スタートラインに立ったばかりとも言えます。フィールドワークで学生が積み重ねた体験の数々、彼らがキャンパスの内外で何を学んだかをどれだけ「学外へ発信」できたか、自省する今日この頃です。担当教員は今後とも努力を続けて参りますので、引き続きプロジェクト演習をお見守りいただき、ご支援ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

2018 年度
根力育成プログラム 「プロジェクト実習」
地域志向教育プログラム「プロジェクト演習」
活動報告書

平成 31 年（2019）3 月 30 日刊行

編集 神田大吾 鈴木敦
発行 茨城大学人文社会科学部根力育成プログラム小委員会

〒310-8512 茨城県水戸市文京 2-1-1
茨城大学人文社会科学部
e-mail atsushi.suzuki.8115@vc.ibaraki.ac.jp